

上新岡館 薬師遺跡

－ 県営一般農道整備事業（山村振興）に伴う遺跡発掘調査報告 －

（第1分冊）

2014年3月

青森県教育委員会

上新岡館・薬師遺跡（第1分冊）

二〇一四・三

青森県教育委員会

か み に い お か だ て
上 新 岡 館
や く し い せ き
薬 師 遺 跡

－ 県営一般農道整備事業（山村振興）に伴う遺跡発掘調査報告 －

（第1分冊）

2014年3月

青森県教育委員会



上：上新岡館 SD-01-03 W→

左：上新岡館全景 W→



薬師遺跡全景 W→

上新岡館・薬師遺跡



土坑墓群A SE ←



溝跡と貯水池状遺構 W←



盛土遺構 (ロングセクションNo.3-5を横断セクNo.12-3 交点から望む) SE ←

薬師遺跡 土坑墓群・貯水池状遺構・盛土遺構



横断セクションNo.12-4 SE →



盛土遺構下層遺物出土状況 (Ⅲ H-53) SW →



弥生包含層 (Ⅲ K-65 ~ Ⅲ K-67) 遺物出土状況 SE →



昭和35年調査Fトレンチ(北側)確認状況 NW →

薬師遺跡 盛土遺構・削平範囲



包2-B層（左）・包3層（右）出土土器



弥生土器



玉・耳飾り



薬師遺跡 出土遺物

土偶

序

上新岡館及び薬師遺跡は、津軽平野の南西部に位置する弘前市新岡地区に所在します。岩木山麓にある両遺跡は、津軽諸城の研究や昭和33・35年の岩木山麓古代遺跡発掘調査事業などによって、良好な状態で存在していることが知られていました。

青森県埋蔵文化財調査センターでは平成22年度から3年間にわたり、県営一般農道整備事業(山村振興)予定地内に所在する上新岡館及び薬師遺跡の発掘調査を実施してまいりました。その成果をまとめたのが本報告書です。

江戸時代の絵図にも記載されている上新岡館では、平成22年度の発掘調査によって薬研堀跡が4条検出され、平安時代の土師器も出土しました。

薬師遺跡は、縄文時代前期と晩期の遺跡として広く知られ、今回の発掘調査によってその一部が明らかとなりました。縄文時代前期の集落、晩期の包含層や土木工事の痕跡、弥生時代の遺物などです。特に晩期の土木工事の痕跡には、遺跡内を削平してその土を盛り上げた遺構や、溝を巡らし貯水池状に使用した遺構などがあり、新たな知見を得ることができました。これらの成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県農林水産部農村整備課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成26年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎隆司

例 言

- 1 本書は、青森県農林水産部農村整備課による県営一般農道整備事業（山村振興）に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成22年度に発掘調査を実施した弘前市上新岡館、平成22年度から同24年度に発掘調査を実施した弘前市薬師遺跡の発掘調査報告書である。上新岡館の発掘調査面積は280㎡である。薬師遺跡の発掘調査面積は平成22年度700㎡、平成23年度800㎡、平成24年度400㎡で合計1,900㎡である。
- 2 上新岡館の所在地は、青森県弘前市大字新岡字山本地内、青森県遺跡番号は202359である。薬師遺跡の所在地は、青森県弘前市大字新岡字薬師地内及び字片付地内、青森県遺跡番号は202351である。
- 3 上新岡館・薬師遺跡における県営一般農道整備事業（山村振興）に伴う発掘調査報告書は、本書が第1冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成22年8月24日～同年10月29日（薬師遺跡・上新岡館） 平成23年7月14日～同年11月25日（薬師遺跡） 平成24年4月24日～同年7月27日（薬師遺跡）
整理・報告書作成期間	平成23年4月1日～平成23年3月31日 平成24年4月1日～平成25年3月31日 平成25年4月1日～平成26年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター康夫文化財保護主幹・工藤忍文化財保護主査・高橋哲文化財保護主事が担当した。上新岡館は工藤が主に担当した。薬師遺跡は、遺構の記載と盛土遺構・削平範囲・包含層等出土土器は神が、他の遺構内出土土器と石器・土石製品類は高橋がそれぞれ主として担当した。全体の編集作業は神と高橋が行った。なお依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託もしくは原稿依頼により実施した。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
	発掘	発掘	発掘	—
	—	整理	整理	整理
福祉設置及び水準測量	株式会社福土調査設計(※1)	—	—	—
ラジヘリ空撮	株式会社シン技術コンサル(※2)	株式会社シン技術コンサル	株式会社シン技術コンサル	—
モザイク写真合成	—	—	—	株式会社シン技術コンサル
遺物の水色い・注記作業	—	—	第一合成株式会社	—
土器類の写真撮影	—	シルバークォート(※2)	シルバークォート	(有)無限
石器類の写真撮影	—	フォトショップいのみ	フォトショップいのみ	フォトショップいのみ
土器実測委託	—	—	株式会社アルカ	—
石器実測委託	—	—	株式会社ラジ	—
地形・地質原稿	—	弘前大学 柴 正敏(※1)	弘前大学 柴 正敏	—
火山灰の分析	—	弘前大学 柴 正敏(※2)	弘前大学 柴 正敏	弘前大学 柴 正敏
放射性炭素年代測定	株式会社パレオ・ラボ(※2)	株式会社加速器分析研究所	株式会社パレオ・ラボ	株式会社パレオ・ラボ
土器胎土分析	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
耳栓付着物の成分分析	株式会社パレオ・ラボ	—	—	—
非晶質の定量的分析及び土器類の定量的分析	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
銅鍍を有する土器の産地推定	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
土器の分析	株式会社パレオ・ラボ	—	—	—
土器の石材同定	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
水色識別及び種別同定	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
炭化材の樹種同定	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—
灰の植物種分析	—	—	株式会社パレオ・ラボ	—

8 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

9 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の50,000分の1地形図「弘前」を複製して使用した。

10 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。

11 挿入中の方位は、すべて座標北を示している。

12 地形図及び調査区域図の縮尺は原則として1/1,000、遺構配置図は1/500としたが、長大なものなどは適宜縮尺を変更した。また各挿入図ごとにスケール等を示した。

13 遺構には、その種類を示す略号と、農道ごと、検出順に通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりで、整理作業に伴って遺構名等を変更したものについては各節冒頭あるいは各遺構の事実記載文に記している。

S I - 竪穴住居跡 S K - 土坑 S R - 埋設土器遺構 S B - 建物跡 S P - ビット

S N - 焼土遺構 S D - 溝跡 S X - 性格不明遺構(貯水池状遺構・竪穴遺構等)

火山灰に関して、B-Tm は白頭山苦小牧火山灰、To-a は十和田 a 火山灰の略称として使用している。

包含層等の名称は、「包含層第〇層」を「包〇層」、「弥生包含層」を「弥包層」というように「含層」や「第」などを省略して記載している部分が多い。

14 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、「新版標準土色帖2005年版」(小山正忠・竹原秀雄)を基に記録した。

15 遺構実測図の縮尺は原則として、竪穴住居跡のカマド・炉等は1/30、竪穴住居跡・土坑・溝跡・掘立柱建物跡・溝状土坑・柱状状ビット群等は1/60に統一し、各挿入図ごとにスケール等を示した。

16 遺構実測図の平面図のうち、ビット(住居内・建物内・単独とも)等には()内にその深さをcm単位で示している。土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付している。各図で使用した網掛けは、各挿入図中に示した。

17 遺構内から出土した遺物等、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を必要に応じて付した。遺物に使用した略号は、土器-P、石器-S、炭化材-Cである。

18 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載している。調査区域外に伸びていたり他遺構・攪乱によって壊されているものは特に()を付して本文やS P計測表に記載している。

19 遺物実測図の個別番号は、遺構ごと、もしくは遺物種ごとに1から遺物番号を付した。

20 遺物実測図の縮尺は、土器類1/3、剥片石器類1/2、礫石器類1/3、土石製品類1/2(玉類4/5)を原則とし、各挿入図にスケール等を示した。また遺物実測図に使用した網掛けは、各挿入図中に示した。

21 遺物観察表の計測値は、原則として現存値を記している。土器類計測値における()内の数値は、口径・底径は推定値、器高は現存値である。土器類の調整技法(文様)は、原則として土器上部(口縁)から順に記載している。

22 遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は不同である。

23 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

24 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た(敬称略、順不同)。

岡村道雄、長田友也、工藤泰博、榊原滋高、清藤敏男、成田しげ子、成田正彦、藤原弘明、青森県立郷土館、板柳町教育委員会、五所川原市教育委員会、弘前市教育委員会

第1分冊 目次

口 絵
序
例 言
目 次
図版目次
表目次

第1編 上新岡館・薬師遺跡調査の概要

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経過

第2章 調査方法

第1節 発掘調査の方法

- 1 発掘作業の方法…………… 1
- 2 整理・報告書作成作業の方法…………… 3

第3章 調査体制

第1節 発掘調査の体制

- 1 平成22年度の発掘調査体制(上新岡館・薬師遺跡)…………… 4
- 2 平成23年度の発掘調査体制(薬師遺跡)…………… 4
- 3 平成24年度の発掘調査体制(薬師遺跡)…………… 5

第2節 整理・報告書作成作業の体制

- 1 平成23年度の整理・報告書作成体制…………… 5
- 2 平成24年度の整理・報告書作成体制…………… 5
- 3 平成25年度の整理・報告書作成体制…………… 5

第4章 遺跡の環境

- 第1節 上新岡館及び薬師遺跡周辺の地形と地質について…………… 6

第2編 上新岡館

第1章 調査の概要

第1節 上新岡館の調査方法等

- 1 発掘作業の方法…………… 8
- 2 整理・報告書作成作業の方法…………… 8

第2節 調査経過

- 1 発掘作業の経過…………… 11
- 2 整理・報告書作成作業の経過…………… 11

- 第3節 上新岡館の基本層序…………… 12

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

- 1 土坑…………… 13
- 2 ビット…………… 14
- 3 溝跡・塚跡…………… 15

- 第2節 遺構外の出土遺物…………… 22

- 第3節 遺物観察表…………… 24

第3章 理化学的分析結果

- 第1節 放射性炭素年代測定…………… 26

第4章 総括

- 第1節 上新岡館の遺構について…………… 30
- 第2節 まとめ…………… 36

第3編 薬師遺跡

第1章 調査の概要

第1節 薬師遺跡の調査方法等	
1 発掘作業の方法.....	38
2 整理・報告書作成作業の方法.....	39
第2節 平成22年度調査分の発掘調査と整理作業の経過等	
1 発掘作業の経過.....	46
2 整理作業の経過.....	47
第3節 平成23年度の発掘調査経過等.....	48
第4節 平成24年度の発掘調査経過等.....	49
第5節 平成23・24年度調査分の整理作業経過等.....	50
第6節 薬師遺跡の基本層序.....	52

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡.....	55
第2節 土坑.....	80
第3節 埋設土器遺構.....	91
第4節 掘立柱建物跡・ピット.....	94
第5節 焼土遺構.....	97
第6節 集石遺構.....	103
第7節 黒曜石散布範囲.....	103
第8節 竪穴遺構.....	104
第9節 溝跡.....	155
第10節 貯水池状遺構.....	158
第11節 盛土遺構.....	174
第12節 削平範囲(弥包層).....	278

第3章 遺構外の出土遺物

第1節 包含層1層出土遺物.....	293
第2節 包含層3層出土遺物.....	303
第3節 第Ⅲ層出土遺物.....	351
第4節 第Ⅳ層出土遺物.....	373
第5節 第Ⅰ層出土遺物.....	379
第6節 攪乱層出土遺物.....	380

目録

口絵1	上新岡館・薬師遺跡	口絵3	薬師遺跡 盛土遺構・削平範囲
口絵2	薬師遺跡 土坑墓群・貯水池状遺構・盛土遺構	口絵4	薬師遺跡 出土遺物

図版目次

図1	上新岡館・薬師遺跡 位置図……………	2	図45	土坑墓群A(2)……………	106
<上新岡館>			図46	土坑墓群B……………	107
図2	岩木火山山麓扇状地の模式柱状図……………	7	図47	ⅢB-51～ⅢG-53周辺検出遺構……………	108
図3	4層の降下軽石層とそれに共在するローム層……………	7	図48	ⅢH-54～ⅢJ-57周辺検出遺構(1)……………	109
図4	赤紫色のローム層の産状……………	7	図49	ⅢH-54～ⅢJ-57周辺検出遺構(2)……………	110
図5	現況およびグリッド配置図……………	9	図50	ⅢJ-59～62周辺検出遺構(1)……………	111
図6	地形および遺構配置図……………	10	図51	ⅢJ-59～62周辺検出遺構(2)……………	112
図7	基本層序……………	12	図52	ⅢJ-59～62周辺検出遺構(3)……………	113
図8	土坑と出土遺物……………	14	図53	ⅢK-64～67周辺検出遺構(1)……………	114
図9	壕跡・溝跡……………	18	図54	ⅢK-64～67周辺検出遺構(2)……………	115
図10	壕跡……………	19	図55	ⅢK-64～67周辺検出遺構(3)……………	116
図11	第2号壕跡・第3号壕跡出土遺物……………	20	図56	ⅢK-64～67周辺検出遺構(4)……………	117
図12	第3号・第4号壕跡出土遺物……………	21	図57	ⅢK-68～ⅢJ-70周辺検出遺構……………	118
図13	遺構外出土遺物……………	23	図58	ⅢI-72～ⅢG-73周辺検出状況……………	119
図14	年代測定をおこなった炭化材試料と暦年校正結果……………	29	図59	ⅢF-74～ⅢD-75周辺検出遺構……………	120
図15	「新岡村縮絵図 文政七年」(1824、弘前市立図書館蔵)……………	32	図60	ⅡX-82～ⅡW-84周辺検出遺構……………	121・122
図16	新岡集落と上新岡館航空写真(1948年米軍撮影)……………	33	図61	土坑出土遺物(1)……………	123
図17	上新岡館見取図・航空写真……………	34	図62	土坑出土遺物(2)……………	124
図18	上新岡館現状と周辺地籍図(1:2,000)……………	35	図63	土坑出土遺物(3)……………	125
<薬師遺跡>			図64	土坑出土遺物(4)……………	126
図19	調査区地形図と昭和33・35年調査区……………	40	図65	土坑出土遺物(5)……………	127
図20	薬師遺跡 年度別調査範囲・測量杭等……………	41	図66	土坑出土遺物(6)……………	128
図21	基本層序(1)……………	53	図67	土坑出土遺物(7)……………	129
図22	基本層序(2)……………	54	図68	土坑出土遺物(8)……………	130
図23	薬師遺跡遺構配置図……………	56	図69	土坑出土遺物(9)……………	131
図24	平成22年度 薬師遺跡 遺構配置図……………	57	図70	土坑出土遺物(10)……………	132
図25	平成23・24年度 薬師遺跡 遺構配置図……………	58	図71	土坑出土遺物(11)……………	133
図26	第2号竪穴住居跡(1)・第1号焼土遺構(1)……………	60	図72	土坑出土遺物(12)……………	134
図27	第2号竪穴住居跡(2)・第1号焼土遺構(2)……………	61	図73	土坑出土遺物(13)……………	135
図28	第2号竪穴住居跡 出土遺物(1)……………	62	図74	土坑出土遺物(14)……………	136
図29	第2号竪穴住居跡 出土遺物(2)……………	63	図75	土坑出土遺物(15)……………	137
図30	第3号竪穴住居跡……………	64	図76	埋設土器遺構 出土遺物(1)……………	138
図31	第3号竪穴住居跡 出土遺物……………	65	図77	埋設土器遺構 出土遺物(2)……………	139
図32	第4号竪穴住居跡(1)……………	67	図78	埋設土器遺構 出土遺物(3)……………	140
図33	第4号竪穴住居跡(2)・第2号埋設土器遺構……………	68	図79	埋設土器遺構 出土遺物(4)……………	141
図34	第4号竪穴住居跡(3)……………	69	図80	ピット内出土遺物(1)……………	142
図35	第4号竪穴住居跡 出土遺物(1)……………	70	図81	ピット内出土遺物(2)……………	143
図36	第4号竪穴住居跡 出土遺物(2)……………	71	図82	ピット内出土遺物(3)……………	144
図37	第4号竪穴住居跡 出土遺物(3)……………	72	図83	ピット内出土遺物(4)……………	145
図38	第4号竪穴住居跡 出土遺物(4)……………	73	図84	ピット内出土遺物(5)……………	146
図39	第5号竪穴住居跡と周辺の遺構……………	74	図85	焼土遺構出土遺物(1)……………	147
図40	第5号竪穴住居跡 出土遺物……………	75	図86	焼土遺構出土遺物(2)……………	148
図41	第6号竪穴住居跡と周辺の遺構……………	78	図87	焼土遺構出土遺物(3)……………	149
図42	第7号竪穴住居跡と周辺の遺構……………	79	図88	焼土遺構出土遺物(4)……………	150
図43	第7・8号竪穴住居跡 出土遺物……………	80	図89	焼土遺構出土遺物(5)……………	151
図44	土坑墓群A(1)……………	105	図90	焼土遺構出土遺物(6)……………	152

図91	集石遺構出土遺物	153	図145	包2-B層出土石器(13)	226
図92	黒曜石散布範囲出土遺物	153	図146	包2-B層出土石器(14)	227
図93	竪穴遺構出土遺物	154	図147	包2-B層出土石器(15)	228
図94	第1・2号溝跡	159	図148	包2-B層出土石器(16)	229
図95	第3・5号溝跡、貯水池状遺構(1)	160	図149	包2-B層出土石器(17)	230
図96	第3・5号溝跡、貯水池状遺構(2)	161	図150	包2-B層出土石器(18)	231
図97	貯水池状遺構(3)	162	図151	包2-B層出土土製品(1)	232
図98	第6号溝跡・第7号土坑	163	図152	包2-B層出土土製品(2)	233
図99	第7号溝跡	164	図153	包2-B層出土土製品(3)	234
図100	溝跡内出土遺物(1)	165	図154	包2-B層出土土製品(4)	235
図101	溝跡内出土遺物(2)	166	図155	包2-B層出土土製品(5)	236
図102	溝跡内出土遺物(3)	167	図156	包2-B層出土土製品(6)	237
図103	溝跡内出土遺物(4)	168	図157	包2-B層出土土製品(1)	238
図104	溝跡内出土遺物(5)	169	図158	包2-B層出土土製品(2)	239
図105	溝跡内出土遺物(6)	170	図159	包2-B層(1mトレンチ)出土石器(1)	240
図106	溝跡内出土遺物(7)	171	図160	包2-B層(1mトレンチ)出土石器(2)	241
図107	貯水池状遺構 出土遺物(1)	172	図161	包2-C-G層遺物出土状況図	242
図108	貯水池状遺構 出土遺物(2)	173	図162	包2-C-G層出土石器(1)	243
図109	平成23年度調査 1mトレンチ配置図	174	図163	包2-C-G層出土石器(2)	244
図110	薬師遺跡ロングセクション分布図概要	175・176	図164	包2-C-G層出土石器(3)	245
図111	盛土遺構 ロングセクション№1他(1)	177・178	図165	包2-C-G層出土石器(4)	246
図112	盛土遺構 ロングセクション№1他(2)	180	図166	包2-C-G層出土石器(5)	247
図113	盛土遺構 ロングセクション№1他(3)	181	図167	包2-C-G層出土石器(6)	248
図114	盛土遺構 ロングセクション№3(1)	182	図168	包2-C-G層出土石器(7)	249
図115	盛土遺構 ロングセクション№3(2)	183	図169	包2-C-G層出土石器(1)	250
図116	盛土遺構 ロングセクション№4(1)	184	図170	包2-C-G層出土石器(2)	251
図117	盛土遺構 ロングセクション№4(2)	185	図171	包2-C-G層出土石器(3)	252
図118	盛土遺構の各層推定分布図	187	図172	包2-C-G層出土石器(4)	253
図119	包2-A層出土石器	200	図173	包2-C-G層出土石器(5)	254
図120	包2-A層出土石器(1)	201	図174	包2-C-G層出土石器(6)	255
図121	包2-A層出土石器(2)・土・石製品	202	図175	包2-C-G層出土石器(7)	256
図122	包2-B層遺物出土状況(1) 土器・石器	203	図176	包2-C-G層出土石器(8)	257
図123	包2-B層遺物出土状況(2) 土器製品	204	図177	包2-C-G層出土土製品(1)	258
図124	包2-B層出土石器(1)	205	図178	包2-C-G層出土土製品(2)	259
図125	包2-B層出土石器(2)	206	図179	包2-C-G層出土土製品(1)	259
図126	包2-B層出土石器(3)	207	図180	包2-C-G層出土土製品(2)	260
図127	包2-B層出土石器(4)	208	図181	包2-H層遺物出土状況図	261・262
図128	包2-B層出土石器(5)	209	図182	包2-H層出土石器(1)	263
図129	包2-B層出土石器(6)	210	図183	包2-H層出土石器(2)	264
図130	包2-B層出土石器(7)	211	図184	包2-H層出土石器(3)	265
図131	包2-B層出土石器(8)	212	図185	包2-H層出土石器(4)	266
図132	包2-B層出土石器(9)	213	図186	包2-H層出土石器(1)	267
図133	包2-B層出土石器(1)	214	図187	包2-H層出土石器(2)	268
図134	包2-B層出土石器(2)	215	図188	包2-H層出土石器(3)	269
図135	包2-B層出土石器(3)	216	図189	包2-H層出土石器(4)	270
図136	包2-B層出土石器(4)	217	図190	包2-H層出土石器(5)	271
図137	包2-B層出土石器(5)	218	図191	包2-H層出土土製品(1)	272
図138	包2-B層出土石器(6)	219	図192	包2-H層出土土製品(2)	273
図139	包2-B層出土石器(7)	220	図193	包2-H層出土土製品(1)	274
図140	包2-B層出土石器(8)	221	図194	盛土遺構(1mトレンチ)出土土器	275
図141	包2-B層出土石器(9)	222	図195	盛土遺構(1mトレンチ)出土石器(1)	276
図142	包2-B層出土石器(10)	223	図196	盛土遺構(1mトレンチ)出土石器(2)・石製品	277
図143	包2-B層出土石器(11)	224	図197	削平範囲・遺物出土状況	281・282
図144	包2-B層出土石器(12)	225	図198	弥生包含層出土遺物(1)	283

図199	弥生包含層出土遺物(2)……………	284	図244	包含層3層出土石器(14)……………	337
図200	弥生包含層出土遺物(3)……………	285	図245	包含層3層出土石器(15)……………	338
図201	弥生包含層出土遺物(4)……………	286	図246	包含層3層出土石器(16)……………	339
図202	弥生包含層出土遺物(5)……………	287	図247	包含層3層出土石器(17)……………	340
図203	弥生包含層出土遺物(6)……………	288	図248	包含層3層出土石器(18)……………	341
図204	弥生包含層出土遺物(7)……………	289	図249	包含層3層出土石器(19)……………	342
図205	弥生包含層出土遺物(8)……………	290	図250	包含層3層出土石器(20)……………	343
図206	弥生包含層出土石器(1)……………	291	図251	包含層3層出土石器(21)……………	344
図207	弥生包含層出土石器(2)・土石製品……………	292	図252	包含層3層出土土製品(1)……………	345
図208	包含層1層出土石器(1)……………	296	図253	包含層3層出土土製品(2)……………	346
図209	包含層1層出土石器(2)……………	297	図254	包含層3層出土土製品(3)……………	347
図210	包含層1層出土石器(3)……………	298	図255	包含層3層出土土製品(1)……………	348
図211	包含層1層出土石器(1)……………	299	図256	包含層3層出土土製品(2)……………	349
図212	包含層1層出土石器(2)……………	300	図257	包含層3層出土土製品(3)……………	350
図213	包含層1層出土石器(3)……………	301	図258	第Ⅲ層遺物出土状況図……………	353
図214	包含層1層出土土製品……………	302	図259	第Ⅲ層出土石器(1)……………	354
図215	包含層3層遺物出土状況図……………	307・308	図260	第Ⅲ層出土石器(2)……………	355
図216	包含層3層出土石器(1)……………	309	図261	第Ⅲ層出土石器(3)……………	356
図217	包含層3層出土石器(2)……………	310	図262	第Ⅲ層出土石器(4)……………	357
図218	包含層3層出土石器(3)……………	311	図263	第Ⅲ層出土石器(5)……………	358
図219	包含層3層出土石器(4)……………	312	図264	第Ⅲ層出土石器(1)……………	359
図220	包含層3層出土石器(5)……………	313	図265	第Ⅲ層出土石器(2)……………	360
図221	包含層3層出土石器(6)……………	314	図266	第Ⅲ層出土石器(3)……………	361
図222	包含層3層出土石器(7)……………	315	図267	第Ⅲ層出土石器(4)……………	362
図223	包含層3層出土石器(8)……………	316	図268	第Ⅲ層出土石器(5)……………	363
図224	包含層3層出土石器(9)……………	317	図269	第Ⅲ層出土石器(6)……………	364
図225	包含層3層出土石器(10)……………	318	図270	第Ⅲ層出土石器(7)……………	365
図226	包含層3層出土石器(11)……………	319	図271	第Ⅲ層出土石器(8)……………	366
図227	包含層3層出土石器(12)……………	320	図272	第Ⅲ層出土石器(9)……………	367
図228	包含層3層出土石器(13)……………	321	図273	第Ⅲ層出土石器(10)……………	368
図229	包含層3層出土石器(14)……………	322	図274	第Ⅲ層出土石器(11)……………	369
図230	包含層3層出土石器(15)……………	323	図275	第Ⅲ層出土石器(12)……………	370
図231	包含層3層出土石器(1)……………	324	図276	第Ⅲ層出土土製品(1)……………	371
図232	包含層3層出土石器(2)……………	325	図277	第Ⅲ層出土土製品……………	372
図233	包含層3層出土石器(3)……………	326	図278	第Ⅳ層出土石器(1)……………	374
図234	包含層3層出土石器(4)……………	327	図279	第Ⅳ層出土石器(1)……………	375
図235	包含層3層出土石器(5)……………	328	図280	第Ⅳ層出土石器(2)……………	376
図236	包含層3層出土石器(6)……………	329	図281	第Ⅳ層出土石器(3)……………	377
図237	包含層3層出土石器(7)……………	330	図282	第Ⅳ層出土石器(4)・石製品……………	378
図238	包含層3層出土石器(8)……………	331	図283	第Ⅰ層・攪乱層出土石器……………	381
図239	包含層3層出土石器(9)……………	332	図284	第Ⅰ層出土石器(1)……………	382
図240	包含層3層出土石器(10)……………	333	図285	第Ⅰ層出土石器(2)・土石製品……………	383
図241	包含層3層出土石器(11)……………	334	図286	攪乱層出土石器(1)……………	384
図242	包含層3層出土石器(12)……………	335	図287	攪乱層出土石器(2)・石製品……………	385
図243	包含層3層出土石器(13)……………	336	図288	攪乱層出土土製品……………	386

表目次

< 上新調館 >

表1	主要点の国土地標値及び標高値一覧……………	8
表2	SP計測表……………	15
表3	土器等 観察表……………	24
表4	鉄製品 観察表……………	25
表5	土製品 観察表……………	25
表6	測定試料および処理……………	28

表7 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果…28

< 業跡 >

表8	主要点の国土地標値及び標高値一覧……………	38
表9	出土石器・石製品組成……………	42
表10	土坑一覧……………	80
表11	ピット計測表……………	95
表12	盛土遺構・削平範囲のセクション名一覧…	179

第1編 上新岡館・薬師遺跡調査の概要

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

県営一般農道整備事業(山村振興)の計画に伴い、青森県農林水産部農村整備課(以下「農村整備課」)から当該事業に係る周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱について、平成19年度に青森県教育庁文化財保護課(以下「文化財保護課」)に照会があった。平成20年度に文化財保護課と中南地域県民局地域農林水産部は場整備課によって現地踏査を実施した結果、薬師遺跡内及び隣接地から縄文土器片や剥片等の遺物が確認され、上新岡館では郭・堀跡・土塁が残存していることから、遺跡内及びその隣接地について試掘調査が必要と判断された。

平成21年度に文化財保護課が試掘・確認調査を実施した結果、薬師遺跡と上新岡館の発掘調査が必要とされ、平成22年度から青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。

なお、事業者側から土木工事のための発掘に関する通知が平成22年2月に提出され、同年3月に県教育委員会から埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の通知がなされた。(中嶋)

第2章 調査方法

第1節 発掘調査の方法等

1 発掘作業の方法

上新岡館及び薬師遺跡の調査で採用した、共通する調査方法は以下のとおりである。

〔測量基準点・水準点の設置〕路線の測量原点及びレベル原点には工事用の既存成果を利用し、不足の場合は調査対象区域周辺に標準の国土座標値と標高値を備えた任意の基準杭を設置して、これらを実測基準点として使用した。主な基準点等の国土座標値(世界測地系)及び標高値は、第2編及び第3編に詳細を示すこととする。

〔グリッド設定〕遺構・基本土層の精査や遺構外出土物の取り上げにあたっては、調査区あるいは遺跡全体を網羅するような、公共座標を基準とした4mグリッドを設定して記録した。グリッド設定の詳細は第2編及び第3編に詳細を示すこととする。

〔基本土層〕遺跡の基本土層については表土から順にローマ数字を付けて呼称し、細分が必要な場合は小文字のアルファベットを付した。

〔表土等の調査〕人力で掘削可能な草地部分などは人力で掘削したが、現代盛土や砂利道部分など明確に攪乱されている部分では、重機を使用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加・撤去した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。ほとんどの遺構平面図と、一部の遺構堆積土断面図は、(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や堅穴住居跡に伴う炉等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遺

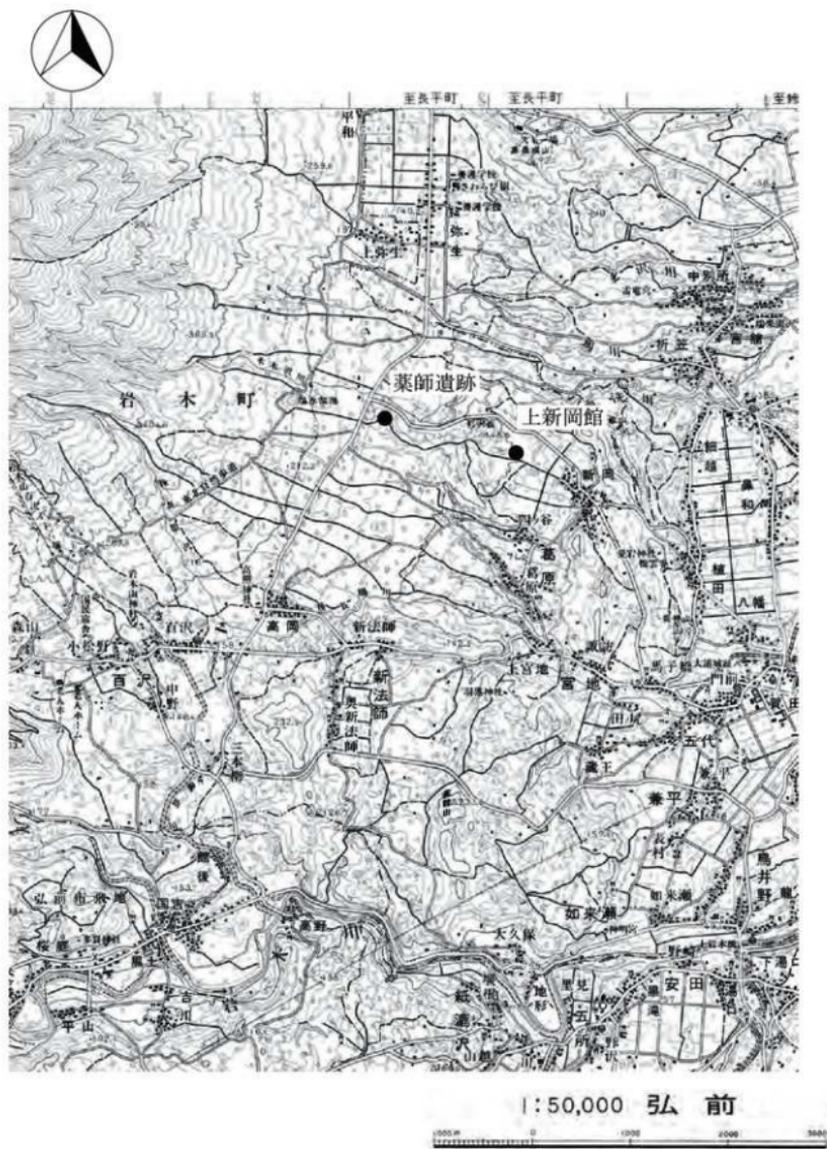


図1 上新岡館・薬師遺跡 位置図

り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成したものもある。遺構内の出土遺物は遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、床面(底面)や炉などで密に出土した遺物については、トータルステーションや簡易遺り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

[写真撮影]原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。デジタルカメラは、1,800万画素のものを使用した。また、業者に委託してラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

上新岡館及び業者遺跡の調査で採用した、共通する整理・報告書作成作業の方法は以下のとおりである。

[図面類の整理]遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遺り方測量で作成した堆積土層断面図や炉・カマド等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

[写真類の整理]35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理して各年度及び地区ごとにスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元]遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に接合し、復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

[報告書掲載遺物の選別]遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄(放置)された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代(時期)・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

[遺物の観察・図化]充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。特に、縄文土器の復元個体や拓本では表現しきれない隆帯・突起等の凹凸のある遺物については、実測図を作成するように心掛けた。また、種類ごとに遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

[遺物の写真撮影]業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

[理化学的分析]出土火山灰の噴出源を特定するための火山灰分析、炭化材や炭化種実の年代を特定するための放射性炭素年代測定、縄文土器・弥生土器等の胎土を比較分析する胎土分析、耳栓の付着物を分析する成分分析、赤色顔料の成分を分析する蛍光X線分析、土器・土製品等の塗膜構造を分析する塗膜構造分析、石器素材である黒曜石の産地を推定する黒曜石産地分析、玉類の成分あるいは石材同定の分析、土壌の水洗選別等によって検出された炭化種実等を特定するための種実同定、遺跡から出土した炭化材の樹種を特定するための樹種同定、灰の母植物を特定する植物珪酸体分析、研究者や研究機関・業者等に委託して行った。

[遺構・遺物のトレース・版下作成]遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ロットリングペンによる手作業と(株)CUBIC製「トレースくん」(遺構実測支援システム)、Adobe Systems社Illustratorを用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、紙図版による手作業とパソコンによるデジタルデータ加工作業を併用した。出土遺物のうち、床面(底面)出土遺物や堅穴住居跡の炉出土遺物、包含層出土遺物等については、遺構平面図等にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載するよう努めた。

[遺構の検討・分類・整理]遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

[遺物の検討・分類・整理]遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

[調査成果の検討]遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代・弥生時代・古代の集落、城跡等の時期・構造・変遷等について検討・整理した。(神)

第3章 調査体制

第1節 発掘調査の体制

1 平成22年度の発掘調査体制(上新岡館及び薬師遺跡)

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 嗣浩(平成24年3月退職)
次長	畠山 昇(平成23年3月退職、現文化財保護主幹)
総務GM	木村 繁博(平成24年3月退職)
調査第二GM	中嶋 友文(現、調査第一GM)
文化財保護主幹	神 康夫(発掘調査担当者)
文化財保護主査	工藤 忍(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授 (考古学)
調査員	福田 友之	青森県考古学会会長 (考古学)
◇	柴 正敏	国立大学法人弘前大学理工学部教授(地質学)
◇	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学)

2 平成23年度の発掘調査体制(薬師遺跡)

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	松田 守正(平成24年3月退職)
次長	成田 滋彦(平成24年3月退職、現文化財保護主幹)
総務GM	木村 繁博(平成24年3月退職)
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	神 康夫(発掘調査担当者)
文化財保護主査	木村 高(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔 (故人)前国立大学法人 弘前大学名誉教授(考古学)
調査員	福田 友之 青森県考古学会会長 (考古学)
◇	柴 正敏 国立大学法人 弘前大学理工学部教授 (地質学)
◇	関根 達人 国立大学法人 弘前大学人文学部教授 (考古学)

3 平成24年度の発掘調査体制(薬師遺跡)

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	柿崎 隆司
次長(総務GM)	高橋 雅人
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	神 康夫(発掘調査担当者)
文化財保護主事	高橋 哲(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦 前弘前大学教授 (考古学)
◇	福田 友之 青森県考古学会会長 (考古学)
◇	柴 正敏 国立大学法人 弘前大学大学院理工学研究科教授(地質学)

第2節 整理・報告書作成作業の体制

1 平成23年度の整理・報告書作成体制

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	松田 守正(平成24年3月退職)
次長	成田 滋彦(平成24年3月退職、現文化財保護主幹)
総務GM	木村 繁博(平成24年3月退職)
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	神 康夫(報告書作成担当者)
文化財保護主査	工藤 忍(報告書作成担当者)
文化財保護主査	田中 珠美(報告書作成担当者)

2 平成24年度の整理・報告書作成体制

平成24年度の整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	柿崎 隆司
次長(総務GM)	高橋 雅人
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	神 康夫(報告書作成担当者)
文化財保護主査	工藤 忍(報告書作成担当者)
文化財保護主事	高橋 哲(報告書作成担当者)

3 平成25年度の整理・報告書作成体制

平成25年度の整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	柿崎 隆司
次長(総務GM)	高橋 雅人
調査第一GM	中嶋 友文
文化財保護主幹	神 康夫(報告書作成担当者)
文化財保護主査	工藤 忍(報告書作成担当者)
文化財保護主事	高橋 哲(報告書作成担当者)

第4章 遺跡の環境

第1節 上新岡館及び薬師遺跡周辺の地形と地質について

弘前大学大学院・理工学研究科
柴 正敏

上新岡館及び薬師遺跡は、弘前市街地の北西約8～9kmに所在し、岩木山の火山麓扇状地の端部に立地している。遺構の原地表面の標高は、上新岡館は約103～117m、薬師遺跡では約160mである。

標記遺跡とその周辺の地形は次のようにまとめることができる：岩木山の「火山地形」、白山山地とそれに連続する大鰐山地からなる「山地」及び津軽平野からなる「平野」である。さらに、山地と平野の境界部には丘陵地及び崖によって区切られる台状の地形である「台地」も認められる。

活火山である岩木山(標高1,625m)は、安山岩～デイサイト溶岩と同質火砕岩類の互層からなる成層火山であり、黒森山などの先岩木火山や1万年前以降に形成された新期の溶岩ドームも存在する。山麓には火山麓扇状地が発達するのは前述の通りである。岩木山の北東斜面には小丘群が認められ、これらは、「岩屑なだれ」による崩壊地形である。岩木山の山体を載せている基盤の地層は、下位より、新第三紀の地層である田野沢層(西黒沢階)、大童子層と赤石層(女川階)、舞戸層と鳴沢層(船川階)及び更新世の地層である黄金山層と山田野層である。

白山山地～大鰐山地は、新第三紀の堆積岩類や火砕岩類を主とし、白亜紀の花崗岩質岩類やジュラ紀付加体堆積物起源の粘板岩、チャート、砂岩などからなる。

津軽平野は、標高20m以下の部分からなる低地であり、岩木川などの河川の両岸には、「自然堤防」及び「後背湿地」が発達する。

上新岡館の基本層序は、上位よりI、II、III、IV、V及びVIの6層に分けられ、薬師遺跡の基本層序は、上位よりI、II、III、IV、V、Va、Vb及びVIの8層に分けられる。各地層(土層)の詳細については後節に譲り、VI層より下位の地層について以下に述べる。

黒木(1995)によれば、岩木山の火山麓扇状地を構成する地層の模式層序は、下位より、新法師軽石層(300cm)、下部赤紫ローム層(100cm)、洞爺テフラ(10cm)、上部赤紫ローム層(100cm)、十和田大不動テフラ(30cm)、ローム層(50cm)及び十和田八戸テフラ(30cm)である(図2)。一方、両遺跡に認められる層序は、下位より、ロームを挟む4層の降下軽石層(約300cm)(図3)、赤紫色の

ルーム層（約100cm）（図4）及びV層～I層である。それぞれ、下位の4層の降下軽石層は新法師軽石層に、上位のルーム層は下部赤紫ルーム層に対比できるものと考えられる。模式層序に認められる洞爺火山灰層より上位の地層は、上新岡館と薬師遺跡とではその状況に若干の違いが認められる。

上新岡館においては、模式層序に認められる洞爺火山灰層より上位の地層は、削剥のため欠如しているものと考えられる。また、V層以上の土層は、斜面や下位の地層の風化・削剥物からなる層と解釈できる。

薬師遺跡においては、模式層序に認められる洞爺火山灰層より上位の地層は、薬師遺跡の地山層のV a層及びV b層として分布する。何れの層も、十和田八戸テフラの再堆積物層と考えられる。すなわち、V層～I層の土層は、斜面や下位の地層の風化物質からなる層と解釈できる。表層の黒色土壌（クロボク）中には、B-Tmが薄層をなして広く分布するほか、明確な層をなさないが、その下位にはTo-aが土壌中に広く拡散して存在する。

【引用文献】

黒木貴一、1995、岩木山北麓の火山麓扇状地。季刊地理学、第47巻、285-301。



図2 岩木山火山麓扇状地の模式柱状図
(黒木(1995)の第3図を改変)

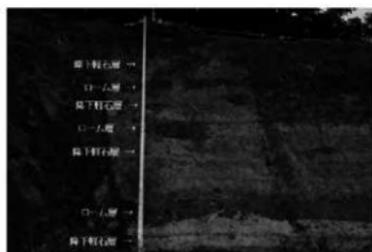


図3 4層の降下軽石層それに挟在するローム層
(スケールの全長は5m)



図4 赤紫色のローム層の産状
(ローム層の層厚は約1m、上新岡館SD01・03清跡断面)

第2編 上新岡館

第1章 調査の概要

第1節 上新岡館の調査方法等

1 発掘作業の方法

平成22年度に行った上新岡館発掘調査は、農道の拡幅予定地を調査対象とした。平成21年度に青森県教育庁文化財保護課が実施した試掘調査によって硬化面が検出されていたことや、工事予定地及び隣接地内に曲輪や堀跡、土塁が残存していることが確認されていたため、古代や中世の遺構調査に重点を置いて、集落跡や城館の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。また、地点によっては黄褐色粘土層まで掘乱されていることが分かっていたので、重機を使用して掘削の省力化を図り、遺構検出、精査を円滑に進められるよう努めた。上新岡館の調査では、第1編で示した調査方法に加えて以下の方法も採用した。

[測量基準点・水準点の設置]各路線の測量原点及びレベル原点の設置にあたっては、測量業者株式会社福土調査設計事務所に業務委託した。主な基準点の国土座標値(世界測地系)及び標高値は表1に、調査区と公共座標軸の位置関係、基準主要点については図3地形および遺構配置図に示してある。

[グリッド設定]グリッドの設定にあたっては、上新岡館の諸先学の研究成果による図面を参考に、館跡の周辺の地表面を観察し、館跡の全体を網羅するようにグリッド設定を行うこととして、座標基準点X=70,800、Y=-37,900を起点として方位に合わせた4×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にアルファベット、西から東に算用数字を付けて、南西隅の組み合わせを呼称した。遺構・基本土層の精査や遺構外出土遺物の取り上げは、平面的出土位置を記録して取り上げた。グリッドの配置は、現況およびグリッド配置図に示している。

[表土等の調査]調査区域全体が30cm以上の厚さの盛り土で覆われていたため、第I・II層の除去や壕跡の覆土の掘削は重機を使用して省力化を図った。

2 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、土坑3基、壕跡4条、溝跡1条、ピット8基が検出され、縄文時代・古代の土器類3箱、金属製品数点、陶磁器類数点が出土した。これらを第1編で示した整理・報告書作成作業の方法で、館跡の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

表1 主要点の国土座標値及び標高一覧

点名	国土座標値 (世界測地系・JGD2000)		標高値 (m)
	X座標	Y座標	
KM2	70762.150	-37639.291	98.491
T4	70809.701	-37737.135	98.147
T5	70818.929	-37820.037	106.866
T6	70829.751	-37846.507	110.052
T7	70854.306	-37871.268	113.824
T5-1	70822.324	-37778.897	106.572
T5-2	70830.937	-37832.853	111.808
No. 22+16. 6R	70816.755	-37747.955	99.527
No. 23R	70817.674	-37751.482	102.256
SP6R	70820.594	-37757.867	103.431
No. 24R	70824.348	-37771.256	105.385
No. 24+8. 2R	70826.007	-37779.766	106.532
EO6R	70827.455	-37788.260	107.836
No. 25R	70827.994	-37791.813	108.707
BCT6	70828.755	-37813.310	109.942
P7	70832.593	-37829.882	106.602
B2	70832.923	-37831.876	111.787
B3	70841.016	-37843.537	113.257

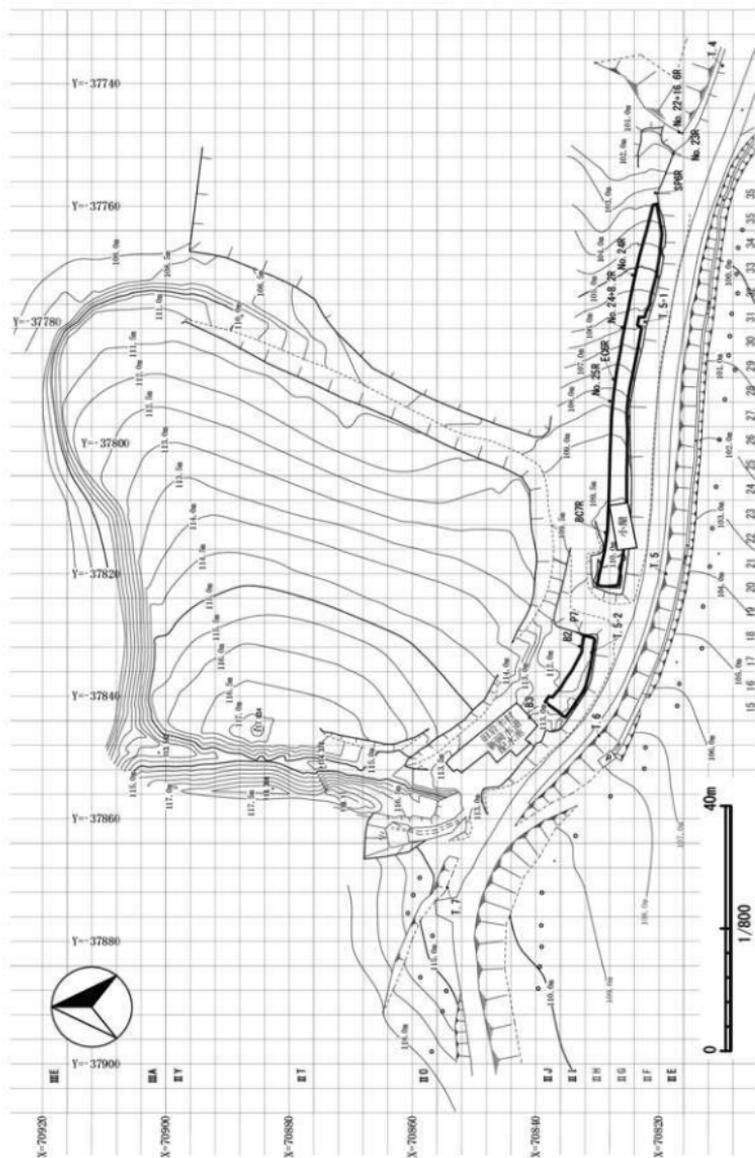


図 5 現状およびグリッド配置図

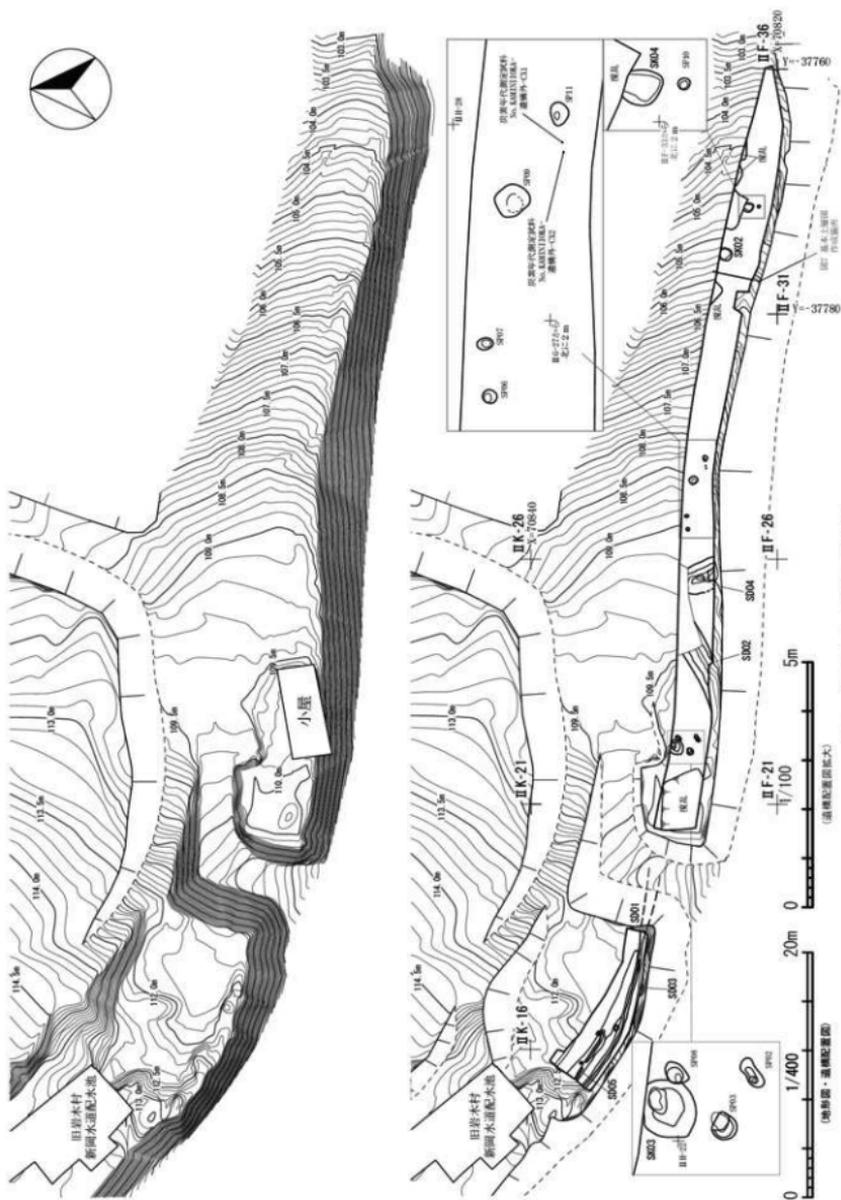


図6 地形および遺構配置図

第2節 調査経過

1 発掘作業の経過

- 9月8日 調査の開始に先立ち、草刈りなど環境整備。
- 9月上旬 (株)福土調査設計に委託して、調査区幅杭・基準点設置。
- 9月中旬 調査事務所、器材庫、作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等を行い、調査機材搬入。人力による粗掘り開始。3班に分かれ、遺構確認に努める。(株)CUBIC社製遺構実測支援システムを使用して調査区及び周辺の地形測量を開始。
- 9月下旬 壕跡(SD01)の排土移動のため、重機を投入。
- 10月上旬 弘前大学理工学部教授柴正敏氏、調査指導に来跡。
- 10月中旬 調査区の地形測量終了。遺構精査終了。
- 10月下旬 (株)シン技術コンサルに委託して遺跡及び調査区域全体の写真撮影。
- 10月21日 調査委託者の中津地域県民局地域農林水産部農道ほ場整備課より依頼を受け、農道受益者を対象に遺跡調査実施状況説明会を行い、16名の参加をみた。
- 10月下旬 重機による埋め戻しを行い、10月29日(金)調査事務所及び駐車場として借用していた土地からプレハブ・トイレ・敷鉄板を搬出し平成22年度の調査をすべて完了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は、当初平成23年度に実施することになっていたが、平成23年度の業者遺跡発掘調査において遺構や出土遺物が予想以上に検出・出土し、当初計上されていた報告書刊行費を発掘調査予算へ組み入れることとした。このため主とした整理・報告書作成作業は平成23年4月1日から平成24年3月31日までの期間で行うこととし、報告書刊行は平成24年度以降とすることとなった。整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成22年度]

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。

1月 炭化材のサンプル等を整理し年代測定の理化学的分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

[平成23年度]

4月上旬～ 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。遺構実測図の図版組み作業を進め、遺構配置図・調査区域図等の作成を行った。

5月中旬 遺物の集計を行った後、接合・復元作業を進めた。

6月中旬～8月下旬 遺物の拓本採取、実測作業を行い、素図が出来上がった遺物から順次、ロットリングペンを使用しトレース図作成を行った。トレース終了後、印刷用版下を作成した。

10月上旬～ 遺構実測図・遺構データ等の整理作業は終了し、遺構の検討・整理作業を開始し、遺構一覧表及び図版等の作成を開始した。

10月下旬～11月上旬 報告書掲載遺物の写真撮影をシルバーフォトに委託し行った。

12月上旬 仮図版を作成し、報告書の内容やページ数を再確認した。

1月下旬～2月 遺構・遺物写真図版を作成し、調査成果を総合的に検討して報告書原稿を作成した。

3月 記録類・出土品を整理して一時的に収納した。

[平成25年度]

12月中旬 印刷業者を入札・選定し、原稿・版下等の入稿、割付・編集作業を行った。

1～2月 必要に応じて適宜印刷業者と打ち合わせを行い、校正やデータの精査を繰り返した。

3月 記録類・出土品等を再整理し、薬師遺跡の記録類とともに図版等対応させて収納した。

3月26日 3回の校正を経て報告書を刊行した。

第3節 上新岡館の基本層序

調査区周辺の地形は、岩木山方面から東方に延びる台地の先端であり、標高は地表面で最高113m、最低標高が103mを測り、西から東に向かって緩やかに傾斜し、途中でやや急に傾斜する。

現状は大半が林檎園であり、遺跡の大半が削平や掘削による擾乱を受けていることが想定された。このため、東西に長い調査区を横断するように数カ所の土層観察用のトレンチを設け、土層を観察しながら表土を掘削し、精査を進めた。

基本層序の位置は、数カ所の土層観察用のトレンチのうち遺構に関する土層が最も良好に残存するⅡF・G-31グリッド付近を選定し調査した。基本土層の位置は図6に、土層を図9に示した。

各層の色調及び諸特徴は以下のとおりである。

第Ⅰ層 10YR4/6 褐色土 現在の表土であり、色調や土質が第Ⅵ層に類似する。他地区の第Ⅵ層を起源とする盛り土と想定される。縄文時代から近世の遺物が出土する。中世陶器である珠洲はすべて本層からの出土である。

第Ⅱ層 10YR3/4暗褐色土 第Ⅰ層に覆われる前の旧表土で、整地層である。10YR5/8黄褐色ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～2mm)1%混入し、土師器・粘土焼成塊が出土する。

第Ⅲ層 10YR3/3暗褐色土 10YR4/3にぶい黄褐色土10%、10YR5/8黄褐色ローム粒(φ1～3mm)2%混入する。本層の上部は褐色が強く、下部は黒色が強い。遺物は確認できなかった。

第Ⅳ層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ1～5mm)5%、10YR5/8黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)2%混入する。傾斜地の端部に発達し、暗褐色土と黄褐色土の互層で構成され、第Ⅴ層起源の二次堆積層の可能性がある。

第Ⅴ層 10YR5/8黄褐色土 2.5Y4/2暗灰黄色浮石(φ10～20mm)3%、炭化物(φ1～2mm)1%混入する。無遺物層で、本層上面で遺構確認を行った。

第Ⅵ層 10YR5/8黄褐色土 無遺物層である。2.5Y4/2暗灰黄色浮石(φ50～120mm)30%、10YR6/8明黄褐色ローム粒(φ2～5mm)5%混入する。

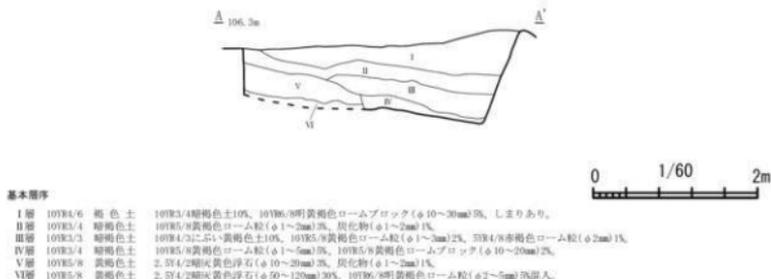


図7 基本層序

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

本調査区からは、土坑3基、溝跡1条、壕跡4条、ピット8基を検出した。調査区は館跡の縁辺部で、林檎園や水道配水池となっており、全般に土地が改変されていることが予想された。調査の結果、ⅡH・ⅡI-18~23グリッドやⅡF-35・36グリッド付近は、リンゴ畑への進入路の拡幅や削平が行われ大きく損壊しているが、それ以外は旧地表面が保存され、遺構が残存していることが判明した。本報告の調査では、近現代の遺物を出土するものや、明らかに現代のものとして判断される堆積土の遺構、または草木痕を擾乱とした。これ以外の時期推定の根拠を持たないものは調査報告対象とした。

ⅡG-27グリッドにおいて、面的な炭化物の集中域を検出し、調査時は遺構の可能性を考慮し炭素年代測定を行った(第3章1)。調査の結果、周辺の遺構の検出状況や、堆積土の状況、ほかに遺物が出土しないことから、最終的に遺構とは判断しなかった。

1 土坑

3基検出した。SK01とSK05は整理段階で自然地形と判断したため欠番とした。

第2号土坑(SK02、図6・8)

【位置・確認】ⅡF-32グリッドに位置する。第V層にて検出した。

【平面形・規模】長軸104cm、短軸100cmの歪な円形を呈し、深さは15cmを測る。

【堆積土】黒色土を主体とする。焼けた礫が堆積土から出土している。

【出土遺物・遺構の時期等】遺物は出土しなかった。堆積土の状況から、平安時代に廃絶し埋没した可能性がある。

第3号土坑(SK03、図6・8)

【位置・確認】ⅡG-22グリッドに位置する。第V層にて検出した。

【平面形・規模】長軸119cm、短軸85cmの円形を呈し、深さは61cmを測る。

【堆積土】暗褐色土を主体とし、下層には第V層起源の粘質土塊を含む。

【出土遺物・遺構の時期等】堆積土から、不明鉄製品(図8-1)が出土している。堆積土の状況から、平安時代以降に廃絶し埋没した可能性が高い。

第4号土坑(SK04、図6・8)

【位置・確認】ⅡF-33グリッドに位置する。第V層にて検出した。

【平面形・規模】長軸76cm、短軸72cmの楕円形を呈し、最深部は24cmを測る。

【堆積土】褐色土を主体とし、焼土が混入する。

【出土遺物・遺構の時期等】土師器が1点出土した(図9-2)。底面の一部が凹んでいることから、柱穴の可能性があるが、平面規模から土坑とした。出土遺物と堆積土から、平安時代の10世紀以降に廃絶し埋没した可能性が高い。

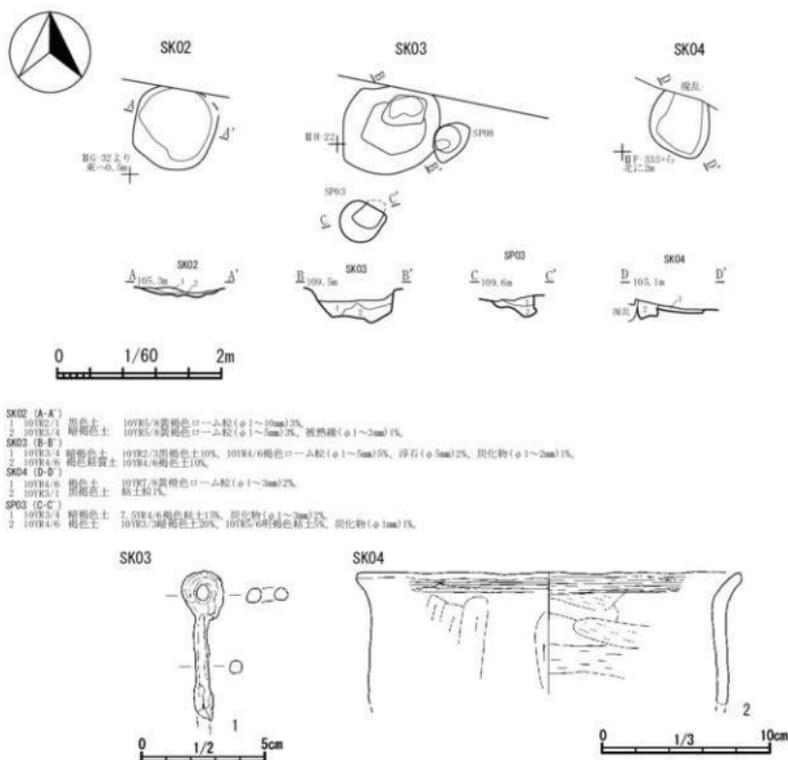


図8 土坑と出土遺物

2 ビット(SP)

11基のビットを検出した。ビットの平面図は図6に部分的に拡大し掲載するほか、SD01と重複するものは図9に掲載しており、計測値等詳細は表2に示した。

ビットの分布は、II G-21・22グリッド付近、II G-26・27グリッド付近、SD01と重複するII I-15・16付近にみられる。各ビットの堆積土からは、遺物は出土しなかった。調査区域が狹隘なこともあり、掘立柱建物跡や横列は検出されなかった。II I-15・16付近のものは、堆積土と隣接するSD05の様相から、SD01が埋没した後に構築された可能性が高く、その年代は近世から近現代が想定される。他のビットの帰属年代は不明である。

なお、SP01,04,05,12は調査段階で攪乱と判断したため、欠番とした。

表2 SP計測表

SP 番号	編年 図面番号	グリッド	座標値		標高(m)	規模(m)			備考
			X	Y		長軸	短軸	傾斜	
1			欠番						覆土。
2	8	ⅡG-22	70826.5	-37814.6	109.3	60	22	22	
3	6-8	ⅡG-22	70822.9	-37815.7	109.4	62	65	22	
4			欠番						覆土。
5			欠番						覆土。
6	6	ⅡG-26	70827.2	-37797.9	109.6	39	27	20	
7	6	ⅡG-26	70827.3	-37796.4	109.7	32	23	22	
8	6-8	ⅡH-22	70828.0	-37814.6	109.3	49	36	64	5003より新しい。
9	6	ⅡG-27	70826.7	-37793.9	109.4	69	39	95	
10	6	ⅡF-33	70821.4	-37771.2	104.7	31	23	16	
11	6	ⅡG-28	70823.8	-37794.7	107.6	41	30	53	
12			欠番						覆土。
13	9	ⅡI-15	70835.9	-37841.1	111.1	23	18	19	5001-PI13, 近世～近現代。
14	9	ⅡI-16	70834.5	-37836.7	110.9	33	30	21	5001-PI11, 近世～近現代。
15	9	ⅡI-16	70833.9	-37836.2	111.6	48	40	26	5001-PI12, 近世～近現代。

3 壕跡・溝跡(SD)

壕跡は4条、溝跡は1条検出した。調査区域が狭く作業上の危険を回避するため、堆積土の掘削は重機を併用した。壁面崩落防止の法面確保のため、各壕跡は一部の完掘にとどめざるを得なかった。

第1号壕跡(SD01、図9)

【位置・確認】ⅡI-J～J-15～18グリッドに位置する。第V層で検出した。SD05・SP13・SP14・SP15と重複し、本遺構が最も古い。

【規模・形態】北西～南東方向に、南西側にふくらむ弧を描くように延びる。確認される長さは13.0m、幅は1.3～3.5mである。第V層以下を掘り込み構築され、底面は下部赤紫ローム層(第3章参照)に達する。第V層確認面からの深さは北西端のⅡJ-15グリッドで1.1mである(図9)。断面形は菜研型を呈し、壁の底面からの立ち上がりは北壁は50°～81°と一旦急に立ち上がるが、壁の途中で比較的緩やかな角度(40°～45°)となり立ち上がる。底面の標高は北西端ⅡJ-15グリッドでは111.4m、調査区外の北東端ⅡH-18崖面露頭に現れる断面から計測した標高は109.2mであり、底面は西から東方に向かって傾斜している。

【堆積土】第1・4・5・6層は層の境界が明瞭で層相が新しいことから、近現代に帰属する土層と考えられる。第7層は黄褐色ローム粒が塊状に堆積しており、人為堆積である。底層の第8層は泥質で、滞水環境で自然堆積による埋没過程が確認できるが、ⅡH-18グリッドの露頭ではローム小塊の混入を確認したことから、人為的に埋め戻された可能性も指摘できる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】本遺跡が位置する台地の南端を圍繞している状況と断面形状から、本遺構と平行に連続する第3号壕跡とともに、遺跡本体方面へは登攀が困難で、かつ本体からは比較的容易に人間が移動可能な構造であり、効果的な防御を意識した遺構と判断される。堆積土の状況と、本遺構と同一性格と考えられるSD03出土遺物から、11世紀後半から12世紀前半に一部滞水環境の箇所を残したまま人為的に埋められ、廃絶したと思われる。そして近世・近現代頃に低地の土地開発に伴い構築されたSD05・SP13・SP14・SP15により破壊され、コンクリート製の旧岩木村新圃水道配水池が建設されたという過程が把握できる。

第2号壕跡(SD02、図6・10・11)

【位置・確認】ⅡG-22・23・24グリッドに位置する。第V層で検出した。SD04と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】北東-南西方向へ、やや南西側がふくらんだ弧を描くように延びる。確認される長さは4.3m、幅は1.6~2.1mである。第V層以下を掘り込み構築される。確認できた第V層上面からの深さは北東端で0.70m、南東端で0.56mで、底面の標高はそれぞれ107.7mと107.7mであり、確認される範囲では底面はほぼ水平である。断面形は葉研型を呈し、壁の底面からの立ち上がりは北西壁は65~46°、南東壁は50~62°で両壁とも急である。

【堆積土】全体に明黄褐色ロームブロックが互層をなし、底面は、淘汰された粗砂が薄く堆積し、粗砂上または中に、角がとれた角礫が散在して出土した。これらの層相から、底面付近は自然堆積で流水環境にあり、以降は人為堆積により埋没したと判断された。

【出土遺物】土師器坏(図11-1~4)と把手付土器の把手部の破片(図11-7、掲載外1点)、縄文土器、焼成粘土塊(図11-6)が出土した。縄文土器は小破片のため、図示しなかった。

【小結】断面形が急斜面の葉研型を呈しており、底面から両壁を登攀し移動することは困難である。本遺構の軸線方向は、遺跡本体部を圍繞するように延びることが予想され、人の移動の阻害を強く意識した遺構と判断される。堆積土層から、廃絶時は、埋め土の沈下を防ぐために明黄褐色ロームを主体とした土で一気に埋められたものと考えられる。この堆積土と遺物の出土状況から、10世紀後半から11世紀前半頃に廃絶し埋没したと考えられる。

第3号壕跡(SD03、図6・9・12)

【位置・確認】ⅡH-ⅡI-15~18グリッドに位置する。第V層で検出し、遺跡本体が位置する台地南端で、旧道を見下ろす崖に面し、本遺構の南壁はほとんど底面まで削られ破壊されている。

【規模・形態】北西-北東方向へ、南側にくらんだ弧を描くように延びる。確認される長さは現存値で13.7m、幅は0.4mである。第V層以下を掘り込み構築される。確認できた第V層上面からの深さは北西端のⅡI-15グリッドで0.96m、北東端のⅡH-18グリッドで崖面露頭に現れる断面から計測した深さは1.1mである。底面の標高は、北西端は旧道に削られているため計測不能、北東端の崖面露頭断面では109.7mであり、底面の傾斜方向は不明である。断面形は崖面露頭では葉研型が観察され(第3章 図4)、壁の底面からの立ち上がりは北西・南東壁とも48~50°を測る。

【堆積土】第2層は明黄褐色土で、全城の上層で検出した。第3層の上層からは褐色土で土師器坏や皿の破片が集中して出土した。北東端の崖面露頭で確認したところ、底面には明黄褐色粘質土、さらに上には同砂質土が堆積しており、底面付近には自然堆積土が認められた。

【出土遺物】土師器坏(図11-8~26)・皿(図12-1~12)・甕(図12-13~17)・甌(図12-18)、縄文土器深鉢、焼成粘土塊が出土した。数量的には土師器の坏と皿の破片が多い。坏の破片には、廃棄後に被熱し、割れ口が黒色に変色しているものがみられた(図11-26)。遺物の出土傾向は、特に坏と皿はⅡH-16・17グリッドの第3層からの出土が多い。第3層出土の土器に伴い出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行った(KAMINIOKA-SD03-C1・KAMINIOKA-SD03-P87)。この炭化材の樹種は広葉樹である(第3章1)。焼成粘土塊は図示していない。

【小結】本遺跡が位置する台地の南端を圍繞している状況と遺構断面形状から、本遺構と平行に連続する第1号壕跡とともに、底面からは登攀が困難な構造を有しており、人の移動の阻害を強く意識

した遺構と判断される。堆積土の状況と出土遺物から、11世紀後半から12世紀前半に自然に埋没し、埋まりきらない状態で人為的に埋められ、廃絶したと判断される。第3層の上層から土師器杯や皿が炭化物とともに集中して出土し、破損後の被熱の痕跡がある遺物が認められることから、本遺構を意図的に埋める前に、土師器の供膳具を打ち割る祭祀行為が行われた可能性がある。

本遺構が埋没した時期は、出土遺物と堆積土、そして隣接するSD01の様相から、平安時代の11世紀後半から12世紀前半頃と考えられる。

第4号塚跡(SD04、図6・10・12)

【位置・確認】II G-25・26グリッドに位置する。第V層で検出した。SD02と重複し本遺構が新しい。

【規模・形態】北西-南東方向に直線的に延びる。確認される長さは2.4m、幅は2.1~2.4mである。第V層以下を掘り込み構築される。確認できた第V層上面からの深さは北端で1.4m、南端で1.2mである。底面の標高はそれぞれ107.0m、106.6mであり、北から南に向かって傾斜している。断面形はやや底面が平坦な箱築型を呈し、壁の底面からの立ち上がりは、東壁58°、西壁48°で、両壁とも急である。底面は不規則な凹凸が連続し認められる。

【堆積土】最上層は現代の土が堆積し、第1層は暗褐色土で自然堆積、第2層はにぶい黄褐色土で褐色土や炭化物を含む土層で人為堆積の層相を示す。第3層は褐色砂質土で、淘汰された粗砂中または上に角礫や円礫が堆積し、強い流水環境にあったと判断される。

【出土遺物】土師器杯(図12-20)、縄文土器深鉢の破片が出土した。数量的には土師器4点、縄文土器1点と全体に極めて少ない。

【小結】本遺跡が位置する台地の南東隅方向に延び、台地を分割することが予想される状況と遺構断面形状から、底面からは登攀が困難な構造を有しており、人の移動の阻害を強く意識した遺構と判断される。新旧関係がSD02より新しいことと、断面形状等が他の同規模の塚跡と様相を異にすることから、本遺構が構築された年代は後出的だが明確な帰属年代は不明である。なお、遺構外であるが隣接するII G-27グリッドの第I層から、同一個体の可能性がある14世紀第3四半期の珠洲播鉢(図13-25・26)が出土しており、当該期に構築された可能性も考えられる。

第5号溝跡(SD05、図6・9)

【位置・確認】II I・II J-15・16グリッドに位置する。第V層で検出した。SD01と重複し、本遺構が新しい。

【規模・形態】北西-東方向に南西側にふくらむ弧を描くように延びる。確認される長さは4.6m、幅は0.25~0.48mである。第V層を掘り込み構築される。確認できた第V層上面からの深さは北西端0.21m、東端で0.19mである。底面の標高はそれぞれ111.4m、111.1mであり、底面は西から東に向かって傾斜している。断面形はU字型を呈する。

【堆積土】暗褐色土を主体とし、明黄褐色土を含み、底面に浮石や淘汰された粗砂が自然堆積する。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】新旧関係から、SD01が埋没した後の構築であり、層相から、SD01埋没箇所を利用し土地開発を行った際に構築された小水路跡と考えられる。本遺構付近で検出されたSP13・SP14・SP15も本遺構に関連する可能性がある。近世から近現代に帰属する可能性が高い。

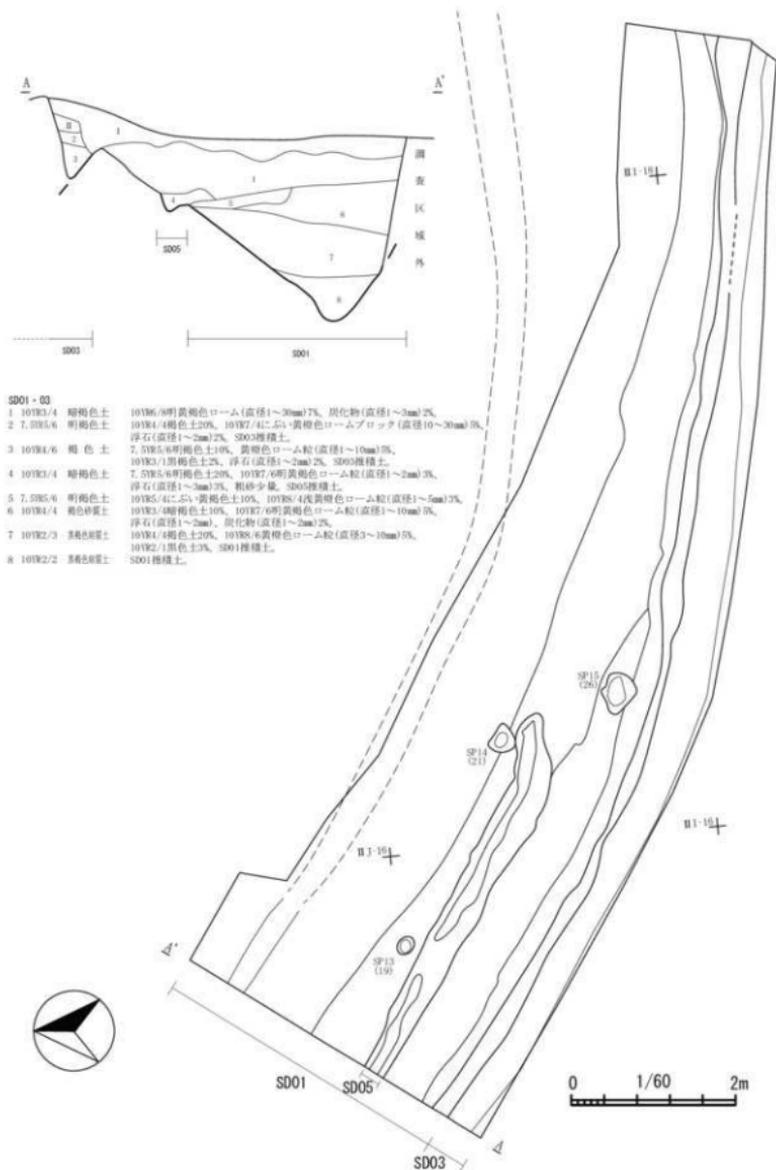
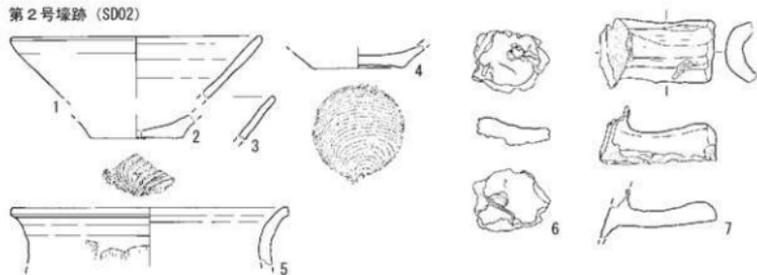


図9 壕跡・溝跡

第2号壕跡 (SD02)



第3号壕跡 (SD03)

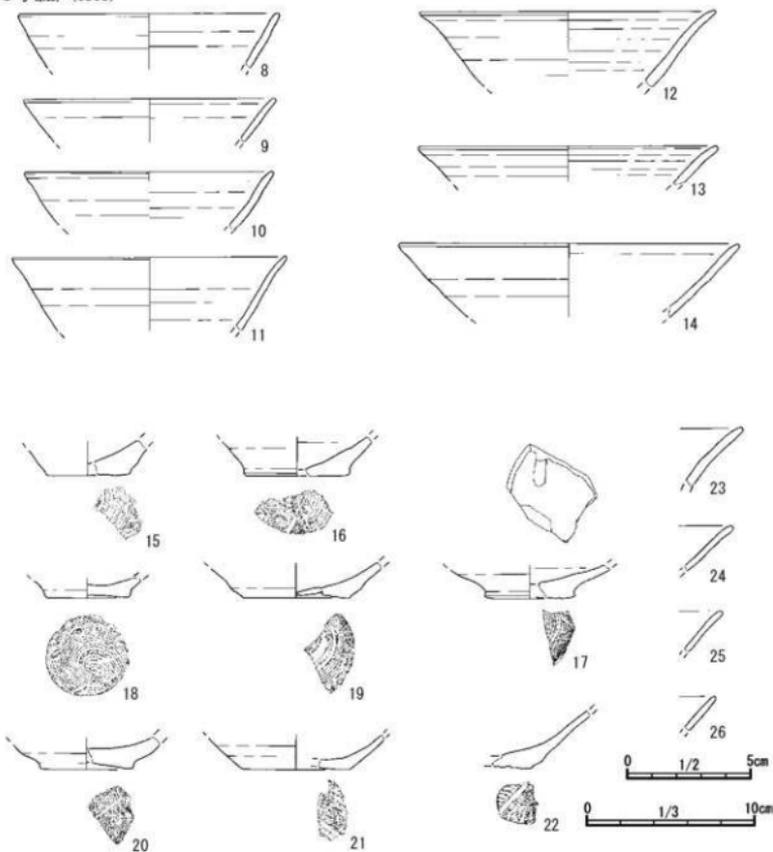


图 11 第2号壕跡・第3号壕跡出土遺物

第3号塚跡 (SD03)

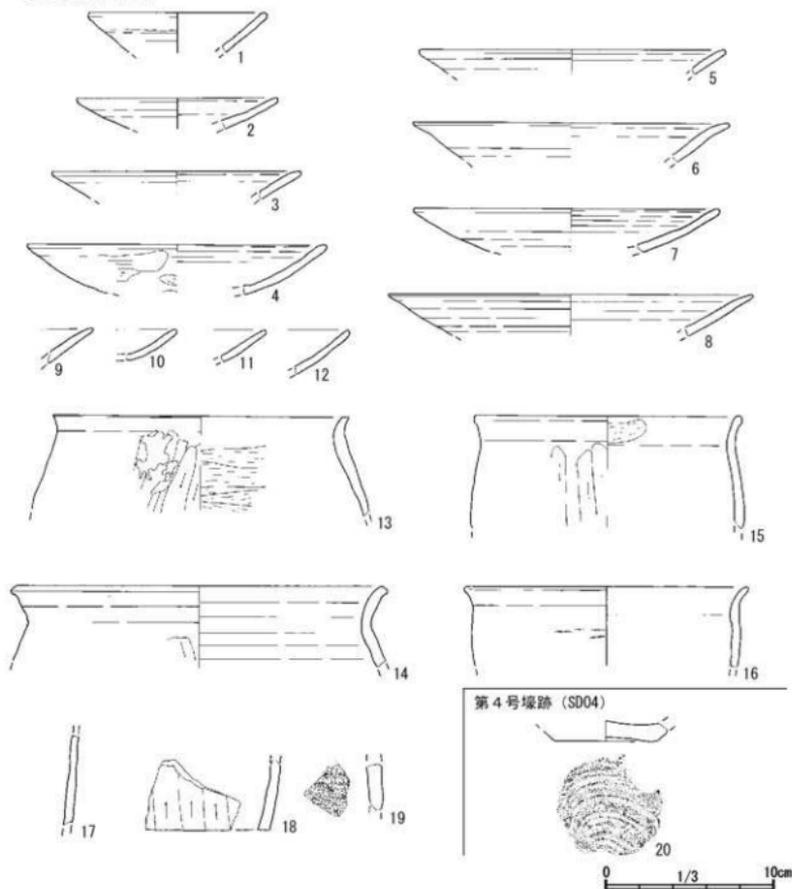


图12 第3号・第4号塚跡出土遺物

第2節 遺構外の出土遺物

遺構外からは、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器が出土した。調査区内の第Ⅰ層からの出土がほとんどで、第Ⅱ層からの出土は少量である。第Ⅲ層以下の土層からの出土はみられない。これは、第Ⅰ層以下第Ⅲ層まで重機による除去を行ったことが大きな要因と考えられる。基本的に第Ⅳ層は人力による掘削を行い遺構確認を行っているが、総じて縄文時代の遺物が少ない。

縄文時代の土器は、ⅡG-26・27グリッドで数点出土した。土師器は、ⅡH・ⅡG-21~29、ⅡF-35であわせて二十数点出土し、本調査で検出した塚跡や土坑、ピットの分布とほぼ同様の分布状況を呈する。深鉢、鉢破片が出土している。うち図13-1・2・3を図示した。

須恵器は2点の出土である(図13-23・24)。壺甕類破片が出土しており、胎土と外部叩き目の条数から、五所川原須恵器窯跡群前田野目窯跡支群で生産されたものの可能性がある。

中世陶器は2点、珠洲播鉢破片がⅡG-27グリッドから出土している(図13-25・28)。2点は接合しないが、同一個体の可能性が高いものである。内面の叩目から、13世紀後半から14世紀前半のもの判断される。

近世磁器は1点ⅡH-21グリッドから出土しているが、出土土層や調査前の土地利用状況から、検出された遺構群が埋没若しくは埋められたのちに混入したものと考えられる。

金属製品は1点、ⅡF-33グリッド第Ⅱ層から出土している。図13-30を図示した。円形で中心部に円形の穴が作出されている。外縁部付近が帯状に隆起し周回しており、金属製の蓋のつまみ部分が欠失したような形状であることから、なんらかの蓋の可能性はある。帰属年代は不明である。

第Ⅳ層上面のⅡG-21・27グリッドの一地点から、炭化材が集中して出土した。特にⅡG-27グリッドから集中して出土し遺構の可能性が考えられたため、炭化物サンプルを採取し炭素年代測定を行っている(第2章1)。共存遺物がないことや、土層の検討結果から、遺構と認定しなかった。

遺構外の遺物の出土の状況は平安時代の遺物が多く、最も広い範囲から出土している。縄文時代の遺物は少量であり、散発的な出土である。中世の遺物は珠洲播鉢であり、年代は13世紀後半から14世紀前半に帰属する。本遺跡は中世の城館として遺跡登録されており、上新岡館に関連する遺物と考えられる。

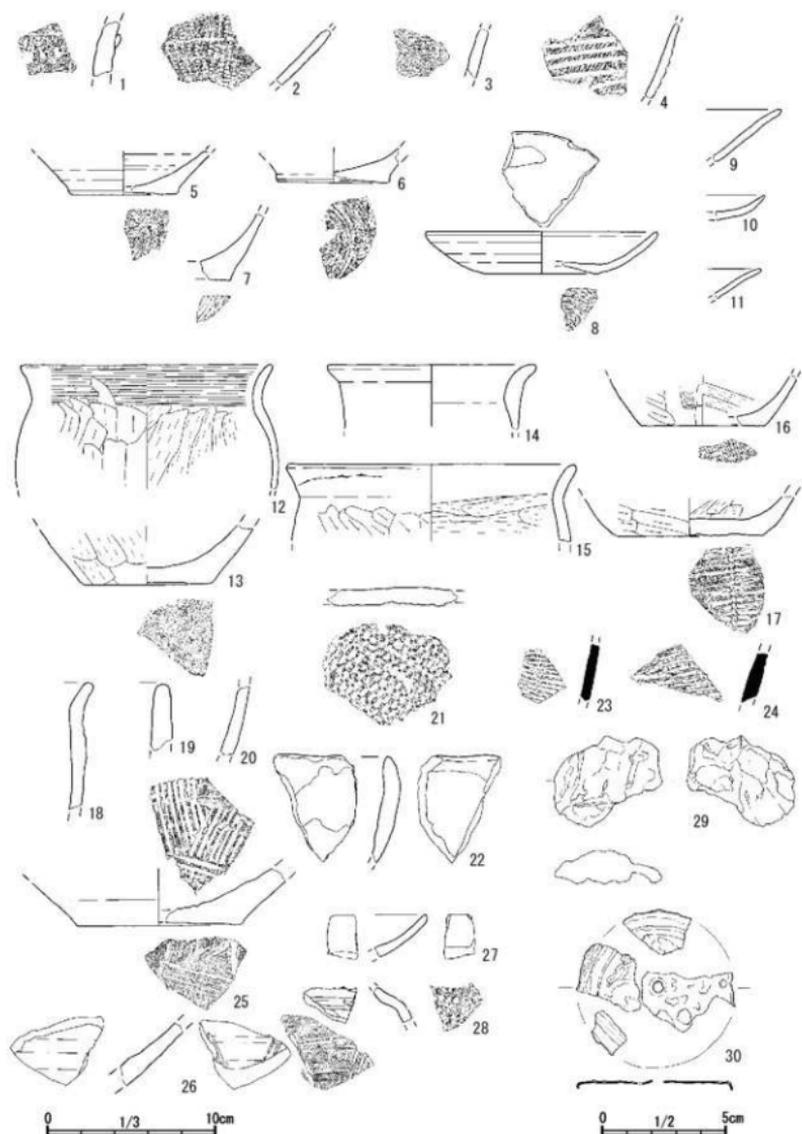


図13 遺構外出土遺物

第3節 遺物観察表

表3 土器等 観察表

図記 図号	遺物 番号	出土 位置	層位号	種類	器種	部材	計測値 (mm)			外面装飾 (文様)	内面装飾 (文様)	底面装飾	備考
							口縁	底径	器高				
8	2	304	1層	土師器	甕	口縁部	(13.9)	-	(8.1)	ナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ	-	粘土層介在
11	1	302	底面	土師器	弁	口縁部～底面	(13.0)	-	(3.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	2	302	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(3.0)	(1.4)	不明	ヨコナ	胴表面(右)	-
11	3	302	埴輪土	土師器	弁	口縁部～底面	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	4	302	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(5.9)	(1.2)	ナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	5	302	埴輪土	土師器	甕	口縁部	(16.4)	-	(3.5)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	-	-
11	7	302	埴輪土	土師器	肥子付土器	肥子	-	-	-	ナデ	-	-	-
11	8	303	埴輪土	土師器	弁	口縁部	(13.4)	-	(3.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	9	303	埴輪土	土師器	弁	口縁部	(13.0)	-	(2.8)	ヨコナ	ヨコナ	-	-
11	10	303	埴輪土	土師器	弁	口縁部	(13.0)	-	(3.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	11	303	埴輪土+1層	土師器	弁	口縁部～底面	(16.4)	-	(4.3)	ヨコナ	ヨコナ	-	-
11	12	303	1層～埴輪土	土師器	弁	口縁部～底面	(17.8)	-	(4.4)	ヨコナ	ヨコナ	-	-
11	13	303	1層	土師器	弁	口縁部	(18.0)	-	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	14	303	1層	土師器	弁	口縁部～底面	(26.4)	-	(4.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	15	303	1層	土師器	弁	底面～底面	-	(3.0)	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	16	303	埴輪土	土師器	弁	底面～底面	-	(6.4)	(2.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	17	303	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(3.4)	(2.0)	ヨコナ	ヨコナ	胴表面(不明)	-
11	18	303	1層	土師器	弁	底面	-	(5.9)	(1.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	19	303	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(6.4)	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	20	303	1層	土師器	弁	底面	-	(3.7)	(1.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	21	303	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(6.0)	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(右)	-
11	22	303	埴輪土	土師器	弁	底面	-	(3.1)	(2.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	胴表面(不明)	底面磨蝕
11	23	303	埴輪土	土師器	弁	口縁部～底面	不明	-	(3.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
11	24	303	1層	土師器	弁	口縁部	-	(2.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	
11	25	303	埴輪土	土師器	弁	口縁部	-	(2.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	
11	26	303	1層～埴輪土	土師器	弁	口縁部	-	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	二次焼酎・薬品に染色	
12	1	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	(16.4)	-	(3.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	2	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	(12.0)	-	(1.8)	ヨコナ	ヨコナ	-	-
12	3	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	(13.0)	-	(1.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	4	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	(18.4)	-	(3.0)	ヨコナデ・底ナデ	ヨコナデ	-	-
12	5	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	(18.4)	-	(3.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	6	303	群10-17 1層	土師器	甕	口縁部	(19)	-	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	7	303	群10-17 1層	土師器	甕	口縁部～底面	(18.3)	-	(2.4)	ヨコナ	ヨコナ	-	-
12	8	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	(22.0)	-	(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	9	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	-	-	(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	10	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	-	-	(3.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	11	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	不明	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	12	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	-	-
12	13	303	1層	土師器	甕	口縁部～底面	(17.8)	-	(6.0)	ヨコナデ、 ヘラケズリ、化粧貼土	ヨコナデ、ナ デ	-	-
12	14	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部～底面	(22.0)	-	(4.8)	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	-	-
12	15	303	埴輪土	土師器	甕	口縁部	(16.0)	-	(6.8)	ヨコナデ、ナデ	ナデ	-	-
12	16	303	1層	土師器	甕	口縁部	(17.0)	-	(4.9)	不明	不明	-	内外表面燻黒化
12	17	303	埴輪土	土師器	甕	底面	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-
12	18	303	埴輪土	土師器	甕	脚部	-	-	-	ヘラケズリ	ヨコナデ	-	-
12	19	303	1層	縄文土器	深鉢	底面	-	-	-	球	-	-	-
12	20	304	底面	土師器	弁	底面	-	(4.4)	(1.2)	-	-	胴表面(右)	-
13	1	群0-26	1層	縄文土器	深鉢	胴底	-	-	-	粘土層削付、粘土層 に縄文(0)押付	-	-	-
13	2	群0-27	1層	縄文土器	鉢	胴底	-	-	-	紅銅回刺	-	-	-
13	3	群0-29	1層	縄文土器	深鉢	胴底	-	-	-	紅銅回刺	ナデ	-	-
13	4	群1-36	1層	縄文土器	鉢	胴底	-	-	-	球刺回刺・文刺	ナデ	-	-
13	5	群1- 36-12	1層	土師器	弁	底面～底面	-	(6.2)	(2.5)	ヨコナ	ヨコナ	胴表面(右)	-
13	6	群1-17	1層	土師器	弁	底面	-	(6.0)	(2.1)	ヨコナデ	-	胴表面(右)	-

図説 番号	遺物 番号	出土 位置	解 位 号	種類	図様	部位	計測値(cm)			外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	底面調整	備考
							口径	底径	器高				
13	7	Ⅱ-15	1期	土師器	卍	胴部～底部	-	-	(8.1)	コテコテ	内面黒色	同表裏(右)	-
13	8	Ⅱ-25	1期	土師器	卍	口縁部～底部	(8.6)	(6.4)	(2.4)	コテテ	コテテ	同表裏(右)	内面黒付着
13	9	Ⅱ-17	1期	土師器	卍	口縁部～胴部	-	-	-	コテテ	コテテ	-	-
13	10	Ⅱ-28	1期	土師器	卍	口縁部	(6.6)	-	(1.9)	コテコテ	コテコテ	-	-
13	11	Ⅱ-17	1期	土師器	卍	口縁部	-	-	-	コテコテ	コテコテ	-	-
13	12	Ⅱ-15	1期	土師器	卍	口縁部～胴部	(3.2)	-	(2.3)	コテコテ、ヘラコテ	コテコテ、ヘラコテ	-	-
13	13	Ⅱ-24	1期	土師器	卍	底部	-	(6.6)	(3.4)	ナデ	ナデ	-	-
13	14	Ⅱ-24	不明	土師器	卍	口縁部	(3.4)	-	(2.9)	コテコテ	コテコテ	-	胎土黒色、陶器片
13	15	Ⅱ-24	1期	土師器	卍	口縁部	(2.2)	-	(4.7)	コテコテ、ヘラコテ	コテコテ、ナデ	-	-
13	16	Ⅱ-25	1期	土師器	卍	底部	-	(2.6)	(2.1)	ヘラコテ、ヘラコテ	ナデ	むしろ圧痕	-
13	17	Ⅱ-17	1期	土師器	卍	底部	-	(6.6)	(2.3)	ヘラコテ	ナデ	むしろ圧痕、ナデ	-
13	18	Ⅱ-25	1期	土師器	卍	口縁部	-	-	-	コテコテ、ナデ	コテコテ、ヘラコテ	-	-
13	19	Ⅱ-15	1期	土師器	卍	口縁部	-	-	-	コテコテ	コテコテ	-	-
13	20	Ⅱ-24	不明	土師器	卍	胴部	-	-	-	ヘラコテ	ヘラコテ	-	-
13	21	Ⅱ-21	1期	土師器	卍	底部	-	-	-	-	-	網代	-
13	22	Ⅱ-29	1期	土師器	土製品	口縁部～胴部	-	-	-	ナデ	-	-	-
13	23	Ⅱ-12	1期	須恵器	壺	胴部	-	-	-	-	-	-	-
13	24	Ⅱ-12	1期	須恵器	壺	胴部	-	-	-	タタキ	ナデ	-	-
13	25	Ⅱ-25	1期	珠洲	磁器	底部	-	(16.6)	(2.4)	コテコテ	コテコテ	ヘラコテ、静止面	内面黒目、古銅片、口縁部(4～14世紀)
13	26	Ⅱ-17	1期	珠洲	磁器	胴部	-	-	-	コテコテ	コテコテ	-	内面黒目、古銅片、口縁部(4～14世紀)
13	27	Ⅱ-13	1期	磁器	卍	口縁部～胴部	-	-	-	コテテ	コテテ	-	内面一部黒目
13	28	Ⅱ-12	1期	陶器	壺	胴部	-	-	-	コテコテ	タタキ	-	-

表4 鉄製品 観察表

図説 番号	遺物 番号	遺 構 名	出土位置	種類	計測値(cm)			保存処理後重量(g)・備考
					長さ・直径	幅	厚さ	
8	1	302	礎土	不明	610	50	50	6.2
13	30	遺構内	Ⅱ-32・Ⅱ期	不明	630	-	10	3.0

表5 土製品 観察表

図説 番号	遺物 番号	遺 構 名	出土位置	種類	計測値(cm)			備考
					長さ・直径	幅	厚さ	
11	6	302	埴土	焼成粘土	2.1	2.50	1.15	-
13	29	出土位置不明		焼成粘土	3.6	6.8	1.9	-

第3章 上新岡館の理化学的分析結果

1 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林絏一
Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・小林克也・菊地有希子

1. はじめに

青森県弘前市大字新岡字山本地内に位置する上新岡館の壕跡などから検出された炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表7のとおりである。

試料は、壕跡であるSD03の第3層と覆土から各1点(試料No.KAMINIIOKA-SD03-C1: PLD-17533、試料No.KAMINIIOKA-SD03-P87: PLD-17534)、II G-22グリッド遺構外炭化物から1点(試料No.KAMINIIOKA-SP04-C1-2: PLD-17535)、II G-27グリッドの遺構外第IV層から2点(試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX2: PLD-17532、試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX1: PLD-17536)の計5点の炭化材である。なお、当初測定予定であったII G-22グリッド出土の試料No.KAMINIIOKA-SP04-C1は、全量(64.83mg)を使用したのがアルカリ処理でほとんど溶解し、AAA処理後の重量が0.14mgで、測定に必要な量の炭素が回収できなかった。試料No.KAMINIIOKA-SP04-C1-2はその代替試料である。

実体顕微鏡下の観察によれば、炭化材の樹種は、試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX2のみ針葉樹でそれ以外は広葉樹である。また今回の試料のうち、遺構外の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX1は樹皮に近い部分であったが、それ以外の試料はいずれも最外年輪以外の部位不明および形状が観察できない部位不明であった(図14)。

試料の時期は、壕跡SD03出土の2点については出土遺物から平安時代、II G-22グリッドおよびII G-27遺構外第IV層の3点については堆積物から平安時代～中世と想定されている。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.1(校正曲線データ: IntCal09)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

4. 考察

各試料の暦年校正結果のうち、2 σ 暦年代範囲(95.4%の確率)に着目して結果を整理する。

塚跡SD03では、3層出土の試料No.KAMINIIOKA-SD03-C1(PLD-17533)は1028-1155 cal AD(95.4%)、同層出土の試料No.KAMINIIOKA-SD03-P87(PLD-17534)は1038-1185 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。いずれも11世紀前半～12世紀後半の範囲内で平安時代に相当し、平安時代という想定年代に対して整合的であった。

II G-22グリッド遺構外の試料No.KAMINIIOKA-SP04-C1-2(PLD-17535)は、712-746 cal AD(12.3%)および767-885 cal AD(83.1%)の暦年代範囲を示した。これは8世紀前半～9世紀後半の暦年代で奈良時代～平安時代に相当し、想定年代である平安時代～中世より古い暦年代も含む結果となった。

II G-27グリッドの遺構外第IV層の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX2(PLD-17532)は、695-698 cal AD(0.6%)、708-748 cal AD(18.3%)、766-883 cal AD(76.5%)の暦年代範囲を示した。これは7世紀末～9世紀後半で飛鳥時代～平安時代に相当し、想定年代である平安時代～中世より古い暦年代も含む結果となった。一方、同区遺構外第IV層の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX1(PLD-17536)は、890-982 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。これは9世紀末～10世紀後半であり、想定年代に対して整合的であった。

木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。遺構外の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX1以外は部位不明の炭化材であり、古木効果、つまり試料の木材が実際に枯死もしくは伐採された年代よりも古い年代が得られている可能性を考慮する必要がある。遺構外No.KAMINIIOKA-SP04-C1-2の試料や遺構外の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX2の暦年代範囲が想定よりも古い暦年代を含む結果となったのは、古木効果の影響である可能性が考えられる。遺構外の試料No.KAMINIIOKA-遺構外-CX1の方は、樹皮に近い部分であり、測定結果の暦年代は、実際に木材が枯死もしくは伐採された年代に近い年代と考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

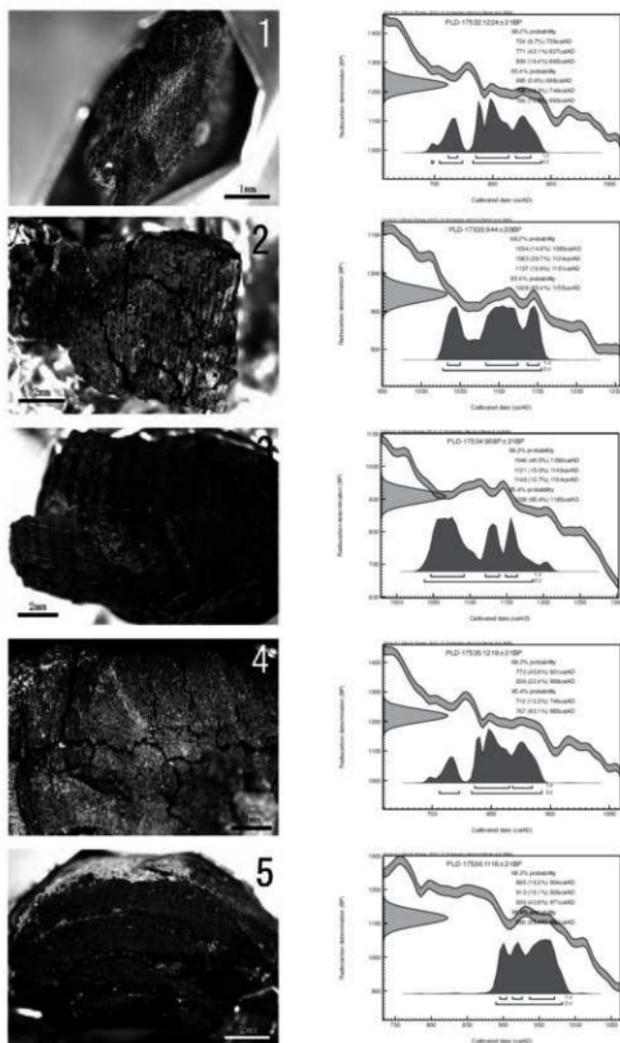
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111–1150.

表6 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-17532	試料No. KAMIN108A-遺構外-C32 調査区: ⅡC-27 遺構: 遺構外 層位: 第IV層 深度: 地表下約20cm	試料の種類: 炭化材 (非糞糞) 試料の性状: 部位不明 採取位置: 外側1年輪	平安時代～中世	前処理前重量: 13.03mg 燃焼量: 3.40mg 精製炭重量: 2.49mg 炭素回収率: 0mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)
PLD-17533	試料No. KAMIN108A-S303-C1 調査区: ⅡB-17 遺構: S303 (塚跡) 層位: 第3層 深度: 地表下約20cm	試料の種類: 炭化材 (非糞糞) 試料の性状: 墓外以外部位不明 採取位置: 外側1年輪	平安時代	前処理前重量: 10.05mg 燃焼量: 2.62mg 精製炭重量: 2.72mg 炭素回収率: 0.79mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)
PLD-17531	試料No. KAMIN108A-S303-P97 調査区: ⅡB-17 遺構: S303 (塚跡) 層位: 塚跡土 深度: 地表下約30cm	試料の種類: 炭化材 (非糞糞) 試料の性状: 墓外以外部位不明 採取位置: 外側1年輪	平安時代	前処理前重量: 9.81mg 燃焼量: 4.45mg 精製炭重量: 2.81mg 炭素回収率: 0.79mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)
PLD-17535	試料No. KAMIN108A-S304-C1-2 調査区: ⅡE-32 遺構: 遺構外 層位: 塚跡土 深度: 地表下約15cm	試料の種類: 炭化材 (非糞糞) 試料の性状: 墓外以外部位不明 採取位置: 外側1年輪	平安時代～中世	前処理前重量: 36.45mg 燃焼量: 6.24mg 精製炭重量: 2.30mg 炭素回収率: 0.71mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)
PLD-17536	試料No. KAMIN108A-遺構外-C31 調査区: ⅡC-27 遺構: 遺構外 層位: 第IV層 深度: 地表下約50cm	試料の種類: 炭化材 (非糞糞) 試料の性状: 程度に古い部分 採取位置: 外側1年輪	平安時代～中世	前処理前重量: 17.91mg 燃焼量: 4.16mg 精製炭重量: 2.76mg 炭素回収率: 0.76mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)

表7 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-17532 試料No. KAMIN108A-遺構外-C32	9	-25.73 \pm 0.17	1224 \pm 21	1225 \pm 20	7240 (9.75) 7260 7710 (12.15) 8270 8300 (16.45) 8500	6950 (6.05) 6980 7080 (18.26) 7480 7660 (16.36) 8330
PLD-17533 試料No. KAMIN108A-S303-C1	9	-25.40 \pm 0.14	944 \pm 20	945 \pm 20	10340 (14.95) 10500 10830 (19.73) 11240 11370 (21.45) 11510	10280 (16.45) 11330
PLD-17531 試料No. KAMIN108A-S303-P97	9	-27.93 \pm 0.19	908 \pm 21	910 \pm 20	10460 (10.35) 10920 11210 (15.05) 11480 11880 (12.75) 11640	10380 (16.45) 11180
PLD-17535 試料No. KAMIN108A-S304-C1-2	9	-26.47 \pm 0.17	1219 \pm 21	1220 \pm 20	7720 (15.85) 8310 8300 (22.45) 8680	7120 (12.26) 7460 7670 (16.36) 8380
PLD-17536 試料No. KAMIN108A-遺構外-C31	9	-25.84 \pm 0.14	1116 \pm 21	1115 \pm 20	8950 (16.25) 9040 9130 (15.15) 9260 9300 (12.85) 9710	8900 (16.45) 9620



1. II H-17区遺構外第IV層 試料No. KAMINI108A-遺構外-CX2 (PLD-17532)
2. S003 (埋跡) 試料No. KAMINI108A-S003-C1 (PLD-17533)
3. S003 (埋跡) 試料No. KAMINI108A-S003-P87 (PLD-17534)
4. II G-22遺構外第IV層 試料No. KAMINI108A-S004-C1-2 (PLD-17535)
5. II H-17遺構外第IV層 試料No. KAMINI108A-遺構外-CX1 (PLD-17536)

図14 年代測定をおこなった炭化材試料と暦年較正結果

第4章 総括

第1節 上新岡館の遺構について

今回調査対象となった上新岡館は、現況はリング圍や畑地となっている。館本体部と考えられる曲輪は、リング圍となっている。内部に出入りする造が3カ所にみられ、現在は農作業用の道として利用されている。曲輪の内部は、東側に傾斜する緩斜面となっており、西側には、直径約1m程の塚状地形がみられる。

曲輪から3m程一段下がった低いところに、今回の発掘調査区が位置している。調査区周辺は、東側に行くに従って緩やかに傾斜が増す地形であり、少なくとも調査区内では意図的な土盛りや平坦面、地面を掘り込む建物跡の痕跡は検出できなかった。曲輪外の東部は、土砂採取が行われており、第V層まで掘り込まれ破壊されていた。一方、曲輪の東北や北部は旧状が残されており、明確な切岸や帯曲輪状の地形が観察できる状況であった。曲輪西側には、壕跡と土塁状地形に隣接し、堰水門から分水される水が流れる水路が一条あり、この水路も堀跡と考えられるものである。確認のため、尾根伝いにさらに西方を探索したが、遺構は確認できなかった(図18)。

上新岡館が登場する最古の史料は、「文政七年新岡村絵図」である(図15)。絵図には、今回調査を行った場所付近に長方形の区画が描かれ、中に「館跡」と書かれている。「館跡」の西・南・北側は青色で着色された一重の堀が描かれ、堀には西方からの流水が連結している。この流水は、岩木山に端を發し、薬師遺跡付近と考えられる「夷館」を経由し台地の尾根伝いに蛇行しながら延び、上新岡館である「館跡」を経て田地で途切れている。この流水は現在も残存し、付近の田畑の灌漑用水に利用されているものである。この流路は自然に形成されたものではなく、人工の堰と考えられる。絵図からは、文政七年(1824)の時点には構築されていたことがわかる。「館跡」の文字の西には「館越」「堀枝」、東には「明ノ腰」の文字がある。「明ノ腰」の南には四角形の構築物が2基描かれており、現在も残る板碑と庚申塔とみられる。現存する板碑に掘られる年号は建武二年(1335)、庚申塔は文政八年(1825)であり、本絵図と年代的に矛盾するが、本絵図は江戸時代後期の新岡集落周辺の様子を示すものとして注目される。

昭和四七年(1971)、成田末五郎は上新岡館について、「杉沢森の東端にあつて、自然の地形を利用した遺構である」と記し、昭和三年(1928)5月20日に中村良之進により調製されたという上新岡館の図を「岩木町々誌」に掲載している。

昭和五四年(1979)、新岡武彦は上新岡館について位置と現状について記しており、アイヌのチャシに構造が類することを述べている。現地に残る壕跡や、旧岩木村新岡揚水場の写真を掲載している。

昭和五六年(1981)、沼館愛三は、新岡の館が上と下の2カ所あることを示し、上館は新岡北側無名祠付近にあり、新岡西南側で四ツ谷との間にある下館とともに金氏の居城と説明している。館の現況を示した図は掲載されていない。

昭和五八年(1983)、青森県教育委員会は、新岡地区では上新岡館と下新岡館の調査を行っている。上新岡館の位置は、新岡集落の西方杉沢森の麓、新岡揚水場付近のリング畑と明記されている。

平成十二年(1999)、今進は、地元の住人としての立場で、土地に伝承される伝説や地名の俗名を元に、新岡地区の歴史を解釈し表した。上新岡館は、「元の下新岡館」と説明や記載がなされており、「上新岡館」という館の名は使用していない。「元の下新岡館」は、新岡集落内にある下新岡館の館主が以前居住していた館跡であると説明されている。

平成一五年(2002)、弘前市は、『弘前市史』において、上新岡館と下新岡館は大浦城築城以前の時期の城館ネットワークの一端を担う館として解説している。館の詳細な所在地の記載はなく、現況の見取り図を掲載している。

今回の発掘調査の結果と、図18を元に、昭和三(1948)年中村良之進作成図と1948年に米軍が撮影した写真を中心に考察する。

館の様相で、現在の状況と相違するのは、曲輪内と堀跡である。中村図では曲輪内は西方が一段高く表現され、曲輪南方から一段高い箇所に入る道が北側に描かれている。現況も西側が高く、旧状は現地に残る塚状の土の頂部がかつての地表だったものと考えられる。従って、現在の曲輪内の西部は、大きく削平されている可能性が高い。曲輪南部には木戸口があり、館の外から内部へ進入する道が描かれている。堀跡は曲輪西・南・東側にみられ、今回の発掘調査区にあたる箇所には「堀趾水田」とあり、水路が描かれている。曲輪東北部には「空堰」とあり、現況では地表面からは全く観察されない堀跡があったことが分かる(図17)。

この中村図の内容は、作成から20年後の1948年に米軍により撮影された空中写真で堀跡や水田、水路が確認できる。今回の発掘調査により、壕であるSD01・SD02・SD03の一群とSD04の一群に年代差がある可能性があることを示した。館跡南側の道は最も外縁にあるSD02の凹地を利用して造られた可能性が想起される。1948年米軍写真や中村良之進図によると、SD01とSD03は台地を圍繞するように延び、その凹地が水田として利用されていたことを確認することができ、SD05やSP13・SP14・SP15が上新岡館が廃絶した後の土地利用に関する遺構であるとした考古学的見解が矛盾しないことも改めて確認できる。

上新岡館の南側の道から内部へ進入する、最近造られたと思われるL字型の道路は、第V層以下を大きく破壊しており、SD01・SD03の延長部と考えられる。この場所には、中村図には「木戸口」とされる道が表されており、1948年の米軍写真によると、明瞭ではないが、館内部への進入路が屈曲しているような様子が確認される。この場所付近と思われるII G-21・22グリッド付近では、土坑やピットが比較的集中して検出されている。出土遺物が非常に少なく、土地買収以前には、小屋が建っていたこともあり、掘乱坑も集中して検出されている。ただしII G-H-20・21グリッド付近に位置する方形の掘乱坑は、形状から、SD03の延長か、館内部への進入路の痕跡の可能性もある。この付近には、館の外から中へ進入するための通路である土橋や、出入口の防御施設である虎口や馬出のような施設が存在していた可能性があるが、現在は遺憾ながら大きく破壊されており、詳細は不明な状態となっている。現在残る資料や調査結果から、城道は、曲輪南部の既存道路から、現在のL字型に屈曲する道路付近から、なんらかの出入口施設を経由し、現在も残る斜路を登り、城内に達するように造られた可能性が高いものと考えられる。

地表面に残る情報は、本館跡の遺構の最新の状況であり、発掘調査の結果と合わせ上新岡館の変遷を考察すると、館は、古代末期の所謂環壕集落や防御性集落と称される遺構を母体とし造られ、東方から流下する環は、上新岡館東方の灌漑をするために引かれたものと考えられ、上新岡館の成立は、新岡集落の成立や開拓と大きく関連するものであり、環の構築も館の成立と連動し構築された可能性が大きいと考えられる。

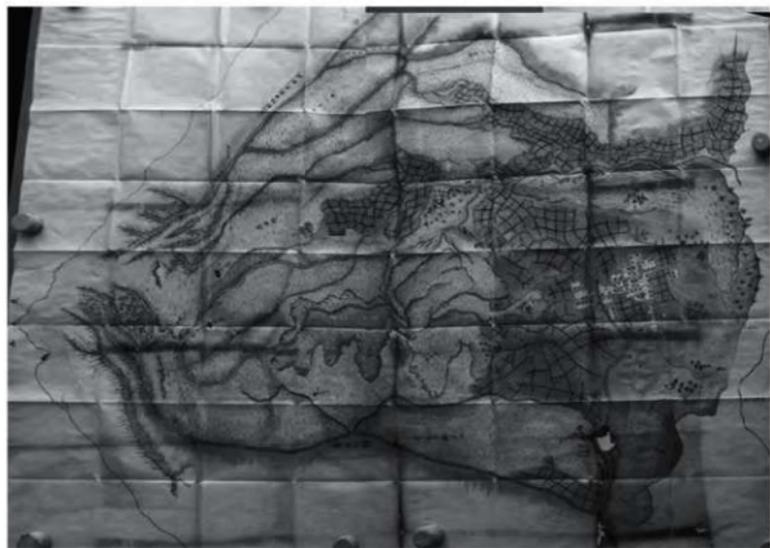
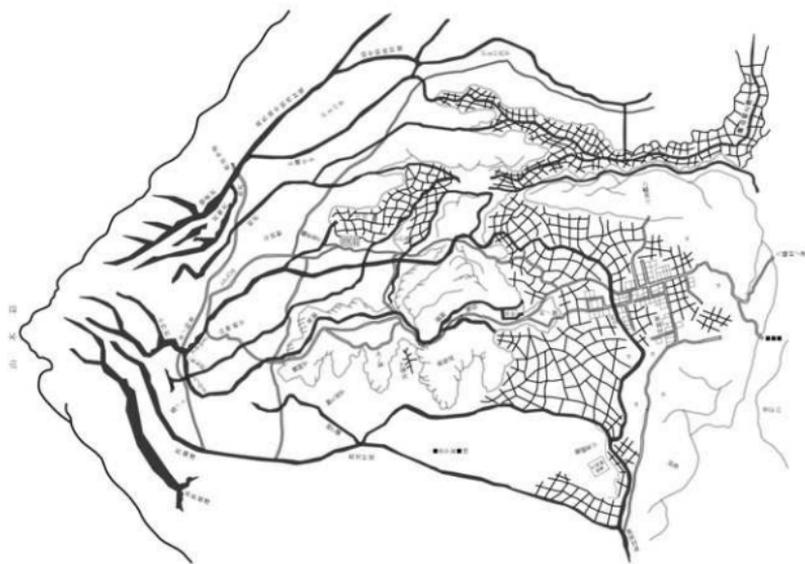


图15 「新町村領絵図 文政七年」(1824、弘前市立図書館蔵)



図16 新岡集落と上新岡館航空写真（1948年米軍撮影）



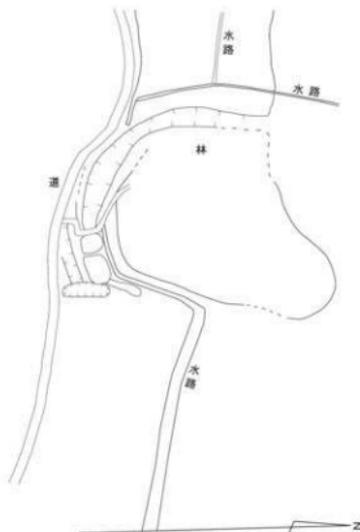
成田末五郎編「上新岡館の図」『岩木町々誌』昭和四七年（1971）を再トレース



1948年米軍撮影空中写真（東から）



弘前市「上新岡館見取図」『新編 弘前市史通史編1（古代・中世）』平成15年（2002）を再トレース



空中写真トレース図

図 17 上新岡館見取図・航空写真



圖18 新岡館現狀と周辺地籍圖 (1:2,000)

第2節 まとめ

岩木山の東の山麓に位置する上新岡館と周辺地域は、板碑や館跡が集中し、中世の遺跡が濃く分布する地域の一つである。上新岡館は、丘陵に囲まれた新岡集落の西方、岩木山から延びる台地の先端部に位置し、館跡からは新岡集落を眼下に望み、丘陵の北や東方には津軽平野部の低地、南方は岩木川に沿う低地や丘陵群から望むことができる。館跡の現況はリング園や畑地となっており、西側に埋まりきらない壕跡や土塁を確認できる。

今回の調査の結果、平安時代の土坑3基と壕跡4条、近世以降の溝跡1条とピット3基、時期不明のピット8基が検出され、平安時代の土師器、須恵器、縄文時代の土器、中世・近世の陶器、時期不明金属製品が出土した。段ボール箱で3箱分の出土遺物の大半は平安時代の土師器で、縄文時代の遺物はごく少量である。今回検出した壕跡の様相や出土遺物から、本遺跡は平安時代の11世紀後半頃から12世紀前半頃青森県内に展開するとされている、いわゆる環壕集落や防衛性集落と呼ばれる、壕に囲まれた集落の可能性があると判明した。また、中世の遺物が出土したが、明確に中世の時期に帰属する遺構は検出できなかった。

壕跡は、SD01とSD03はほぼ同軸で、台地の縁辺を巡るように延びている。底面付近の堆積土の状況は粘質土の箇所もあり、廃絶時は一部滞水環境にあったと思われるが人為的に埋められていた。SD01の断面形態は、葉研状を呈し、標高の高い北側方面には人の登攀が困難であり、館の外側に対する、防衛的意図が感じられるものである。SD01とSD03の間は、第V層が両壕の構築により掘削され、所謂やせ尾根状を呈しており、かさ上げや版築は行っていなかった。しかし掘削角度から、人員の往來の阻害を意識して意図的に掘削していた可能性がある。この尾根状地形は調査前の地形にも残存し、既存壕跡の西にある土塁状の高地に連続する可能性がある。意図的に作出したものであるならば遺構と認定できるが、今回の調査では明確に判断できなかったため、遺構と認定しなかった。

一段低い地点で検出されたSD02とSD04は重複し、SD04が新しく、SD04の底面の形態や堆積土は前者に比べ相違し、時期や埋没時の環境の差が認められた。SD02は、軸方向や断面形状、土層堆積状況がSD01とSD03に類似していることから、これらSD01・SD02・SD03は同時期に構築され廃絶した可能性が高く、その年代は出土遺物から11世紀後半から12世紀前半以降と判断された。

SD04付近のII G-27グリッドから、珠洲播鉢の13世紀末から14世紀第3四半期頃に帰属する破片が2点、表土から出土した。出土層位が表土第I層であり、周辺から検出された遺構の廃絶・埋没年代決定の根拠とすることはできないが、中世における上新岡館の機能時期は13世紀末から14世紀第3四半期以降である可能性がある。また、本調査区より西側方面は、SD01・SD03の軸と館の西側に現存する壕跡の軸から、SD01は、現存する壕跡に連続するもので、SD03はさらに西側に現在用水路となっている溝に連続するものと考えられる。

現在館跡の南側に位置する既存の道から上新岡館内部に進入する道は、SD01・SD03の埋没後に造られた水田跡や、SD02の跡地や元から存在した出入り口を拡張して造られたものと考えられ、大部分は破壊されているが昭和三年(1928)の中村園にもある「木戸口」の一部は、調査区域外に、農作業用道路として一部残存している。

SD03では、堆積土最上層に本報告で第2層とした明褐色土が堆積している。試掘調査時に硬化面と報告されたもので、この下層のII H-16・17グリッドから、土師器坏や皿の破片とともに炭化物が集中して出土し、破片となった後に火を受けたことが明らかな土師器坏が出土している。SD03や、

SD01の11世紀後半から12世紀前半頃とした廃絶・埋没年代は、これらの遺物から導き出されたものであり、意図的な埋め戻しの前に祭祀が行われた可能性が考えられる。

今回の発掘調査により、上新岡館から検出された壕跡は、11世紀後半から12世紀前半頃に廃絶・埋没したものであり、珠洲稲鉢の出土から、上新岡館が中世の13世紀末から14世紀第3四半期頃に機能した可能性を確認することができたことは、今回の発掘調査の大きな成果であった。そして、上新岡館は少なくとも江戸時代の文政七年(1824)には地元新岡の住民に館跡として把握され、薬師遺跡方面の丘陵の尾根を貫流する水路も江戸時代には穿たれていたことが判明し、館は新岡地区の開拓と連動し機能していた可能性を見いだすことができた。今回の調査で検出した壕跡の明確な帰属年代や構築目的は、上新岡館の中心部分の調査を行うことにより判明するものと思われ、当地域における平安時代末から中世にかけての開拓の様相の解明のため、今後、考古学はもとより歴史学分野全体の総合的な研究による調査が望まれるものである。(工藤)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 『青森県の中世城館』 昭和58年(1983)
 青森県教育委員会 『小沢館跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第22集 1997
 福島県大越町教育委員会『大越館跡』
 五所川原市教育委員会 『五所川原須恵器跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集 2003
 成田末五郎編 『岩木町々誌』 昭和47年(1971)
 新岡武彦 『新岡館の人びと』 昭和54年(1979)
 沼館愛三 『津軽諸城の研究』 昭和56年(1981)
 三浦圭介 「古代」『新編 弘前市史』資料編1 平成7年(1995)
 佐藤 仁 「第四章 弘前地域の金石文」『新編 弘前市史』資料編1 平成7年(1995)
 工藤清泰 「歴史時代 東北」『日本土器事典』1996
 今 進 『新岡郷土史-先人の足跡-』 平成12年(1999)
 弘前市 『新編 弘前市史』通史編1(古代・中世) 平成15年(2002)
 齋藤 淳 「北奥出土の権土器について」『青森県考古学』第16号 青森県考古学会 2008
 吉岡康暢 『中世須恵器の研究』平成6年(1994)

第3編 薬師遺跡

第1章 調査の概要

第1節 薬師遺跡の調査方法等

1 発掘作業の方法

薬師遺跡では、縄文・弥生時代の遺物と、遺構と推測される落ち込み等が確認されたため、縄文・弥生時代の遺構調査に重点を置いて、時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。また、第1編で示した調査方法に加えて、薬師遺跡の調査では以下の方法も採用した。

[測量基準点・水準点の設置]路線の測量原点及びレベル原点として使用した主な基準点等の国土座標値(世界測地系)及び標高値は表8に、調査区と公共座標軸の位置関係、基準主要点等については図20にそれぞれ示してある。

[グリッド設定]遺構・基本土層の

精査や遺構外出土遺物の取り上げにあたっては、公共座標を基準とした4mグリッドを設定して記録した。「X=771.200、Y=-39.200」の点を「ⅢA-51」とし、西から東へは数字を付していき、南から北へはローマ数字とアルファベットの組み合わせを付していった。アルファベットはⅡA、ⅡB、ⅡC…、ⅡX、ⅡY、ⅢA、ⅢB…、というようにYまで達したらローマ数字を一つ繰り上げる25進法とした。グリッド呼称は南西隅のグリッド杭名を用いることとした。

[小グリッドの設定]平成23年度の調査中、盛土遺構及び削平範囲周辺で遺物の出土密度が非常に濃くなったことから、これらの区域では通常のグリッドを16に分割した小グリッドを設定して遺物を取り上げることとした。通常4m四方のグリッドを東西・南北とも1mで区切った16の方眼にし、東方方向をa・b・c・d、北方方向を1・2・3・4と各列を命名し、その組み合わせで各1m方眼をa1、a2、a3、a4、b1、b2、…、d3、d4と呼称した。したがって小グリッドで取り上げた遺物は、「ⅢH-54(a3)」、「ⅢK-60(c4)」というように通常のグリッドと小グリッドを併記している。

[各年度の調査区]平成22年度の調査区は、工用センター杭ではSP39~No112+16.038間、調査グリッドでは概ね31~51ライン間であった。

平成23年度の調査区は、工用センター杭ではNo100~No104+11.727(EC.37)間と、No108+10.4~SP39間で、調査グリッドでは概ね63~84ライン間と、51~ⅢDライン間の2区間であった。

平成24年度の調査区は、工用センター杭ではNo104+11.727(EC.37)~No108+10.4間で、調査グ

表8 主要点の国土座標値及び標高値一覧

区分			点名	国土座標値 (世界測地系・JGD2000)		標高値 (m)
工事杭	測量杭	後視点		X	Y	
○	○	○	No.100L	71183.473	-39069.843	-
○	○	○	No.102L	71208.126	-39102.452	-
○	○	○	No.103+13.2L	71233.366	-39123.047	-
○	○	○	No.103L	71224.075	-39114.944	160.795
○	○	○	No.104L	71236.462	-39128.035	160.852
○	○	○	No.104R	71242.534	-39125.449	161.188
○	○	○	No.106L	71236.371	-39166.196	161.279
○	○	○	No.107L	71230.294	-39181.907	161.279
○	○	○	No.108L	71212.547	-39188.552	160.983
○	○	○	No.109+17.0L	71190.171	-39220.692	161.573
○	○	○	No.110+5.5L	71188.942	-39229.118	160.573
○	○	○	No.112+17.0	71174.012	-39276.19	-
○	○	○	No.112L	71181.721	-39262.135	159.561
○	○	○	BC.36L	71185.949	-39074.448	160.747
○	○	○	BC.37L	71229.576	-39119.223	160.795
○	○	○	BC.39L	71207.227	-39190.556	160.983
○	○	○	BC.40L	71183.843	-39254.307	159.59
○	○	○	EC.36R	71218.718	-39102.827	160.997
○	○	○	EC.38L	71225.427	-39183.235	160.807
○	○	○	EC.38R	71228.799	-39190.928	160.944
○	○	○	EC.39R	71200.971	-39210.423	160.777
○	○	○	SP.38L	71232.993	-39178.899	161.279
○	○	○	SP.39L	71197.374	-39197.583	-
○	○	○	SP.40L	71180.809	-39264.468	159.624
○	○	○	SP.40R	71188.284	-39267.588	159.895
○	○	○	N6	71237.383	-39150.992	-
○	○	○	KBM01	71187.524	-39270.579	159.922
-	○	○	K-1	71227.516	-39101.91	160.795
-	○	○	K-2	71195.547	-39090.48	160.747
-	○	○	K-3	71248.32	-39120.387	160.795
-	○	○	K-4	71214.817	-39169.868	161.272
-	○	○	K-5	71230.138	-39180.956	161.379

リッドでは概ねⅢD～63ライン間であった。

[遺物包含層・盛土遺構等の調査]原則として上層から層位毎に人力で掘削したが、盛土遺構で非常に堅く締まったローム層など人力での掘削が非常に困難な土層は、遺物等を損傷しないよう留意しながら電動ハンマも使用した。遺存状態が良好な遺物や、特徴的な遺物が出土した区域では、トータルステーションや簡易遺り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップ図や形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。盛土遺構等の土層精査では各土層の三次元的把握に努め、分層した土層名を土層断面写真に写し込んで撮影したものが多く、その後土層観察用ベルトを除去して精査を進めていくと新たな土層が出現するなど、土層名を必要に応じて変更したことがある。したがって盛土遺構等の土層名は、写真に撮影されているものよりも図版に掲載されている土層名が優先されることを了承いただきたい。また、遺物包含層、盛土遺構、削平範囲では、それぞれの土層や関係遺構、調査の進展状況等により最適な調査方法を採用・変更したことから、詳細については各事実記載項目を参照いただきたい。

[微細遺物の検出]遺構掘削において微細遺物を見落とす可能性が考えられた土坑墓(平成22・23年度)の堆積土や、黒曜石散布範囲(平成23年度)の土壌は土のう袋に採取して乾燥させた後、ふるいによって微細遺物の検出に努めた。メッシュは1.0・2.0・4.0mmを使用した。

2 整理・報告書作成作業の方法

3ヶ年の調査と整理作業によって、堅穴住居跡7棟、土坑81基、埋設土器遺構14基、溝跡7条、貯水池状遺構1基(付属ピット列1基含む)、建物跡3棟、ピット86基、ピット列1条、焼土遺構25基、集石遺構1基、黒曜石散布範囲1カ所、堅穴遺構1基、盛土遺構2カ所、削平箇所1カ所などの遺構が検出された。遺物は、縄文時代前期・晩期、弥生時代の遺物を主に、土器類278箱、石器類133箱の合計411箱が出土した。

これらの遺構・遺物について、第1編で示した整理・報告書作成作業の方法で整理作業を行った。主に縄文時代・弥生時代の集落の時期・構造等を解明するため、堅穴住居跡、盛土遺構をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

出土物の掲載及び分類にあたって、以下の基準を用いることとした。

(1)土器の掲載にあたって

[土器の帰属する層位について]原則として調査現場で取り上げた遺構種ごと、出土層位ごとに掲載した。しかし特に土器に関しては複数の遺構や層位をまたがって接合したものが少なくなく、これについては個々の遺物の破片を確認して、帰属する遺構・層位を適切に把握するように努めた。このことをふまえて、次の基準を原則として掲載することとした。

- ・遺構内と遺構外にまたがって接合している資料は、遺構内に優先的に掲載した。
- ・遺構内同士で接合している資料は、より底面(床面)に近から出土した遺構、もしくは土器遺存率の大きい資料の出土した遺構、に帰属することと判断した。
- ・盛土遺構、遺物包含層、Ⅰ～Ⅳ層等の複数層出土遺物が接合しているものは、より下位の土層に帰属することを原則とした。ただし、下位層出土破片がわずかで、上位層出土片が多数接合している資料の場合は自然的攪乱や人為的攪乱などが想定できるため、上位層に掲載しているものもある。

[土器の掲載順序について]遺構内出土土器の掲載にあたっては、各遺構から出土した遺物が1頁に収

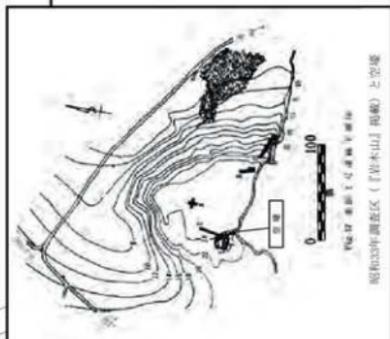
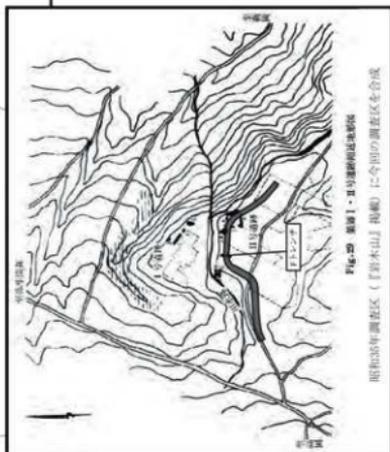
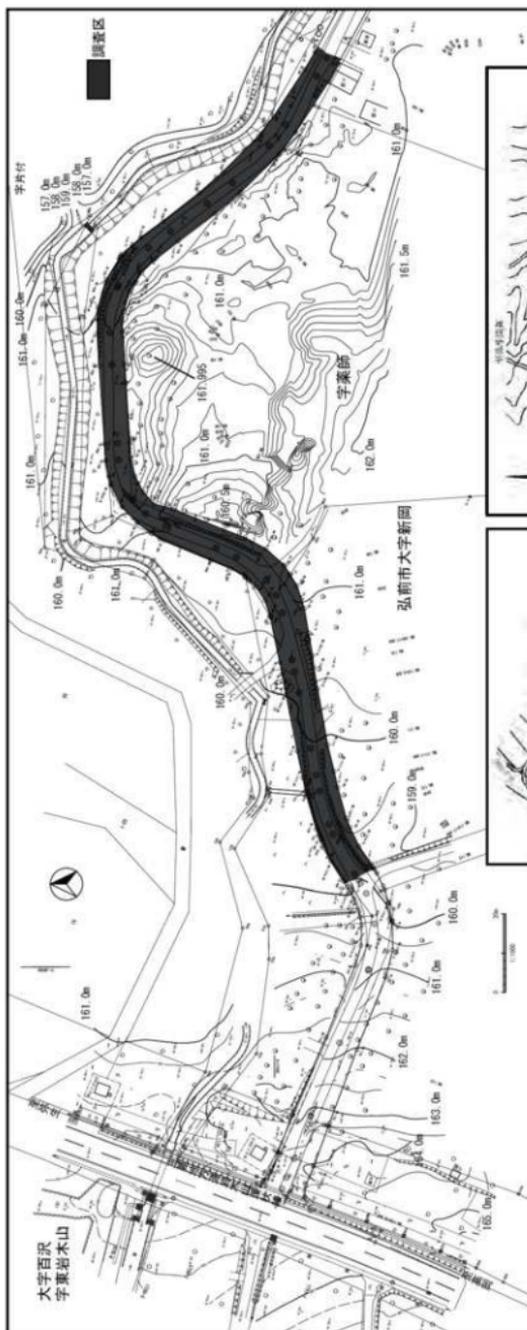


図19 調査区地形図と昭和33・35年調査区

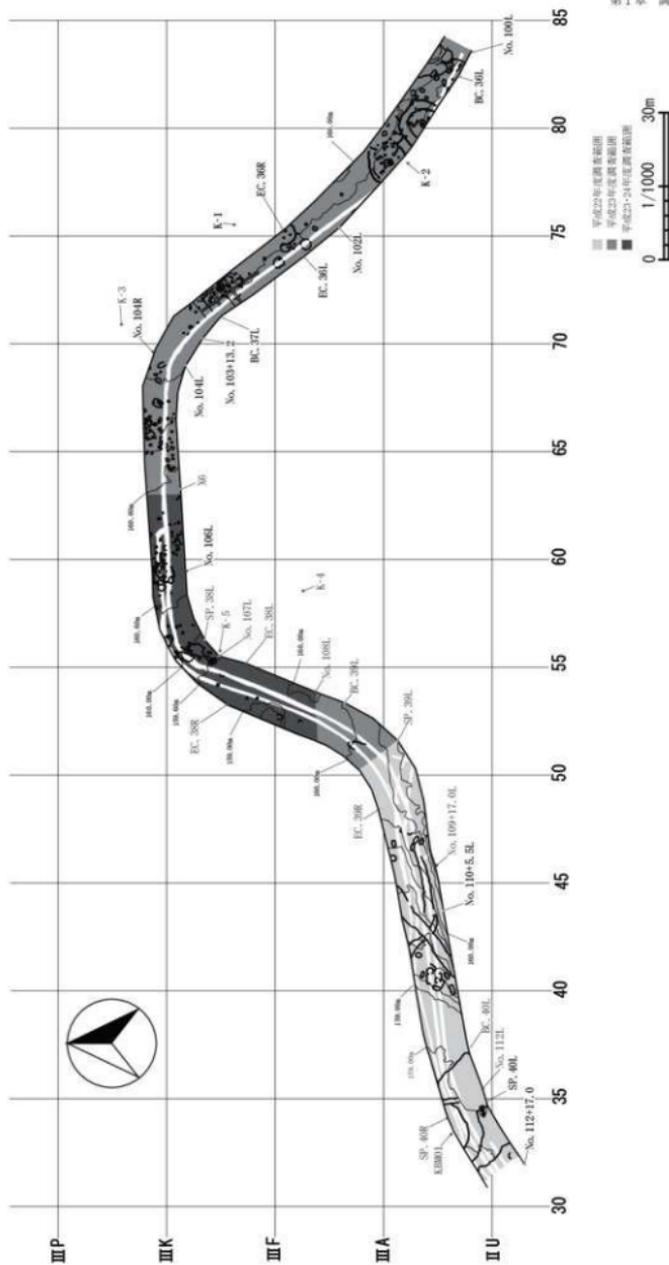


図20 業師遺跡 年度別調査範囲・測量杖等

〔剥離の方向〕

正方向：剥片の主要剥離面を打面とし、背面側に剥離面がみられる場合。一般的にみられる方向なので、特に強調しない限りは、剥離は正方向である。

反方向：剥片の背面側を打面とし、主要剥離面側に剥離がみられる場合。この場合は「反方向の剥離」と記述する。両面加工は、正方向と反方向の両方向から剥離されていることである。

〔押圧剥離〕 打面厚が1mm以下で規則正しく並んでいる場合、押圧剥離と認定した。

〔叩き折り〕 剥離面にバルブやコーンなどが認められ意図的に叩き折ったと思われる場合。曲げ折れでも、石器の形状が整っている場合は叩き折りに認定した。

〔磨面〕 平滑な「磨面1」と、ザラザラした「磨面2」に区分する。

〔研磨と敲打〕 同じ現象でも右表のように技術と機能で用語を分けて用いた。

技術	研磨面	敲打整形
機能	磨面・擦痕・砥面	敲打痕

〔剥片石器〕 剥片を素材とした石器で、2,820点出土している。AからM類まで分類し、さらに器種によっては細分した。

〔A類 石鏃〕 石鏃としたものは、尖頭部をもち、先端部が薄く扁平な石器である。鏃身部先端の平面形態は基本的に二等辺三角形をなしている。分類は基部形態をもとに行なった。

尖基鏃(Aa)：基部が尖頭状に作出されたもの

平基鏃(Ab)：基部が平らなもの

凹基鏃(Ac)：基部にえぐりがはいるもの

円基鏃(Ad)：基部が丸いもの

これに茎部が付く場合は、尖基有茎鏃(Ata)、平基有茎鏃(Atb)、凹基有茎鏃(Atc)とした。

石鏃未成品(Ay)：加工から石鏃と思われるが、形状が整わないもの

石鏃 (Az)：基部が破損しているため、上記分類ができないもの

〔B類 石槍〕 尖頭部をもつ石器の内、左右対称形であり、石鏃と比較し大形で厚手のある石器を石槍とした。石鏃の加工が押圧剥離と思われる加工であるが、石槍の場合は貝殻状剥離で器体が整形され、最終的に押圧剥離で整形されている。

〔C類 石錐〕 石錐としたものは、尖頭部をもち、その断面形が三角形もしくは四角形を呈する石器である。石鏃の先端部が比較的扁平であるのに対し、石錐は厚手である場合がある。

石錐(Ca)：摘まみを有する形態

石錐(Cb)：棒状形態

石錐(Cc)：剥片の一端に錐状の加工を有するもの

石錐(Cz)：錐部の断片

〔D類 石笄〕 両面加工では左右対称の細長い形状で、長軸一端に直交する刃部が作出されている。刃部は側面観が嘴状を呈している場合が多く、両面加工である。

〔E類 両面調整石器〕 分類AからDまでは基本的に両面加工の石器である。その中で形状が整わず、器種の特定できない両面調整の石器を一括した。

〔F類 石匙〕 素材剥片の一端に一对のえぐり加工をいれ摘まみ部を作出し、刃部と判断できる縁部をもつ石器である。摘まみ部の位置から縦形と横形に分類した(高橋2012)。

縦形石匙(Fa1)：縦方向に長い刃部。

縦形石匙(Fa2)：縦方向に尖頭状の形状を呈した刃部をもつもの。刃部は両面加工である。

横形石匙(Fb)：横方向に刃部をもつもの。斜めに摘まみ部が作出されたものも含む。

[G類 搔器・削器] 平行剥離で縁辺が連続的に剥離された石器である。搔器は形態の長軸の一端に急角度の刃部を、削器は長軸に平行して刃部が作出される石器とする。さらに以下のように細分した。

搔器(Ga1): 急角度の刃部をもつ石器である。刃部の平面形態は外湾もしくは直線状である。

搔器(Ga2): 叩き折り加工で形態を整形する搔器。刃部の加工はGa1と同じである。

削器(Gb1): 刃部と判断できる縁辺をもつ石器である。握まり部がない点で、石匙と同じである。

削器(Gb2): 両側辺が加工されている削器の内、片辺は外湾もしくは山形、もう片辺は直線もしくは直線に近い外湾である。外湾・山形の辺は両面加工であり、まれにアスファルトが付着している。もう片方は両面・片面加工であり、こちらが刃部と思われる。

削器(Gb3): 整形加工は認められるが、刃部は加工のない鋭い縁辺。いわゆる素刃削器

[H類 両極石器] 対向する縁辺から、バルブが発達せず、リングの密な二次加工や階段状剥離の二次加工で形成されている。

[I類 二次加工剥片・石器断片]

二次加工剥片(Ia): 部分的に加工がみられるが、器種を特定できない場合を二次加工剥片とした。大半は貝殻状剥離がみられる。

石器断片(Ib): 加工の様相から石匙か削器と思われるが、破損のため、全体形状が不明な石器。

[J類 異形石器] 鈴木克彦(2005)が用語などで検討を加えている一群である。異形石器と異形石製品に区分する必要を指摘しているが、点数が少ないので、ここでは異形石器として扱う。

[K類 微細剥片] 剥片の縁辺に微小剥離痕がみられる石器である。

[L類 石核] 目的剥片を剥離したと思われる石器である。

[M類 剥片・裂片] M類は、上記2,824点には含まれていない。剥離開始部を持つ場合を剥片(Ma)、剥離開始部がない場合を裂片(Mb)とした。アスファルトが付着した資料も含まれる。

【礫石器】 礫を素材とした石器で、698点出土している。打製石斧や磨製石斧は狭義では礫石器に含まれないが、ここでは礫石器の範疇にいたれた。

[N類 打製石斧] 剥片や礫を素材とし、形状は細長い形態であり、石筥に類似する。しかし石筥の刃部が押圧剥離で剥離されたと推定されるが、打製石斧は剥離基部が大きく深くえぐれた剥離で構成されている。

[O類 磨製石斧] 研磨で最終的に整形し、長軸の一端に直交した刃部をもつ石器である。

[P類 半円状扁平打製石器] 剥片や礫を素材とし、周辺を剥離して形状を整える。一辺が半月状あるいは弧状をなし、それに対する辺は直線である。後者が機能面である。(北海道式)石冠(S類)と異なり幅広い機能面は形成されていない。

[Q類 敲磨器] 礫を素材としている。加工はなく、使用痕のみを残している。以下細分した。

凹石(Qa): 礫に凹みをもつ石器

磨石(Qb): 礫の平らな面に磨面1を持つ石器

敲石(Qc): 礫に敲打痕を持つ石器。

[R類 石錘] 扁平な礫を素材とし、一對の抉り加工を持つ石器である。

[S類 (北海道式)石冠] 扁平な礫を素材とし、磨面は曲面で比較的ざらざらしている。基本的に剥離加工はない。P類と識別困難な場合も多い。その場合は磨面の厚い場合はS類に分類した。本来この器種は縄文前期中期に盛行する器種であるが、まれに晩期でも確認されている(芹沢編1979など)。

石製品で石冠があるので、区分するために(北海道式)石冠と記す。

[T類 石皿・台石・砥石]

石皿(Ta1): 素材礫の中央部が平滑になった皿形の石器である。縁を持つ形態。

石皿(Ta2): 素材礫の中央部が平滑になった皿形の石器である。縁が無い形態。

石皿(Taz): 石皿の断片。Ta1ともTa2とも判断できない場合。

台石(Tb): 大形の礫を素材とし、磨面以外の痕跡(凹みや敲打)の機能面をもつ石器である。大形の扁平な礫の中で、特に使用痕は確認できないが、平坦な面を持つ場合も台石に含めた。

砥石(Tc): 磨製石器や骨角器などを仕上げる為の砥のこである。筋砥石などが該当する。10cm以下の箱形隅丸方形で全面研磨面を有する場合も砥石に含めた。

[U類 擦切具] 礫もしくは剥片を素材とし、縁辺に強い研磨痕を残した石器。刃部の形状はU字状であり、強い線状痕を伴う。

[V類 軽石製品] 軽石を素材とした石器全般である。

[W類 加工礫] 礫を素材とし、上記どれにも当てはまらない石器を一括した。

[X類 自然礫] 加工・使用痕のない礫である。X類は、上記の698点には含まれていない。なお黒曜石などの原石も加工は認められないので、X類に分類してある。

[石製品] 利器と認めかねない製品を石製品(Z類)とする。489点出土している。

[Za 独鈷石・石冠]

[Zb 石棒・石刀・石剣] 棒状の石製品である。断面形状から以下の通り分類した。

石刀(Zb1): 断面形状の片側が鋭く、片側が丸い場合

石剣(Zb2): 断面形状の両側辺が鋭い場合

石棒(Zb3): 断面形状が丸い場合

判断できない場合は石棒類(Zb99)とした。

[Zc 岩版]

[Zd 石製円盤]

[Ze 垂飾品]

管玉(Ze1): 管状の形状

平玉1(Ze2): 小口面が平らな形状

平玉2(Ze3): 形状は平玉に似ているが、押しつぶしたようになり、厚みがなくなっている。

丸玉(Ze4): 小口面が丸みを持つ。

勾玉(Ze5)

その他の玉関係(Ze6)

未製品(Ze88): 主にZe3・4関係

原石(Ze99)

[Zz 石製品] 上記に該当しない石製品

(3)土製品の分類

土製品は、特徴的な形状のものや、出土層などを検討し、329点抽出した。その中から240点に対し図化・写真撮影を行った。以下本文で扱う上での分類基準を示す。

【ミニチュア土器】 袖珍土器とも呼ばれる小形の土器である。鈴木克彦(1984)の分類では目安として6cm以内とある。形状から、鉢形、皿形、壺形、高坏形、片口形、四脚形、鐙形、蓋形、匙形などに分類できる。他に断片として口縁部、底部がある。

【土偶】 中空土偶、刺突土偶、結髪形土偶に分類した。分類できない場合は土偶とした。完形品は1点もないので、頭部(顔・頭髮)、胴部(肩・胸・腰)、腕部、脚部と部位を分けた。

【土製品】

[岩版]、[土面]、[耳飾り(耳栓)]、[土玉]

[土製円盤] 土器片を打ち欠いたりして製作された円形並びに円形に近い土製品。有孔と無孔に区分できる。なお土器片に2個1対の挟りがある場合は、[土器片鏟]とした。

第2節 平成22年度調査分の発掘調査と整理作業の経過等

1 発掘作業の経過

平成22年度の薬師遺跡発掘調査では、本調査必要範囲の西側部分を調査区として設定した。

平成21年度に青森県教育庁文化財保護課が行った確認調査の結果、縄文時代の遺物・遺構が確認されているものの調査区の大半は砂利道として攪乱されていることが分かっていたので、重機を使用して掘削の省力化を図り、縄文時代の遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

平成22年度の発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

- 7月下旬 青森県中南部地域県民局地域農林水産部(調査委託者)、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。
- 8月中旬 調査事務所等予定地に鉄板を敷設してから調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
- 8月24日 発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員2名、補助員4名、発掘作業員43名の規模で発掘調査を開始した。まずは調査区内のうち人力で掘削できる草地部分の表土を除去し、遺跡の遺存状況把握に努めた。
- 9月上旬 調査区西側の状況が把握できたことからセンター杭No110～113南側半分の砂利道部分を、一部農作業に必要な範囲を除き重機で除去した。
- 9月中旬 上新岡館の発掘調査開始により、約3分の1の発掘作業員を上新岡館へ投入する。薬師遺跡では小判形の土坑や溝跡などが検出され始める。土坑から玉が出土したことから土坑墓であることが確定的となり、微細遺物を収集するために土坑の土壌を採取する作業を開始する。
- 9月下旬 溝跡・貯水池状遺構など調査区西側の湧水ある区域の遺構精査を進める。調査区東側草地部分を掘削・調査して遺跡の遺存状況が把握できたことから、重機を用いてセンター杭No109～110の砂利道部分を掘削する。また、一部農作業のため掘削できなかった区域で農作業が終了したとの連絡を受け、そこに敷設してあった鉄板を借地部分へ移設して未調査区の表土も除去し、調査区全面の遺構を確認する作業に入った。
- 10月上旬 溝跡・貯水池状遺構において、重なって出土した遺物の取り上げ作業を進める。遺跡周辺の地形・地質等について、弘前大学工学部柴 正敏教授の現地指導を受ける。
- 10月中旬 東側の47グリッドライン周辺からも土坑がまとまって検出され、土坑墓群が2つあることが判明。土坑墓土壌の採取作業を継続しながら、乾燥・ふるい選別作業も並行して行う。
- 10月下旬 貯水池状遺構西側でピット列が検出される。空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに

委託し、遺跡全景及び遺構群等の空中写真等を撮影する。調査の終了した区域から埋め戻し・整地作業を開始する。

10月29日 調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、調査を終了した。その後、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去、さらにプレハブ用地・駐車場用地・農道迂回路用として敷設していた鉄板も搬出し、11月上旬にすべての作業を完了した。

2 整理作業の経過

平成22年度調査分の報告書作成事業は平成23年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成22年11月に終了している。その他の整理・報告書作成作業は平成23年4月1日から平成24年3月31日までの期間で行った。薬師遺跡は主に縄文時代の遺跡であり、検出遺構の中では縄文時代のもが多く、出土遺物も縄文土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。

平成22年度調査分の整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成22年度]

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。

12月 土坑出土の玉類成分分析及耳栓付着物同定について、株式会社パレオ・ラボへ委託した。

[平成23年度]

4月 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。図面類は、必要に応じて図面修正を行い、それをもとに個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。出土遺物は、遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。

5月 計測作業の終了後、遺構・グリッドごとに土器類の接合作業を開始した。

6月 接合土器にボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。下旬には柴正敏教授(弘前大学理工学部)に薬師遺跡出土火山灰について原稿執筆を依頼した。

7月 復元作業の終了後、遺物の検討・分類・整理作業を経て、土器類の報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。遺物整理一覧表に接合状況や図化手順も記載し、整理作業のスムーズ化を図った。これを基に土器類の拓本採り、断面図作成、実測図作成など本格的な整理作業に入っていた。

8月 土器類の報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。

10月 土器類の拓本採りは終了し、断面図・実測図作成作業が進むとともに、遺物写真撮影の準備作業も行った。

11月 報告書掲載遺物の写真撮影を行い、土器類はシルバーフォトに、石器類はフォトショップいなみにそれぞれ委託して撮影した。

12～1月 遺構関係は報告書の体裁に合わせた図版組み作業を行い、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。遺物関係では土器類及び石器類の実測図作成作業を進めた。

2～3月 遺構図・遺物図とも粗原稿や仮図版等を作成し、報告書の内容・ページ数を確認した。実測が終わった遺物は一部トレース作業を行った。

3月30日 出土遺物や記録類の整理作業を行う。最後に記録類・出土品を整理して一時的に収納し、

平成23年度の整理作業は終了した。

第3節 平成23年度の発掘調査経過等

平成23年度の薬師遺跡発掘調査では、平成22年度調査区の東側部分を調査区として設定した。

平成22年度以前の調査成果を踏まえ、調査区の大半を占める砂利道は重機を使用して除去して掘削の省力化を図り、縄文時代の遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

平成23年度の発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

- 5月中旬 青森県中南地域県民局地域農林水産部(調査委託者)、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。
- 7月上旬 調査事務所予定地及び農道迂回路部分等の整地工事を行い、鉄板を敷設する。
- 7月中旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。調査区東側の表土(碎石)を、重機で除去し始める。
- 7月14日 発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入して環境整備を行う。職員2名、補助員4名、発掘作業員40名の規模で発掘調査を開始し、調査区東端部の南側より遺構確認作業に着手した。
- 7月下旬 調査区東端部南側で縄文時代前期の堅穴住居跡を検出し、精査を行う。また、平成22年度に検出された小判形の土坑と酷似する土坑が数基検出され、その中でもSK26で多数の玉が出土したことから、微細遺物を収集するために土坑の土壌を採取し慎重に精査を進める。
- 8月上旬～中旬 調査区東側から段階的に重機で表土を除去し、西側へ遺構確認作業を繰り返す。ⅢH-72グリッド周辺で黒曜石散布範囲(SX04)を検出したことから、ここでも微細遺物の検出のため土壌の採取を行う。採取と並行して土坑群やSX04の堆積土の水洗選別作業を行う。
- 8月下旬 調査区東端南側の調査が終了したことから埋め戻しと農道迂回路付け替えを行い、調査区東端北側の表土を除去する。再度縄文時代前期の堅穴住居跡等を検出し、土層観察用ベルトを復元してから北半分の精査を開始する。ⅢE-74グリッド周辺で縄文時代前期の遺構が検出され、縄文前期集落の広がり確認された。一方では、重機での表土除去と人力での遺構確認作業を西へ進めていたが、67グリッドライン周辺から遺物が多く出土ようになったため、トレンチ等を設定して遺跡の状況を確認することにした。
- 9月上旬 調査区東端北側で重複する縄文時代の堅穴住居跡等の精査を終了する。平成23年度調査区北西部に大規模な盛土遺構及び捨て場の存在が窺えたことから、その内容を把握するために水道管理設備などの攪乱掘り上げや、各グリッドに設定した1mトレンチの精査などでその内容把握に努めた。
- 9月中旬 盛土遺構及び捨て場の状況から当初予定していた期間での調査終了は不可能と判断し、関係機関と協議し調査期間を延長することとした。調査区南西部(ⅢDライン以南)の調査を行い、遺物の包含が比較的少なくこのエリアの調査は終了した。
- 9月下旬 降雨によりプレハブ前の調査区や1mトレンチなどが水没する。
- 10月上旬～中旬 センター杭No104付近(69グリッドライン)以東の調査を終了し、ⅢDラインから69ラインの間の区域の精査を2つの観点を中心に進める。1点目は包含層1層を掘り上げて盛土遺構の上面を検出することで、2点目は東側の弥生時代遺物が出土する区域の精査である。遺跡周辺の地形・地質等について、弘前大学理工学部柴 正敏教授の現地指導を受ける。
- 10月下旬 漸移層と思われる土層から弥生時代遺物が出土することが確認されたことから、この区域

が削平された可能性を視野に入れて精査を進める。検出遺構・盛土遺構・削平範囲等について、弘前大学人文学部 関根 達人教授の現地指導を受ける。空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託し、遺跡全景及び遺構群等の空中写真等を撮影する。

- 11月上旬 平成時代遺物が出土する範囲とそこで検出された遺構の精査を進め、盛土遺構と捨て場の状況の記録も行う。
- 11月中旬 一面の雪景色に見舞われるも、平成24年度に調査を持ち越す区域について崩落等を防ぐために砂・単管・コンパネ等で保護し、ブルーシート・土のう等で養生した。さらに雪で埋もれないように高さ約2.5mに虎ロープ等で調査区を囲った。調査の終了した区域から埋め戻し、整地作業を開始する。
- 11月25日 調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、平成23年度の調査を終了した。その後、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去、さらにプレハブ用地・駐車場用地として敷設していた鉄板も搬出した。平成24年度に持ち越す調査区を迂回する農道迂回路部分は、鉄板を搬出してその代替として砕石を敷き均し、農家車両等の迂回路を確保した。これらの作業は、12月上旬までにすべて完了した。

第4節 平成24年度の発掘調査経過等

平成24年度の業跡遺跡発掘調査では、平成23年度調査で完了できなかった北西部分を調査区とした。平成23年度の調査で表土等は除去し終えていたことから、縄文時代の盛土遺構・遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

平成24年度の発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

- 4月上旬 青森県中南地域県民局地域農林水産部(調査委託者)、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。
- 4月中～下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
- 4月24日 職員2名、補助員4名、発掘作業員30名の規模で発掘調査を開始し、発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入して環境整備を行う。前年度に設置していた虎ロープ等の囲いや、遺構等を養生していたブルーシート・コンパネなどを必要に応じて外し、調査に着手した。
- 5月上旬 平成24年度調査区南西部の水道管理設溝を掘削し、南西部の盛土遺構及び包含層の状況を精査する。その結果、この区域には包含層1層やI層が遺存していることが判明し、まずは当該層を掘り上げて盛土遺構上面を検出することに主眼を置いた。また、南西側がより新しい時期に形成された盛土遺構と推察されたため、南西側より調査を進めることとした。
- 5月中～下旬 平成24年度調査区南西部の包2-B層を主として精査していく。この頃から調査区壁と中央を縦断する水道管理設溝の壁、1mトレンチの各セクション等を慎重に観察し、各土層の広がりや性格、遺物の帰属土層等を見極めながら遺物の取り上げ作業を進める。また調査区を横断するベルトを5～10mおきに設定し、その範囲ごとに水道管理設溝トレンチとともに遺物の取り上げや土層断面図作成等の精査を繰り返すこととした。
- 6月上旬 南西部の包2-B層の調査に目処が立ち、盛土遺構本体の調査へ移行していく。盛土遺構のロームを主体とする土層は堅く締まっているものの細片の遺物が多く、量も比較的少ないことから、電動ハンマを用いて掘削の効率化を図る手法を採用する。

- 6月中旬 掘削土量が多く、全体の進捗状況がやや遅れ気味であったことから、発掘作業員を11名増員して、調査期間も2週間延長することとした。作業員が増員したことから、南西側からの盛土遺構・包含層等の精査に加え、東側の包含層の精査も並行して進めた。
- 6月下旬 現地見学会の準備を進め、6月30日(土)に現地見学会を開催し、約200名の参加があった。
- 7月上旬 現地見学会のために残しておいた包含層の遺物を取り上げて、包含層や盛土遺構の土層観察用ベルトなどを掘り上げていく。盛土遺構及び包含層等を掘り上げた区域では縄文時代前期の埋設土器遺構や土坑などが検出され始める。
- 7月中～下旬 現地見学会のために残しておいた包含層の遺物を取り上げて、横断セクションや調査区壁ロングセクションなどの図化・写真撮影などの記録作業を進める。横断セクションは記録作業が終わり次第、土層観察用ベルトを掘り上げていき、その下層で検出された縄文時代前期の埋設土器遺構や土坑などの精査も進めていった。空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託し、遺構群等の空中写真等を撮影する。
- 7月27日 調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、平成24年度の調査を終了した。調査区を埋め戻し、農道迂回路として設置していた砂利等を敷き直して車両が通行できるようにした。また調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去、さらにプレハブ用地・駐車場用地として敷設していた鉄板も搬出し、駐車場用地等借地も原状に復した。

第5節 平成23・24年度調査分の整理作業経過等

平成23年度調査区域と平成24年度調査区域が重複していることから、平成23年度終了区域分は平成24年度に、平成24年度終了区域分は平成24年度の調査終了後から翌25年度末までを報告書作成事業の実施期間とした。ただし、写真類の整理作業等は、それぞれの発掘作業終了当該年度内に終了している。薬師遺跡は主に縄文時代の遺跡であり、検出遺構の中では縄文時代のものが多く、出土遺物も縄文土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。

平成23・24年度調査分の整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成23年度]

- 11月 平成23年度調査分の写真類・図面類の整理作業を一部行い、写真類の整理作業は終了した。
- 12月中旬 盛土遺構・土坑等から出土した炭化材について、AMS法による放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所へ委託した。

[平成24年度]

- 4月 今年度も薬師遺跡の調査を行うため、当面は平成23年度に終了した区域を対象として遺構及び遺物の整理作業を行うこととした。図面類は、必要に応じて図面修正を行い、それとともに個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。出土遺物は、遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。
- 5月 計測作業の終了後、遺構・グリッドごとに土器類の接合作業を開始した。
- 6月 柴正敏教授(弘前大学大学院理工学研究科)に「薬師遺跡周辺の地形・地質」と「薬師遺跡出土火山灰分析」について原稿執筆を依頼した。
- 7月 平成24年度の発掘調査が終了し、出土した土器等の水洗い・注記業務を第一合成株式会社へ委託した。
- 8～9月 接合された土器にボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。

- 復元作業の終了後、遺物の検討・分類・整理作業を経て、土器類の報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。遺物整理一覧表に接合状況や図化手順も記載し、整理作業のスムーズ化を図った。これを基に土器類の拓本採り、断面図作成、実測図作成など整理作業を行った。平成24年度調査分の写真類・図面類の整理作業を一部行った。11月には写真類の整理作業を終了した。
- 10月 委託していた今年度出土土器等の水洗い・注記業務が完了したため、これらを遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。3ヶ年の調査で撮影した各調査区の空中写真を合成する、モザイク写真の作成を委託した。
- 11月 計測作業の終了後、復元可能個体単体を中心に土器類の接合作業を開始した。石器類は報告書掲載予定遺物を選定し、それらには整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。報告書に掲載する平成23年度出土遺物土器類をシルバークラフトに委託して写真撮影を行った。黒曜石製石器の産地推定業務、玉類の石材同定業務、水洗選別及び種実同定業務、炭化材の樹種同定業務、灰の母植物分析業務を株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 12月 接合された土器にボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。これらには順次整理番号をナンバリングして遺物整理一覧表に加え、接合状況や図化手順も記載していった。報告書に掲載する石器類をフォトショップいなみに委託して写真撮影を行った。出土石器類の石質を柴正敏教授(弘前大学大学院理工学研究科)に鑑定していただいた。一部の報告書掲載遺物の実測図作成業務について、土器は株式会社アルカ、石器は株式会社ラングに委託した。赤色顔料の蛍光X線分析及び土器等の塗膜構造分析業務を株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 1月 平成23年度に調査した遺構類は、報告書の体裁に合わせた図版組み作業を行い、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。土器類は接合作業と復元作業を、石器類は図化作業を進めた。放射性炭素年代測定業務を株式会社パレオ・ラボに、砂粒のポイントカウント法による胎土分析業務をパリオ・サーヴェイ株式会社それぞれに委託した。
- 2月 平成24年度に調査した遺構類についても、報告書の体裁に合わせた図版組み作業を行い、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。復元作業の終わった一部の報告書掲載土器類は、シルバークラフトに委託して写真撮影を行った。
- 3月 土器類は復元可能土器単体の接合を終えたことから、平成23・24年度出土遺物をまとめ、同一グリッドもしくは近隣グリッドを含めた接合作業に移行した。
- [平成25年度]
- 4～5月 平成23・24年度にまたがって調査した区域の遺構及び遺物の整理作業を行った。図面類は、必要に応じて図面修正を行い、個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。土器類は引き続き同一グリッドもしくは近隣グリッドを含めた接合作業を進め、石器類は図化作業を進めた。
- 6～7月 接合した土器類にはボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。これらには順次整理番号をナンバリングして遺物整理一覧表に加え、接合状況や図化手順も記載していった。土偶などの土製品の図化作業を行った。柴正敏教授(弘前大学理工学部)に薬師遺跡出土火山灰の原稿執筆を依頼した。
- 8～10月 土器類の図化作業も進める。8月末～上旬には報告書掲載遺物の写真撮影を行い、土器類は(有)無限に、石器類はフォトショップいなみにそれぞれ委託して撮影した。

- 11月 報告書の体裁に合わせた遺構図版・遺物図版・写真図版の版組み作業を進め、調査成果を総合的に検討して、報告書の前稿作成や遺物観察表の精査を継続した。
- 12月 3年間に作成した図版・写真図版・原稿・観察表等を取りまとめて体裁を整え、原稿・版下等を完成させた。中旬には印刷業者を選定・入札し、原稿・版下等を入稿した。
- 1～2月 遺物カラー写真撮影を(有)無限に委託し、巻頭カラー図版を作成・入稿した。報告書全体の割付・編集作業を進め、原稿、遺構図版、遺物観察表、遺構及び遺物写真図版などの精査・校正を繰り返して適宜印刷業者と打ち合わせを行った。
- 3月26日 3回の校正を経て報告書を刊行した。
- 3月31日 最後に、3年間の調査における出土遺物や記録類を整理して収納し、平成25年度の整理・報告書刊行作業は終了した。

第6節 薬師遺跡の基本層序

薬師遺跡は岩木山の東麓に広がる標高約160mの段丘上で、北側に舌状にせり出した台地とその基部が遺跡となっている(図1・19)。遺跡の北側は比較的急な崖となっており、岩木山に源を発する一本木沢川が東流している。台地上を東方、新岡方面へ約2km進んだ地点には上新岡館が存在する。昭和33・35年の調査報告書では遺跡周辺が原野であったことが確認できるが、昭和40年代頃に大規模開拓が行われ、現在はりんご畑の中にある。りんご畑を作ったときに造成工事も行われたようで、地形や道路など当時の面影は失われているものが多いようである。

今回の調査区は舌状に張り出す台地の根元部分にあたり、全長約260mに及ぶ長い調査区である。遺構確認面の直上まで掘削や造成、路盤・砕石が及んでいる部分が多かったが、4カ所で基本層序を記録したものを図21・22に示す。また、盛土遺構周辺などでは基本層序を含めたロングセクションを掲載しているため、必要に応じて各図も参照いただきたい。

図示した基本土層は、ⅡV-38グリッド、ⅢC-51グリッド、ⅢI-71グリッド、ⅡY-79グリッドである。白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)を目視できる状態で遺存していたのは沢地形にあるⅡV-38グリッドとⅢC-51グリッドであった。また火山灰分析の結果、遺物包含層である包含層1層や弥生包含層にも白頭山苦小牧火山灰や十和田a火山灰が含まれていることが明らかになっている(第4章第1節)。ⅢI-71グリッド及びⅡY-79グリッドは台地上にあることから、上位層がりんご畑の造成などの際に削平されたものと考えられる。

各層の色調及び諸特徴は以下のとおりで、各包含層との時間的前後関係については遺構外出土遺物(第3章冒頭)に記載することとする。

第I層 10YR2/1～2/3 黒色～黒褐色土、他

表土、砂利層、轍跡、農道の側溝跡、水道設備等の埋設溝、攪乱土層の類で、近代以降に形成された土壌である。明確な時期差が認められる地点では小文字アルファベットを付けて細分した。

第II層 10YR3/1～3/2 黒褐色土

弥生時代から近世に形成されたと思われる黒褐色土層である。41ライン以西や51ライン周辺といった沢地形部分では所々で本層を確認できるが、他の地点では削平等によって欠落することが多い。ⅡV-38グリッドで白頭山苦小牧火山灰が面的に堆積しており、3層に細分した特徴を以下に記す。

第II a層 10YR3/1 黒褐色土 二次堆積したB-Tmがブロック状に混入する。10C後半～近世の土壌と思われる。

第II b層 10YR5/4 濃い黄褐色火山灰 B-Tm主体層だが、ⅡW-39グリッド周辺の沢筋にのみ厚く

まとまって検出されたことから、二次堆積の可能性もある。また、53～67ライン付近には包含層1層(包1)が認められ、火山灰分析によるとB-TmもしくはTo-aが含まれており、本層に相当するものと考えられる。

第II c層 10YR3/2 黒褐色土 B-Tmの低位に認められ、弥生時代～10C前半に形成された土層と思われる。本層はⅢC-51グリッドでも確認された。また、62～69ライン付近では削平範囲(弥生時代遺物包含層(弥包))が検出され、火山灰分析によるとB-Tm及びTo-aが含まれており、本層に相当するものと考えられる。

(**間層a** 2.5Y4/1 黄灰色粘土 ⅡW-39グリッドにあり、第II c層が地下水等の影響で変成しグライ化したものと考えられる。)

第III層 10YR2/1 黒色土

シルト質で、縄文時代中期から晩期に形成された土層と考えられる。54～63ライン付近では本層を母材とした晩期の遺物包含層が形成されており、その部分については包含層3層(包3)と呼称した。

(**間層b** 5Y4/1 灰色粘土 ⅡW-39グリッドの第V層直上にあり、第III層が変成・グライ化したものと判断された。)

第IV層 10YR3/2～6/6 黒褐色～明黄褐色土

漸移層で、第III層の黒色土と第V層のローム粒・ブロックが混在している。削平されている場合を除き、主として本層上面にて最終の遺構確認を行った。55～60ライン及び70～77ライン付近では本層が縄文時代前期の遺物を包含していたことから、第V層上面でも遺構確認作業を行った。

第V層 10YR5/6～6/8 黄褐色～明黄褐色ローム質土

いわゆるローム層で千枚浮石に対比されるものと思われ、本層上面で最終的な遺構確認を行った。ソフトな上位層(第Va層)とややハードな下位層(第Vb層)に細分されるが、Ⅲ1-71グリッドでは第Va層と第Vb層が混在しているように思われる。43～48ライン、78ライン以東などでは上面が削平されていて、本層が表土直下で出現する。

第Va層 10YR6/8～7/6 明黄褐色土 ソフトロームで、乾燥しやすい。

第Vb層 10YR5/6～7.5YR6/6 黄褐色～橙色土 ハードロームで、ややしまりがある。

第VI層 10YR5/4～10YR6/3 にぶい黄褐色～にぶい黄橙色土

粘土質土で堅くしまり、湿性ある。

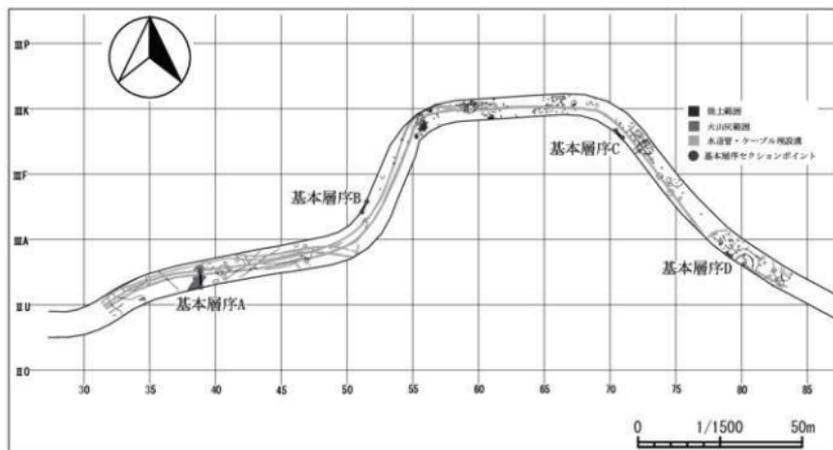
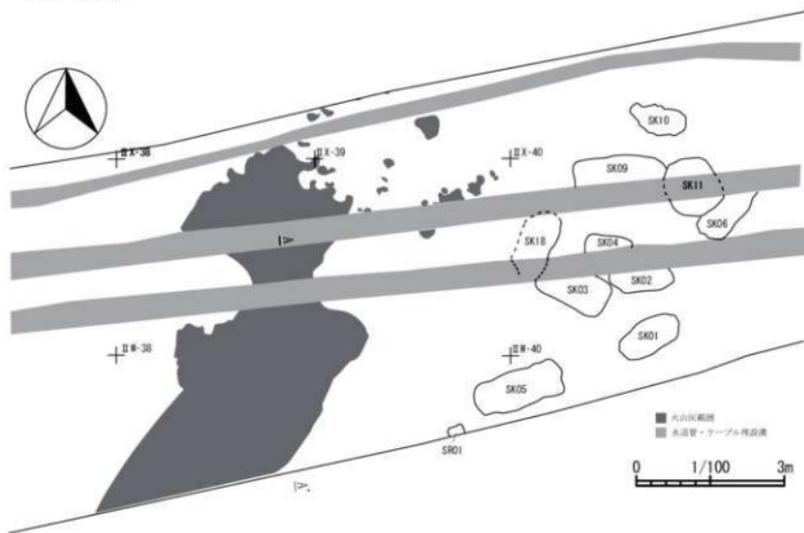
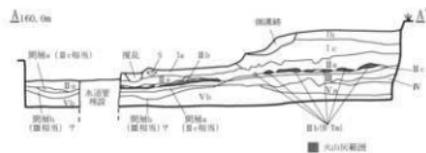


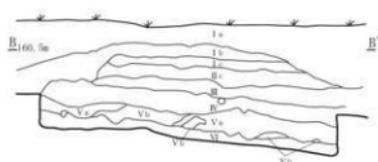
図21 基本層序(1)



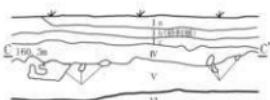
基本層序A



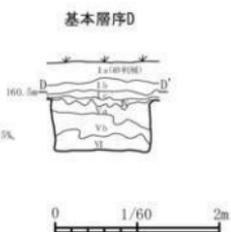
基本層序B



基本層序C



基本層序D



基本層序A(A-A')

- | | | |
|------|----------|---|
| Ia層 | 10YR6/8 | 明黄褐色ロームと暗褐色土の混同土。にぶい黄褐色土(φ1~2mm)2%, 暗色砂質土20%, 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)5%, 暗色砂質土2%, 酸化鉄粉, 磁石あり。 |
| Ic層 | 10YR2/1 | 黒色土 |
| Ie層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| II層 | 10YR3/1 | 暗褐色土 |
| IIb層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色火山灰 |
| IIc層 | 10YR3/2 | 暗褐色土 |
| IIe層 | 2.5Y4/1 | 灰白色粘土 |
| III層 | 10YR2/1 | 暗褐色土 |
| IV層 | 5Y4/1 | 灰色粘土 |
| IVb層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| Va層 | 10YR7/6 | 明黄褐色土 |
| Vb層 | 7.5YR6/6 | 暗褐色土と北傾ではオリーブ灰色を呈する。酸化鉄粒(φ2mm)20%。 |

基本層序B(B-B')

- | | | |
|-----|---------|---------------------------|
| Ia層 | 10YR2/1 | 黒色土 |
| Ib層 | 10YR3/2 | 暗褐色土 |
| Ic層 | 10YR2/1 | 黒色土 |
| Ie層 | 10YR3/2 | 暗褐色土 |
| II層 | 10YR2/1 | 暗褐色土 |
| IV層 | 10YR3/3 | 暗褐色土と黄褐色土の混合層。黄褐色土が50%含む。 |
| Va層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 |
| Vb層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 |

基本層序C(C-C')

- | | | |
|------|---------|---|
| Ia層 | 10YR2/1 | 暗褐色土と砂粒の混合層。暗ローム粒(φ1~3mm)3%, 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)3%。 |
| Ic層 | 10YR2/1 | 黒色土 |
| Ie層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| V層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| VI層 | 10YR6/3 | にぶい黄褐色土 |
| VII層 | 10YR4/6 | 暗褐色土と暗褐色土の混合層。 |

基本層序D(D-D')

- | | | |
|-----|---------|---------------------------|
| Ia層 | 10YR2/1 | 暗褐色土 |
| Ic層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| IV層 | 10YR3/2 | 暗褐色土と黄褐色土の混合層。暗褐色土が50%含む。 |
| Va層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 |
| Vb層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 |
| VI層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 |

図22 基本層序(2)

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

7軒の竪穴住居跡が検出され、その内1軒では拡張が認められる。縄文時代前期のものが調査区東側にある程度まとまって6軒あり、1軒は晩期以降と思われるものである。なお調査現場でSI01として精査した遺構は、土坑であったため欠番である。

第2号竪穴住居跡(SI02a・b、図26～29)

[位置・確認] II X-79、II W・II Y-80-81グリッドに位置し、第四層で確認した。本住居跡は拡張されており、新しいものをSI02a、古いものをSI02bとして記録した。SI02aはSI03と重複しSI02aが新しいが、SI02bとSI03は重複していないため新旧関係は不明である。またSN01とも重複していてSI02a・02bの方が古い。

第2号竪穴住居跡a(SI02a)

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形と推定されるが、調査区域外に半分以上ある。確認面から床面の深さは20～29cmを測り、やや開きながら立ち上がる。住居の長軸方向はN-36°-Eと推定される。

[床面・壁溝] 床面はSI02b部分では貼床を施して平坦に整え、堅く踏みしめられているのが確認された。SI02bを外側に拡張した部分は、地山をそのまま床面としている。壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 本住居跡に帰属すると思われる柱穴は12基検出され、Pit2・5は深さがそれぞれ82cm、76cmを測ることから主柱穴の可能性がある。Pit5 覆土上位から沈線と刺突で口縁部文様帯を形成する縄文土器(図28-1)が出土しており、主柱を抜き取ってから埋納された可能性も考えられる。Pit1・6などは壁柱穴の可能性があるが、明確ではない。

[炉] 住居中央付近、調査区壁際に地床炉と思われる焼土が検出された。43×26cmの不整形で、深さ約7cmまで被熱が及んで赤色化していた。

[その他の施設] Pit10はその下部にSI02bの柱穴が検出されていることから本住居に帰属する可能性があるが、その確認面中央部で地床炉が検出されていることから、その掘り方と考えることもできる。

[堆積土] 覆土上位は黒色土が、覆土中位には暗褐色土もしくは黒色土が、床面付近では褐色土が自然堆積している。

[出土遺物] (図28-29)縄文土器は深鉢(1～3)、口縁部片(4～6)、底部(7・8)を図示した。住居覆土中位以下からは小破片が散発的に出土したが、地床炉周辺の床面近くからは復元個体となった2・3・7・8が出土した。また1はPit5 覆土上位から潰れた状態で出土したものである。1は4単位の突起を持ち、突起の頂部に刻みがある。口縁部に沿って沈線が、胴部上半にも沈線が巡る。突起下に沈線で山形状に囲まれた範囲に刺突が施されている。胴部は球筒形であり、LRL縄文が横回転で施文されている。底部は上げ底状で内面は丁寧に磨かれ、赤焼の丁寧な作りである。球筒状の器形や沈線。刺突による文様など、大木式土器の影響を受けた土器と考えられる。2は口縁部にL側面圧痕、その下部に結束第1種の横回転がみられる。体部はRL縄文の斜め回転によって縄文が縦走している。底部は上げ底状である。内面は丁寧に磨かれている。1と2の土器は胎土分析を行っており、その結果は第4章第3節にある。3は口縁部に単軸絡条体第1類側面圧痕、その下に結束第2種の回転施文が4条、胴部は斜位回転によって縦走するRRL縄文が施文されている。底部は欠損している。4・5・6は口縁部断片資料である。7は底部であり、上げ底状である。わずかに縄文施文がみられる。8は底部であり、縦走する縄文が施文されている。

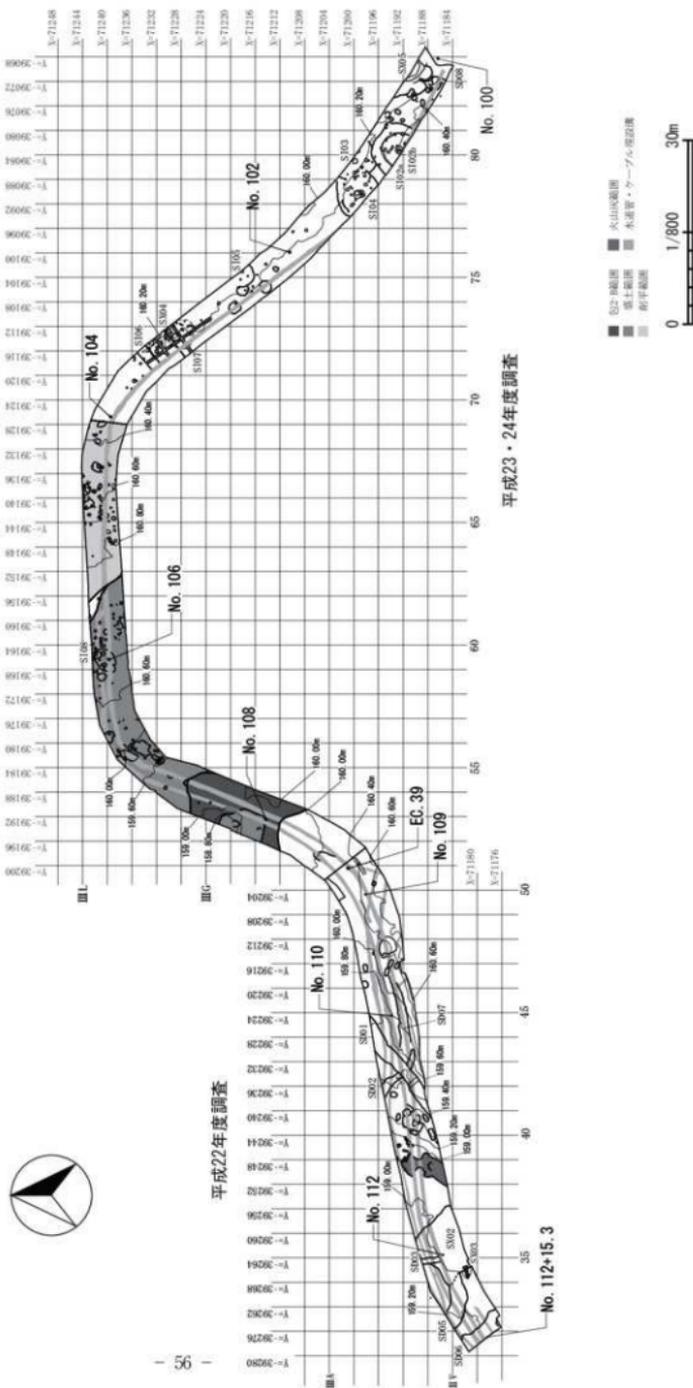


図23 業師遺跡遺構配置図

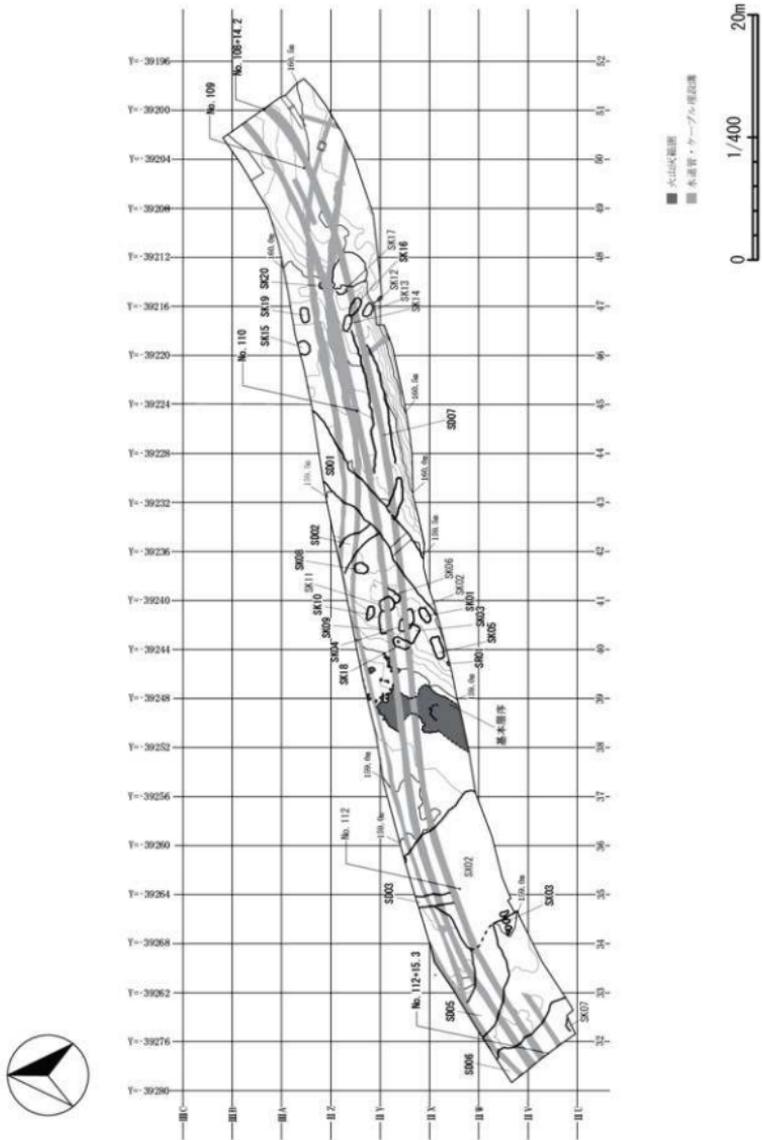


図24 平成22年度薬師遺跡遺構配置図

石器類は石鏃1点、石筥1点、二次加工剥片1点、半円状扁平打製石器1点、石皿1点、自然礫が4点の計9点が出土し、内6点を図示した。9は尖基鏃、10は石筥、11は半円状扁平打製石器、14はTa2の大形石皿、12・13は自然礫である。土製品は、15～17が有孔の土製円盤である。素材は円筒式土器の胴部片である。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、SI03・SI02bより新しく、縄文時代前期の円筒下層d1式期に作られ、円筒下層d2式期に廃絶されたものと思われる。

第2号竪穴住居跡b(SI02b)

[平面形・規模] 平面形は長円形と推定されるが、半分は調査区域外にある。確認面から床面の深さは30～35cmを測るが、上部はSI02aに拡張されているため、壁の状況は不明である。住居の長軸方向はN-34°-Eと推定される。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としている。壁溝は北東部と北西部で断続的に検出された。北東部は長さ137cm、幅16～21cm、深さ2～8cmで、北西部は長さ304cm、幅20～30cm、深さ6～10cmである。

[柱穴] 本住居跡に帰属すると思われる柱穴は7基検出され、Pit11・12・17が主柱穴の可能性はある。

[炉・その他の施設] 調査区域内では検出されなかった。

[堆積土] SI02aの貼床層である、ロームを主体とする褐色土が本住居床面に充填されている。

[出土遺物] SI02a貼床層で埋め戻されているため細片1点が出土しただけで、図示し得なかった。

[遺構の時期等] 遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期円筒下層d1式頃に埋められてSI02aへと改築されたものと思われる。

第3号竪穴住居跡(SI03、図30～31)

[位置・確認] II Y-79・80、III A-79グリッドに位置し、第IV層で確認した。SI02a、SI04と重複し、いずれよりも本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は直径約7.5mのほぼ円形をなすものと思われ、北東半は調査区域外にある。確認面から床面の深さは18～33cmを測るが、西側と南側は他遺構によって壁が削平されていて確認できない。壁は底面付近ではしっかり立ち上がるが、遺構確認面付近は大きく外側に開いて、だらだらと広がる部分もある。住居跡の長軸方向は、主柱穴と思われるPit5・6を結ぶ線が長軸とすればN-46°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としており、中央部付近がやや硬化した状態で検出された。壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は11基検出され、Pit4・5・6が主柱穴と思われる。主柱穴の平面形は直径50cm前後の円形もしくは楕円形で、深さがそれぞれ58cm・87cm・71cmでしっかりした掘り方である。なお、本住居Pit10としたものは、精査の結果SI04に帰属すると考えられたことから、SI04Pit24とした。

[炉] 調査区域内では検出されなかったことから、調査区域外にあるものと思われる。

[その他の施設] 住居中央部付近からPit3が検出された。断面は上部が開くコ字状をなし、炭化物を含む暗褐色土～褐色土が主に堆積していた。

[堆積土] 炭化物や焼土粒を含む暗褐色土や褐色土が主に堆積している。

[出土遺物] 縄文土器は口縁部片(1～3)、底部(4)を図示した。1は不明瞭だがRR回転施文の可能性のあるものとLR側面圧痕がみられる。2は結束第1種と単節縄文、3はRLR複節縄文が施文されている。4の底部外面には圧痕がみられる。石器類は剥片2点、大形の台石1点の計3点が出土し、

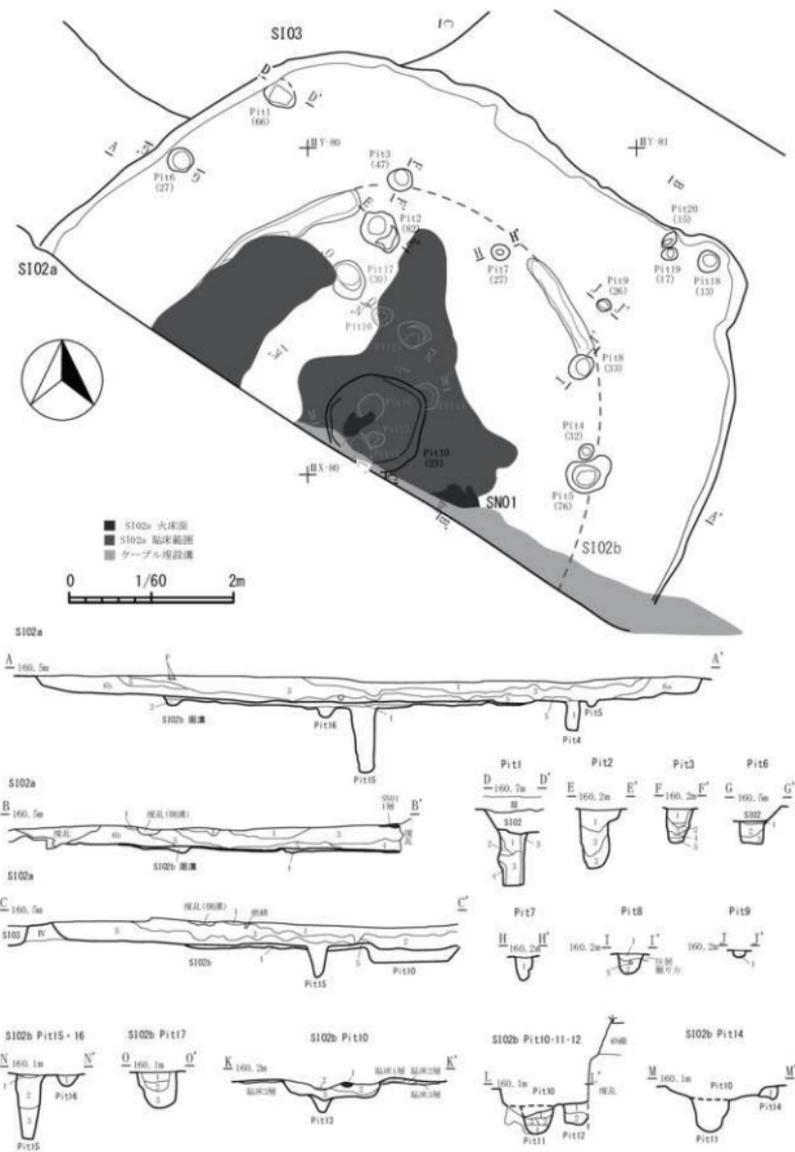


図26 第2号竪穴住居跡(1)・第1号焼土遺構(1)

S102a(A-A, B-F, C-C')

- 1層 I0YR2/3 黄褐色土
2層 I0YR3/4 暗褐色土
3層 I0YR2/3 暗褐色土
4層 I0YR3/4 暗褐色土
5層 I0YR4/6 褐色土
6層 I0YR4/6 褐色土
IV層 I0YR5/6 黄褐色土

S102b(A-A, B-F, C-C')

- 1層 I0YR4/6 褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土
SN01(砂層)

SN01(砂層)

- 1層 7.5YR3/4 暗褐色焼土

S102a(P110-D-D')

- 1層 I0YR2/4 暗褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土上黄褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土
4層 I0YR5/6 黄褐色土
5層 I0YR5/6 黄褐色土

S102a(P12(E-E'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土
2層 I0YR3/4 暗褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土
4層 I0YR4/6 褐色土

S102a(P12(F-F'))

- 1層 I0YR4/6 褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土上黄褐色土
3層 I0YR2/3 暗褐色土
4層 I0YR4/6 褐色土
5層 I0YR3/4 暗褐色土

S102a(P14(A-A'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土

S102a(P15(P-P'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土

S102a(P16(G-G'))

- 1層 I0YR5/6 黄褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土

S102a(P107(H-H'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土上褐色土の混合層, 黄褐色ローム粒(φ1~20mm)3%, 褐色色粘土粒(φ1~2mm)1%,

S102a(P108(I-I'))

- 1層 I0YR4/6 褐色土
2層 I0YR2/3 暗褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土上黄褐色土との混合層, 黄褐色粒(φ1~10mm)5%,

- 暗褐色土10%, パイズ(φ2~10mm)15%, 炭化物粒(φ1~2mm)7%,
ローム粒(φ1~2mm)15%, パイズ(φ2~10mm)10%, 炭化物粒(φ1~20mm)5%,
暗褐色土20%, ローム粒(φ1~10mm)15%, 浮石(φ2~10mm)2%,
暗褐色土20%, ローム粒(φ1~10mm)2%, 炭化物粒(φ1~2mm)2%,
暗褐色土30%, ローム粒(φ1~2mm)2%, 炭化物粒(φ1~10mm)2%,
粘土粒(φ1~2mm)5%, 浮石(φ5~20mm)2%, 炭化物粒(φ1~20mm)7%,
暗褐色土(φ1~5mm)3%,
粘土粒(φ1~2mm)5%, 褐色色粘土粒(φ1~2mm)2%,
炭化物粒(φ1~5mm)1%,

- S102aの底より, 黄褐色ローム粒(φ1~50mm)10%, 褐色色粘土粒(φ1mm)1%,
炭化物(φ1~10mm)2%, 酸化鉄渣片含む,
S102aの西側内河溝,

- ローム粒(φ1~10mm)5%, 炭化物粒(φ1~5mm)1%,

- 明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)2%, 褐色色粘土粒(φ1~10mm)2%,
土上の混合層,
黄褐色ローム粒(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%,
粘土20%,
褐色土20%,

- 褐色土10%, 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%, 褐色色粘土粒(φ1~2mm)1%,
炭化物粒(φ1~2mm)2%,
黄褐色ローム粒(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)2%,
明黄褐色ローム20%,

- 黄褐色ローム粒(φ1~15mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%,
暗褐色土20%,
明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%,
褐色土20%,

- ローム粒(φ1~3mm)5%, 炭化物粒(φ1~2mm)1%,
パイズ(φ5~10mm)7%, 炭化物粒(φ1~2mm)7%, ローム粒(φ1~3mm)3%,
粘土粒(φ1~5mm)1%,

- 褐色色粘土粒(φ1~2mm)1%,
黄褐色ローム粒(φ1~10mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%,
黄褐色ローム粒(φ1~5mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%以下,

S102a(P109(J-J'))

- 1層 I0YR2/3 暗褐色土上褐色土の混合層, 黄褐色ローム(φ1~5mm)2%,

S102b(P110(K-K'))

- 1層 I0YR4/6 褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土
3層 I0YR5/6 黄褐色土

S102b(P111(L-L'))

- 1層 I0YR4/6 褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土
4層 I0YR4/6 褐色土

S102b(P112(L-L'))

- 1層 I0YR5/6 黄褐色土
2層 I0YR4/6 褐色土
3層 I0YR4/6 褐色土

S102b(P114(M-M'))

- 1層 I0YR4/6 褐色土

S102b(P115(N-N'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土上褐色土の混合層, 炭化物(φ1~10mm)2%,
2層 I0YR5/6 黄褐色土, 炭化物(φ1~5mm)2%,
3層 I0YR5/6 黄褐色土, 黄褐色ローム粒(φ1~30mm)10%,

S102b(P116(N-N'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~15mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)2%,

S102b(P117(O-O'))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土上褐色土の混合層, 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%,
炭化物(φ1~3mm)2%,

S102a(P118(注記のみ))

- 1層 I0YR2/2 暗褐色土 炭化物(φ5mm大)2%, 準焼土。

S102a(P119(注記のみ))

- 1層 I0YR2/2 暗褐色土 ローム片含む, 準焼土。

S102a(P120(注記のみ))

- 1層 I0YR3/4 暗褐色土 ローム片含む, 準焼土。

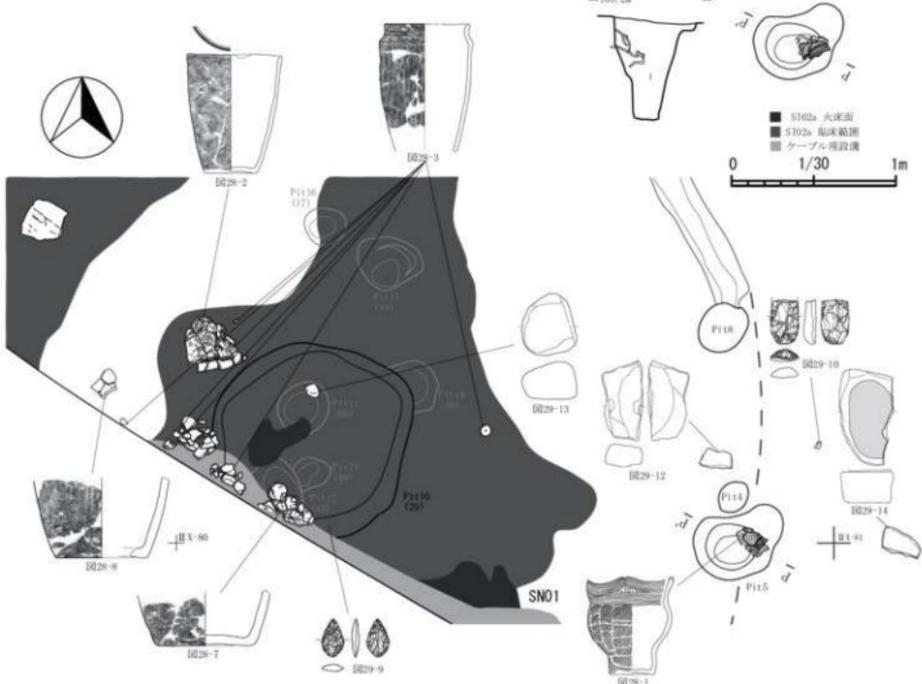


図27 第2号竖穴住居跡(2)・第1号焼土遺構(2)

第2号住居跡

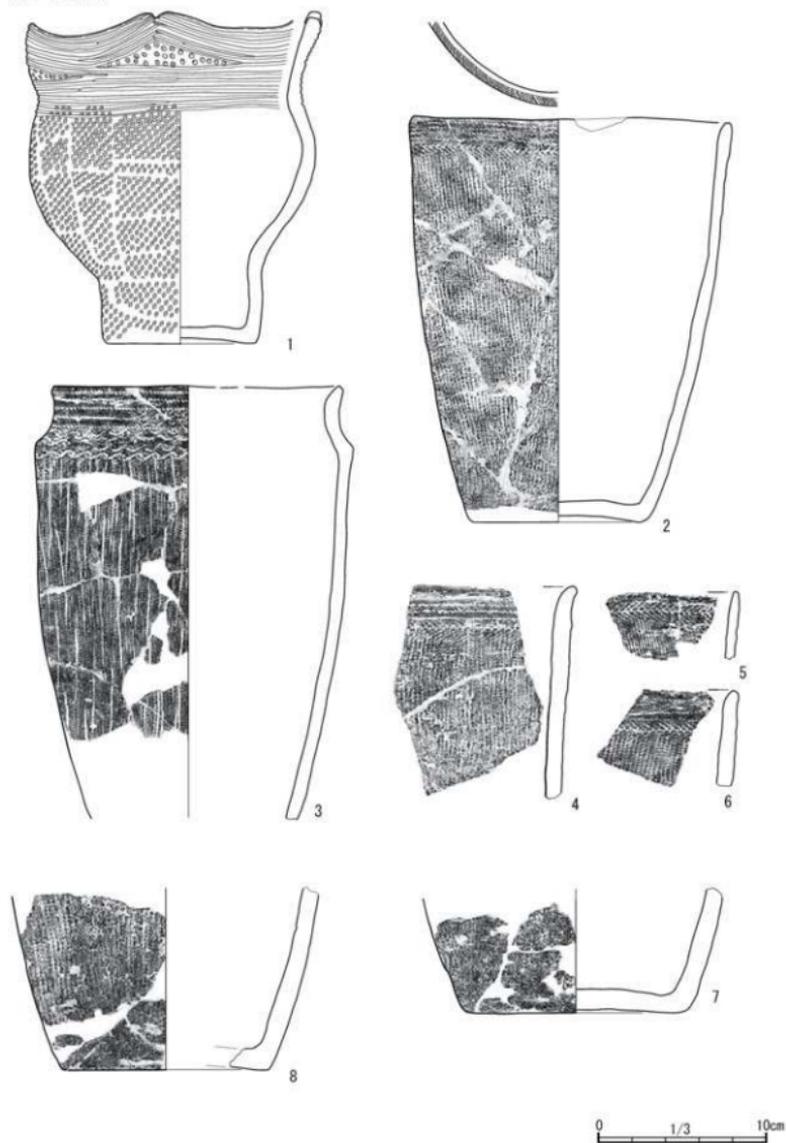


图28 第2号竖穴住居跡 出土遺物(1)

第2号住居跡

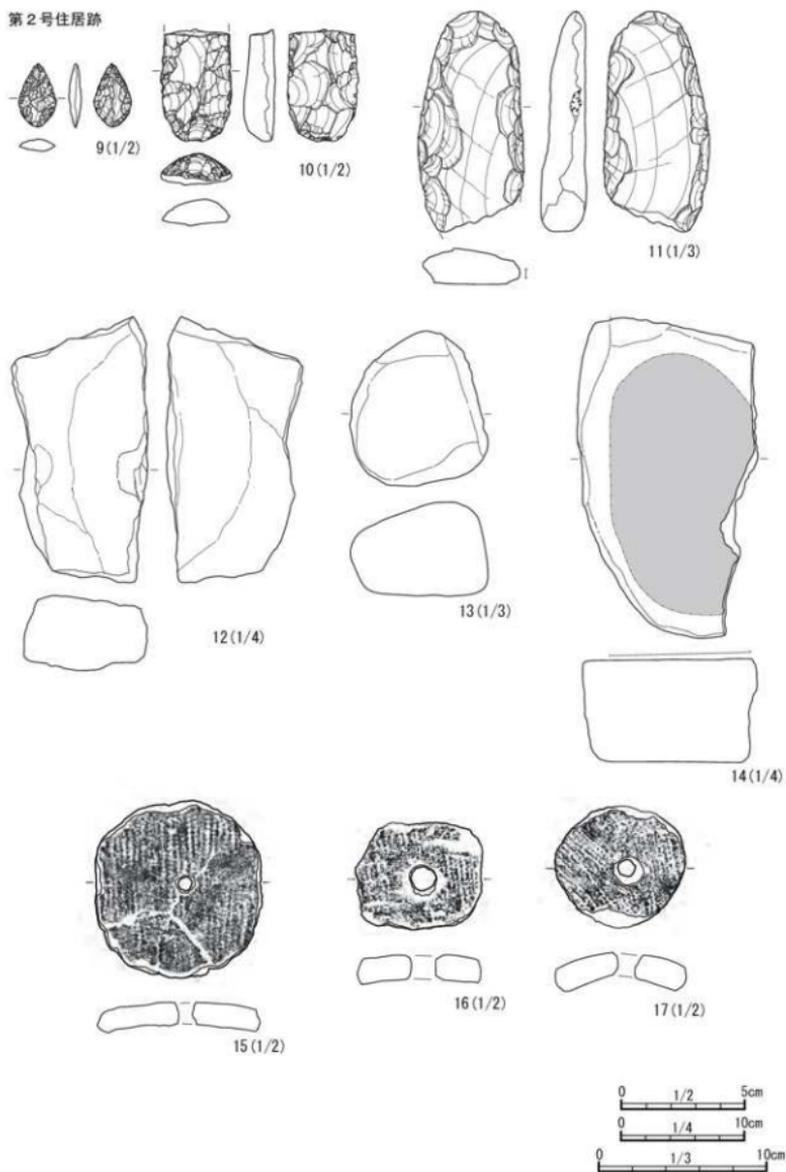
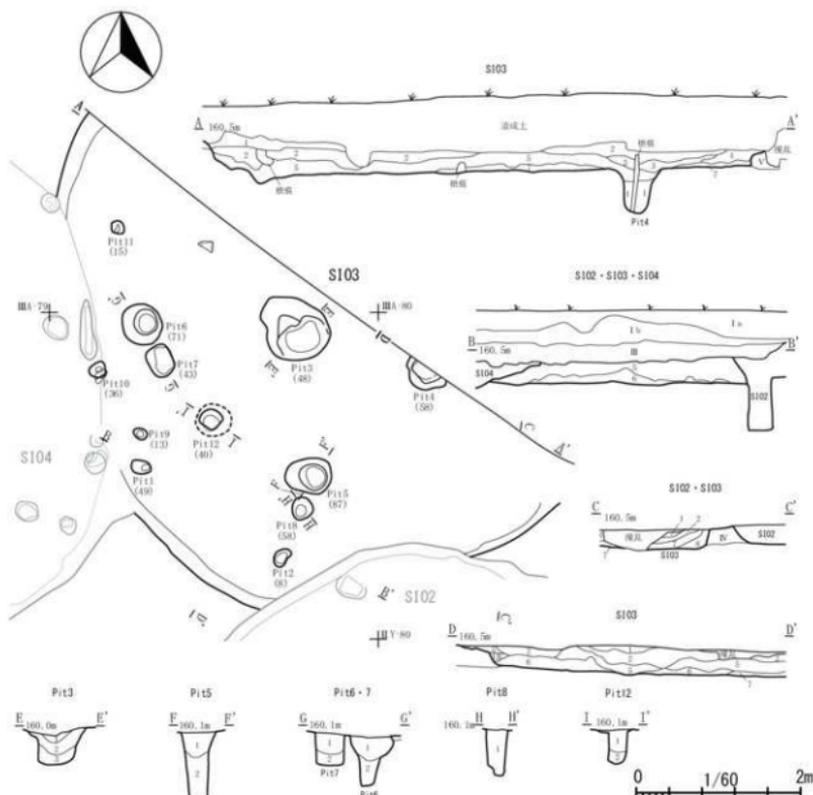


図29 第2号竪穴住居跡 出土遺物(2)



- S103 (A-A'・B-B'・C-C'・D-D')**
- 1層 10YR2/4 暗褐色粘土 黄褐色ローム粒(φ5~50mm)25%, 砂(φ5~80mm)10%, ゴロ4等¹⁾が混ざる。
 - 11層 10YR1/1 黒色土 暗褐色土の混合土。ローム粒(φ1~25mm)3%, 粘土粒(φ5~10mm)1%。
 - 1層 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土の混合土。パリス(φ2~10mm)3%, ローム粒(φ1~3mm)2%, 炭化物粒(φ<1mm)2%。
 - 2層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~2mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%。
 - 4層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ロームブロック(φ1~30mm)7%, 褐色粘土粒(φ1~3mm)1%, 赤褐色粘土(φ1mm)以下、炭化物(φ1~3mm)2%。
 - 2層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%。
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)8%, 褐色粘土粒(φ1mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%。
 - 6層 10YR4/4 暗褐色土 黄褐色ロームブロック(φ1~60mm)5%, 炭化物(φ1~30mm)1%。
 - 7層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%以下。
 - 8層 10YR4/6 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~1mm)5%, 褐色粘土粒(φ1~3mm)1%。
 - 11層 10YR5/6 黄褐色土 黄土5%, 炭化物(φ1mm)1%。
- S103P13 (E-E')**
- 1層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)以下。
 - 2層 10YR5/6 黄褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)1%。
 - 3層 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)1%。
- S103P14 (A-A')**
- 1層 10YR5/6 黄褐色土 明黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%。
- S103P15 (F-F')**
- 1層 10YR2/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)1%。
 - 2層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~2mm)2%, 炭化物(φ1mm)以下。
- S103P16 (G-G')**
- 1層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%。
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1mm)1%。
- S103P17 (H-H')**
- 1層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%, 炭化物粒(φ1mm)1%。
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%。
- S103P18 (H-H')**
- 1層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ロームブロック(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~20mm)2%, 褐色粘土粒(φ1mm)以下。
- S103P19**
- 1層 10YR4/4 褐色土 ローム7%含む。
- S103P110**
- 1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒(1~20mm)10%, 浮石(φ3~10mm)3%, 炭化物(φ1~3mm)3%。
- S103P112 (I-I')**
- 1層 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒(φ1~15mm)7%, 炭化物粒(φ1mm)1%, 浮石(φ3~20mm)2%。
 - 2層 7.20R4/6 褐色土 炭化物粒(φ1mm)1%。

図30 第3号竪穴住居跡

第3号住居跡

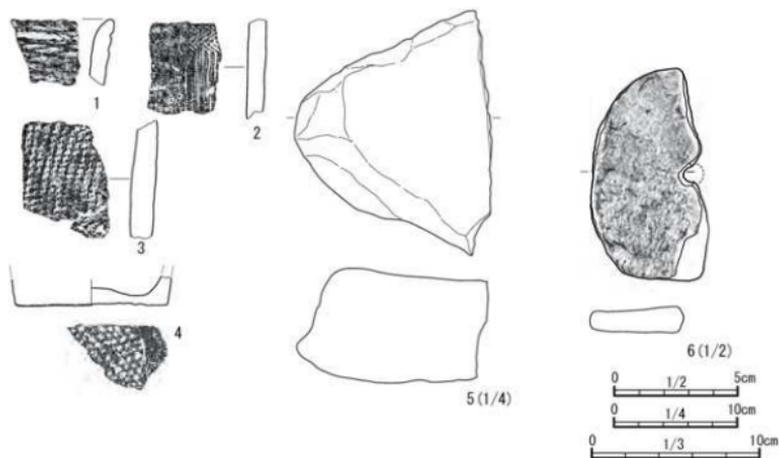


図31 第3号竪穴住居跡 出土遺物

台石(5)1点を図示した。土製品は有孔の土製円盤(6)が1点出土している。素材は円筒式土器の胴部片である。表面は磨滅が顕著である。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期の円筒下層d1式期頃に廃絶されたものと思われる。

第4号竪穴住居跡(SI04、図32～38)

[位置・確認] II Y・Ⅲ A-77～79グリッドに位置し第IV層で確認した。SI03と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 南西部の約3分の1は調査区域外にあって、確認できた平面形は円形に近いが、東西・南北が約6.7mの隅丸方形に近いようにも思われる。確認面から床面の深さは20～27cmを測り、北東側では攪乱によって壁が検出されなかった部分もある。壁はやや開きながら立ち上がる。主柱穴と思われるPit2・18をつなぐ線を住居跡の長軸方向とすれば、長軸方向はN-18°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としており、壁溝は東側と西側で各1条検出された。東側は長さ73cm、幅12～21cm、深さ12cmで壁際に存在する。西側は長さ188cm、幅10～16cm、深さ5～8cmで、壁際から約60～70cm内側で検出されたことから、建て替えによる古い時期の壁溝の可能性がある。

[柱穴] 柱穴は24基検出され、そのうちPit2・4・18が主柱穴と思われる。平面形が直径40～55cm程度の楕円形で、深さはそれぞれ77・52・66cmである。いずれも柱痕を確認できないことから、住居廃棄に伴って柱を抜き取ったものと思われる。中央部にあるPit5・16も規模が大きく主柱穴を構成する一部である可能性があり、Pit5が地床炬を壊して作られていることも考慮に入ると、2時期の柱穴配置を想定することができる。Pit2覆土から略完形の縄文土器鉢(図35-3)が、Pit5覆土から縄文土器深鉢(図38-2)がそれぞれ出土した。東側壁際のPit22・24・13・12・3は、平面形が20cm前後の円形で深さ20～37cmの比較的同規模のピットであることから、壁柱穴の可能性もある。なおPit24は、

調査時SI03Pit10としていたものであるが、精査の結果本住居に帰属するものと考えられたことから、SI04Pit24と改名した。

[炉] 中央のやや南寄りに地床炉1基が検出された。65×55cmの楕円形の火床面が検出され、深さ8cmまで被熱が及んで赤色化していた。またPit1底面で、Pit5に切られるような直径約30cmの半円形の火床面が検出された。長さ138×128cmの楕円形、深さ13cmのPit1底面のほぼ中央部に火床面はある。火床面は深さ5cmまで被熱による赤色化が及んでおり、Pit1が竈穴炉として作られたものと考えられる。Pit16は火床面が検出されていないが、Pit1と類似した規模・検出位置であることから、Pit1と同じ目的で作られた可能性がある。

[その他の施設] 特になし。

[堆積土] 覆土上位は黒褐色土が、下位は褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

[出土遺物] (図35～38) 遺物は覆土中から破片が散発的に出土し、やや北側の覆土中位から床面直上にかけて復元可能個体が出土した。縄文土器は深鉢(1・2・4～8)、浅鉢(3)、口縁部(9～13)、胴部(14)が出土している。1は体部上半が膨らみ、頸部が外反する形状である。4単位の突起から懸垂状に2本の隆帯がつき、その上に竹管による刺突がある。口縁部装飾は側面圧痕で文様を形成している。頸部と胴部の境に1条の隆帯が巡り、その上に竹管による刺突がある。胴部は縦方向の羽状縄文であるが、下半分の一部に横方向の羽状縄文が施文される。底部はあげ底気味である。2は口縁端部に刻み、単軸絡条体の側面圧痕が口縁部に、多軸絡条体が体部に施文されている。3の浅鉢は、口縁・口唇部にRの側面圧痕、胴部にR単軸絡条体が縦回転、結束第2種の横回転文が施文されている。底部は磨かれている。4は口唇部に刻み、口縁部に単軸絡条体第1類の側面圧痕、口縁と体部境に刺突、体部には結束第2種の横回転の縄文が施文されている。結束部の縄文は、LR縄文と、合燃りの縄同土を結束している。底部が欠損し、粗い胎土を用いている。5は胴部下半から底部資料であり、単軸絡条体第1類が縦走する。6は無文土器であり、口縁部に推定で山形状の突起が1単位作られているものと思われる。7は底部資料で、結束第2種が横方向に施文されている。8は、口縁部にはL単軸絡条体とRL縄文の側面圧痕が施され、胴部には単軸絡条体第1A類がみられる。9～13は口縁部片である。14は表面剥落している資料で、まばらな施文であることから、土偶など土製品の一部である可能性がある。

石器類は石鏃1点、石匙1点、両極石器1点、石核3点、剥片4点、抉入扁平打製石器1点、敲磨器2点、石錘1点、石皿類3点、加工礫1点、自然礫6点の計24点出土した。その中から14点図示した。15は凹基鏃、16は片面加工の刃部を持つ横形石匙、17～19は石核である。20は半円状扁平打製石器断片、21は(北海道式)石冠である。扁平な礫の周辺を剥離で加工し、側面にザラザラした磨面2を持つ。22は加工礫である。剥離と敲打痕がみられる。23・24は凹石、25は大形の筋砥石、26・27は凹みを持つ台石である。28は玉髓製の扁平の自然礫である。

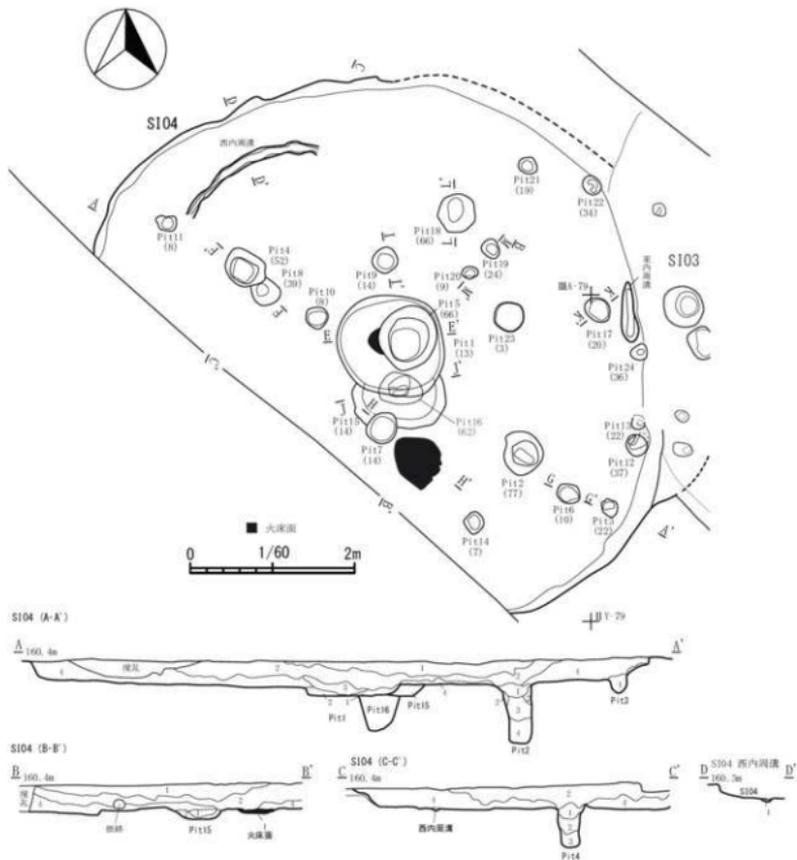
土製品は土製円盤(29)が1点出土している。両面から穿孔されているが貫通していない。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期の円筒下層d2時期に廃絶されたものと思われる。内周溝や炉(竈穴炉)が複数あるが、主柱穴配置が1組のみであることから、建て替えではなく小規模な改築が行われたものと考えられる。

第5号竈穴住居跡(SI05・図39～40)

[位置・確認] III E-74・75グリッドに位置し、第IV層で確認した。SK31と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 北東半が調査区域外にあって、北西部は攪乱によって壊されていることから、不明



S104 (A-A'・B-B'・C-C')

- 1層 10YR2/3 黒褐色土
 2層 10YR2/2 暗褐色土・褐色土の混合層
 3層 10YR4/6 褐色土
 4層 10YR4/4 褐色土
 5層 10YR2/1 黒色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)80%、灰白色粘土粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)10%、赤褐色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%、褐色土20%含む。暗褐色ローム粒($\phi 1\sim 20\text{mm}$)1%、相灰色粘土($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、灰化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、赤褐色焼土($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%、黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)1%、灰白色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%、赤褐色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%、明黄褐色ロームブロック($\phi 1\sim 30\text{mm}$)10%、相灰色粘土($\phi 1\sim 20\text{mm}$)7%、灰化物($\phi 1\sim 20\text{mm}$)5%、褐色土と褐色土との混合層(総合的3.50%ローム含む)、相灰色粘土($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、灰化物($\phi 1\sim 20\text{mm}$)2%。

S104 (B-B')

- 1層 10YR2/3 黒褐色土
 2層 10YR4/4 褐色土
 3層 10YR5/6 赤褐色土
 4層 10YR2/1 黒色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、相灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%以下、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下、褐色土20%含む。炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%、明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 30\text{mm}$)1%、相灰色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%以下、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下、明黄褐色ロームブロック($\phi 1\sim 100\text{mm}$)が数々としている。

S104地味伊 (B-B'・H-H')

- 1層 10YR4/4 褐色土
 2層 10YR2/1 黒色土
- 暗褐色が混む、相灰色粘土粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%以下。

S104西内溝渠 (C-C'・D-D')

- 1層 10YR5/6 黄褐色土
- ロームブロック($\phi 10\text{mm}$)3%混入。

S104東内溝渠

- 1層 10YR4/4 褐色土
- 上位にローム($\phi 3\sim 20\text{mm}$)含む。

S104P11 (A-A')

- 1層 10YR4/4 褐色土
 2層 10YR4/4 褐色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)1%以下、相灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%以下、相灰色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%以下、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%。

S104P12 (A-A')

- 1層 10YR2/3 暗褐色土
 2層 10YR4/4 褐色土
 3層 10YR4/6 褐色土
 4層 10YR2/4 暗褐色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)5%、相灰色粘土($\phi 1\sim 2\text{mm}$)2%、灰化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、赤褐色土($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%、灰化物($\phi 1\sim 30\text{mm}$)7%、黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)1%、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%。

S104P13 (A-A')

- 1層 10YR4/4 褐色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、相灰色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%以下、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%。

S104P14 (C-C')

- 1層 10YR2/3 暗褐色土
 2層 10YR4/6 褐色土
 3層 10YR3/4 暗褐色土
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、赤褐色焼土($\phi 1\text{mm}$)1%、相灰色粘土($\phi 1\sim 20\text{mm}$)2%、灰化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、相灰色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%、灰化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、相灰色粘土($\phi 1\text{mm}$)1%、灰化物($\phi 1\text{mm}$)1%。

図32 第4号竪穴住居跡(1)

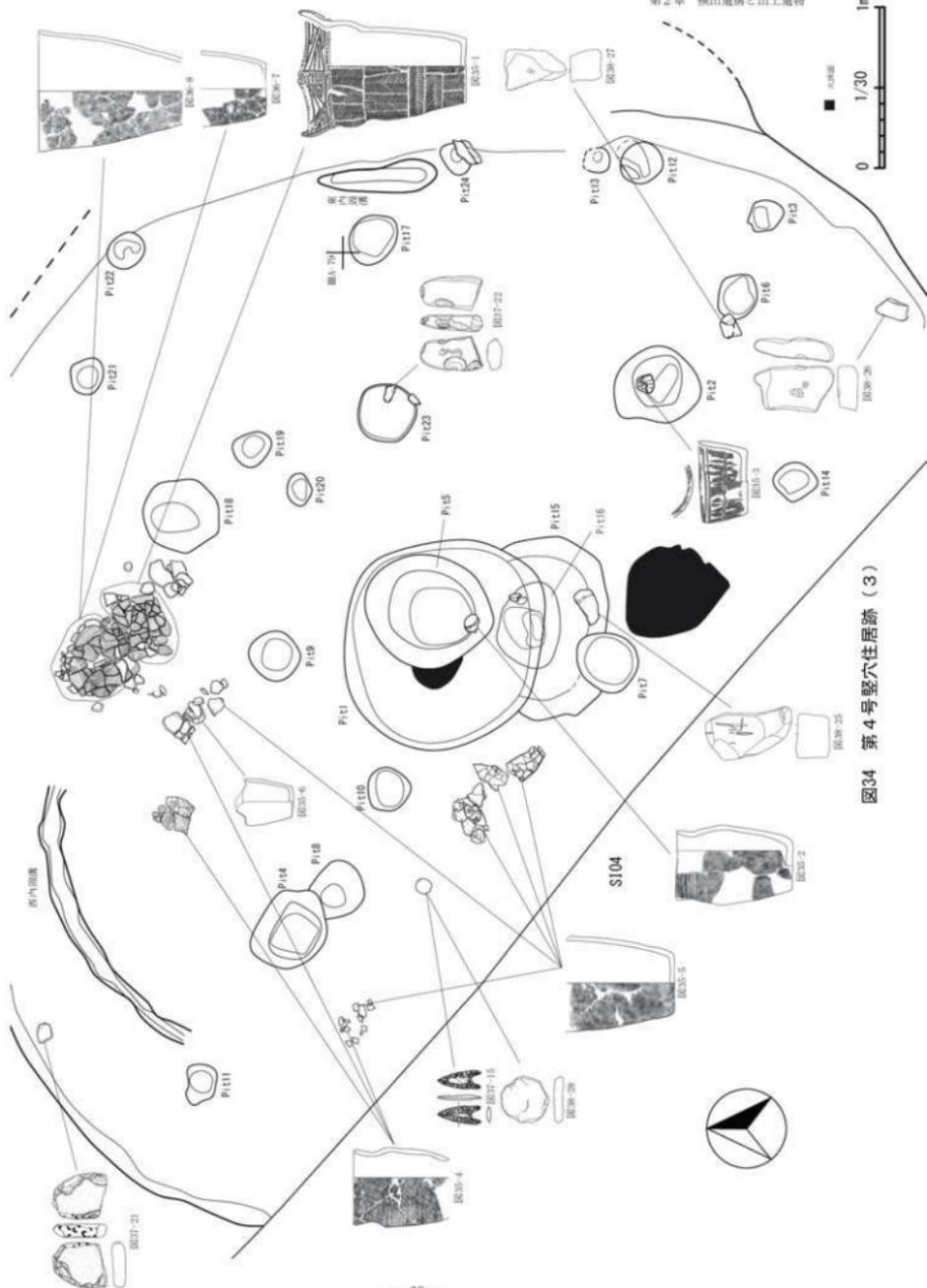


図34 第4号竪穴住居跡(3)

第4号住居跡

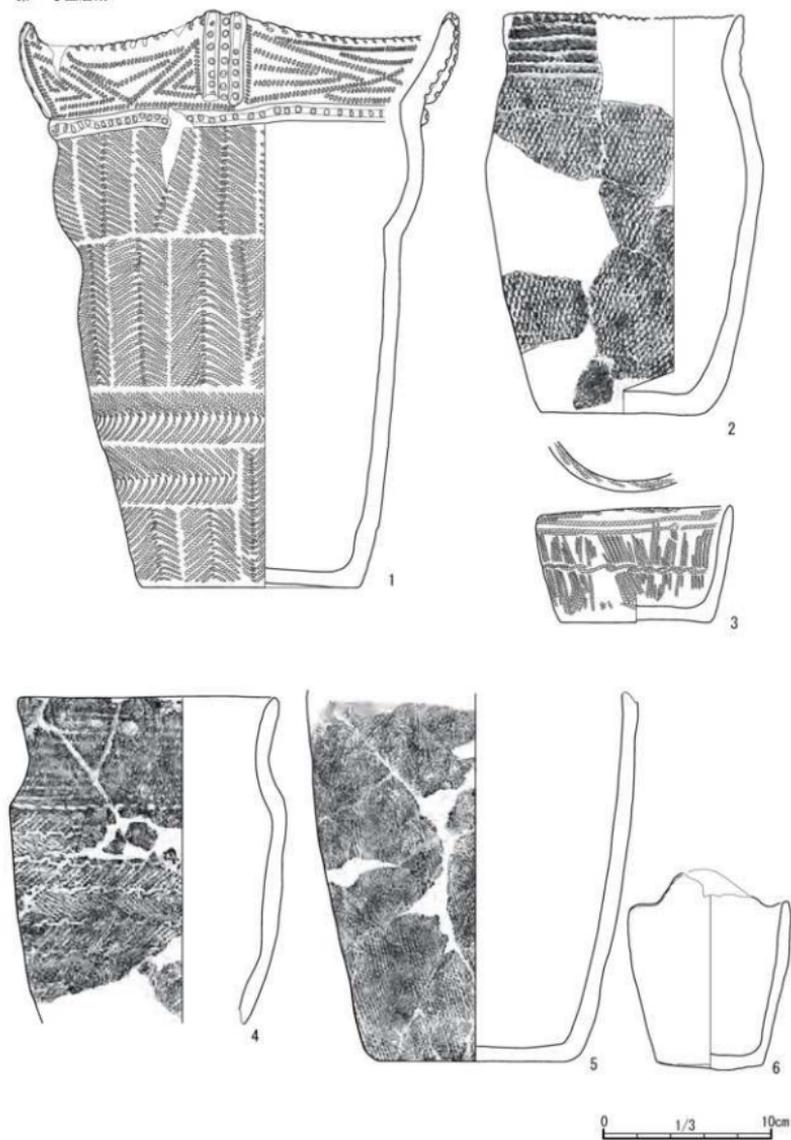


图35 第4号竖穴住居跡 出土遺物(1)

第4号住居跡

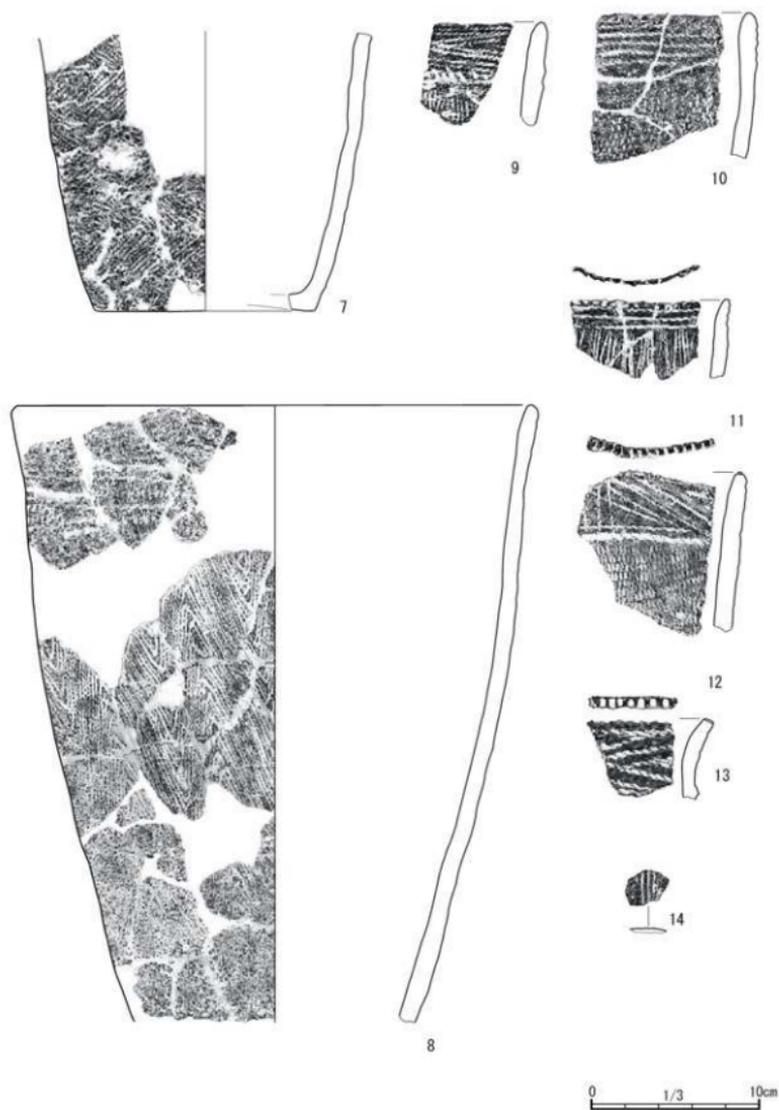


図36 第4号竪穴住居跡 出土遺物(2)

第4号住居跡

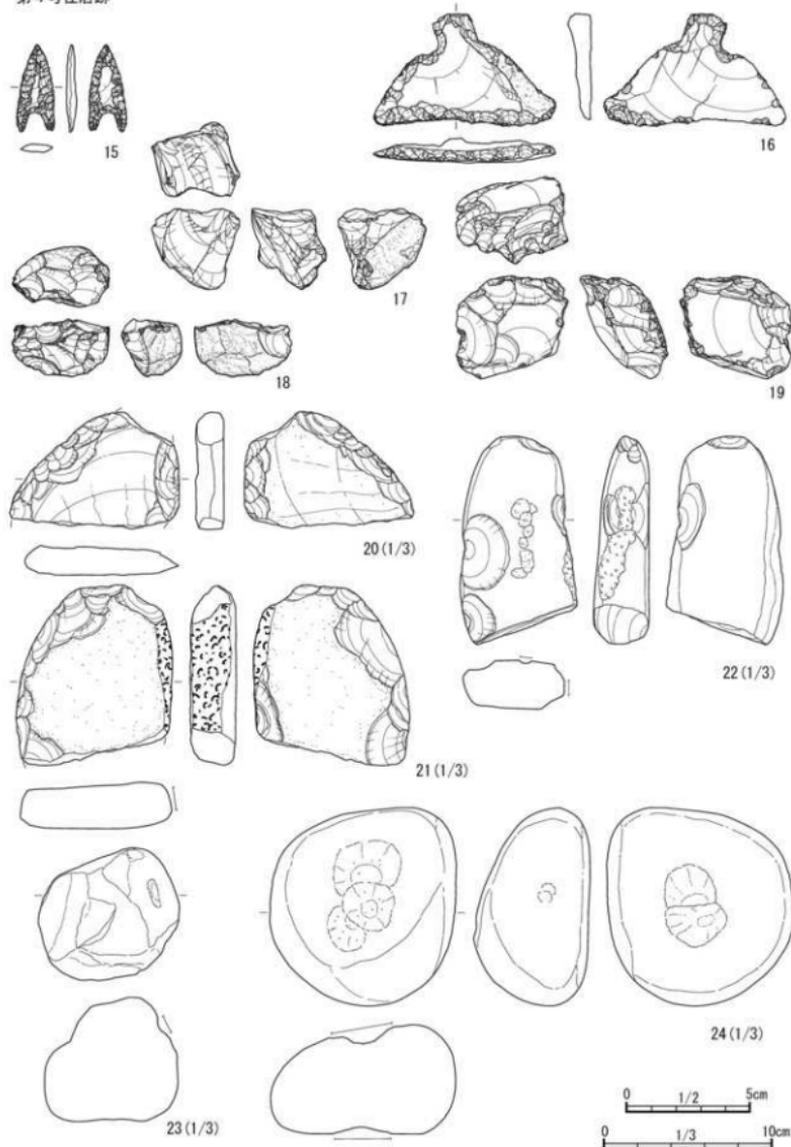


图37 第4号竖穴住居跡 出土遺物(3)

第4号住居跡

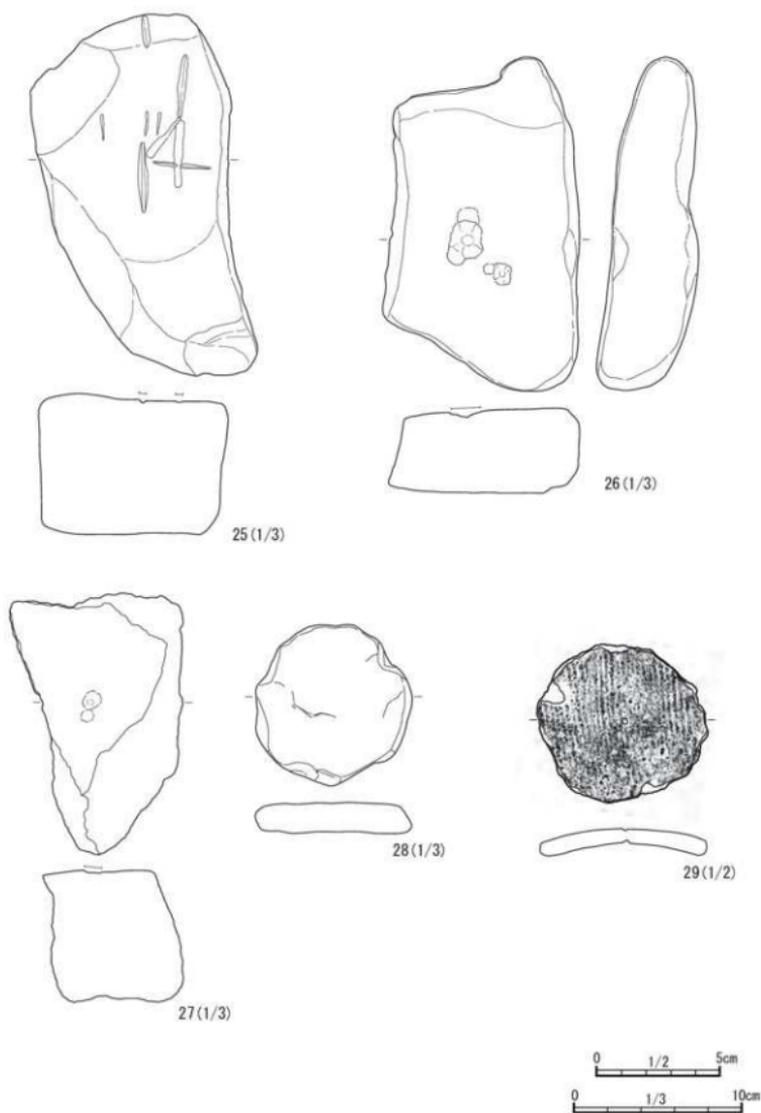
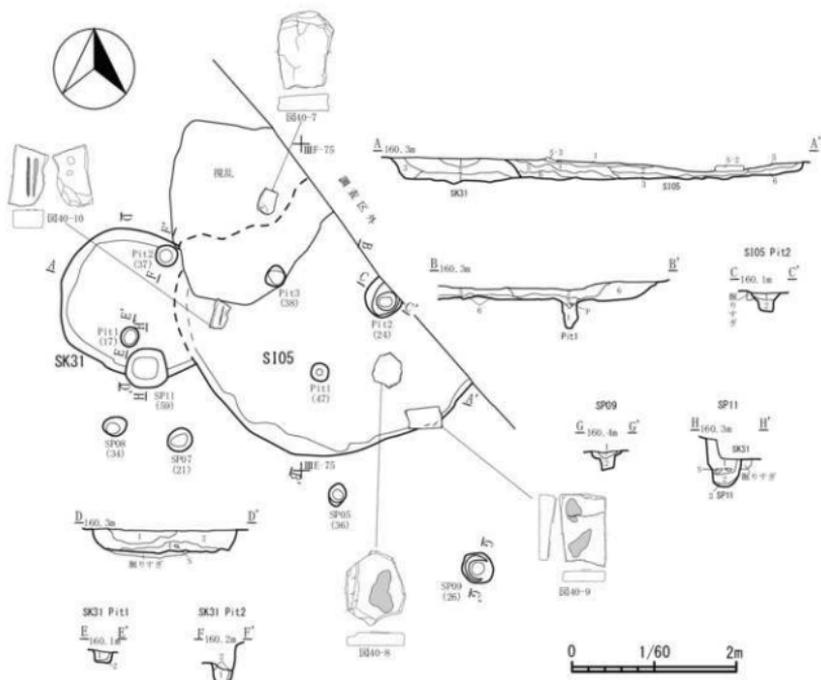


図38 第4号竪穴住居跡 出土遺物(4)



S105 (A-A'・B-B')

- 1層 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%, 褐色粘土粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)以下。
 2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)3%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\sim 20\text{mm}$)2%。
 3層 10YR4/4 褐色土 明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%, 灰白色粘土粒($\phi 1\sim 20\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\sim 5\text{mm}$)1%, 土器あり。
 4層 10YR4/6 褐色土 暗褐色土の混合層。黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%。
 5層 10YR5/6 暗褐色土 明黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)以下。褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%。
 6層 10YR4/6 褐色土 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)以下。炭化物($\phi 1\text{mm}$)以下。

S105SP11 (B-B')

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%。

S105SP12 (C-C')

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土10%含む。黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%。
 2層 10YR5/6 黄褐色土と暗褐色土の混合層。炭化物($\phi 1\sim 10\text{mm}$)1%。

S105SP13

- 1層 10YR4/4 褐色土

SK31 (D-D')

- 1層 10YR4/4 褐色土と暗褐色土の混合層。明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 20\text{mm}$)2%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)以下。炭化物($\phi 1\text{mm}$)以下。
 2層 10YR4/6 褐色土 明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 20\text{mm}$)1%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%。
 3層 10YR4/6 褐色土 黄褐色土($\phi 1\sim 20\text{mm}$)1%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 炭化物($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%。
 4層 10YR4/4 褐色土 明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)1%, 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)以下。炭化物($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%。雜あり。

SK31SP11 (E-E')

- 1層 10YR4/6 褐色土
 2層 10YR2/6 黄褐色土 炭化物($\phi 1\text{mm}$)以下。

SK31SP12 (F-F')

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 褐色土10%含む。黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 30\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)以下。
 2層 10YR4/6 褐色土

SP05

- 1層 10YR4/6 褐色土 南朝土器片出土。底面性あり。

SP07

- 1層 10YR3/3 暗褐色土

SP08

- 1層 10YR4/6 褐色土 炭化物($\phi 1\sim 1\text{mm}$)1%。雜土中位から雜出土。

SP09 (G-G')

- 1層 10YR3/2 暗褐色土 黒褐色土
 2層 10YR3/2 暗褐色土 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%。

SP11 (H-H')

- 1層 10YR4/6 褐色土 明黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%。(右隣S-170×120mm)。(右隣S-220×60mm)。
 2層 10YR5/6 黄褐色土 褐色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)以下。炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%。
 3層 10YR3/3 暗褐色土 褐色土5%含む。

図39 第5号竪穴住居跡と周辺の遺構

第5号住居跡

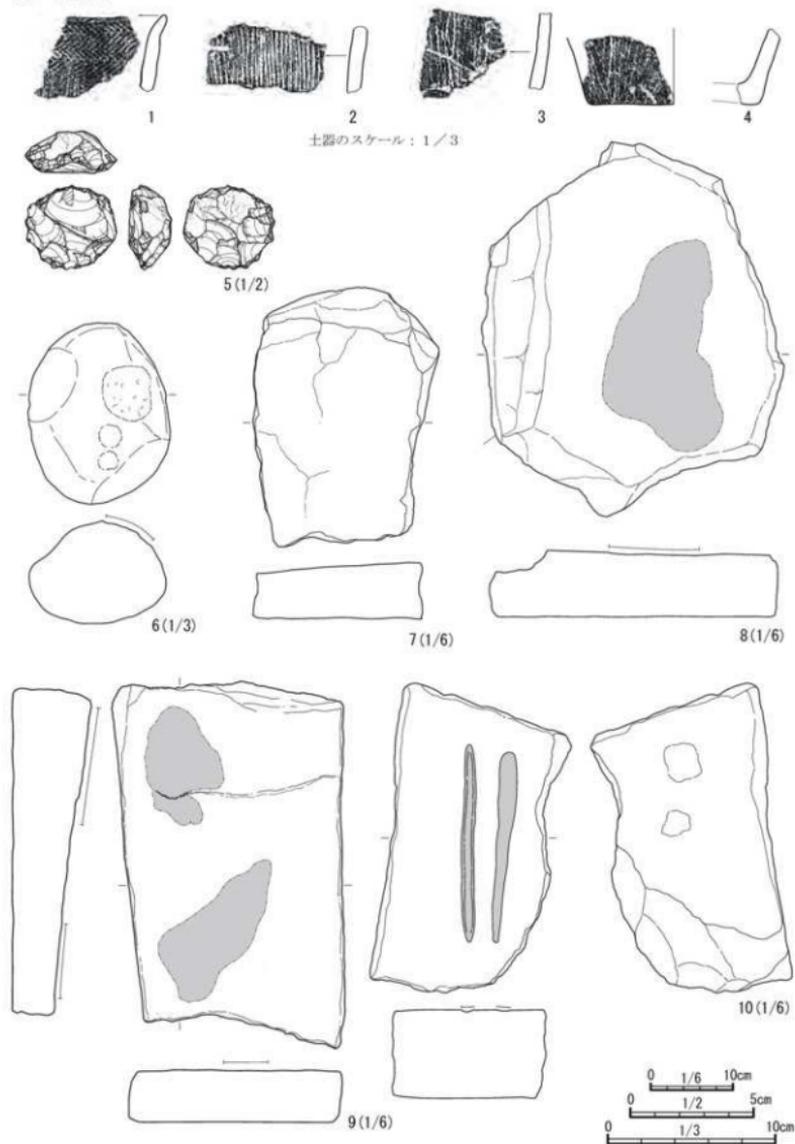


図40 第5号竪穴住居跡 出土遺物

な部分が多いが、平面形は概略円形をなすものと推定される。確認面から床面の深さは、10～24cmを測り、西側に比べて南東側はやや浅く、いずれの壁も開きながら立ち上がっている。主柱穴と思われる Pit1・3をつなぐ線を住居跡の長軸方向とすれば、長軸方向はN・25°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としており、壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は、主柱穴と思われる Pit1・3の2基が検出された。Pit2は規模的にも検出位置的にも、SI04Pit1・Pit15と類似していることから、それらと同機能を有している可能性がある。

[炉] 調査区域内では検出されなかったことから、調査区域外にあるものと思われる。

[その他の施設] 特になし。

[堆積土] 覆土上位は暗褐色土～褐色土が、下位には褐色～黄褐色土が自然堆積している。

[出土遺物] 遺物は、確認面から玉砥石・台石の類が出土したが、これらは住居の埋没途中に廃棄されたもので、住居の時期とは異なったものと考えられる。遺物は床直から若干量出土しているが、散発的な出土を示している。縄文土器は口縁部片(1)、胴部片(2・3)、底部(4)を図示した。単軸絡条体第1類や結束第1種がみられ、縄文時代前期末頃に属すると思われる。石器類は石核1点、剥片1点、敲磨器1点、石皿類4点の計7点が出土し、内6点を図示した。5は円盤状の石核である。6は凹石、7は台石、8・9は大形のTa2石皿である。扁平な礫を素材としている。平滑な磨面が形成されている。10は筋砥石であり、2条の砥面がみられる。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期末の円筒下層d1式期頃に廃絶されたものと思われる。

第6号竪穴住居跡(SI06、図41)

[位置・確認] III F-72グリッドに位置し、第IV層で確認した。大半が調査区域外にあって、かつ攪乱によって壊されていて、ごく一部を検出した。SK45とも重複するようだが、攪乱が介在していたため新旧関係を明らかにすることはできなかった。

[平面形・規模] 弧状の壁を検出したため、平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと思われる。確認面から床面までの深さは約35cmで、外側に開きながら立ち上がる。住居の長軸方向は不明である。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としており、壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は1基検出され、深さ43cmを測ることから主柱穴である可能性がある。

[炉] 調査区域内では検出されず、調査区域外にあるものと思われる。

[その他の施設] 特になし。

[堆積土] 覆土上位は黒色土が、下位には暗褐色土が自然堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[遺構の時期等] 堆積土の様相などから、縄文時代晩期以降に廃絶されたものと思われる。しっかりと掘り込みとピットを検出したことによって住居跡と認定したが、SK31のような竪穴遺構、もしくは土坑である可能性もある。

第7号竪穴住居跡(SI07、図42～43)

[位置・確認] III G・III H-72・73グリッドに位置する。SX04(黒曜石散布範囲)の精査終了後、第V層で確認した。SK43・SX04と重複し、SK43より本遺構が新しく、SX04より本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は北西から南東にのびる楕円形と推定される。堆積土と地山が酷似しており、壁を検出することはできなかったため、壁の状況等は不明である。主柱穴と思われる Pit3・13をつなぐ線を住居跡の長軸方向とすれば、住居の長軸方向はN・30°-Wである。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としており、壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 本住居跡の内外から20基以上のピットが検出され、調査時点で本住居に伴うと思われるものには「Pit」番号を付し、伴わないと思われるものは「SP」番号を付したが、Pit5が第1号ピット列に含まれる可能性があるなど、断定できたわけではない。これらのうちPit3・13が深さ76cm、77cmであることから本住居跡の主柱穴と考えられ、Pit4・11・12・33も約50cmの深さを有することから主柱穴の可能性はある。

[炉] 中央部やや西寄りで地床炉が1基検出された。50×40cmの火床面で、深さ5cmまで被熱が及んで赤色化していた。

[その他の施設] 住居北東部で検出されたPit1・7は深さ53cm・43cmで、推定壁際で約70cmの間隔を空けて存在していることから、出入り口等何らかの施設である可能性が考えられる。

[堆積土] 覆土上位は暗褐色土が、下位には褐色土が自然堆積している。

[出土遺物] 本住居の覆土上位遺物は、黒曜石散布範囲(SX04)の構成土でもある。SX04の精査終了後に本住居が検出されたため、本住居跡に含まれていた遺物はごく少量であった。縄文土器は胴部片(1・2)を図示し、いずれも縄文時代前期末に属すると思われる。石器類は出土していない。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期末葉の頃に廃絶されたものと思われる。

第8号竪穴住居跡(SI08、図114・43)

[位置・確認] III J・III K-58・59グリッドに位置し、第IV層で確認した。SK78より本遺構が新しく、SK76・82、SN13・21・22、SP66・73・80・81より古い。

[平面形・規模] 壁が不明瞭であったことや遺構の重複などから壁を一部確認できなかったが、平面形は北東から南西方向に長い楕円形を呈するものと思われる。長軸4.0m、短軸3.0mで、確認面から床面までの深さは18～22cmを測る。壁は開きながら立ち上がり、住居の長軸方向はN-48°-Eである。

[床面・壁溝] 床面は地山をそのまま床面としている。壁溝は検出されなかった。

[柱穴] 柱穴は1基のみ、深さ27cmのPit1が検出された。

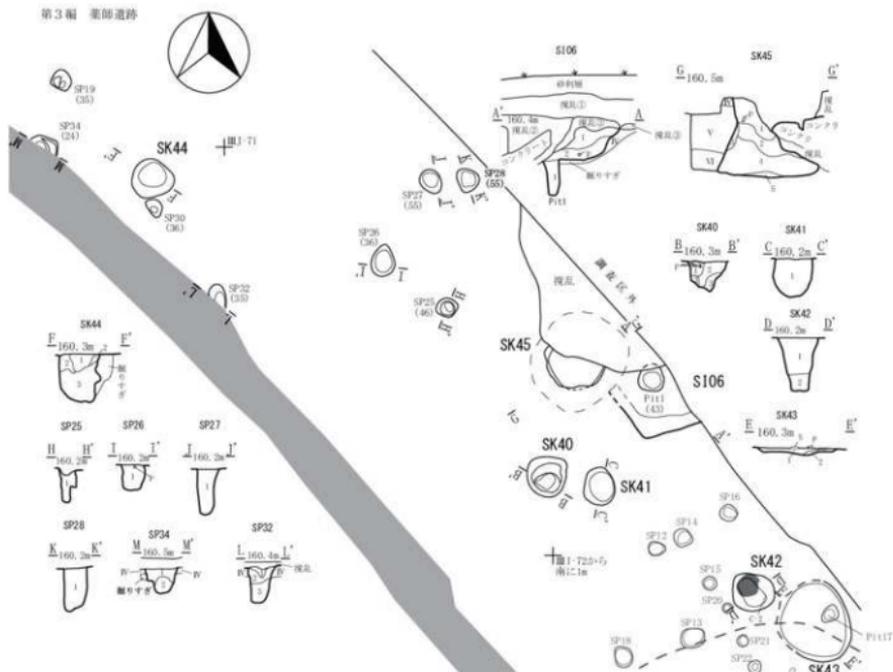
[炉] 住居南寄りの壁際に地床炉1基が検出された。北半は水道管理設溝によって壊されているが、火床面は50～60cm程度の円形をなすものと推定され、深さ10cmまで被熱が及んで赤色化していた。

[その他の施設] 特になし。

[堆積土] 覆土上位は黒褐色土が、下位には褐色土が自然堆積している。

[出土遺物] 縄文土器は口縁部片(3～6)を図示した。すべて円筒下層d1式に属する。3は低い隆帯をもち、口縁部にLR側面圧痕が施文される。4は表面粗く、RL縄文の側面圧痕である。5は結束第1種羽状縄文が2段みられ、胴部は単軸給条体第1類縦回転である。6は方向の異なる1段の縄2条を1組にした側面圧痕である。石器類は剥片1点が出土している。

[遺構の時期等] 出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、縄文時代前期末葉期の円筒下層d1式期頃に廃絶されたものと思われる。



- S106 (A-A)**
 1層 10192/3 黄褐色土
 2層 10193/6 明黄褐色土
 3層 10193/2 黄褐色土
 4層 10192/1 黄褐色土
 5層 10193/3 暗褐色土
- S106(P)11 (A-A)**
 1層 10193/4 暗褐色土
- SK40 (B-B)**
 1層 10193/8 黄褐色土
 2層 10193/5 黄褐色土
 3層 7.235/9 暗褐色土
- SK41 (C-C)**
 1層 10193/4 暗褐色土
- SK42 (D-D)**
 1層 10194/6 褐色土
 2層 10193/4 暗褐色土
- SK43 (E-E)**
 1層 10193/6 黄褐色土
 2層 10193/6 明黄褐色土
- SK44 (F-F)**
 1層 10194/6 褐色土
 2層 10193/8 黄褐色土
 3層 10194/4 褐色土
- SK45 (G-G)**
 1層 10193/4 暗褐色土
 2層 10193/3 暗褐色土
 3層 10194/6 褐色土と黄褐色土
 4層 10194/6 褐色土
 5層 10193/6 黄褐色土
 6層 10194/4 褐色土
 7層 10193/8 黄褐色土
 8層 10193/4 二重黄褐色土
- SP19**
 1層 10193/4 暗褐色土
- SP25 (H-H)**
 1層 10194/4 褐色土
- SP26 (I-I)**
 1層 10194/4 褐色土
- SP27 (J-J)**
 1層 10194/6 褐色土
- SP28 (K-K)**
 1層 10194/4 褐色土
- SP30**
 1層 10193/3 暗褐色土

- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 4\text{mm}$)10%, (若くは多く含む)
 紫土10%含む、灰白色粘土粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%,
 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%,
 黄褐色土10%含む、炭化物($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%,
 土に2%黄褐色土10%含む、明赤褐色土粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%
- 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%
- 暗灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%, 土器多数含む。
 明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%、赤褐色焼土($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%、暗灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)5%、
 暗褐色土20%含む、明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)5%、
 暗褐色土20%含む、暗灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%以下。
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)5%、明赤褐色焼土($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、
 暗灰色粘土粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%、炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)2%、
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)5%、炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)5%、
 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)3%、炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)3%、
- 暗褐色土20%含む、暗灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下。
 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%、暗灰色粘土粒($\phi 1\text{mm}$)1%、
 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%、
- 暗褐色土20%含む、黄褐色ローム粒($\phi 1\text{mm}$)1%以下、炭化物($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、
 黄褐色土20%含む、明黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%、炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下。
 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下。
- 黄褐色ローム粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%、赤褐色焼土($\phi 1\sim 10\text{mm}$)2%、暗灰色粘土粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、土器あり。
 暗褐色土20%含む、黄褐色土($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%、赤褐色焼土($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\sim 3\text{mm}$)1%、炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)4%、
 2層 10193/6 黄褐色土
 3層 10193/6 黄褐色土
 4層 10193/6 褐色土
 5層 10193/6 褐色土
 6層 10193/6 褐色土
 7層 10193/6 褐色土
 8層 10193/6 褐色土
 9層 10193/6 褐色土
 10層 10193/6 褐色土
 11層 10193/6 褐色土
 12層 10193/6 褐色土
 13層 10193/6 褐色土
 14層 10193/6 褐色土
 15層 10193/6 褐色土
 16層 10193/6 褐色土
 17層 10193/6 褐色土
 18層 10193/6 褐色土
 19層 10193/6 褐色土
 20層 10193/6 褐色土
 21層 10193/6 褐色土
 22層 10193/6 褐色土
 23層 10193/6 褐色土
 24層 10193/6 褐色土
 25層 10193/6 褐色土
 26層 10193/6 褐色土
 27層 10193/6 褐色土
 28層 10193/6 褐色土
 29層 10193/6 褐色土
 30層 10193/6 褐色土
 31層 10193/6 褐色土
 32層 10193/6 褐色土
 33層 10193/6 褐色土
 34層 10193/6 褐色土
 35層 10193/6 褐色土
 36層 10193/6 褐色土
 37層 10193/6 褐色土
 38層 10193/6 褐色土
 39層 10193/6 褐色土
 40層 10193/6 褐色土
 41層 10193/6 褐色土
 42層 10193/6 褐色土
 43層 10193/6 褐色土
 44層 10193/6 褐色土
 45層 10193/6 褐色土
 46層 10193/6 褐色土
 47層 10193/6 褐色土
 48層 10193/6 褐色土
 49層 10193/6 褐色土
 50層 10193/6 褐色土

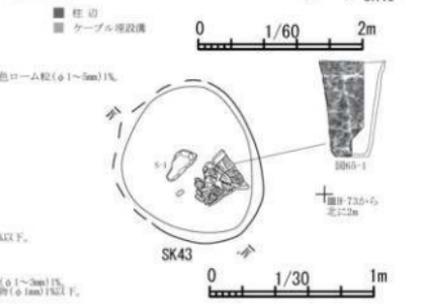
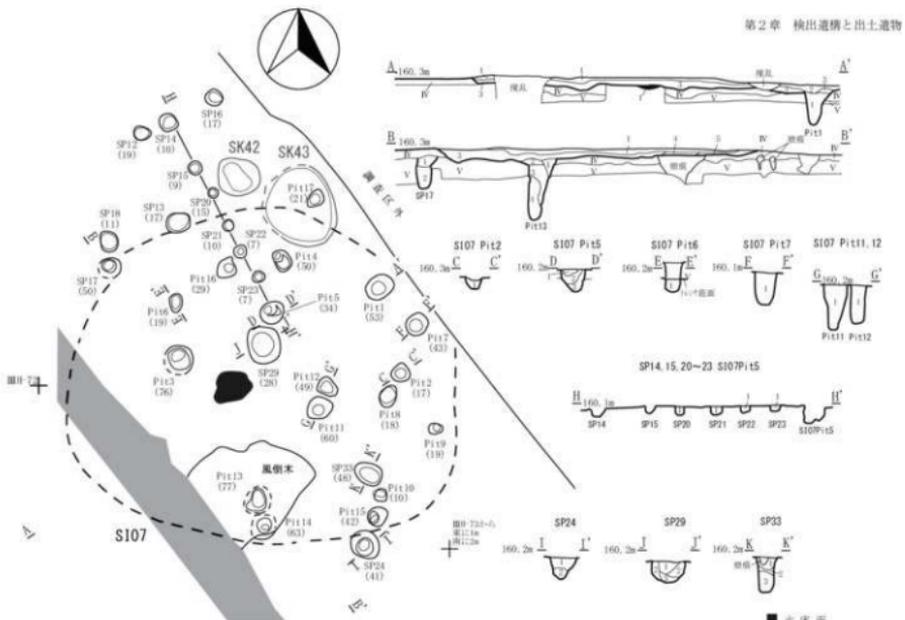


図41 第6号竪穴住居跡と周辺の遺構



S107 (A-K・B-E)

- 1層 101K3/2 暗褐色土
- 2層 101K3/2 暗褐色土
- 3層 101K3/4 褐色土
- 4層 101K3/2 暗褐色土
- 5層 101K3/2 暗褐色土
- D層 101K3/2 暗褐色土
- V層 101K3/8 黄褐色土

黄褐色ローム粒(φ1mm)以下、
 黄褐色粘土粒(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下、
 灰褐色ローム粒(φ1mm)以下、赤褐色土(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%, 褐色粘土粒(φ1mm)以下、
 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下、
 明黄褐色ローム粒(φ1mm)以下、
 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 褐色ローム粒(φ1~5mm)2%,
 暗褐色土10%含む、褐色粘土粒(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1~5mm)2%

S107尖塚遺 (A・K)

- 1層 101K3/4 褐色土

炭化物(φ1~2mm)1%, 焼土粒(φ3mm)1%

S107P11 (A・K)

- 1層 101K3/3 暗褐色土

黄褐色ローム粒(φ1mm)1%, 赤褐色土(φ1mm)以下、褐色粘土粒(φ1mm)以下、

S107P12 (C・C')

- 1層 101K3/3 茶褐色土

褐色ローム片、黄褐色ローム粒(φ1mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%

S107P13

- 1層 101K4/4 褐色土
- 2層 101K4/6 褐色土
- 3層 101K3/6 黄褐色土
- 4層 101K4/6 褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~3mm)2%, 炭化物(φ1mm)以下、
 黄褐色ローム粒(φ1mm)1%, 灰白色粘土(φ1mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%,
 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)3%, 灰白色粘土(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)2%,
 明黄褐色ローム粒(φ1mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%

S107P14

- 1層 101K3/2 暗褐色土

炭化物1%, 基礎石フレック1%含む、

S107P15 (D・D')

- 1層 101K2/3 茶褐色土
- 2層 101K4/6 褐色土
- 3層 101K3/4 暗褐色土

褐色土が2%含む、
 黄褐色ローム粒(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%,
 明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)3%, 明褐色粘土(φ1~3mm)以下、
 炭化物(φ1mm)以下、

S107P16 (E・E')

- 1層 101K4/4 褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下、

S107P17 (F・F')

- 1層 101K4/4 暗褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 褐色粘土(φ1mm)以下、

S107P18

- 1層 101K4/4 暗褐色土

明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)4%

S107P19

- 1層 101K3/3 暗褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~3mm)3%

S107P110

- 1層 101K4/4 褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%

S107P111 (G・G')

- 1層 101K4/4 褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~5mm)4%, 炭化物(φ1mm)1%

S107P112 (G・G')

- 1層 101K3/3 暗褐色土

黄褐色ローム粒(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%

S107P113・P114

- 1層 101K3/4 暗褐色土

風洞木の支柱掘られたための埋戻し不明、

S107P115

- 1層 101K3/4 暗褐色土

に黄褐色土が上部に10%含む、(φ1mm)大粒、

S107P116

- 1層 101K3/4 暗褐色土

炭化物(φ1~5mm)3%

S107P117

- 1層 101K4/4 褐色土

炭化物(φ1~2mm)3%

S107P118

- 1層 101K3/3 茶褐色土

炭化物(φ1~5mm)2%

SP1 (28)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP2 (41)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP3

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP4 (8・H)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP5 (8・H)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP6

- 1層 101K3/3 暗褐色土

SP7 (8・G)

- 1層 101K3/4 褐色土
- 2層 101K3/6 褐色土

SP8

- 1層 101K4/2 灰黄褐色土

SP9 (8・H)

- 1層 101K3/4 褐色土

SP10 (8・H)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP11 (8・H)

- 1層 101K3/3 茶褐色土

SP12 (8・H)

- 1層 101K3/4 褐色土

SP13 (8・H)

- 1層 101K3/4 褐色土

SP14 (8・H)

- 1層 101K3/4 褐色土

SP15 (8・H)

- 1層 101K3/4 暗褐色土

SP16 (8・H)

- 1層 101K3/4 暗褐色土

SP17 (8・J)

- 1層 101K4/6 褐色土

SP18

- 1層 101K3/6 黄褐色土
- 2層 101K3/6 黄褐色土

SP19

- 1層 101K3/2 茶褐色土

SP20 (8・K)

- 1層 101K4/4 褐色土と暗褐色土の混合層、明黄褐色ローム粒(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%,
 2層 101K3/6 黄褐色土、明黄褐色ローム粒(φ1mm)以下、炭化物(φ1~20mm)3%、
 3層 101K3/8 黄褐色土、褐色粘土粒(φ1~3mm)1%, 褐色粘土(φ1mm)以下、
 4層 101K4/6 褐色土、明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下、
 5層 101K3/6 黄褐色土、明黄褐色ローム粒(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下、

図42 第7号竪穴住居跡と周辺の遺構

第7号住居跡



第8号住居跡

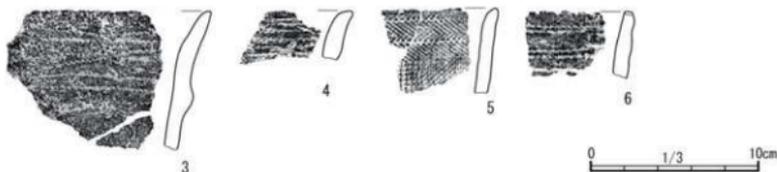


図43 第7・8号竪穴住居跡 出土遺物

第2節 土坑

3ヶ年の調査において81基の土坑が検出された。各土坑の諸特徴・調査所見等について以下に記載する。

表10 土坑一覧(1)

※標高：m、重複：(古)→(新)、規模：cm

	エナゴ・標高・検出層位・平面形	ⅡV・ⅡⅧ-40	159.4	第V層	小判形
第1号土坑 (SK01) 図44-45	重複	なし。			
	規模(長軸・短軸・深さ)・長軸方位	134	68	37	N-31°-E
	底面・壁の状況	底面は平坦で、壁上部は削平を受けているがしっかりと立ち上がる。			
	堆積土	上位はロームブロックを比較的多く含む暗褐色土で、底面付近は黒褐色土主体。人為堆積。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第2号土坑 (SK02) 図44-45・61	エナゴ・標高・検出層位・平面形	ⅡⅧ-40	159.4	第IV層	小判形
	重複	北側が水道管理設備溝によって壊されている。			
	規模(長軸・短軸・深さ)・長軸方位	131	-	22.4	N-88°-W
	底面・壁の状況	底面はやや凹みがあり、丸みを帯びながら壁が立ち上がる。			
	堆積土	黒褐色土が堆積し、人為堆積の可能性はある。			
出土遺物	1は雲形文の鉢形土器、2・4は口縁部、3は台部、6～8は晩期土器胴部、9は底部である。5は縄文時代前期である。いずれも確認面で出土した。				
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第3号土坑 (SK03) 図44-45	エナゴ・標高・検出層位・平面形	ⅡⅧ-40	159.3	第IV層	隅丸方形
	重複	北側が水道管理設備溝によって壊されている。			
	規模(長軸・短軸・深さ)・長軸方位	140	-	22.6	N-26°-E
	底面・壁の状況	底面は丸底風で、壁は丸みを帯びながらしっかりと立ち上がる。			
	堆積土	上位はロームブロックを含む暗褐色土で、底面付近は黒褐色土主体。人為堆積。			
出土遺物	遺物は出土しなかった。				
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第4号土坑 (SK04) 図44-45	エナゴ・標高・検出層位・平面形	ⅡⅧ-40	159.3	第IV層	隅丸方形?
	重複	南側が水道管理設備溝によって壊されている。			
	規模(長軸・短軸・深さ)・長軸方位	95	-	27	N-81°-W
	底面・壁の状況	底面は平坦で、しっかりと壁が立ち上がる。			
	堆積土	上位が暗褐色土、下位が黄褐色土で、人為堆積である。			
出土遺物	図示し得なかったが、縄文時代前期と晩期の土器細片が1層から出土した。				
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				

表10 土坑一覧(2)

第5号土坑 (SK05) 図44-45-61	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡV-39・40	159.3	第V層	隅丸長方形
	重複	なし。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	187.5	78.2	42.1	N-68°-E
	底面・壁の状況	底面は平坦で、しっかりとした壁が立ち上がる。			
	堆積土	上位は暗褐色土、下位は黒褐色土主体で、いずれもロームブロックを含む人為堆積である。			
第6号土坑 (SK06) 図44-45-61	出土遺物	10・11は覆土から出土した縄文晩期の土器片である。微細断片(12)1点、平玉2点が出土している。いずれも底面直上にあたる覆土4層から出土し、14は緑色凝灰岩製の両面穿孔のものである。13は成分分析では石材を断定できなかった(第4章第5節1)が、肉眼観察でヒスイと特定された資料である。土坑上部で出土した縄は土層観察によると1層中であり、本土坑に伴わないものと思われる。覆土4層から出土した炭化材を年代測定した(第4章第1節1)。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状・玉の出土等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡV-40・41	159.4	第V層	隅丸方形
	重複	SK06→SK11。北側が水道管理設備によって壊されている。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	170程度	66	19.5	N-37°-E
第7号土坑 (SK07) 図98	底面・壁の状況	底面は平坦で、壁はやや傾きながら立ち上がる。			
	堆積土	ロームを含む暗褐色土もしくは黒褐色土が堆積し、人為堆積である。			
	出土遺物	15は無文の底部片で、底外面に何らかの不明圧痕がみられる。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡT-32	158.7	SK06底面で検出	不整形
第8号土坑 (SK08) 図44-45-61	重複	SK07→SK06。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	115	-	77.7	-
	底面・壁の状況	底面は丸底状で、しっかりとした壁が立ち上がる。			
	堆積土	上位は黒褐色土で、下位は黒褐色土が堆積。下位は自然、上位は人為堆積の可能性がある。遺物は出土しなかった。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から古代～中世の井戸跡の可能性もある。			
第9号土坑 (SK09) 図44-45-61	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡX-41	159.4	第V層	楕円形
	重複	壁上部は削平され、北側が水道管理設備によって壊されている。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	110	87	21.8	N-19°-E
	底面・壁の状況	底面は丸底面、壁は丸みを帯びて傾きながら立ち上がる。			
	堆積土	ロームを含む灰褐色土もしくは暗褐色土が堆積し、人為堆積の可能性がある。			
第9号土坑 (SK09) 図44-45-61	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡW-40	159.3	第IV層	隅丸長方形
	重複	SK09→SK11。南側がケール埋設溝で壊されている。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	188	-	37.2	N-87°-E
第10号土坑 (SK10) 図44-45-61	底面・壁の状況	底面は平坦で、しっかりとした壁が立ち上がる。			
	堆積土	ロームを多く含む黒褐色土もしくは黒褐色土で、人為的に埋め戻されている。			
	出土遺物	16～18・21は晩期の土器。19・20は円筒下層式の土器である。底面直上から18が出土した。17はSK09覆土出土土器と、SK15底面出土土器とが接合したものである。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡX-40	159.3	第IV層	隅丸方形
第10号土坑 (SK10) 図44-45-61	重複	なし。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	119	60	22	N-73°-W
	底面・壁の状況	底面は概ね平坦で、壁はしっかりと立ち上がる。南東端はオーバーハングしている。			
	堆積土	上位は黒褐色土、下位は暗褐色土が堆積し、人為堆積の可能性がある。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
第11号土坑 (SK11) 図44-45-61	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡW-40・41	159.4	第IV層	楕円形
	重複	SK06・09→SK11。中央部がケール埋設溝で壊されている。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	134	58	24.8	N-18°-W
	底面・壁の状況	底面は平坦で、壁は丸みを帯びながらしっかりと立ち上がる。			
第12号土坑 (SK12) 図46	堆積土	ロームを含む暗褐色土もしくは暗褐色土が堆積し、人為堆積と思われる。			
	出土遺物	22は確認面から出土した無文の土器片である。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡW・ⅡX-47	160.7	第V層	円形?楕円形?
	重複	なし。北側は覆土で壊され、大半が調査区域外にある。			
第12号土坑 (SK12) 図46	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	-	-	17	N-73°-W
	底面・壁の状況	底面は平坦で、丸みを帯びて傾きながら壁が立ち上がる。			
	堆積土	ローム粒を含む黒褐色土が、人為堆積している。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
	機能・時期・特記事項	遺構大半が調査区域外にあるが、土坑の形状や堆積土等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			
第13号土坑 (SK13) 図46	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡX-46・47	160.4	第V層	小判形
	重複	なし。			
	距離(出納・距離-深3)-長軸方向	116.5	62.6	2～15	N-74°-W
	底面・壁の状況	底面は概ね平坦で、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。壁上部は削平により遺存していない。			
	堆積土	完脱してしまったため、不明。			
第13号土坑 (SK13) 図46	出土遺物	図示し得なかったが、縄文時代晩期の土器断片が出土した。			
	機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。			

表10 土坑一覧(3)

第14号土坑 (SK14) 図46	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡX-46	160.3	第V層	小判形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	127.3	55.7	11.7	N-74° -E
	底面・壁の状況	底面は緩な平埠で、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。壁上部は削平により遺存していない。			
	堆積土	褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。			
第15号土坑 (SK15) 図46-61	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡY-46	159.8	第V層	円形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	115.7	-	25.4	(軸なし)
	底面・壁の状況	底面は丸底風で、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。壁上部は削平により遺存していない。上位はロームブロックが、下位は暗褐色土が堆積している。人為堆積と思われる。			
	出土遺物	17はSK09覆土出土土器と、SK15底面出土土器とが接合したものである。23は晩期、24は円筒下層式の土器、25は底面直上から出土した赤彩の耳飾りで、赤色顔料分析を行っている。底面直上から出土した炭化材を年代測定した。分析の詳細は第4章第2節1(年代測定)・第4節(顔料分析)を参照のこと。			
機能・時期・特記事項	出土遺物、土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第16号土坑 (SK16) 図46	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡX-46・47	160.3	第V層	小判形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	151.9	51.9	14.6	N-63° -E
	底面・壁の状況	底面は丸底風で、壁は緩やかに立ち上がるようだが、削平されていて壁上部は遺存していない。			
	堆積土	ロームを含む暗褐色土が堆積し、人為堆積と思われる。			
第17号土坑 (SK17) 図46	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡX-47	160.3	第V層	円形?楕円形?
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	-	-	30.6	-
	底面・壁の状況	底面は平埠で、壁はしっかりと立ち上がる。東側は多く擾乱によって潰されている。			
	堆積土	黒褐色土あるいは暗褐色土で、いずれもロームを含むことから、人為堆積と思われる。			
第18号土坑 (SK18) 図44-45・61	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡB-40	159.2	第IV層	楕円形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	150程度	75程度	32.2	N-23° -E (長さ20×幅17.4cm、 深さ12.2cm)あり。
	底面・壁の状況	底面は平埠で、しっかりと壁が立ち上がる。底面や北側に円形のPit1(長さ20×幅17.4cm、深さ12.2cm)あり。			
	堆積土	ローム層を含む黒褐色土が人為的に堆積している。			
第19号土坑 (SK19) 図46	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡY-46	159.8	第V層	楕円長方形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	119.7	65.8	8.2	N-87° -E
	底面・壁の状況	底面は平埠で、壁はしっかりと立ち上がる。			
	堆積土	ローム主体で、人為的に埋め戻されている。			
第20号土坑 (SK20) 図46	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡY-47	160	第V層	円形?楕円形?
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	-	60程度?	16	-
	底面・壁の状況	底面は平埠で、壁はしっかりと立ち上がる。			
	堆積土	ロームブロックを含む暗褐色土が人為的に堆積している。			
第21号土坑 (SK21) 図60-61	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅡB-R1・82	160.5	第V層	楕円長方形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	117	60	28	N-85° -E
	底面・壁の状況	底面は平埠で、しっかりと壁が立ち上がる。			
	堆積土	ロームブロックを含む暗褐色土が人為的に堆積している。			
第22号土坑 (SK22) 図60-61	トポ・標高・検出層位・平面形	ⅢB-82	160.3	第V層	不整形円形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・面積(㎡)	83	75	73	N-26° -E
	底面・壁の状況	底面は丸底状で、全体の断面形はフラスコ状をなす。底面北東部で深さ10cmのPit1が検出された。壁部は壁崩落土と思われる黄褐色ローム主体で、中央付近は暗褐色土が自然堆積している。			
	出土遺物	31は縄文後期前葉の十握内1式で、炭化物が付着している。32は前期末葉の土器である。自然糞が1点出土した。			
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状、周辺遺構の状況等から縄文時代後期前葉以降のフラスコ状土坑と考えられる。				

表10 土坑一覽(4)

第23号土坑 (SK23) 図60-62	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡV-S2	160.4	第V層	隅丸長方形?
	重複	北東半は水道管理設備で壊されている。			
	底面・壁の状況	98	(36)	14	N-5°-E
	堆積土	底面は平坦で、壁は丸みを帯びて開きながら立ち上がる。			
	出土遺物	ローム殻を含む褐色土・暗褐色土が堆積し、人為堆積である。 7は底面から出土した緑色凝灰岩製の平玉1で、両面穿孔である。土器類は出土しなかった。			
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第24号土坑 (SK24) 図59-62	平面・構造・検出部位・平面図	ⅢD-75	160.2	第IV層	不整な隅丸長方形
	重複	なし。			
	底面・壁の状況	92	72	20	N-31°-E
	堆積土	底面には凹凸があり、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。 ローム殻を含む黒褐色土が堆積していることから、人為堆積の可能性が高い。			
	出土遺物	確認面で古式土器類の可能性のある環頸甕(6062-5)が出土した。口縁部コナテ、胴部にハケマ、部分的に炭化物が付着している。他に図示していないが、縄文時代前期と晩期の土器類片が出土した。			
機能・時期・特記事項	本遺構の北側に黒曜石散布範囲(SX04)があって、それとの関連が想定しうるが、本土坑の機能等は不明である。				
第25号土坑 (SK25) 図60-62	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡV・ⅡF-S3	159.7	SD08・SX05底面	楕円形
	重複	SK25→SX05・SD08			
	底面・壁の状況	235	200程度	83	N-65°-E
	堆積土	底面は平坦で、平坦はしっかりと立ち上がる。全体の形状はフラスコ状をなすと思われる。 黒褐色土もしくは暗褐色土が堆積しており、自然堆積の可能性が高い。			
	出土遺物	1が縄文後期、3が縄文前期末で、2・4は晩期の土器である。2の内面に漆のような付着物がある。			
機能・時期・特記事項	他遺構との重複等によって遺構上部が遺存していないが、縄文時代晩期のフラスコ状土坑と思われる。				
第26号土坑 (SK26) 図60-62	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡV・ⅡF-S1	160.4	第V層	不整長方形
	重複	SK26→SK27・SK32。			
	底面・壁の状況	(84)	60	19	N-53°-E
	堆積土	底面は平坦で、壁はしっかりと立ち上がる。 暗褐色土及び褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
	出土遺物	壁土下や底面から緑色凝灰岩製の玉が34点出土し、その中で17点を図示した。形状は平玉2である。残りは断片や破損・砕片である。底面から4~7cm上で出土した炭化物2点(C-1・3)について年代測定した(第4章第2節2)。			
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状、出土遺物等から縄文時代晩期の墓と考えられる。				
第27号土坑 (SK27) 図60-63	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡF-S2	160.3	第V層	楕円形
	重複	SK26→SK27→SX05・SD08。			
	底面・壁の状況	230程度	200程度	83	N-58°-E
	堆積土	底面はやや起伏がある丸底盤で、壁は開きながら立ち上がる。 明黄褐色ロームを多く含む黒褐色土が主として堆積している。ロームは壁上部の崩落土と思われ、自然堆積の可能性が考えられる。			
	出土遺物	1・2は縄文後期中層内1式の土器片である。3は底部である。1~3は胎土の色調など同一個体と思われる。4は蓋形土器の頸部、5・6は胴部、7、赤彩の残跡である。8は底部である。石器類は、削器1点、磨石1点、自然礫2点が出土している。9は削器で、刃部は両面加工である。素材縦長剥片の打面側も両面加工で整形し、揃まみのような形状を呈している。10は磨石であり、両面に磨面がみられる。12は扁平な自然礫を素材とした台石である。11は花崗閃緑岩の自然礫である。石質と形状から磨器の素材と思われる。石器類は底面東側からままで出土した。底面北側から炭化物が出土し、年代測定を行った(第4章第2節2)。			
機能・時期・特記事項	他遺構等との重複や削平等によって遺構上部が遺存していないが、土坑の規模・形状、出土遺物等から縄文時代晩期のフラスコ状土坑と考えられる。				
第28号土坑 (SK28) 図60-64	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡF・ⅡX-S1	160.3	第V層	不整円形
	重複	なし。			
	底面・壁の状況	62	59	28	N-18°-E
	堆積土	底面は平坦で、しっかりとした壁が立ち上がる。 全体に暗褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
	出土遺物	1は床敷から出土した十層内1式の深鉢である。石器は3点が出土している。3は大形器で縁を持つ石皿である。ただ縁は高くなく、機能面との差は少なく、機能面も平坦であり、使用痕は不明瞭である。裏面側は縦打整形である。4は表裏に磨面を持つ磨石、2は自然礫である。覆土中位から3・4が並んで出土しており、石皿(3)は伏せた状態であった。			
機能・時期・特記事項	後期の土器片が底面直上から出土おり、石皿が伏せた状態であったことや土坑の規模・形状等から縄文時代後期前期の土坑である可能性が考えられる。遺構全体の形状は、SK38と類似している。				
第29号土坑 (SK29) 図60	平面・構造・検出部位・平面図	ⅡF-S2・S3	160.1	第V層	楕円形?
	重複	SK29→SD08。(85) (75)			
	底面・壁の状況	北東半はSD08によって、遺構上部も視乱によって壊されているため全容は不明であるが、底面は北東方向に傾斜しており、やや起伏がある。壁は丸みを帯びながら立ち上がるようだが、測定できない。			
	堆積土	黄褐色ロームと褐色土の混合土であり、人為堆積である。			
	出土遺物	図示し得なかったが、縄文時代晩期の土器類片が出土した。			
機能・時期・特記事項	土坑の規模・形状、遺構の重複関係等から、縄文時代晩期の墓の可能性が考えられる。				

表10 土坑一覧(5)

第30号土坑 (SK30) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡV・ⅡE-81	160.4	第V層	楕丸長方形?
	重複	南西平の大部分が調査区域外にあると思われる。			
	底面・壁の状況	58	24	19	N-24°-E
	堆積土	底面は平埠で、大きく開きながら壁が立ち上がる。			
	出土遺物	炭化物を含む褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
機能・時期・特記事項	遺物は出土しなかった。				
第31号土坑 (SK31) 図39-62	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢE-74	160.2	第IV層	円形
	重複	SK31→S105・SP11。			
	底面・壁の状況	200	170	26	N-70°-W
	堆積土	底面は平埠で壁は開きながら立ち上がる。底面からビット2基を検出した。			
	出土遺物	褐色土が主として堆積している。			
機能・時期・特記事項	25～27の縄文時代前期末の土器片が出土したが、晩期の遺物は出土しなかった。				
第32号土坑 (SK32) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡV-82	160.3	第V層	不整な長方形
	重複	SK26→SK32。			
	底面・壁の状況	62	42	26	N-60°-W
	堆積土	底面はやや丸底風で、南東部はスロープ状になっている。長切の壁は丸みを帯びながらしっかりと立ち上がる。			
	出土遺物	ロームを含む褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
機能・時期・特記事項	少量の炭化物が出土したが、遺物は出土しなかった。				
第33号土坑 (SK33) 図59-62	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢD-74	160.2	第V層	楕円形
	重複	中央部分が水道管理設備によって壊されている。			
	底面・壁の状況	200	182	51	N-62°-E
	堆積土	底面は平埠で、壁は垂直に立ち上がる。			
	出土遺物	ロームを主体とする褐色土が堆積している。			
機能・時期・特記事項	6は縄文時代前期の底部片で、他に自然礫1点が出土した。縄文時代晩期の遺物は出土しなかった。				
第34号土坑 (SK34) 図59	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢE・F-73, ⅢE-74	160.2	第V層	楕円形
	重複	中央部分が水道管理設備によって壊されている。			
	底面・壁の状況	207	194	32	N-38°-W
	堆積土	底面は平埠で、壁はやや開きながら立ち上がる。東側底面には直径約27cmの楕円形で、深さ48cmを測るP11が検出された。			
	出土遺物	ロームを主体とする褐色土が堆積している。			
機能・時期・特記事項	6は甲輪筋条体第1型を寓文する胴部片で、他に遺物は出土しなかった。				
第35号土坑 (SK35) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢX-81	160.5	第V層	楕円形
	重複	なし。			
	底面・壁の状況	94	65	25	N-18°-W
	堆積土	底面は凹凸があって、壁は丸みを帯びながら立ち上がるようである。			
	出土遺物	浮石・炭化物を含む暗褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
機能・時期・特記事項	図示し得なかったが、縄文時代晩期の土器片が出土した。				
第36号土坑 (SK36) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡW-82	160.1	第V層	楕丸長方形
	重複	SK22と重複するが新旧不明 (SK22→SK36の可能性高い)。SK36→SX05・SD08。			
	底面・壁の状況	155	71	69	N-59°-W
	堆積土	底面は平埠で、垂直にしっかりと壁が立ち上がる。北西部では一部オーバーハングする。			
	出土遺物	炭化物やローム粒を含む褐色土が主としており、人為堆積である。			
機能・時期・特記事項	図示し得なかったが、縄文時代前期及び晩期の土器片が出土した。				
第37号土坑 (S37) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡX-81	160.2	第V層	楕丸方形
	重複	北側の一部が、風倒木によって壊されている。			
	底面・壁の状況	103	95	46	N-87°-W
	堆積土	底面は緩丸底風で、壁はやや開きながら立ち上がる。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
機能・時期・特記事項	ロームや粘土を含む暗褐色土が主としており、人為堆積の可能性はある。				
第38号土坑 (SK38) 図60	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅡX-81	160.2	第V層	不整円形
	重複	なし。			
	底面・壁の状況	61	52	22	N-58°-E
	堆積土	底面は平埠で、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。			
	出土遺物	ロームや粘土粒を含む暗褐色土が主として堆積しており、人為堆積である。			
機能・時期・特記事項	遺物は出土しなかった。				
機能・時期・特記事項	遺構全体の形状は、SK28と類似しており、規模・形状等から縄文時代晩期の土坑である可能性が考えられる。				

表10 土坑一覧(6)

第39号土坑 (SK39) 図47-62	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢA・ⅢB-50・51	160.3	第IV層	不整形円形?
	重複	水道管理設備溝等によって潰されており、遺構の全容は不明である。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	(346)	146	80	N-20°-E
	底面・壁の状況	底面は起伏がある丸底で一定しておらず、壁はなだらかに開きながら立ち上がる。			
	堆積土	覆土上位は黒褐色土、中位は黒色土で、下位は壁面落ろームと黒褐色土の混合土であると思われる、自然堆積と考えられる。			
出土土物	29～34は縄文晩期の土器で、35～37は縄文前期の土器である。36・37の胴部には回転文がみられるものの織線質の痕跡が認められないことから、縄を原体としていない可能性がある。2本の平行径線内に凹み、平行線は等間隔に1対のへこみができ、そこにはさらに沈線に平行な筋目状の押圧がある。等間隔に生じており、回転文と思われる。横物質の織線ではないので、魚骨椎骨の回転文の可能性もある。石器は、石鏝1点、石核1点、自然礫6点が出土している。39は実基礎である。40は石核である。38は南西端から出土した大形の遮光器土偶の胴部分で、沈線と縄文が施文されている。				
機能・時期・特記事項	縄文時代晩期の土偶脚や大洲A式土器片などの出土からそれ以降に作られたものと考えられるが、その機能は不明である。				
第40号土坑 (SK40) 図41-64	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢB・ⅢI-71・72	160.1	第IV層	不整形円形
	重複	なし。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	54	53	38	N-41°-E
	底面・壁の状況	底面は凹凸がある丸底で、開きながら立ち上がる。			
	堆積土	一部に暗褐色土を含む黄褐色ろームが主として堆積している。			
出土土物	確認品及び覆土から縄文時代前期土器の体部下半1個体分が出土しているが、接合できなかったもの・11のみを図示した。縄文時代晩期の土器片は出土していない。				
機能・時期・特記事項	堆積土の種類や土器の出土状況等から、縄文時代前期の埋設土器遺構の可能性はある。				
第41号土坑 (SK41) 図41	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢB・ⅢI-72	160.1	第IV層	楕円形
	重複	なし。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	47	39	50	N-15°-W
	底面・壁の状況	底面は丸底状で、全体の形状は柱穴状をなす。			
	堆積土	ろーム粒や焼土粒を含む暗褐色土が堆積しており、人為堆積である。			
出土土物	遺物は出土しなかった。				
機能・時期・特記事項	堆積土の種類等から縄文時代晩期以降と思われる。全体の形状から柱穴の可能性はある。				
第42号土坑 (SK42) 図41-62	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢB-72	160.1	第IV層	楕円形
	重複	なし。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	55	48	67	N-76°-W
	底面・壁の状況	底面は平坦で一部硬化する。壁はラッパ状に立ち上がり、全体の形状は柱穴状をなす。			
	堆積土	上位は褐色土、下位は暗褐色土が堆積しており、人為堆積と思われる。			
出土土物	縄文時代前期の土器が出土した。13は胴部片、13は底部片で、共に円筒下層式土器である。単軸輪条体第1類が施文されている。削器1点、剥片1点が出土している。14は小形の黒曜石製削器で、反方向の加工がある。底面直上から炭化物が出土し、そのうちC-2を放射性炭素年代測定した(第4章第2節2)。				
機能・時期・特記事項	全体の形状や堆積土の種類、出土土物、放射性炭素年代測定結果等から、縄文時代前期末の柱穴と考えられる。				
第43号土坑 (SK43) 図41-65	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢB-72	160.1	第IV層	楕円形
	重複	SK43→S107。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	(101)	(88)	8	N-46°-W
	底面・壁の状況	底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。断面形状は直状をなす。			
	堆積土	ろームを主体とする黄褐色土もしくは明黄褐色土が堆積している。			
出土土物	底面から縄文前期土器(1)と半円状扁平打製石器(2)が並べられたように出土した。1は円筒下層式の深鉢である。口唇・口縁部ともにL形断面圧痕が施されている。口縁部を様直下にナゲにより胴部との境を強調し段状となっている。胴部は多軸輪条体が縦方向に施文され、底部は平底である。他に縄文前期土器片4点(3～6)を図示した。3・4は多軸輪条体、5は縄文、6は単軸輪条体である。石器は、剥片1点、半円状扁平打製石器1点が出土している。2は半円状扁平打製石器である。大形品であり、素材のほぼ全縁辺を剥離で加工している。機能面にゼラチンした幅狭い断面を持つ。				
機能・時期・特記事項	土器と石器をセットで埋納したもので、縄文時代前期末葉の円筒下層式4式期である。				
第44号土坑 (SK44) 図41	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢI-70	160.2	第V層	不整形円形
	重複	なし。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	54	49	57	N-72°-W
	底面・壁の状況	底面は丸底で、壁は垂直に立ち上がる。全体の形状は柱穴状をなす。			
	堆積土	粘土や炭化物を含む褐色土もしくは黄褐色土が堆積している。			
出土土物	遺物は出土しなかった。				
機能・時期・特記事項	堆積土の種類や全体の形状等から縄文時代前期末の柱穴の可能性はある。				
第45号土坑 (SK45) 図41-64	平面図・標高・検出層位・平面形	ⅢI-71・72	160.3	第IV層	円形
	重複	北東側が覆土によって壊されている。S106との新旧は不明。			
	基礎(土縁・瓦縁・溝口)・瓦縁方位	77	—	95	—
	底面・壁の状況	底面は平坦で断面形状はフラスコ状をなす。			
	堆積土	上位は暗褐色土、下位は褐色土が主として堆積しており、人為堆積と思われる。			
出土土物	5・6は単軸輪条体第1類がみられる縄文時代前期の胴部片である。図示していないが縄文時代前期の土器のほか、晩期の土器片も出土した。				
機能・時期・特記事項	全体の形状からフラスコ状土坑で、時期は縄文時代晩期と思われる。				

表10 土坑一覧(7)

図番	土坑名	平面形状	深さ	層	形状
第46号土坑 (SK46) 図57	重複	IIIK-68・69	160.3	第V層 (削平範囲)	不整形円形
	底面・壁の状況	南東端は覆瓦によって壊されている。 (153)	90	33	N-26°-E
	堆積土	底面は凹凸があって一定しておらず、壁は緩やかに立ち上がる。 暗褐色土と黄褐色ロームが混合した状態で堆積している。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
	概要・時期・特記事項	堆積土の様相等から縄文時代晩期以降と思われるが、その機能は不明である。			
第47号土坑 (SK47) 図57-64	重複	IIIK-68	160.5	第V層 (削平範囲)	楕円形?
	底面・壁の状況	遺構上部が風倒木の影響を受けていると思われる。南北両端が壊されている。 (105)	85	45	N-16°-E
	堆積土	底面は丸底で、壁はやや開きながらしっかりと立ち上がる。 上位は暗褐色土、下位は黒褐色土で、中に褐色ロームがレンズ状に挟んでいる。			
	出土遺物	7は地文縄文が横走することから弥生時代の土器片と思われる。また南側から大形の自然縄が1点出土した。			
	概要・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代のもと思われるが、その機能は不明である。			
第48号土坑 (SK48) 図57	重複	IIIK-68	160.7	弥生層 (削平範囲)	円形?
	底面・壁の状況	削平範囲より新しく、弥生包含層の形成途中かそれ以降である。北半は調査区域外にある。 41	(10)	11	—
	堆積土	底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。 上位はB-Tmと思われる火山灰を両状を含む黒褐色土が、下位は暗褐色土が主に堆積しており、いずれも焼土粒を含んでいる。			
	出土遺物	遺物は出土しなかった。			
	概要・時期・特記事項	土層観察では弥生包含層以降であることから、弥生時代から平安時代のもと思われるが、その機能は不明である。			
第49号土坑 (SK49) 図53-54-64	重複	IIIK-65	160.6	第V層 (削平範囲)	楕円形
	底面・壁の状況	なし。 47	41	42	—
	堆積土	底面は平坦で壁は開きながら立ち上がる。全体の形状は柱穴状である。 上位は暗褐色土で、下位は黄褐色土が堆積している。			
	出土遺物	覆土上位から土器片がまとまって出土した。8は表面が摩滅している覆口縁部片で、口唇に菊目、平行沈線が帯り横走する縄文がみられる。9は台部で3単位の波状文が展開し、3単位の透かし孔が上下にみられる。図示していないが割片1点も出土した。			
	概要・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代のもと思われる。機能は柱穴の可能性がある。			
第50号土坑 (SK50) 図53-54-65	重複	IIIK-65	160.5	第V層 (削平範囲)	歪な楕円形
	底面・壁の状況	SP37→SK50。 79	40	19	N-46°-E
	堆積土	底面は丸底で、壁は緩やかに立ち上がる。 暗褐色土が主として堆積している。			
	出土遺物	覆土から比較的多くの遺物が出土した。11は壘形土器の口縁部である。口縁部直下に沈線1条、内面に比線が3条ある。12は台が付くと思われる浅鉢の口縁部であり、沈線が帯り、口縁部は磨り削られている。沈線内に赤帯が残されている。11縄文が横走する。13は台付鉢で波状文が展開すると思われる。透かし孔をもつ。14は浅鉢形土器の胴部下で、SK50、SK52、SP52出土土器片と接合した。SK58出土土器 (図66-7) と同一個体と思われる。図67-5はSK50・51・60・包1層から出土した同一個体の壘形土器で、詳細はSK60出土遺物で述べる。他に割片が1点出土している。			
	概要・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代のもと思われる。SP37堆積土と類似しており、同一遺構の可能性もある。そうであった場合、機能は柱穴の可能性もある。			
第51号土坑 (SK51) 図53-54-66	重複	IIIK-65	160.6	第V層 (削平範囲)	楕円形
	底面・壁の状況	南側は水涵管理設備によって壊されている。 73	(43)	28	N-69°-E
	堆積土	底面は丸底状をなし、西側にはピット状の落ち込みが検出された。壁は丸みを帯びながらしっかりと立ち上がる。 上位は暗褐色土、下位は褐色土が主として堆積しており、人為堆積と思われる。			
	出土遺物	1は壘形土器である。胴部に変形文字文が上下2段に展開し、文線内部は無文、地文や胴部には11E縄文が斜め方向に走る。口唇部には菊目があり、口縁には2本の沈線と貫通孔がみられる。胴部直下には3本の沈線が帯り、一番上の沈線は結節沈線である。SK51 (図66-1)、SP62 (図63-10)、弥生層 (図20-5)、包1層 (図21-21) は同一個体である。2は小形の壘で、口縁から胴部まで縄文があって胴部に比線が帯る。3は口縁部片で突起に最低3条の菊目がある。文線は平行文字文であるが、内面に比線が2条ある。4は小型鉢の口縁部片である。5は11E縄文が縦走する体部下で、形状から大形の壘もしくは壘と思われる。6は台部で、確認できる範囲で4条の単位の平行沈線がみられる。波状文が展開すると思われる。図67-5はSK50・51・60・包1層から出土した同一個体の壘形土器で、詳細はSK60出土遺物で述べる。図202-1はSK51・52・弥生層から出土した遺物が接合した壘形土器で、詳細は削平範囲出土遺物で述べる。			
	概要・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代五所式→井沢式のもので、機能は柱穴と思われる。			

表10 土坑一覧(8)

	グリッド・標高・検出層位・平面形	■K-65・66	160.5	第V層(削平範囲)	楕円形
第52号土坑 (SK52) 図53-54-67	重複	南端は水道管理設備によって壊されている。			
	底面・壁の状況	(58)	52	53	N-4°-E
	堆積土	確認面では暗褐色土、覆土には褐色土が堆積し、人為堆積である。			
	出土遺物	1は大型の壺形土器である。胴部の張り出し部は3本単位の沈線が2組巡る。胴部上半には変形工字文が本一単位の沈線が展開する。2はまばらな縄文が施文される弥生土器底部で、3は円筒下層41式の口縁部片である。4は石棒の断片である。部分的に研磨は跡がみられる。図202-1はSK51・52・弥生層から出土した遺物が接合した壺形土器で、詳細は削平範囲内出土遺物で述べる。図65-1は浅鉢形土器の胴部下段で、SK50、SK82、SP52出土土器片と接合した。			
	機能・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代のもと思われる。その機能は柱穴の可能性が高い。2建物構成する一部と思われる。			
第53号土坑 (SK53) 図53-54-68	グリッド・標高・検出層位・平面形	■K-66	160.4	第V層(削平範囲)	不整形長方形?
	重複	SK57・SP35・36→SK53。北半は調査区域外にある。			
	底面・壁の状況	(169)	206	36	N-28°-E
	堆積土	土層観察では把握できなかったが、底面は凹凸があって一定していないことから複数の土坑が重複している可能性がある。壁は丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。			
	出土遺物	暗褐色土もしくは褐色土が主体として堆積しており、人為堆積である。 1はSP43出土土器と接合した口縁に2条の沈線、頸部直下に4条の沈線、胴部上半には流氷状の工字文が描かれる意である。同一個体と思われるものが、SK52・53、SP43、弥生層から出土した。2は壺形土器である。短い外反する口縁の縁部に刻みがある。口縁は無文帯であり、奇孔が1つ確認できた。胴部上半に沈線が2条流る。胴部には、縦に区画された無文帯の間に、三日月状の文様が展開し、その間隔には糸の方向が異なるので、縦の交差線が施文されたと思定される。内面口縁部に13条の沈線がみられる。3～5は同一個体の壺形土器である。口縁部は外反し、無文である。頸部には1条の平行沈線の上下に刻みがある。施文は乱縄文である。6は壺もしくは壺の胴部である。7は壺の胴部片である。縄文が施文されている。8は無文の底部である。石器は尖基槌(9)1点と図示していない削片1点が出土している。			
機能・時期・特記事項	土層観察から、弥生層形成途中もしくはそれ以後に本遺構が作られたと考えられ、出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。また、その機能は不明である。				
第54号土坑 (SK54) 図53-54-65	グリッド・標高・検出層位・平面形	■J-65	160.9	第V層(削平範囲)	楕円形
	重複	なし。			
	底面・壁の状況	68	57	91	N-49°-E
	堆積土	底面は平坦で、壁はラック状に広がりが立ち上がる。全体形状は柱穴状である。			
	出土遺物	確認面付近は暗褐色土であるが、覆土大半は褐色土もしくは黄褐色土で、人為堆積である。7は胴部片であり、単軸輪条体第1型が観察する。他に図示していないが弥生土器の断片も出土した。			
機能・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代のもと思われる。その機能は柱穴と思われる。2建物構成する一部と思われる。				
第55号土坑 (SK55) 図53-54-69-70	グリッド・標高・検出層位・平面形	■K-65	160.5	第V層(削平範囲)	不整形長方形
	重複	SP46→48→SK55。			
	底面・壁の状況	189	140	32	N-39°-W
	堆積土	底面は凹凸が激しく、壁は丸みを帯びて開きながら立ち上がる。			
	出土遺物	確認面では暗褐色土がみられるが、覆土は褐色土が主体で、人為堆積である。 1は大型の壺形土器である。SK06からも土器片が出土し、接合している。全体に縦走縄文が施文され、口縁と胴部の境に1条の刺突列が施されている。2は突起部分である。3は台部であり、平行沈線が5本巡っている。4は底部資料である。5は8単位の突起をもつ鉢形土器である。口縁に2条、胴部に5本の平行沈線が巡る。突起の下部面に彫り状を入れ、コブ状に軽く盛り上げてい。内面には沈線が3本巡っている。6・7は同一個体と思われる台付浅鉢である。口唇部には3条沈線を単位に、変形工字文が施文されている。8単位の突起の頂部に刻みがある。口唇部には丸みがある。乱縄文が施文されている。台部はX字状文が確定4単位展開されている。三角形の透かしが上下2つある。台の裾部に刻みがある。一部赤彩が残る。8は壺形土器であり、乱縄文が上部と下部に縦走する。9は壺形土器の胴部上段で、流氷状の変形工字文が展開する。同一個体がSP53から出土している。流氷状工字文を持つ壺形土器は五所遺跡でも確認されている(村越1965)。10～12は同一個体と思われる壺形土器である。乱縄文の縦走縄文が全面にみられる。			
機能・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代の遺構と考えられる。その機能は不明である。				
第56号土坑 (SK56) 図53-54	グリッド・標高・検出層位・平面形	■K-66	160.5	第V層(削平範囲)	楕円形
	重複	SP52→SK56。			
	底面・壁の状況	70	49	18	N-30°-E
	堆積土	底面は丸底端で、壁は緩やかに立ち上がる。			
	出土遺物	褐色土が堆積している。 遺物は出土しなかった。			
機能・時期・特記事項	遺構の重複関係等から弥生時代の遺構と思われるが、その機能は不明である。				
第57号土坑 (SK57) 図53-54-65	グリッド・標高・検出層位・平面形	■K-65	160.4	第V層(削平範囲)	楕円形?
	重複	SK57→SK53。北側は調査区域外にある。			
	底面・壁の状況	(105)	(38)	36	N-83°-W
	堆積土	底面は起伏があり、壁は丸みを帯びながらしっかりと立ち上がる。			
	出土遺物	確認面付近は暗褐色土で、覆土大半は黄褐色土が堆積している。 8は赤彩の痕跡がみられる弥生土器台部であり、波状文が展開するものと思われる。9は底部片である。断片が1点出土している。			
機能・時期・特記事項	堆積土の様相等から弥生時代の遺構と思われる。西側はピット状をなしており、3建物の一部となる可能性がある。				

表10 土坑一覧(9)

第58号土坑 (SK58) 図53-54-66	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢK-66	160.5	第V層 (削平範囲)	不整形円形?
	重複	SP54→SK58,			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	103	50	20	N-64° -E
	底面・壁の状況	底面はやや起伏があるが概ね平坦で、壁は丸みを帯びて開きながら立ち上がる。			
	堆積土	主としてぶい・黄褐色土が堆積し、人為堆積である。			
第59号土坑 (SK59) 図53-54-65	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢJ-64	161.7	第V層 (削平範囲)	楕円形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	51	37	21	N-11° -E
	底面・壁の状況	底面は丸底面で、丸みを帯びながら立ち上がる。			
	堆積土	褐色土と黄褐色ロームの混合土で、人為堆積である。			
第60号土坑 (SK60) 図53-54-67	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢK-65	161.6	第V層 (削平範囲)	不整形円形
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	74	55	16	N-70° -E
	底面・壁の状況	底面は平坦で壁は丸みを帯びながら立ち上がり、断面形状は直状をなす。			
	堆積土	暗褐色土が主として堆積している。			
第61号土坑 (SK61) 図53-54	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢJ-64	161.8	第V層 (削平範囲)	楕円形
	重複	SK62→SK61,			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	55	49	24	N-40° -E
	底面・壁の状況	底面は丸底状で、中央やや北寄りに深さ約7cmのピットが検出された。壁は丸みを帯びて開きながら立ち上がる。			
	堆積土	褐色土が堆積している。			
第62号土坑 (SK62) 図53-54-68	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢJ-64	161.8	第V層 (削平範囲)	不整形円形
	重複	SK62→SK61, 西端はSK61に壊されている。			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	52	50	23	N-89° -E
	底面・壁の状況	底面は丸底状で凹凸があり、丸みを帯びながら立ち上がる。			
	堆積土	ぶい・黄褐色土もしくは黄褐色土が堆積している。			
第63号土坑 (SK63) 図53-54	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢK・ⅢL-66	160.4	第V層 (削平範囲)	方形?
	重複	なし。			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	(59)	46	28	N-8° -E
	底面・壁の状況	底面はやや凹凸があるものの概ね平坦で、壁は丸みを帯びて立ち上がり上部は外反する。			
	堆積土	確認面付近は暗褐色土だが、覆土大半はローム粒・炭化物等を含む褐色土もしくは黄褐色土で、人為堆積である。			
第64号土坑 (SK64) 図55-71	グリッド・標高・検出層位・平面形	ⅢK-67	160.5	第V層 (削平範囲)	不整形円形
	重複	SP55→SK64→SN03・05・SP56,			
	縦横(距離・距離・深さ)・直径方位	181	129	39	N-53° -E
	底面・壁の状況	底面は起伏があって一定しない。壁は丸みを帯びて立ち上がるが上部は緩やかに外反する。			
	堆積土	ローム・炭化物粒を含む暗褐色土～黄褐色土が堆積し、人為堆積の可能性はある。			
第64号土坑 (SK64) 図55-71	出土遺物	1・2・3は口縁部片である。4は壺形土器の胴部片で、6本の平行沈線がみられる。5は磨滅したかすかに縄文がみられる胴部片である。図示していないが、SK66出土土器(図71-14)と同一個体片が出土している。石器は、剥片1点、砥石器1点、右石1点、自然礫1点が出土している。6は四角であり、正面に凹みがある。7は台石で凹みがある。底面直上から出土した炭化材(サンプル1)を年代測定した(土庫第2節2)。なお本遺構土庫で検出したSN03でも年代測定を行っている(同)。			
	機能・時期・特記事項	出土遺物や堆積土の様相等から弥生時代の遺構と考えられるが、確認面にB-Tesが堆積している(火山灰分析・第4章第1節2)ことから、平安時代まで埋地であったものと思われる。また、土坑の機能は不明である。			

表10 土坑一覧(10)

第65号土坑 (SK65) 図53・54・71	グリッド・標高・検出層位・平面形	IIIK-66	160.4	第V層 (削平範囲)	楕円形
	重複	トレンチによって南東部は遺存していない。			
	縦横(図録・別録・写真)・面積(㎡)	38	48	19	N-46°-W
	底面・壁の状況	底面は丸底風で、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。			
	堆積土	褐色土もしくは黄褐色土が堆積している。			
第66号土坑 (SK66) 図53・71	出土遺物	8は胴部片である。9は台付き鉢の口縁部である。推定で8単位の突起をもち、突起頂部には刻みがある。口縁部に沈線が走り、頸部左側に縦方向のストリット状刻みが施されている。胴部には変形文字工が展開するが、結節部にコブや彫り込みがあるかは不明である。内面にも沈線が2条走る。			
	機能・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代の遺構と思われるが、その機能は不明である。			
	重複	IIIJ・IIIK-64	160.7	第V層 (削平範囲)	楕円形?
	底面・壁の状況	北平が水道管理設備によって壊されている。			
	堆積土	70	(29)	12	N-88°-W
第67号土坑 (SK67) 図47・72	出土遺物	10は底面直上から出土した小形の弥生時代付鉢である。縦走するR1縄文がみられる。11・12は胴部片である。13は変形土器で変形文字工に彫り込みと軌盤状のコブがみられる。14は変形土器である。包1層や第1層からも胴部片が出土し、接合した。R1縄文を縦走させている。			
	機能・時期・特記事項	堆積土の様相や出土遺物等から弥生時代の遺構と思われる。遺構の形状と出土土器から墓の可能性が考えられる。			
	重複	IIIJ-D-52	160.6	包2-A層上面	不整形円形?
	底面・壁の状況	西平が覆瓦によって壊されている。			
	堆積土	61	(27)	8	-
第68号土坑 (SK68) 図47・72	出土遺物	1は覆土から出土した粗製深鉢形土器で、R1縄文が施文されている。石器としては、尖基有蓋石鏝(2)1点、二次加工剥片2点、裂片1点、平玉2点が出土している。本図示の平玉は断片資料であり、鏝跡でしか限り両面穿孔である。			
	機能・時期・特記事項	包2-A層形成後なので弥生時代以降の遺構と思われるが、その機能は不明である。			
	重複	IIIJ-F-63	159.7	包2-A・B層上面	不整形楕円形
	底面・壁の状況	北西端が覆瓦によって壊されている。			
	堆積土	(120)	77	22	N-23°-W
第69号土坑 (SK69) 図47・73	出土遺物	3～9は晩期の土器片であり、口縁部などの特徴から大洞A式に属する。石器としては尖基鏝(10)1点、剥片5点が出土している。			
	機能・時期・特記事項	包2-A層形成後で、大洞A式土器が出土していることから、晩期後葉から弥生時代の遺構と思われるが、その機能は不明である。			
	重複	IIIJ-E-52	159.2	III層	楕円形
	底面・壁の状況	北端が覆瓦によって壊されている。			
	堆積土	(121)	102	27	N-8°-E
第70号土坑 (SK70) 図48・73	出土遺物	土器は縄文時代前期(1～3・9)と晩期(3～8)のものが出土した。1は口縁部に単輪縁全体第1部の側面圧痕がある。口縁と胴部の間に結束第2種回転文が2段施文され、胴部にはR1縄文が縦走する。2は口縁部に側面圧痕、口縁直下に刺突、胴部は多輪縁全体が施文されている。3はR1縄文の側面圧痕である。9は内筒下層式土器の底部で1と同一個体と思われる。4～8は晩期土器片である。石器としては大形の台石(10)と自然礫7点が出土している。台石は中央に凹みを持つ。土器と台石は覆土中から、自然礫は底面近くからの出土である。			
	機能・時期・特記事項	縄文時代晩期の遺構と思われるが、その機能は不明である。			
	重複	IIIJ-H-54	159.6	第IV層	円形
	底面・壁の状況	なし。ケーブル埋設溝の下位で検出された。			
	堆積土	49	44	13	-
第70号土坑 (SK70) 図48・73	出土遺物	晩期の土器片(11～21)を図示した。15～18は赤彩の注口土器片で、同一個体の注口部分(写真図版81)が確認面直上層で出土していた。20は覆土から出土した深鉢体下半であり、R1縄文が施文されている。炭化物が付着している。			
	機能・時期・特記事項	土坑検出直上層で赤彩の覆口縁部や注口土器の注口部(写真図版81)が出土し、その下位の本土坑覆土から同一個体と思われる体部片(15～18)を確認している。実際の掘り込みは第III層上部以上と思われる。出土した土器から、縄文時代晩期の遺構と思われるが、その機能は不明である。			

表10 土坑一覧(12)

第79号土坑 (SK79-1B) 73) 図48・75	平面図・標高・検出層位・平面図	Ⅲ1・ⅢJ-55	159.8	第IV層	楕円形	
	重複	中央部分が水涵管理施設によって覆られている。				
	底面・壁の状況	319	125	40	N-24° E	
	堆積土	底面は起伏があって一定しておらず、壁は緩やかに立ち上がる。暗褐色土が主として堆積し、底面付近は褐色土もしくは黄褐色土が堆積している。				
	出土遺物	1・2は同一個体と思われる、円筒下層式土器で多軸路条体が施文されている。3は縄文晩期の土器片である。石器として、磨石1点、台石1点、自然礫3点が出土している。台石(4)は確認面付近で出土したもので、2つの凹みを持つ。				
機能・時期・特記事項	南側は調査当初「SK73」として調査していたが、SK79と同一遺構であることが判明したことからSK79に統合した。出土遺物等から縄文時代晩期の遺構と思われるが、その機能は不明である。					
第80号土坑 (SK80) 図50・51・75	平面図・標高・検出層位・平面図	ⅢK-58	160.9	第IV層	不整形円形	
	重複	なし。(ケーブル埋設溝の下位で検出)				
	底面・壁の状況	149	121	30	N-37° W	
	堆積土	底面はやや起伏があって、壁は丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる。暗褐色土や褐色土が主として堆積している。				
	出土遺物	5～10が前期、11が晩期土器である。前期のうち5が口縁部、6～10は胴部片であり、円筒下層d式頃と思われる。11は晩期土器胴部片である。				
機能・時期・特記事項	検出層位から縄文時代晩期の遺構と思われるが、その機能は不明である。					
第81号土坑 (SK81) 図48	平面図・標高・検出層位・平面図	ⅢH・ⅢI-55	159.6	第IV層	楕円形	
	重複	SK81→SN19	151	66	35	N-37° E
	底面・壁の状況	底面は丸底状で北側に段差があり、壁は丸みを帯びながら立ち上がる。				
	堆積土	暗褐色土が主として堆積している。				
	出土遺物	土器は出土していないが、割片が1点出土している。				
機能・時期・特記事項	検出層位や堆積土の様相等から縄文時代前期の遺構と思われるが、その機能は不明である。					
第82号土坑 (SK82) 図50・51	平面図・標高・検出層位・平面図	ⅢH-59	160.9	S108床面	円形	
	重複	SK82→S108				
	底面・壁の状況	68	56	43	—	
	堆積土	面積 0.141㎡。断面形 コ字状。垂直に立ち上がる。褐色土が主として堆積している。				
	出土遺物	遺物は出土しなかった。				
機能・時期・特記事項	遺構重複関係及び堆積土の様相等から、縄文時代前期の遺構と考えられるが、その機能は不明である。					

第3節 埋設土器遺構

埋設土器遺構は14基検出され、ⅢGラインから61ラインの間に多くが存在する。縄文時代前期7基、晩期6基、弥生時代1基である。

第1号埋設土器遺構(SR01、図45・76)

[位置・確認] ⅡV-39グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は北西方向に傾いた正立状態で埋置され、口縁部付近はりんご畑造成等の削平によって遺存していない。掘り方は黒褐色土で、土器内部には黒色土が堆積していた。
[土器の詳細と時期] 口縁部を欠いた深鉢形土器(1)で、外面に条痕が施文されており縄文時代晩期の粗製土器と考えられる。破片で出土した2・3が口縁部とみられる。土器内部から出土した炭化材を年代測定した(第4章第2節1)。他にLR縄文が施文された土器片(4)、RL縄文が施文された深鉢口縁部(5)が出土した。

第2号埋設土器遺構(SR02、図33・76)

[位置・確認] ⅢC-76グリッドに位置し、第V層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置され、上部大半は遺存しておらず、底部付近のみが出土した。土器内部にはふい黄褐色土が堆積し、掘り方は褐色土もしくは黄褐色土であった。
[土器の詳細と時期] 深鉢形土器の底部(7)で、RL縄文が斜位回転施文されている。底部は幾分上げ底気味である。縄文時代前期の円筒下層d式土器と思われる。

第3号埋設土器遺構(SR03、図53・76)

[位置・確認] III K-63(c3)グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は北西方向にやや傾いた正立状態で埋置されているが、台部のみの出土であり、体部上半は遺存していない。台部下方で褐色土の掘り方を検出した。

[土器の詳細と時期] 埋設されていたのは台付き鉢形土器と思われるが、上部は遺存していない。胴部には3条の平行沈線がみられ、LR縄文が横方向に施文されている。台部には上に2条の沈線、下は3本沈線で文様帯を区画し、その部分に2段の波状文が展開し、透かし孔を持つ。波状文と下側の平行沈線が交差する部分に彫り込みと低い瘤が形成されている。弥生時代の五所式土器と思われる。

第4号埋設土器遺構(SR04、図47・76)

[位置・確認] III F-53グリッドに位置する。第III層で43×32×8cmの扁平な凝灰岩の礫が出土し、その下部に土器が埋設されていることを確認した。土器に蓋をするような状況であった。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置されており、わずかな掘り方を有する。土器内部・掘り方とも黒褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 完形の深鉢形土器(8)で、口縁部は内面に折り返し、軽い段が形成されている。外面にLR縄文が施文されている。諸特徴よりこの土器は縄文時代晩期に比定される。

第5号埋設土器遺構(SR05、図47・77)

[位置・確認] III G-53グリッドに位置し、第III層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置されており、楕円形の掘り方を有する。土器内部確認面から拳大礫が1点出土した。土器内部には黒褐色土が、掘り方には暗褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 口縁は小波状をなし、外面に条痕を施文する完形の深鉢形土器(1)である。条痕は胴部中央部では上下方向に、口縁部付近では横もしくは斜め方向にみられる。ナデによる調整で、部分的に条痕が不明瞭になっている。諸特徴よりこの土器は縄文時代晩期に比定される。

第6号埋設土器遺構(SR06、図50・77)

[位置・確認] III J-60グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置され、掘り方を有する。堆積土は暗褐色土で、掘り方下部は黄褐色土である。

[土器の詳細と時期] 体部上半を欠く深鉢形土器の体部下半(2)で、外面にはLを用いた単軸絡条体第1類が縦位回転施文されている。諸特徴よりこの土器は縄文時代前期の円筒下層d式に比定される。

第7号埋設土器遺構(SR07、図50・77)

[位置・確認] III K-58・59グリッドに位置し、盛土遺構の包2-H1層及び包2-H2a層で確認した。盛土遺構の構築中もしくは構築後に本遺構が作られたものと思われる。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 南半がケーブル埋設溝で壊されているため、北半のみ検出された。土器は倒立状態で埋置され、掘り方を有する。炭化物を含む褐色土もしくは暗褐色土で埋められている。

[土器の詳細と時期] 深鉢形土器の口縁部(3)で、外面にRL縄文が施文される。口縁部は内湾している。諸特徴よりこの土器は縄文時代晩期に比定される。

第8号埋設土器遺構(SR08、図50・78)

[位置・確認] III J-60グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置され、掘り方を有する。土器内部には褐色土が、

掘り方には黄褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 体部上半は欠く、深鉢形土器の底部付近のみ(1)が出土した。単軸絡条体第1類を縦回転で施文し、幾分上げ底である。この土器は縄文時代前期の円筒下層式に比定される。

第9号埋設土器遺構(SR09、図49-78)

[位置・確認] III J・III K-57グリッドに位置し、盛土遺構包2-G2層で確認した。盛土遺構の構築中もしくは構築後に本遺構が作られたものと思われる。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 浅鉢形土器(2)が倒立状態で埋置され、口縁部のみが遺存していた。その下部には深鉢形土器(3)の破片が敷かれたように出土している。掘り方を有し、黒褐色土及び暗褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 浅鉢形土器(2)は口縁部のみで、口唇付近に平行沈線を施文し、突起を配列する眼鏡状文様が展開する。頸部は無文帯である。諸特徴よりこの土器は縄文時代晩期の大洞A式あたりの土器と思われる。深鉢形土器(3)は口縁に2個一対の突起を持ち、口縁部に沈線が3条巡る。胴部にはRL縄文が施文され、諸特徴よりこの土器も縄文時代晩期の大洞A式あたりの土器と思われる。4は土器の北側、掘り方底面付近から出土した敲石である。

第10号埋設土器遺構(SR10、図49-78)

[位置・確認] III J-56グリッドに位置し、第IV層で確認した。SN23と重複し、本遺構が古い。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は西方向に傾いた正立状態で倒れたように埋置されていたようであるが、体部上半は遺存していない。掘り方を有し、土器内部・掘り方とも暗褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 口縁部を欠いた深鉢形土器(5)で、胴部外面にはRL縄文が斜め回転施文されている。諸特徴よりこの土器は縄文時代前期の円筒下層式に比定される。

第11号埋設土器遺構(SR11、図49-78)

[位置・確認] III J-56グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器はやや南方向に傾いた倒立状態で埋置されており、掘り方を有する。土器内部には黒褐色土～黄褐色土が堆積し、掘り方は黄褐色土が主体である。

[土器の詳細と時期] 深鉢形土器(6)で、幅の狭い口縁部にはRの縄を2条平行方向に押圧している。頸部には低い隆帯があり、その直下に結束第1種が横方向に施文されている。胴部にはRL縄文の縦走縄文が施文されている。諸特徴よりこの土器は縄文時代前期の円筒下層d1式に比定される。

第12号埋設土器遺構(SR12、図49-79)

[位置・確認] III I-56グリッドに位置し、第III層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置され、頸部付近の破片が土器内部に落ち込んだ状態で出土した。土器内部には黒褐色土が、掘り方には暗褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 大型の壺形土器(3)で、胴部下半に最大径を持つ。口縁部は土器内部から出土し、接合しなかったが大森勝山遺跡などで出土している類例を参考に、推定して図化した。口縁端部は幾分丸みを持つが平坦に近い。胴部にはLR縄文が施文され、底部との境まで施文されている。底部は幾分上げ底である。縄文時代晩期前半のものと推定される。

第13号埋設土器遺構(SR13、図49-79)

[位置・確認] III J-56グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は正立状態で埋置されているが、体部上半は遺存していない。土器内部にはぶい黄褐色土が、掘り方には暗褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 深鉢形の底部付近土器(1)である。一見単軸絡条体にみえたが、深い条と条の間に浅い条がある。また回転の単位が菱形であるので、反回りの縄RRL縄文を回転させたものと思われる。諸特徴よりこの土器は縄文時代前期の円筒下層式土器に比定される。

第14号埋設土器遺構(SR14、図49-79)

[位置・確認] ⅢJ-56グリッドに位置し、第IV層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[埋設方法・掘り方・堆積土] 土器は南東方向に傾いた倒立状態で埋置されている。土器内部には炭化物を含む褐色土が、掘り方には黄褐色土が堆積していた。

[土器の詳細と時期] 深鉢形土器(2)で、底部と胴部上半は接合しなかった。口縁部文様帯には竹管の刺突とR・L2条一組の側面圧痕が2段で施されている。そして頸部と胴部の区画1条と、胴部に2条、計3条の結束第1種が横方向に施文されている。地文にはR単軸絡条体第1類が縦方向に回転施文されている。底部は上げ底である。諸特徴よりこの土器は縄文時代前期の円筒下層d1式土器に比定される。

第4節 建物跡・ピット

平成22～24年の調査区からは、堅穴住居跡と貯水池状遺構に伴うピットを除き合計107基のピットが検出された。それぞれのピットの位置や計測値、諸特徴、出土遺物等は表11に示した。

ピットが密に検出された区域は、以下の3カ所である。

1. SN10周辺のⅢJ・ⅢK-60・61グリッド域
2. 削平範囲(弥包層)内のⅢJ・ⅢK-65・66グリッド域
3. 黒曜石散布範囲周辺のⅢG～ⅢI-71・72グリッド域

各区域で検出されたピットに加えて柱穴状の土坑(SK)を含めて検討した結果、建物跡3棟とピット列1条が存在していた可能性が想定された。区域ごとに調査所見を述べていくこととする。

1 SN10周辺のⅢJ・ⅢK-60・61グリッド域

SN10精査時に周辺から検出されたピットは、SN10に関連するピットと考えてピット番号をSN10Pit1、Pit2…と付していた。しかし一部が別遺構の第1号建物跡であることが判明したため、それらをSN10Pit1→SP96、SN10Pit2→SP97、SN10Pit3→SP98、…、SN10Pit12→SP107、と改称した。本区域で検出されたピットは、柱穴状のものに加えて溝状のピットも検出されたが、硬化面や貼床等は検出されなかった。調査区が狭く柱穴構成を追究することもできなかったため、SN10周辺で建物等を構成するかどうか確認を得ることはできなかった。第1号建物跡(SB01、図50)はⅢJ・ⅢK-60・61グリッドに位置し、他遺構との直接的な重複は認められなかった。SP68・69・96・97で構成され、現状では梁行1間×桁行1間の方形の掘立柱建物跡と推定されるが、南側にもう1間分延びる可能性や、SP79と組み合わせられて亀甲形建物跡となる可能性もある。南北方向を主軸方向とすると、N-20°-Wである。SP68は包3層下位で検出され、他の3基はIV層で検出された。硬化面や貼床等は検出されなかった。SP68・69から晩期の土器片が出土しており、かつ包3層下位で検出されていることから、本建物跡は縄文時代晩期の前葉から中葉頃に作られたものと思われる。

2 削平範囲(弥包層)内のⅢJ・ⅢK-65・66グリッド域

この区域では2つの建物が存在していた可能性がある。1つ目は第2号建物跡(SB02、図56・197)で、南側のⅢJ-64～66グリッドで検出された深さ50cmを超えるピット・土坑群で構成されるものである。

水道管理設溝で分断されているが、西からSP50・SP51・SK52・SP42・SP57が弧状に配置されているように見受けられる。この内側にあるSK54・SP38・SP40も外側のピット列と同心円状に感じられる。この2重弧状の内側は弥生層遺物の分布が疎である(図197)ことから、建物を構築するために削平されたか、建物が存在していたために遺物が散布していない可能性が考えられる。ここでは硬化面や貼床等は検出されていない。仮にこれらが建物跡であった場合、規模は直径約13mの円形をなすものと推定される。SP42・50、SK52から弥生時代五所式から井沢式期の遺物が出土しており、当該期のものと考えられる。

2つ目は**第3号建物跡**(SB03、図56・197)で、北側のⅢK-65グリッドで検出された深さ30cm台のピット群で構成されると目されるものである。直線上にあるSP37・45・53が深さ32~36cmで、平面形も規格性が高いことから一連の遺構であった可能性がある。これを主軸とすると、主軸方位はN-61°-Eとなる。また、北側にあるSP62・SK57西側も同規模のピットで、かつ直角に折れ曲がった位置にあることから同遺構に組み込まれることが想定されるが、柱間寸法に統一性がみられなくなるため、推論の域を脱することができない。ここでも硬化面や貼床等は検出されていない。SP45、SP62、SK57からは弥生土器が出土していることから、弥生時代前半期に作られた建物跡と考えられる。

3 黒曜石散布範囲周辺のⅢG~ⅢI-71・72グリッド域

この区域では、SI07、黒曜石散布範囲、土坑等が検出されており、比較的密に遺構が存在している区域である。SI07に属するピットがあるためそれらを除外すると、浅いピットで構成されるピット列1条が検出されたが、建物を構成するピット群を抽出することができなかった。

第1号ピット列(略称なし、図58)はⅢH-72グリッドに位置し、SI07・SX04より古い。SP14・15・20~23の6基に加え、SI07Pit5も含まれると思われる。これらはいずれも第V層で検出された。長さ2.8mの直線的に並ぶピット列で、両端にある直径約20~25cmのピット2基とその内側にある直径12~18cmの小ピット5基で構成される。両端のSP14~SP15間、SP23~SI07Pit5間は約60cmで並び、その間の小ピット間はいずれも約40cm、主軸方向はN-27°-Wである。いずれのピットからも遺物は出土していない。この周辺からは量が少ないながらも縄文時代前期・晩期、弥生時代、古式土師器?などいろいろな時期の遺物が散布しており、本ピット列の帰属時期を推定することができない。併せてその機能も不明である。

表11 ピット計測表(1)

主な発掘 図版	SP 番号	グリッド	標高 (m)	規模(cm)			平面形	備考・出土遺物
				長軸	短軸	深さ		
図60	1	ⅢF-82	160.1	44	40	28	隅丸方形	図示していないが、覆土から前期土器片出土。
図60	2	ⅢF-82	160.4	28	25	16	楕円形	出土遺物なし。
図25	3	ⅢF-76	160.2	47	43	64	楕円形	図示していないが、覆土から前期土器片、上部から自然落1点出土。
図25	4	ⅢF-76	160.3	(25)	21	31	楕円形	底面から炭化物出土。
図39	5	ⅢF-75	160.1	28	21	36	楕円形	円筒下層式土器片(図80-1)出土。
図25	6	ⅢF-73	160.3	44	39	77	円形	SP10~SP06、図80-2・3とも円筒下層4口式縁部で、3の胴部は反巻り縄の紐状縄文、4も縄文前期で、単軸糸巻体第18種の胴部片。
図39	7	ⅢF-74	160.1	31	27	21	円形	出土遺物なし。
図39	8	ⅢF-74	160.2	29	23	34	円形	卵石(図80-5)1点出土。
図39	9	ⅢF-75	160.4	42	36	26	楕円形	出土遺物なし。
図25	10	ⅢF-73・74	160.3	(15)	14	29	円形	SP10~SP06、図示しがないが前期土器片出土。
図39	11	ⅢF-74	160.3	53	51	50	円形	SK31~SP11、図80-6は玉素材の二次加工製片で珪化作用の進んだ石材。石材産地分析し碧玉と判定(第4章第8節2)。図80-7は半円状扁平打製石器。
図42	12	ⅢH-72	160.0	21	17	19	楕円形	出土遺物なし。
図42	13	ⅢH-72	160.0	30	24	17	楕円形	出土遺物なし。
図42	14	ⅢH-72	160.1	23	19	10	楕円形	1ピット列の一部。

表11 ビット計測表(2)

主な掲載 図版	S/P 番号	グリッド	標高 (m)	規模(cm)			平面形	備考・出土遺物
				長軸	短軸	深さ		
図42	15	ⅡH-72	160.1	16	14	9	円形	1ビット列の一部。
図42	16	ⅡH-72	160.0	22	20	17	円形	出土遺物なし。
図42	17	ⅡH-72	160.0	(27)	25	50	楕円形	出土遺物なし。
図42	18	ⅡH-72	160.0	27	23	11	楕円形	出土遺物なし。
図41	19	ⅡJ-70	160.0	27	25	35	楕円形	出土遺物なし。
図42	20	ⅡH-72	160.1	15	13	15	楕円形	1ビット列の一部。出土遺物なし。
図42	21	ⅡH-72	160.1	14	14	10	円形	1ビット列の一部。出土遺物なし。
図42	22	ⅡH-72	160.1	17	16	7	円形	1ビット列の一部。出土遺物なし。
図42	23	ⅡH-72	160.1	16	12	7	楕円形	1ビット列の一部。出土遺物なし。
図42	24	ⅡG-72	160.2	40	32	41	楕円形	出土遺物なし。
図41	25	ⅡI-71	160.2	30	25	46	楕円形	出土遺物なし。
図41	26	ⅡI-71	160.2	40	30	36	楕円形	図80-8~10の円筒下層式土器片出土。
図41	27	ⅡI-71	160.2	31	25	55	楕円形	出土遺物なし。
図41	28	ⅡI-71	160.2	32	25	55	楕円形	出土遺物なし。
図42	29	ⅡH-72	160.2	50	44	28	楕円形	出土遺物なし。
図41	30	ⅡI-70	160.1	25	16	36	楕円形	出土遺物なし。
図42	31	ⅡG-73	160.1	25	20	28	楕円形	出土遺物なし。
図41	32	ⅡI-70・71	160.3	(36)	17	35	楕円形	水道管理設備に繋ぎされる。出土遺物なし。
図42	33	ⅡG-72・73	160.2	33	29	48	円形	S107下部、段下げ後検出。織出土。
図41	34	ⅡI-70	160.4	35	(20)	24	楕円形?	水道管理設備に繋ぎされる。出土遺物なし。
図56	35	ⅡK-66	161.2	37	32	36	楕円形	SK53南より古い。D580-11は口縁部部に刻み、口縁直下に平行沈線が3本、頸部直下に沈線が流る広口蓋。12は胴部片である。13はSK53出土遺物と接合した。
図56	36	ⅡK-66	161.2	34	27	29	楕円形	SK53南より古い。出土遺物なし。
図56	37	ⅡK-65	160.5	26	22	36	楕円形	SK50より古い。3建物の一部。出土遺物なし。
図56	38	ⅡJ-65	160.9	30	29	52	楕円形	2建物の一部?。出土遺物なし。
図56	39	ⅡJ-65	160.8	33	28	29	楕円形	D681-1は赤彩の縄文土器。
図56	40	ⅡJ-65	160.8	39	33	54	円形	2建物の一部?。図示していないが縄文式土器片出土。発生?
図53	41	ⅡJ-66	160.7	34	24	41	楕円形	出土遺物なし。
図56	42	ⅡJ-66	160.6	40	32	51	楕円形	2建物の一部。D681-2は赤彩の口縁部片。他に晩期~弥生土器片・織出土。
図53	43	ⅡK-66	160.7	25	22	37	円形	D681-5は口縁に1本の沈線。頸部直下に4本の沈線。胴部上半には浅水状の工字文が描かれる蓋である。地文は縄文式で口縁内面に3本の沈線が流る。SK53、赤包層ながら同一個体が出土している。
図53	44	ⅡK-66	160.7	35	26	20	歪な楕円形	D681-6は晩期胴部片。
図53	45	ⅡK-65	160.6	35	24	32	楕円形	3建物の一部。D681-7・8は同一個体の鉢形土器。
図53	46	ⅡK-65	160.6	33	26	44	楕円形	SP46~SK55。出土遺物なし。
図53	47	ⅡK-65	160.3	44	27	40	楕円形	SP47~SK55。出土遺物なし。
図53	48	ⅡK-65	160.0	32	29	47	円形	SP48~SK55。出土遺物なし。
図53	49	ⅡJ-65	160.8	32	28	48	円形	出土遺物なし。
図56	50	ⅡJ-64	160.9	50	43	61	歪な円形	2建物の一部。D681-9は波状工字文の鉢形土器でSK59出土土器と接合した。地文は縦走する縄文式である。10は変形工字文をもつ鉢で上部交点部に彫り込みとわずかに彫らんだコブがある。横は工字文が縦文され、赤彩。11は工字文をもつ鉢口縁部。12は変形工字文を持つ円蓋。D682-14・15は大形の鉢形土器で、頸部直下に3本の平行沈線が流る。14の外面上部に付着していた炭状灰化物を年代測定した(第4章第2節3)。D681-13は陶石で正面と右側面に凹みを持つ。
図56	51	ⅡI-64	161.0	(74)	49	63	楕円形	2建物の一部。D683-1は弥生土器の鉢口縁部。
図53	52	ⅡK-66	160.3	33	32	48	円形	SP52~SK56。D683-2は弥生土器の胴部片。D665-14は浅鉢形土器の胴部下層で、SK50、SK52、SP52出土土器片と接合した。
図56	53	ⅡK-65・66	160.5	42	37	34	歪な円形	3建物の一部。D683-5は五所式土器の蓋で、同一個体がSK55から出土。6は一部彫削しているが変形工字文と刺突があって、5と同一時期。
図53	54	ⅡK-67	159.9	31	30	49	円形	SP54~SK58。出土遺物なし。
図53	55	ⅡK-67	159.5	40	31	43	歪な楕円形	SP55~SK64。D683-3はかすかに縄文式のみられる晩期土器片。
図56	56	ⅡK-67	159.9	31	26	23	歪な楕円形	SK64~SP56。B-Ta降下以前。出土遺物なし。
図56	57	ⅡJ-66	160.5	25	14	52	楕円形?	2建物の一部。出土遺物なし。
図53	58	ⅡJ-64	160.7	40	35	45	楕円形	出土遺物なし。
図53	59	ⅡJ-64	160.7	33	23	25	歪な楕円形	D683-4は晩期土器片。
図50	60	ⅡK-61	161.0	27	24	19	円形	SN08~SP60。D683-7は沈線が3本みられる弥生時代晩期胴部片。8は縄文式の晩期胴部片。
図53	61	ⅡK-64	160.8	40	30	54	楕円形	D683-11は波状口縁を持つ変形土器。頸部に2列の刺突列があり、R1の縦文・縄文。
図56	62	ⅡK-64-65	160.8	42	27	30	楕円形	3建物の一部?。D683-9は付付浅鉢で変形工字文が展開する赤彩土器。10は広口蓋で、SK51等出土遺物と同一個体。
図50	63	ⅡJ-61	161.3	(113)	(11)	45	不明	横断径がNo.7で確認。出土遺物なし。
図50	64	ⅡJ-61	161.3	40	26	48	楕円形	横断径がNo.7で確認。出土遺物なし。
図52	65	ⅡJ-62	161.2	33	21	32	楕円形	径がNo.4-10で確認。出土遺物なし。
図50	66	ⅡK-59	161.0	15	(11)	41	楕円形	径がNo.3-10、包3下で確認。S108~SP66。出土遺物なし。
図52	67	ⅡJ-56・57	160.5	(19)	(9)	22	不明	径がNo.3-8、包3下で確認。出土遺物なし。
図50	68	ⅡK-60a1-a2	160.9	36	32	90	楕円形	1建物の一部。包3より古い。D683-13は深鉢口縁部片。
図50	69	ⅡK-60b4	161.0	46	(42)	52	楕円形	1建物の一部。D683-14・15は晩期土器胴部片。
図50	70	ⅡK-59-2	160.9	16	(7)	49	楕円形	横断径がNo.8で確認。S108~SN22より新しい。出土遺物なし。
図50	71	ⅡK-59	160.7	(14)	(7)	17	不明	径がNo.1-5で確認。出土遺物なし。

表11 ピット計測表(3)

主な掲載 図版	S P 番号	グリッド	標高 (m)	規模(cm)			平面形	備考・出土遺物
				長軸	短軸	深さ		
図50	72	III-K-59	160.6	(13)	(9)	25	不明	ソウダセリソウNo.1-5で確認。出土遺物なし。
図50	73	III-K-59a1	161.1	26	23	31	楕円形	SI08→SP73。晩期土器片出土。
図25	74	III-K-58b2	160.4	24	23	14	楕円形	出土遺物なし。
図25	75	III-K-57	160.5	(16)	(13)	29	不明	ソウダセリソウNo.1-5で確認。出土遺物なし。
図25	76	III-K-57	160.3	(25)	(13)	43	不明	ソウダセリソウNo.1-5で確認。出土遺物なし。
図50	77	III-K-59a1	160.5	28	23	14	楕円形	図83-12は晩期土器割片。
図50	78	III-K-62a1	161.2	33	(16)	24	楕円形	図84-1は片口土器の片口部で炭化物が付着。2は同一個体と思われる底部で内外面に炭化物付着。同一個体と思われる胴部土器片(図22-1-8)が包2-113層で出土。他に自然産が1点出土。
図50	79	III-K-60b3	161.2	45	43	35	楕円形	図84-4～7は縄文晩期。8は縄文前期。9は弥生時代土器片。
図50	80	III-K-59b2	161.1	32	27	44	楕円形	横断セリソウNo.5で確認。SI08→SP60。出土遺物なし。
図50	81	III-K-59a1	161.0	30	25	24	楕円形	SI08→SP81。図84-3は石置断片。
図50	82	III-K-60c1	161.1	32	23	21	楕円形	出土遺物なし。
図50	83	III-K-60c1	161.0	18	(14)	15	楕円形	出土遺物なし。
図50	84	III-K-60c1	161.2	14	13	13	楕円形	出土遺物なし。
図50	85	III-K-60c1	161.2	19	12	12	歪な楕円形	出土遺物なし。
図50	86	III-K-60c1	161.2	13	9	11	歪な楕円形	出土遺物なし。
図50	87	III-K-58c4	160.3	26	22	49	楕円形	SK77の下で確認。出土遺物なし。
図25	88	III-J-61b3	161.1	24	不明	16	不明	ソウダセリソウNo.9で確認。出土遺物なし。
図25	89	III-J-62c4	160.6	24	21	17	円形	出土遺物なし。
図50	90	III-J-58b2	160.9	17	10	14	楕円形	出土遺物なし。
図25	91	III-K-57	160.9	25	23	21	歪な楕円形	出土遺物なし。
図48	92	III-J-55	159.8	46	33	43	歪な楕円形	前期と晩期土器片出土。図84-12は赤彩の晩期土器。
図48	93	III-J-55	159.8	42	26	32	不整形	晩期土器片出土。図84-13は口縁部片。14は胴部片。
図48	94	III-J-55	159.8	24	19	16	楕円形	晩期土器片出土。
図48	95	III-J-55	159.9	39	27	47	楕円形	図84-15は晩期口縁部。16は円筒下層式土器。17は晩期台部。
図50	96	III-J-61	161.0	33	30	49	楕円形	図:SN10のP11L。1建物の一部。出土遺物なし。
図50	97	III-J-60	161.0	38	30	72	楕円形	図:SN10のP12。1建物の一部。出土遺物なし。
図50	98	III-J-61	161.0	19	11	23	楕円形	図:SN10のP13。出土遺物なし。
図50	99	III-J-61	161.0	47	17	37	長楕円形	図:SN10のP14。出土遺物なし。
図50	100	III-J-60	161.0	39	14	19	長楕円形	図:SN10のP15。出土遺物なし。
図50	101	III-J-61	161.0	36	29	32	楕円形	図:SN10のP16。出土遺物なし。
図50	102	III-J-60	161.1	24	22	7	円形	図:SN10のP17。出土遺物なし。
図50	103	III-J-60	161.0	32	25	15	楕円形	図:SN10のP18。図84-18・19は晩期土器の口縁部。
図50	104	III-J-60	161.0	29	21	38	楕円形	図:SN10のP19。出土遺物なし。
図50	105	III-J-60	161.0	18	16	15	楕円形	図:SN10のP110。出土遺物なし。
図50	106	III-J-60	161.0	16	14	21	楕円形	図:SN10のP111。出土遺物なし。
図50	107	III-J-60	161.0	24	23	11	楕円形	図:SN10のP112。出土遺物なし。

第5節 焼土遺構

焼土遺構は25基検出され、55～57ライン、59～62ライン、67～69ラインにある程度のみとまりがみられる。55～57ライン、59～62ラインは盛土遺構形成前のものである。

第1号焼土遺構(SN01、図27)

[位置・確認] II W-80グリッドに位置し、SI02a確認面で確認した。SI02aより本遺構が新しい。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸66cm、短軸27cmの不整形で南西半は攪乱によって壊されている。堆積土は暗褐色焼土である。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。縄文時代前期末に廃絶されたSI02aが埋まりきってから本遺構が形成されていることから、詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期頃から弥生時代のいずれかの時期の所産と思われる。

第2号焼土遺構(SN02、図57)

[位置・確認] III K-68グリッドに位置し、弥生包含層で確認した。風倒木の影響を受けている。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸39cm、短軸18cmの歪な楕円形を呈する。堆積土は黒褐色土と焼土からなる。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。弥生包含層で検出されたことと、堆積土にB-Tmがみられることから、時期は弥生時代から平安時代(B-Tm降下期)のいずれかの時代と考えられる。

第3号焼土遺構(SN03、図53-55・85)

[位置・確認]Ⅲ K-67グリッドに位置し、弥生包含層で確認した。SK64より本遺構が新しい。

[平面形・規模・堆積土]当初確認した規模は長軸80cm、短軸69cmの歪な楕円形を呈し、深さ12cmほど被熱により暗赤褐色〜ぶい赤褐色を呈していた。本遺構周辺でB-Tmを含む黒褐色土が堆積していたがその下位にも焼土層が広がっていることが判明し、最終的には1.1m四方に焼土層が広がった。南側で検出されたSN05・06とともに一体の遺構である可能性がある。

[出土遺物・遺構の時期等]本遺構の北東約1.5mの地点から図85-1の弥生土器が出土した。外反する口縁部の下位に、「ハ」の字状に内傾する長い頸部を有している。肩部が軽く膨らみ小さな底部へずばんでいく器形の長頸甕である。口縁部には推定6単位の突起が付き、突起頂部に切り込みがある。口縁上部に刻み目がある。口縁内面には沈線2条が巡る。頸部は上部に4条、胴部境界に5条の平行沈線が巡っていてその間は無文である。体部にはRL縄文が施文されている。石皿の断片(2)が1点出土している。東方向には数十cm大の礫が散在していた。本焼土遺構と周辺から出土した弥生土器は同じ高さで検出したものであるが、本焼土遺構にはB-Tmがみられることから両者は伴わない可能性がある。なお焼土遺構で出土した下層炭化材(C-6)と焼土層炭化材(C-10)の2点について放射性炭素年代測定した(第4章第2節2)。

第4号焼土遺構(SN04、図57)

[位置・確認]Ⅲ K-68グリッドに位置し、弥生包含層で確認した。被熱した焼土がブロック状に分断されて落ち込んでいることから、本遺構が廃棄された後、風倒木で攪拌されたものと思われる。

[平面形・規模・堆積土]規模は長軸66cm、短軸13cmの不整形で、被熱により深さ約3cmまで被熱による赤色化がみられる。堆積土は焼土を含む暗褐色土が主で、掘り方北側ではB-Tmが検出された。

[出土遺物・遺構の時期等]図示し得る遺物は出土しなかった。時期は、弥生時代包含層で検出されたこと、B-Tmが検出されたこと、近隣の状況等から、弥生時代から平安時代(B-Tm降下期)の間の可能性が考えられる。

第5号焼土遺構(SN05、図53-55)

[位置・確認]Ⅲ K-67グリッドに位置し、弥生包含層で確認した。南側半分が急激に落ち込んでおり、本遺構が廃棄された後、風倒木によって攪拌されたものと思われる。

[平面形・規模・堆積土]規模は長軸40cm、短軸27cmの不整形を呈し、深さ5cmまで被熱による赤色化がみられる。B-Tmを含む暗褐色土が堆積し、火床面は暗赤褐色土を呈する。北側・南側で検出されたSN03・06とともに一体の遺構である可能性がある。

[出土遺物・遺構の時期等]遺物は出土しなかったが、弥生時代包含層で検出されたことと、堆積土にB-Tmがみられることから、時期は弥生時代から平安時代(B-Tm降下期)の可能性が高い。

第6号焼土遺構(SN06、図53-55)

[位置・確認]Ⅲ K-67グリッドに位置し、弥生包含層で確認したが、北側は攪乱によって壊されている。覆土にB-Tmが検出されたことから、本遺構はそれより古い。

[平面形・規模・堆積土]本遺構は2カ所に分断されて検出された。北側のものは長軸29cm以上、短軸15cmの歪な不整形をなし、南側は長軸21cm、短軸18cmの歪な円形を呈している。堆積土は弥生包含層と考えられる暗褐色土で、火床面は被熱が弱い暗赤褐色焼土である。本層上部の弥生層中にB-Tmが検出されており、北側で検出されたSN03・05とともに一体の遺構である可能性がある。

[出土遺物・遺構の時期等]遺物は出土しなかったが、弥生包含層で検出されたこととB-Tmが検出されたことから、時期は弥生時代から平安時代(B-Tm降下期)の可能性が高い。

第7号焼土遺構 (SN07, 図50・51・85・112)

[位置・確認] Ⅲ K-61(c1)グリッドに位置し、包2-H3層下面、包3層上面で確認した。包2-H3層下位で検出されたことから、盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 北半は調査区域外にあり、確認できる規模は長軸44cm、短軸11cmで、楕円形を呈するものと思われる。焼土表面はしっかりした火床面で、その厚さは約10cmである。火床面の下位には約20cmの暗褐色土があって掘り方と思われるが、土坑となる可能性もある。

[出土遺物・遺構の時期等] 縄文時代晩期の遺物が出土した。3は平口縁の粗製深鉢で、LR縄文が施文されている。4～7は口縁部片、8は無文の台部片である。図示していないが自然礫が1点出土している。本遺構の時期は、盛土遺構を構成する包2-H3層の下位で検出されたことと出土遺物から、盛土遺構形成直前にあたる縄文時代晩期中葉期と考えられる。

第8号焼土遺構 (SN08, 図50・51)

[位置・確認] Ⅲ K-61(a4)グリッドに位置し、第IV層で確認した。SP60と重複し本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 北西側がSP60によって壊されているが、規模は長軸約40cm、短軸34cmの楕円形を呈するものと思われる。被熱によって厚さ4cmほどが赤褐色化している。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。弥生土器片が出土したSP60より古く、第IV層で検出されたが削平範囲隣接地にあることから、時期は縄文時代晩期後半から弥生時代と思われる。

第9号焼土遺構 (SN09, 図50・51)

[位置・確認] Ⅲ J-61グリッドに位置し、包2-H3層下面、包3層上面で確認した。包2-H3層下位で検出されたことから、盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸44cm、短軸37cmの不整楕円形を呈する。明確な火床面を形成しておらず、廃棄された焼土の可能性が高い。

[出土遺物・遺構の時期等] 図示し得る遺物は出土しなかった。時期は、盛土遺構を構成する包2-H3層の下位で検出されたことから、盛土遺構形成前の縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第10号焼土遺構 (SN10, 図50・51・116)

[位置・確認] Ⅲ J-60・61グリッドに位置し、包3層下面、Ⅲ層上面で確認した。盛土遺構、SN14と重複し、いずれよりも本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 南半が調査区域外にあって、全体の規模は不明であるが、確認できた規模は長軸176cm、短軸76cmで、不整楕円形を呈するものと思われる。火床面の下部と思われるのは第6層のみで、色調が下方の地山へと漸移している。第2～5層は火床面であったものが攪拌を受けたように見受けられ、暗褐色土を含んでいる。第1層の暗赤褐色土は廃棄後に堆積した土壌と思われる。

[出土遺物・遺構の時期等] 図示し得る遺物は出土しなかった。Ⅲ層上面で検出されたことから、時期は縄文時代晩期中葉以前と考えられる。

第11号焼土遺構 (SN11, 図48・85)

[位置・確認] Ⅲ I-J-55グリッドに位置し、包2-F4層精査中に確認した。SN17より本遺構が新しく、盛土遺構形成中に本遺構が作られた。

[平面形・規模・堆積土] 北西部が攪乱によって壊されているが、確認できた規模は長軸131cm、短軸60cmの歪な不整形を呈する。焼土層を掘り上げてしまったため堆積土を記録していないが、火床面を形成していない、廃棄された焼土である。

[出土遺物・遺構の時期等] 土器は、9は口縁部片、10は胴部片である。石器類は石鏃1点、石核3点、

剥片2点、自然礫1点の計7点が出土している。尖基有茎鎌の11は、茎部が折損している。時期は盛土遺構の形成土中に検出されたことから、盛土形成初期段階の縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第12号焼土遺構 (SN12、図50)

[位置・確認] Ⅲ K-59グリッドに位置し、包3層上面で確認した。盛土遺構より本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸41cm、短軸30cmのやや歪な楕円形を呈する。火床面の層厚は8cmである。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。時期は、盛土遺構の形成前、包3層の形成後半期の縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第13号焼土遺構 (SN13、図50)

[位置・確認] Ⅲ K-59グリッドに位置し、包3層中で確認した。SK78-SI08より本遺構が新しく、盛土遺構より本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 南半が攪乱によって壊されているが、確認できた規模は長軸92cm、短軸45cmのやや歪な不整形を呈する。火床面の層厚は10cmである。

[出土遺物・遺構の時期等] 図示し得る遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代前期末のSI08より新しく盛土遺構形成前の包3層中で検出されており、縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第14号焼土遺構 (SN14、図50-116)

[位置・確認] Ⅲ J-60・61グリッドに位置し、包2-H3層下面、包3層上面で確認した。SN10より本遺構が新しく、盛土遺構より本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 南半が調査区域外にあって、調査区壁面の土層観察によって検出したため、遺構全体の規模は不明である。セクションで検出した長さは54cm、層厚6cmである。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。時期は、盛土遺構を構成する包2-H3層下位、包3層上面で検出されたことから、盛土遺構より古い縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第15号焼土遺構 (SN15、図50-51・85)

[位置・確認] Ⅲ J-59・60グリッドに位置し、包3層で確認した。

[平面形・規模・堆積土] 北側は攪乱のため、南西部は1mトレンチのため遺存していないが、規模は長軸82cm、短軸43cmほどの楕円形を呈するものと思われる。層厚4cmの明褐色焼土が主体である。

[出土遺物・遺構の時期等] 土器は3点図示し、12は晩期前葉の口縁部で三又文がみられる。13は鉢形土器の突起部で、14は胴部片である。石器は15の尖基有茎鎌が出土し、先端と茎部が折れている。茎部にはアスファルトが付着している。時期は、盛土遺構より古く、包3層で検出されたことなどから、縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第16号焼土遺構 (SN16、図50-51・85)

[位置・確認] Ⅲ K-59・60グリッドに位置し、包3層で確認した。他遺構との重複はない。

[平面形・規模・堆積土] 北側は攪乱のため、南東部は1mトレンチのため遺存していないが、規模は長軸73cm、短軸47cmほどの楕円形を呈するものと思われる。層厚4cmの明褐色焼土が主体である。

[出土遺物・遺構の時期等] 16は鉢形土器の口縁部で、RL縄文が施文されている。17は条痕文土器の口縁部である。時期は、盛土遺構より古いことや包3層で検出されたことなどから、縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第17号焼土遺構 (SN17、図48-86～89)

[位置・確認] Ⅲ I-55・56グリッドに位置し、包3層下面、Ⅲ層上面で確認した。盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸332cm、短軸245cmの歪な不整形を呈する。炭化物を多く含む明赤褐色焼土が主体で火床面を形成しておらず、廃棄された焼土や炭化物で形成されたものである。
 [出土遺物・遺構の時期等] 本遺構の堆積土にあたる包3層からは、剥片・裂片の集中が確認できた。剥片類は珪質頁岩が187.3g検出され、そのうち、剥片・裂片が集中した地点は、40.2gである。ただし製品はない。また本遺構周辺から炭化種実も多く出土しており、同定したところオニグルミ・ハンノキ属・トチノキ・ブドウ属・キハダとの結果を得た(第4章第9節)。

遺物は比較的多く出土し、図86～89に示した。1～6は深鉢形土器で、何点かは同一個体と思われる。1はB突起を持つ深鉢形土器で、突起は2個一対の1単位のみである。無節のRの縄を回転させている。2は深鉢の口縁部でB突起がみられる。LR縄文が施文されている。3～6はLR縄文が施文されている。7は平坦口縁を持つ深鉢形土器である。胴部中央に最大径がある。LR縄文が施文されている。8は小波状口縁の深鉢形土器である。砂粒の動きから、胴部下半は斜め上方向に、胴部上半は右から左の横方向にケズリをいれている。部分的にナデ調整がみられる。9は無文の壺形土器である。表面にケズリ痕があり、砂粒の動きから、胴部下半は上方向へ、中央部は斜め上方向に、胴部上半は右から左の横方向にケズリをいれている。部分的にナデ調整がみられる。口縁部はナデである。10は胴部中央に最大径を持つ大形の壺である。口唇は肥厚、口縁は外反し、頸部は直立した無文帯となっている。胴部は全面にLR縄文が施文されている。11は浅鉢の口縁部である。12は浅鉢で胴部に雲形文がみられる。非常に細かな縄文が施文されている。13は浅鉢である。口縁部に羊歯状文が崩れたモチーフと胴部に雲形文がみられる。口唇部に三角形の刻みをいれ、内面には沈線が1条巡る。14は大形の浅鉢、15は三叉文を持つ鉢形土器である。16～19は晩期前半期の土器片で、16は赤彩の浅鉢である。21は口縁部が肥厚しており、体部には網目状に単軸絡条体を回転施文している。22・23は底部の資料である。24～26は円筒下層式の土器片で、24・26には多軸絡条体が施文されている。

尖基有茎鏃(27)は、茎部にアスファルトが付着している。刺突のある土製品の断片資料(28)は、竹管状の工具の刺突であり、土偶の肩部の断片資料と思われる。

時期は、盛土遺構より古いことや、検出された層位などから縄文時代晩期前半と考えられる。

第18号焼土遺構(SN18、図48-90)

[位置・確認] III H・III I-55グリッドに位置し、SN17の南東すぐ脇、包3層下面、III層上面で確認した。盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸79cm、短軸38cmの歪な楕円形を呈する。極暗褐色焼土を主体として火床面を形成しておらず、廃棄焼土で形成されたものである。

[出土遺物・遺構の時期等] 本遺構の北部から縄文時代晩期の浅鉢(図218-5)が、東側から同晩期の壺(図229-9)が出土しており、包3層出土遺物として掲載している。1は深鉢の下半部で、LR縄文が施文されている。時期は、盛土遺構より古い点や、検出層位、北部から出土した浅鉢などから縄文時代晩期前半期と思われる。

第19号焼土遺構(SN19、図48-90)

[位置・確認] III H-55グリッドに位置し、包3層で確認した。SK81より新しく、盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸119cm、短軸106cmの不整形を呈する。焼土ブロックを多量に含む黒褐色土で、廃棄焼土と考えられる。

[出土遺物・遺構の時期等] 焼土下面に深鉢土器の破片が出土した。6は粗製深鉢で、口縁は小波状を呈し体部にはLR縄文が施文されている。7は雲形文が展開した浅鉢である。8は雲形文をもつ土

器片で、SN17で出土している14と類似している。9は胴部片、10は底部片である。自然礫が4点出土している。時期は、包3層で検出されたことや出土遺物などから、縄文時代晩期中葉頃と考えられる。

第20号焼土遺構 (SN20、図50-90)

[位置・確認] Ⅲ K-58・59グリッドに位置し、包3層で確認した。SR07・盛土遺構より古い。

[平面形・規模・堆積土] 南半が攪乱によって壊されており、確認できた規模は長軸73cm、短軸37cmで、楕円形を呈するものと思われる。火床面は明赤褐色土主体で、層厚9cmである。

[出土遺物・遺構の時期等] 2・3は晩期の口縁部片である。時期は、盛土遺構より古く包3層で検出されたことなどから、縄文時代晩期中葉と思われる。

第21号焼土遺構 (SN21、図50-90)

[位置・確認] Ⅲ K-59グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。SI08より新しい。

[平面形・規模・堆積土] 北端が攪乱によって壊されており、確認できた規模は長軸73cm、短軸61cmで、やや不整な楕円形を呈するものと思われる。堆積土は上位が暗褐色土で、下位は明赤褐色焼土である。被熱が深さ12cmまで及んでいる。

[出土遺物・遺構の時期等] 4は厚みのある底部片で、縄文前期のものである。時期は、盛土遺構より古く、埋没したSI08上部で検出されていることから、縄文時代晩期前半頃の可能性がある。

第22号焼土遺構 (SN22、図50)

[位置・確認] Ⅲ K-59グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。SI08より新しく、SP70より古い。

[平面形・規模・堆積土] 北側は調査区域外にあって、確認できた規模は長軸62cm、短軸56cmの不整形である。堆積土は暗褐色焼土と黒褐色焼土である。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。時期は、盛土遺構より古く、埋没したSI08上部に検出されていることから、縄文時代晩期前半頃の可能性がある。

第23号焼土遺構 (SN23、図48)

[位置・確認] Ⅲ J・Ⅲ K-56グリッドに位置し、包3層で確認した。SR10より本遺構が新しく、盛土遺構より本遺構が古い。

[平面形・規模・堆積土] 一部トレンチによって遺存していないが、規模は長軸212cm、短軸158cmの不整形を呈する。焼土は赤褐色で層厚4cmを測り、廃棄焼土の可能性が高い。

[出土遺物・遺構の時期等] 図示し得る遺物は出土しなかった。時期は、盛土遺構より古く包3層で検出されたことから、縄文時代晩期中葉頃と思われる。

第24号焼土遺構 (SN24、図48-90)

[位置・確認] Ⅲ J-56グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認し、SK79より本遺構が新しい。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸54cm、短軸42cmの不整形を呈し、層厚は3cmである。堆積土は暗褐色土を含む明赤褐色焼土で、廃棄焼土の可能性が高い。

[出土遺物・遺構の時期等] 5は晩期の胴部片である。時期は、盛土遺構より古く第Ⅲ層上面で検出されたことから、縄文時代晩期前半頃と思われる。

第25号焼土遺構 (SN25、図48)

[位置・確認] Ⅲ I-56グリッドに位置し、風倒木精査中に確認した、他遺構との重複はない。

[平面形・規模・堆積土] 規模は長軸36cm、短軸34cmの楕円形を呈する。焼土層を掘り上げてしまったため堆積土を記録していないが、火床面を形成していない廃棄された焼土と思われる。また、本遺構は、風倒木によって引きずり込まれていて原位置を保っていない。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。本遺構周辺の土壌は第Ⅲ～Ⅳ層と思われることから、時期は周辺で検出されている焼土遺構と同様、縄文時代晩期前半頃と思われる。

第6節 集石遺構(SX07、図53・91)

集石遺構は、1基のみ検出された。

[位置・確認] ⅢK-64グリッドに位置し、弥生包含層で確認した。他遺構との重複はない。

[配置・規模・下部構造] 長さ1mの直線上に礫4点を配置し、その南東脇の拳大礫1点も加えた計5点で構成される。直線上にある礫4点の長軸方位はN-32°-Eで、その下部にトレンチを設定して掘り下げたが掘り方や土坑等は検出されなかった。当時の生活面に集石・配置したものと考えられる。

[堆積土] 褐色を呈する弥生包含層中に集石・配置されている。

[出土遺物] 敲磨器が1点、石皿が1点、自然礫2点出土し、そのうち2点図示した。1は大型石皿で、機能面は不明瞭である。2は凹石であり、表裏に凹みがある。

[遺構の時期等] 土器類が出土していないが弥生包含層中で検出されており、下限は弥生時代と考えられる。したがって縄文時代晩期後半から弥生時代中期頃のものであるが、その機能は不明である。

第7節 黒曜石散布範囲(SX04、図58・92)

黒曜石の剥片やチップ等が散布している範囲を1カ所確認した。

[位置・確認] ⅢH-72グリッド周辺に位置する。黒色土層である第Ⅲ層を精査中に、黒曜石片が散在して出土したことから、黒曜石散布範囲(SX04)として土層観察用ベルトを設定し精査を行った。本遺構周辺で竪穴住居跡(SI07)、土坑、ピットなどが検出されているが、すべて本遺構より古いと思われる。

[規模・遺物の出土状況] 概ね南北8m、東西4mの範囲に黒曜石製フレーク、チップの類が出土したが、製品は出土しなかった。掘削時に取り上げたのは黒曜石片83点、黒曜石以外の礫32点、土器片153点で、ふるいによって検出した微細チップもある。微細遺物の検出では本遺構周辺を図58にあるようにA～Jの10ブロックに区切って土壌を採取し、乾燥後、2・5・10mmメッシュのふるいによって微細遺物を収集した。

[堆積土] 遺物を包含する堆積土層は、平成23年調査時は「第Ⅲ層」としていたが、翌24年度に弥生包含層の存在を把握したことと、周辺区域から弥生土器片及び土玉等が出土していることから、本遺構の堆積構成土は「第Ⅲ層」ではなく「弥生包含層」であった可能性が高い。

[出土遺物] 土器については、1以外は口縁部や底部資料である。1は底部を欠損した甕であり、口縁部内外面に2条の沈線、胴部に平行沈線が10条めぐる。胴部沈線中には、上から5条目に2個一対のコブがみられる部分と、上から3条目(剥落している)と7条目の2段に2個一対コブがみられる部分とがあり、交互に施文される可能性がある。胴部下半には縦走するRL縄文が施文されている。7は(流水状)工字文を持つ土器片である。9は1の底部である可能性が高い。

石器については、石器類は石鏃1点、削器1点、両極石器2点、二次加工剥片2点、石核2点、剥片95点、自然礫4点である。頁岩の平基有茎鏃(10)や微細剥片(11)が出土している。黒曜石は散布された状態で検出されている。非常に小形の資料であり、器種は二次加工剥片や剥片などであり、定型石器はない。12は土玉である。IブロックⅢ層相当層から出土している。

[遺構の時期等] 堆積土の様相や出土遺物などから、弥生時代から古代の遺構である可能性が考えられ、本遺構周辺で黒曜石製石器の製作等が行われていた可能性がある。

第8節 竪穴遺構(SX05、図60・93)

調査区南東端で比較的規模の大きな遺構が1基検出され、竪穴遺構とした。

[位置・確認] II W-82・83、II X-82グリッドに位置し、第IV層で確認した。SK25・27・36、SD08と重複し、いずれよりも本遺構が新しい。調査区域内では柱穴等は確認できなかったが、一般的な土坑より規模が大きいことから竪穴遺構とした。

[平面形・規模・底面] 北東の大半が調査区域外にあるものと思われ、遺構の全容は不明である。調査区域内で確認できた規模は、長さ8.5m、幅2.8mで、確認面の平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと思われ、確認面からの深さは135～155cmである。直径約3mの円形をなすと思われる底面は丸底状を呈し、壁が開きながら50cmほど立ち上がるとおおきく外反し、確認面まで非常に緩やかに立ち上がっていく。底面は第V層を大きく掘り込み、部分的に第VI層に達している。

[堆積土] 堆積土は全体的に黒褐色土及び黒色土が堆積しているが、底面付近では暗褐色土と黒褐色土の混合土が堆積している。底面付近は壁からの崩落土と思われ、覆土中位にはB-Tmが確認されており(第4章第1節2)、自然に堆積したものである。

[出土遺物] 土器については、1は台付き鉢形土器である。2・3は壺形土器である。4は丸底壺形土器であり、表面が剥落しているが、部分的に赤彩が確認できる。5～7は砂沢式と思われる口縁部片である。8・9は晩期土器、10～12は十腰内I式、13・14は前期の土器片である。

石鏃1点、搔器1点、微細剥片1点、石核1点、剥片1点、敲磨器2点、加工礫1点の計8点出土し、6点図示した。15は尖基有茎鏃である。16は微細剥片である。17は刃部が鋸歯状に加工された搔器である。凹石19は裏面3個の、正面両側面に2個一対の凹みがみられる。21は表裏に凹石を持つ凹石である。20は花崗閃緑岩製の加工礫で、叩き折られている。18は土版の断片である。

[遺構の時期等] 覆土下位から弥生時代前期砂沢式の遺物(5)が出土しており、当該期までに構築されたものと考えられ、縄文時代晩期頃の可能性が高い。また覆土中位には白頭山苦小牧火山灰が堆積していることから、古代まで埋りまきらずに窪地であったことから、覆土中・上位から出土した遺物は埋没過程で後世に流れ込んだものと考えられる。本遺構の機能は不明である。

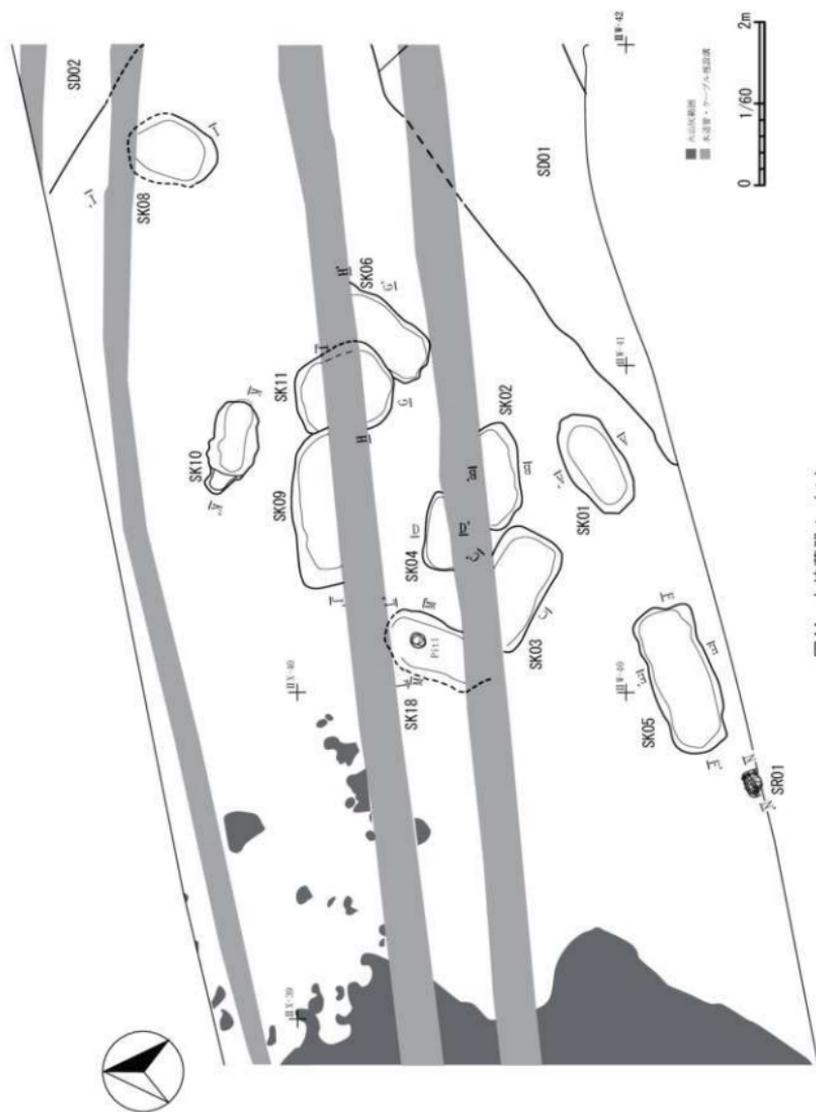


図44 土坑墓群A(1)

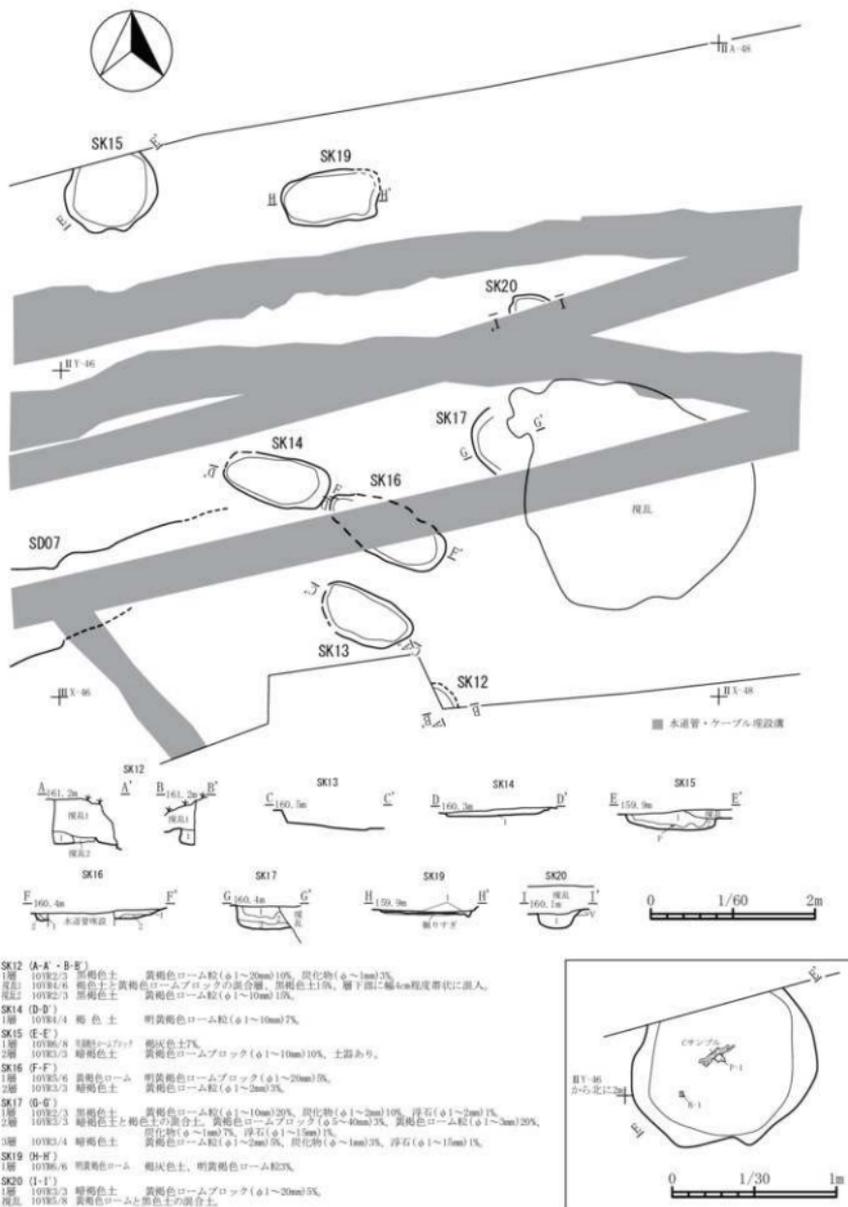


図46 土坑墓群B

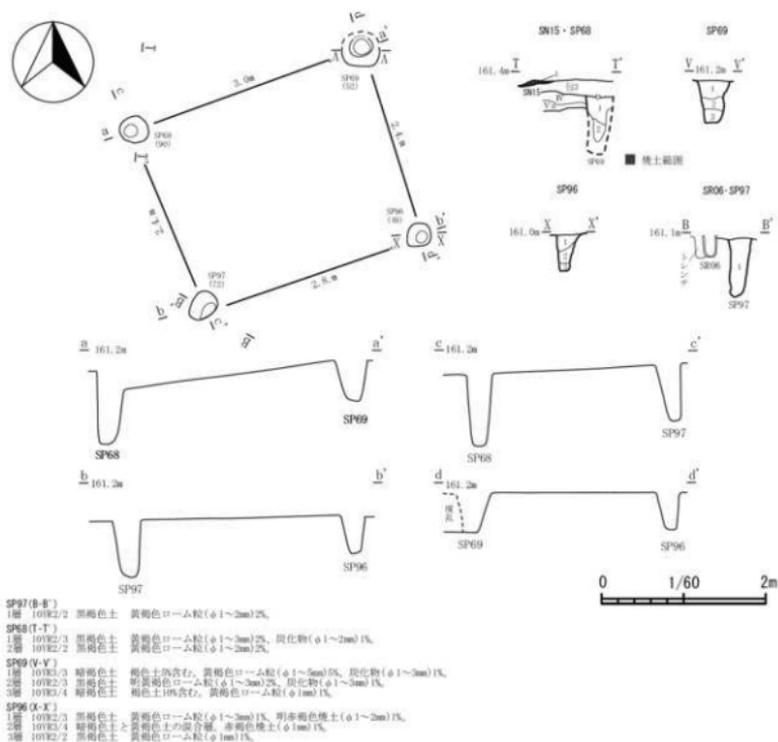


図52 III J-59~62周辺検出遺構(3)

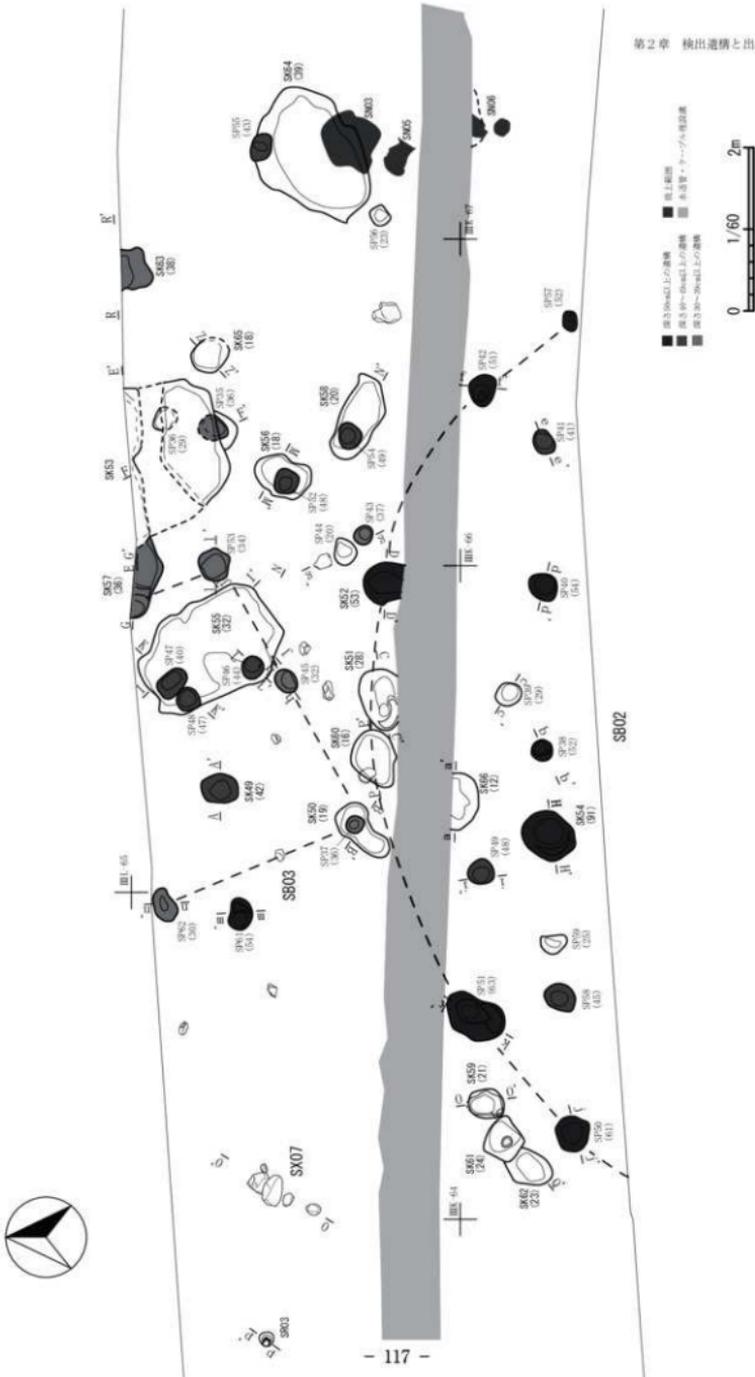
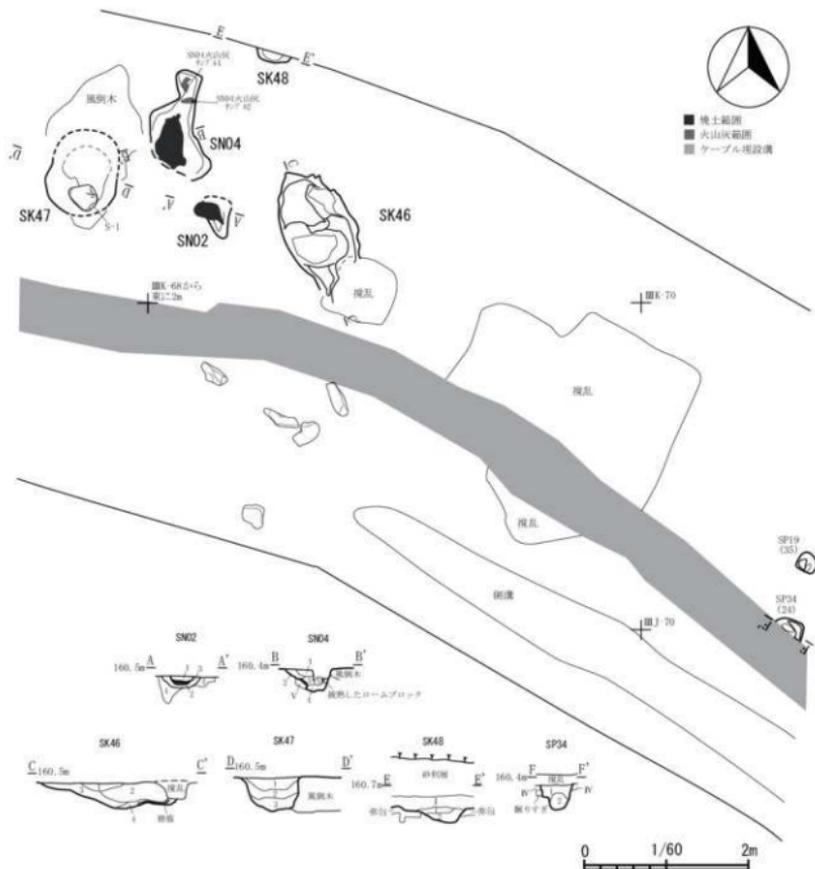


図56 Ⅲ K-64～67周辺検出遺構(4)



SK47(A-F) 穿土層はブロック状で火床面を形成していない。崩壊された焼土が風倒木によって沈降したものと思われる。

- 1層 10TR3/3 暗褐色土 明赤褐色焼土(φ1~3cm)2%
- 2層 10TR3/6 暗褐色土 焼土層 褐色土高含有、炭化物(φ1~2cm)1%
- 3層 10TR3/3 暗褐色土 明赤褐色焼土(φ1~3cm)2%、炭化物(φ1cm)1%
- 4層 10TR4/4 褐色土 風倒木、黄褐色土7%含む、炭化物(φ1~3cm)2%、明赤褐色焼土(φ1cm)1%以下、褐色粘土粒(φ1mm)1%以下。

SK48(B-F)

- 1層 10TR4/6 褐色土 ローム、暗赤褐色焼土が2%含む。
- 2層 10TR3/4 暗褐色土 焼土粒混入、褐色土が10%含む、暗赤褐色焼土が2%含む、黄褐色ローム粒(φ1mm)1%
- 3層 10TR3/3 暗褐色土 暗赤褐色土、赤褐色焼土が10%含む。
- 4層 10TR2/3 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~3cm)1%。

SK46(C-C')

- 1層 10TR3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1mm)1%、明赤褐色焼土(φ1~3cm)1%、炭化物(φ1~3cm)1%
- 2層 10TR5/6 暗褐色土 褐色土が10%含む、炭化物(φ1~2cm)1%
- 3層 10TR3/3 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~3cm)1%、明赤褐色焼土(φ1~3cm)1%、炭化物(φ1~5cm)2%
- 4層 10TR5/8 黄褐色土 褐色土が20%含む、炭化物(φ1~5cm)1%

SK47(D-D')

- 1層 10TR3/4 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~5cm)2%、褐色粘土粒(φ1mm)1%以下、炭化物(φ1mm)1%以下、
- 2層 10TR4/4 褐色土 明赤褐色ロームブロック(φ1~10cm)2%、炭化物(φ1mm)2%
- 3層 10TR2/3 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~3cm)2%、炭化物(φ1~3cm)1%
- 風倒木 10TR5/6 暗褐色土 黒褐色土高含有、褐色粘土粒(φ1mm)1%

SK48(E-E')

- 1層 10TR2/1 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~3cm)1%、赤褐色焼土(φ1~3cm)1%
- 2層 10TR2/3 暗褐色土 褐色土が10%含む、明赤褐色焼土(φ1~10cm)1%
- 3層 10TR3/4 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~10cm)2%、赤褐色焼土(φ1~5cm)1%
- 5層 10TR4/4 褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~3cm)1%、明赤褐色ローム粒(φ1~3cm)1%、明赤褐色焼土(φ1~3cm)1%、

SP34(F-F')

- 1層 10TR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒(φ1mm)2%
- 2層 10TR2/3 暗褐色土 明赤褐色ローム粒(φ1~5cm)2%、褐色粘土粒(φ1mm)1%以下、
- IV層 10TR3/6 黄褐色土 褐色土が10%含む(ブロック状)。

図57 III K-68~III J-70周辺検出遺構

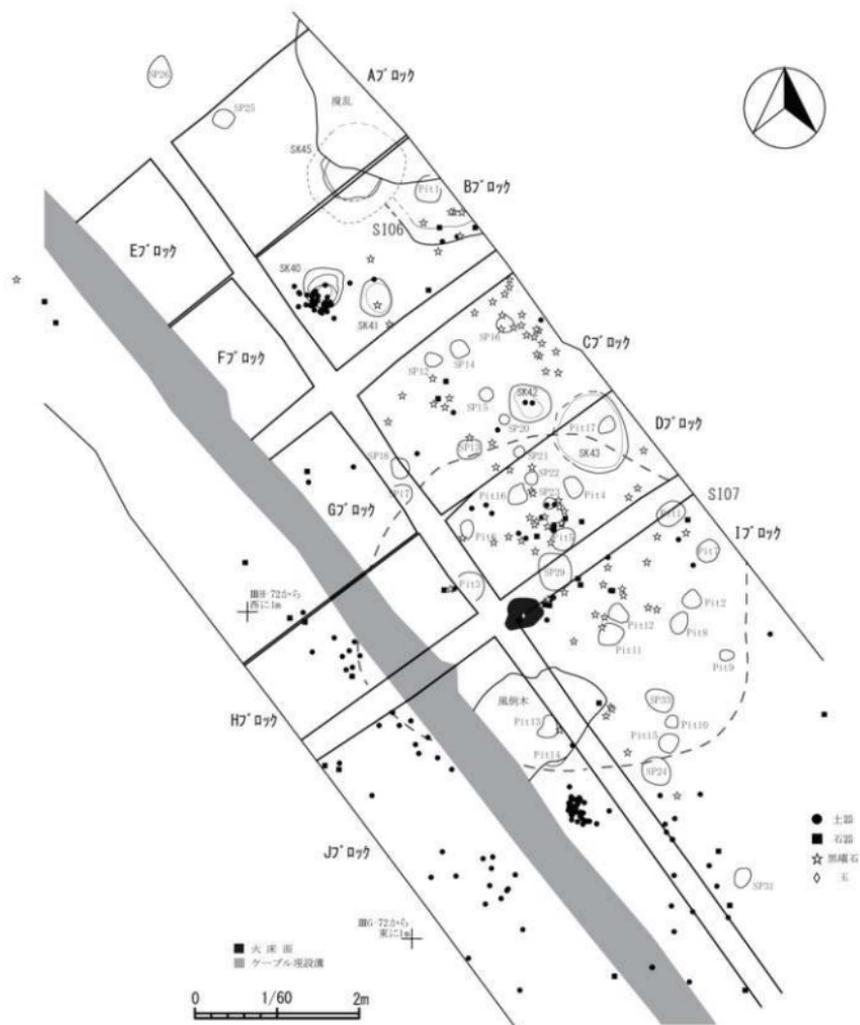
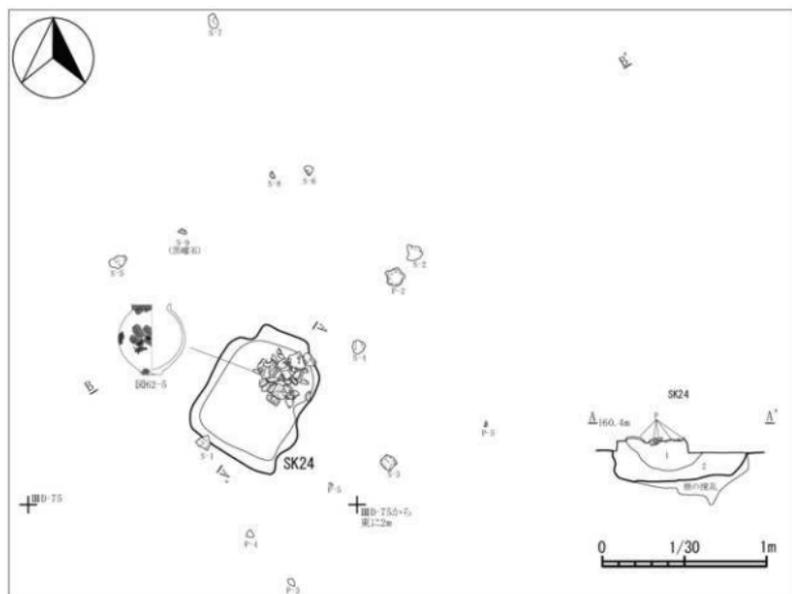


図58 Ⅲ1-72～ⅢG-73周辺検出状況（黒曜石散布範囲）



SK24付近遺物出土状況



SK24 (A-A)

- 1層 10YR2/2 黒褐色土 コーム粒(φ1~5mm)2%, 粘土粒(φ1~2mm)1%
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 コーム粒(φ1~20mm)7%, 粘土粒(φ1~3mm)1%

III D-75(9)9(9) (B-B)

- ⅨA層 10YR2/3 黒褐色土 細かい黄褐色粘土ブロック(φ1~120mm)2%, 褐色粘土(φ1mm)以下。
- ⅨB層 10YR2/3 黒褐色土 細かい黄褐色コーム粒(φ1mm)1%, 炭化物(φ1mm)以下。
- ⅨC層 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色コーム粒(φ1mm)以下。
- ⅨD層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色コーム粒(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1mm)以下。
- ⅨE層 10YR4/4 褐色土 黒褐色土の混合層(右のⅨ層の中に酸化鉄がまばらに混入)。

SK33 (C-C)

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 褐色土の混合層、黒褐色土が7%含有。黄褐色コーム粒(φ1~3mm)2%, 褐色粘土粒(φ1mm)以下、炭化物(φ1mm)1%。
- 2層 10YR4/6 褐色土 黄褐色コーム粒(φ1~10mm)2%, 褐色粘土粒(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%, 種籾あり。
- 3層 10YR5/6 黄褐色土 黄褐色コーム粒(φ1~10mm)2%, 褐色粘土粒(φ1mm)以下、炭化物(φ1mm)以下。
- 4層 10YR4/4 褐色土 黄褐色コーム粒(φ1~5mm)1%, 褐色粘土粒(φ1mm)以下、炭化物(φ1mm)以下。
- 樹根 10YR2/1 黒色土

SK34 (D-D'・E-E')

- 1層 10YR3/4 暗褐色土 コーム粒(φ1mm)2%, 炭化物粒(φ1~2mm)3%
- 2層 10YR4/6 褐色土 コーム粒(φ1~5mm)2%
- 3層 7.5YR4/6 黄褐色土 炭化物粒(φ1~2mm)2%

図59 III F-74~III D-75周辺検出遺構

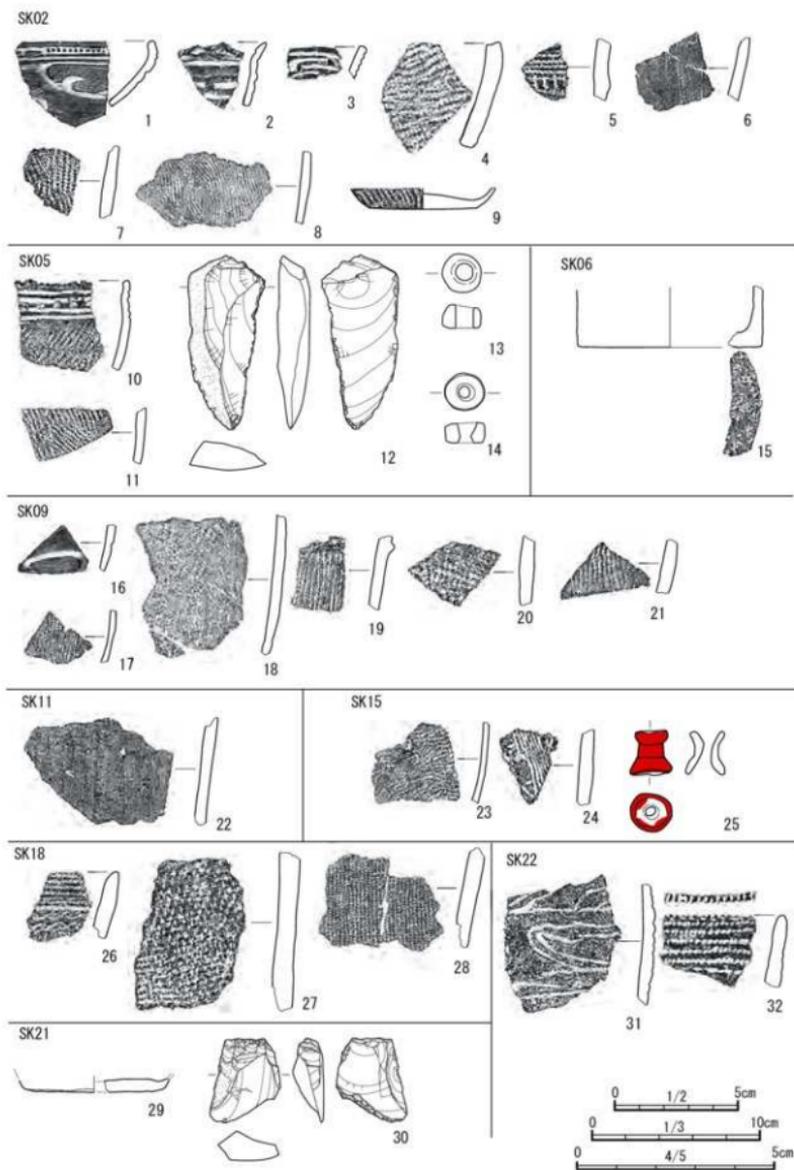


図 61 土坑内出土遺物(1)

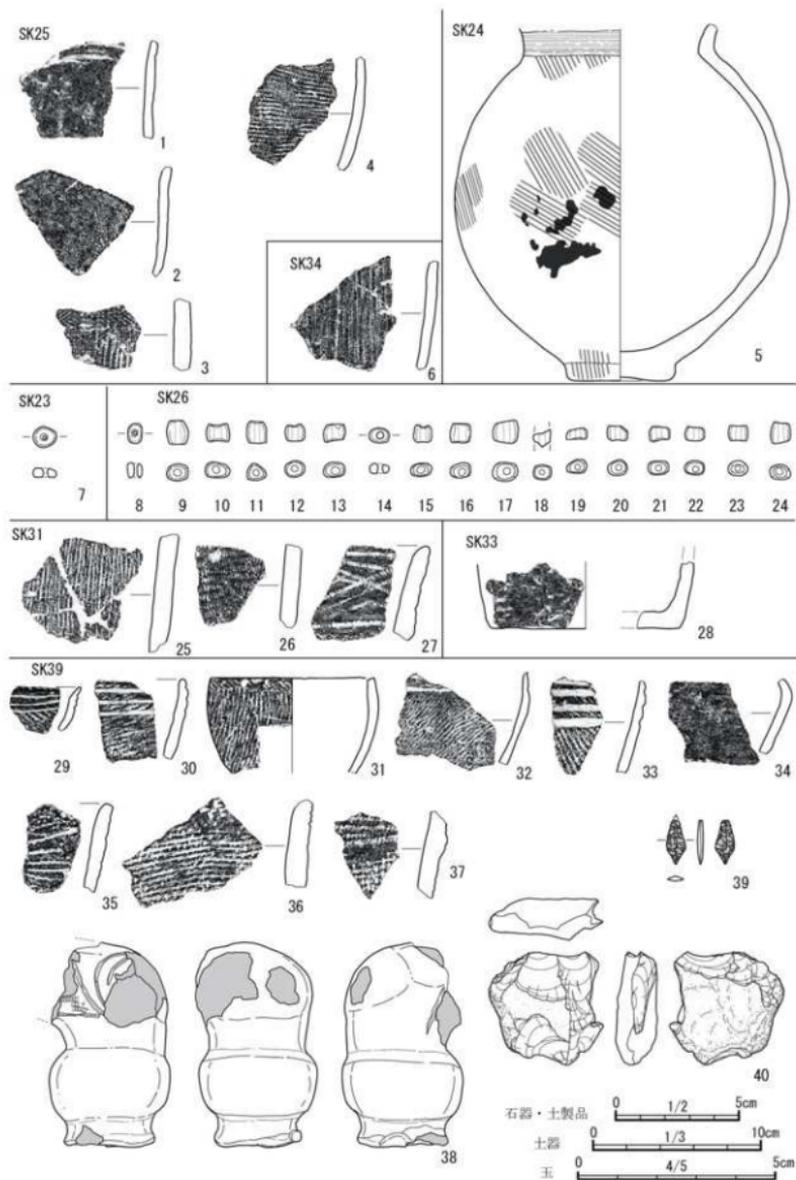


図 62 土坑内出土遺物 (2)

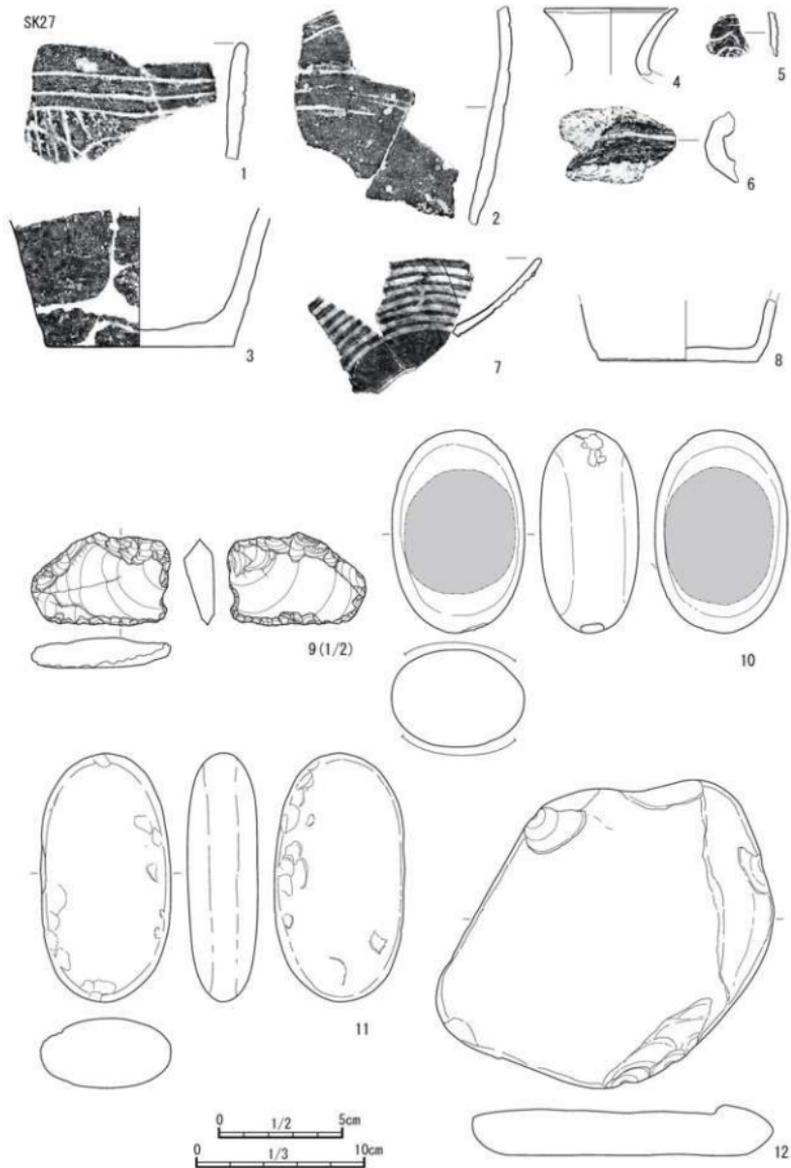
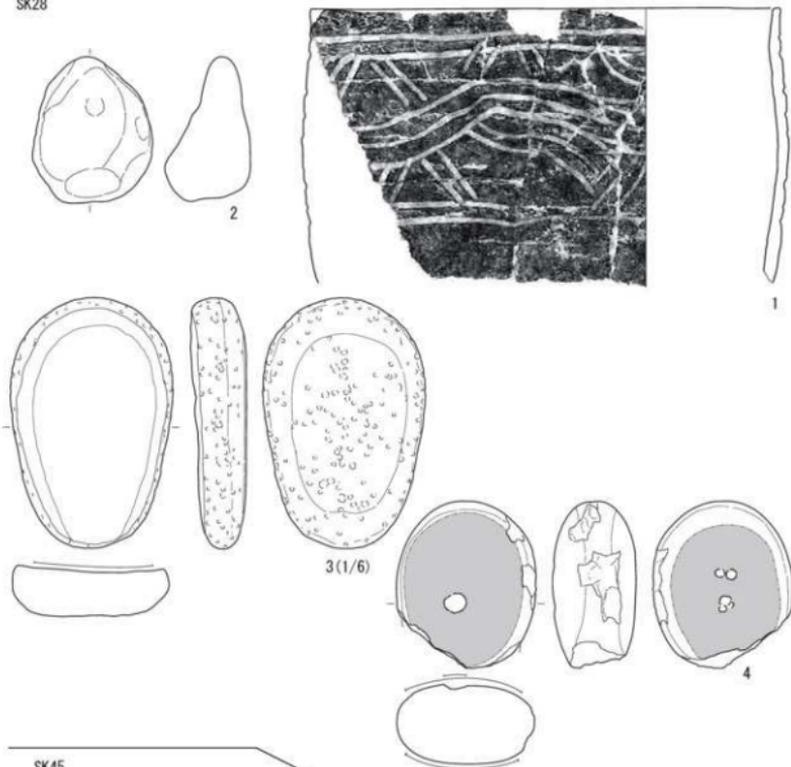
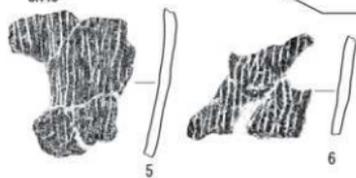


图 63 土坑内出土遺物 (3)

SK28



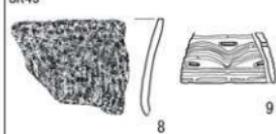
SK45



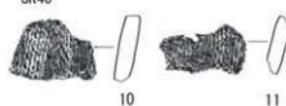
SK47



SK49



SK40



SK42

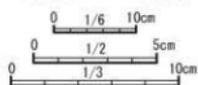
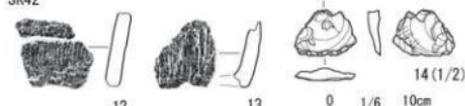


图 64 土坑内出土遺物 (4)

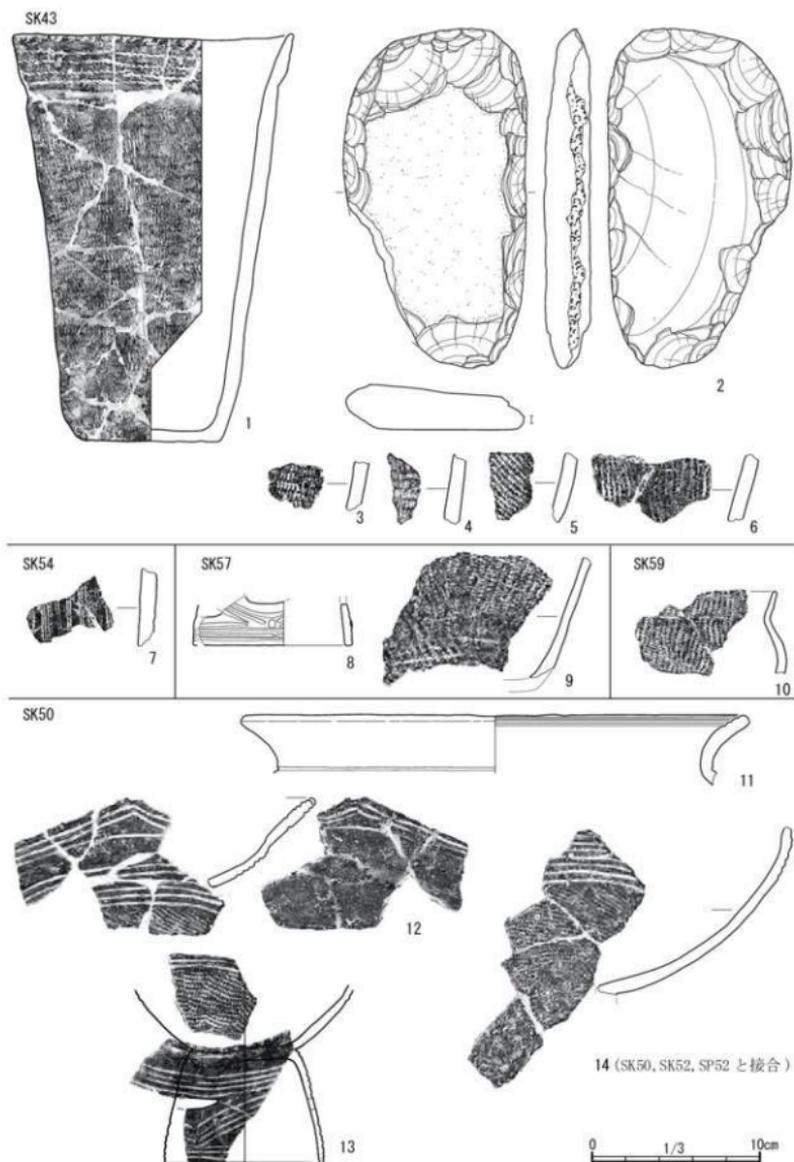
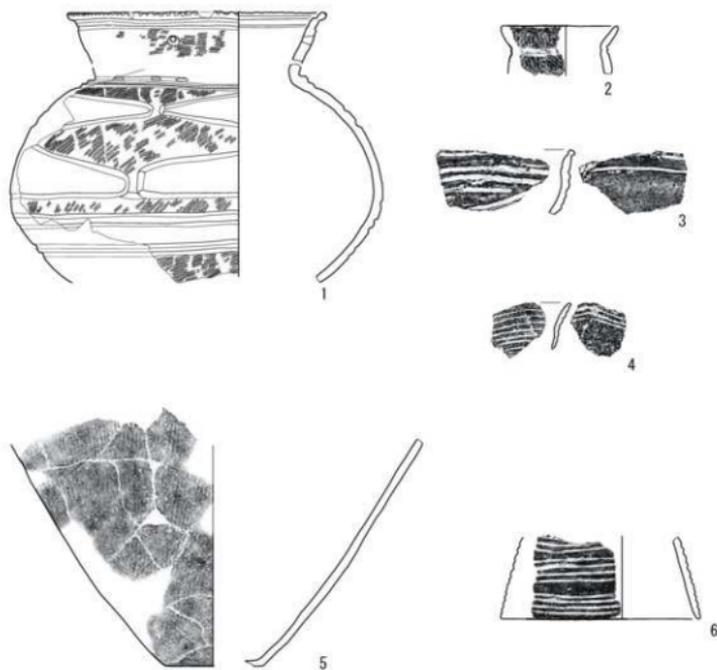


図 65 土坑内出土遺物(5)

SK51



SK58

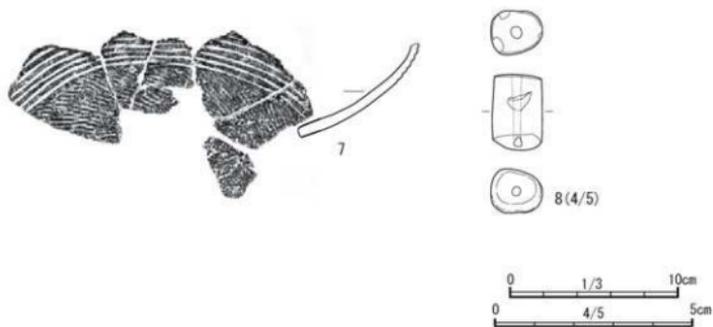
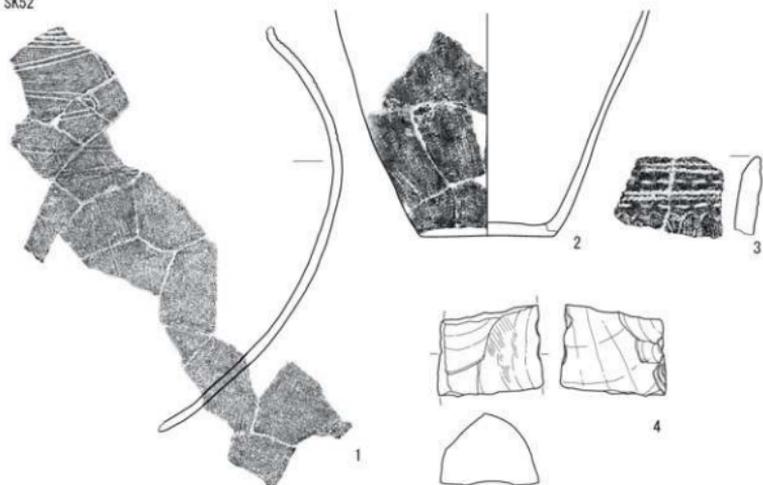


图 66 土坑内出土遺物 (6)

SK52

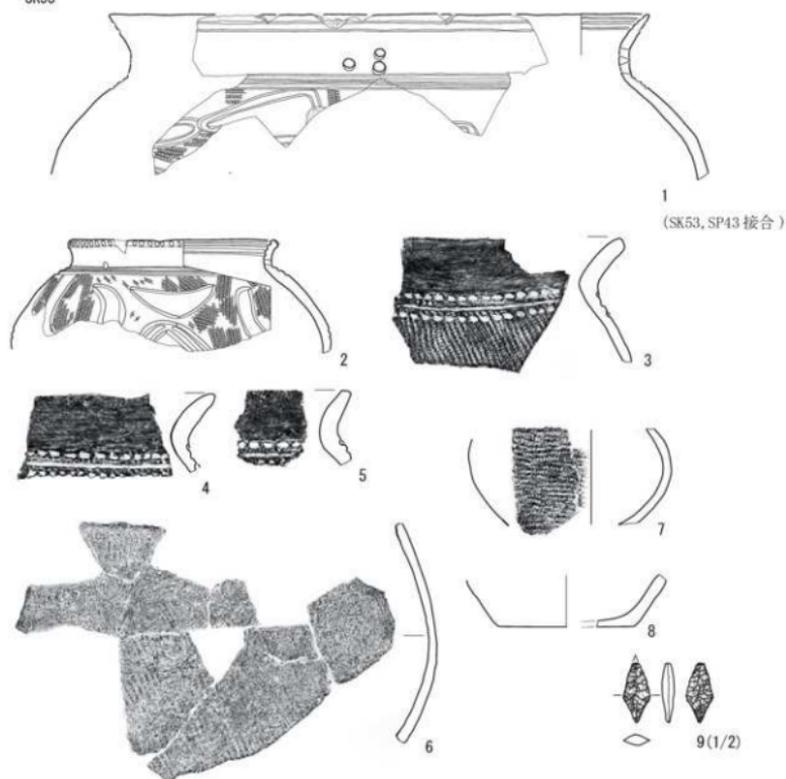


SK60



図 67 土坑内出土遺物（7）

SK53



SK62

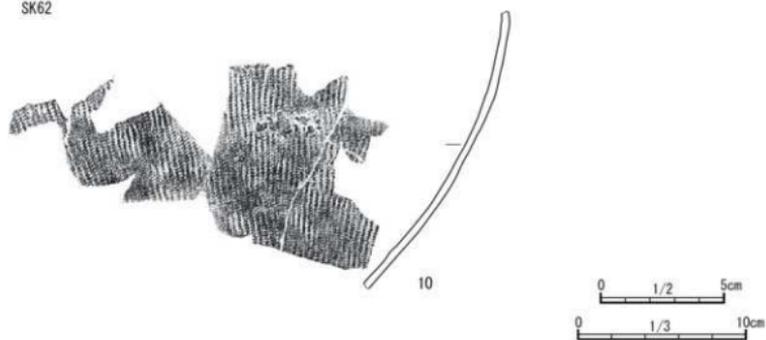


图 68 土坑内出土遺物 (8)

SK55

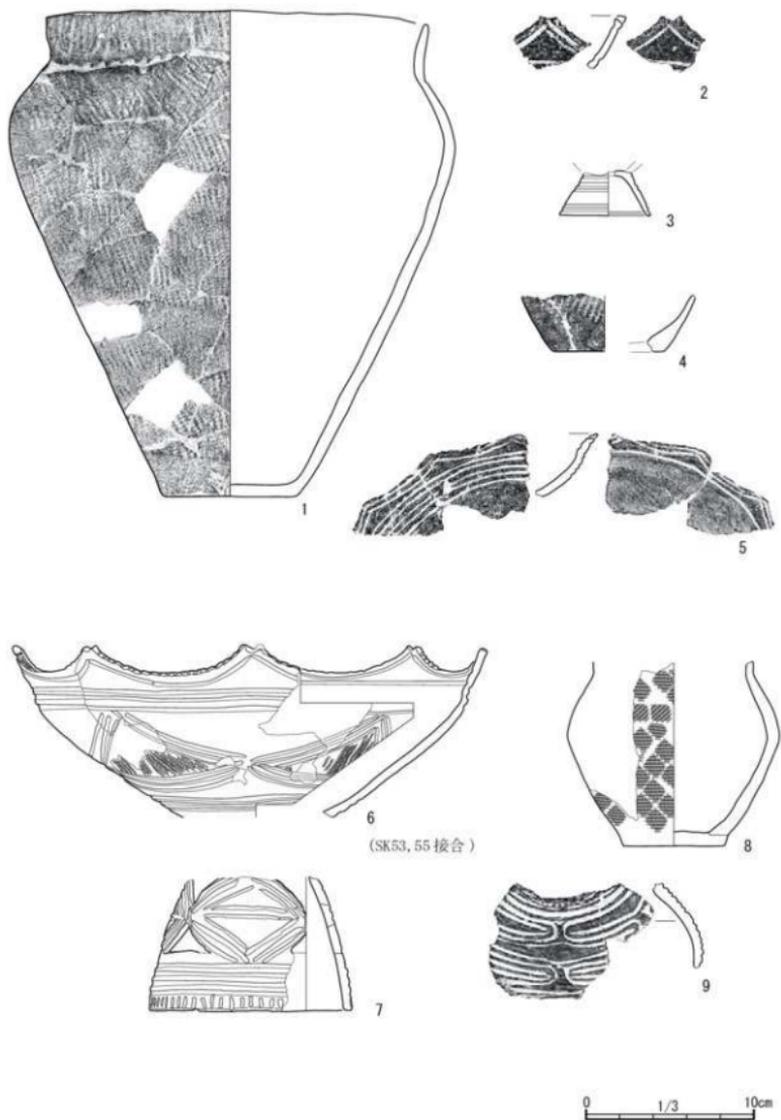


図 69 土坑内出土遺物 (9)

SK55

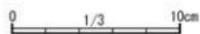
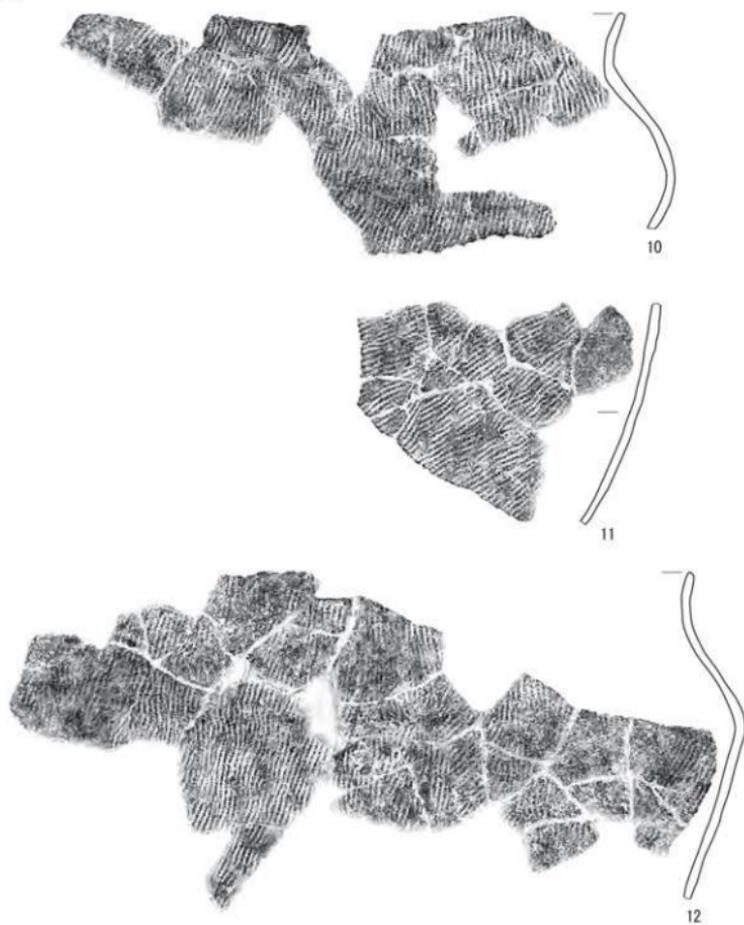


图 70 土坑内出土遺物 (10)

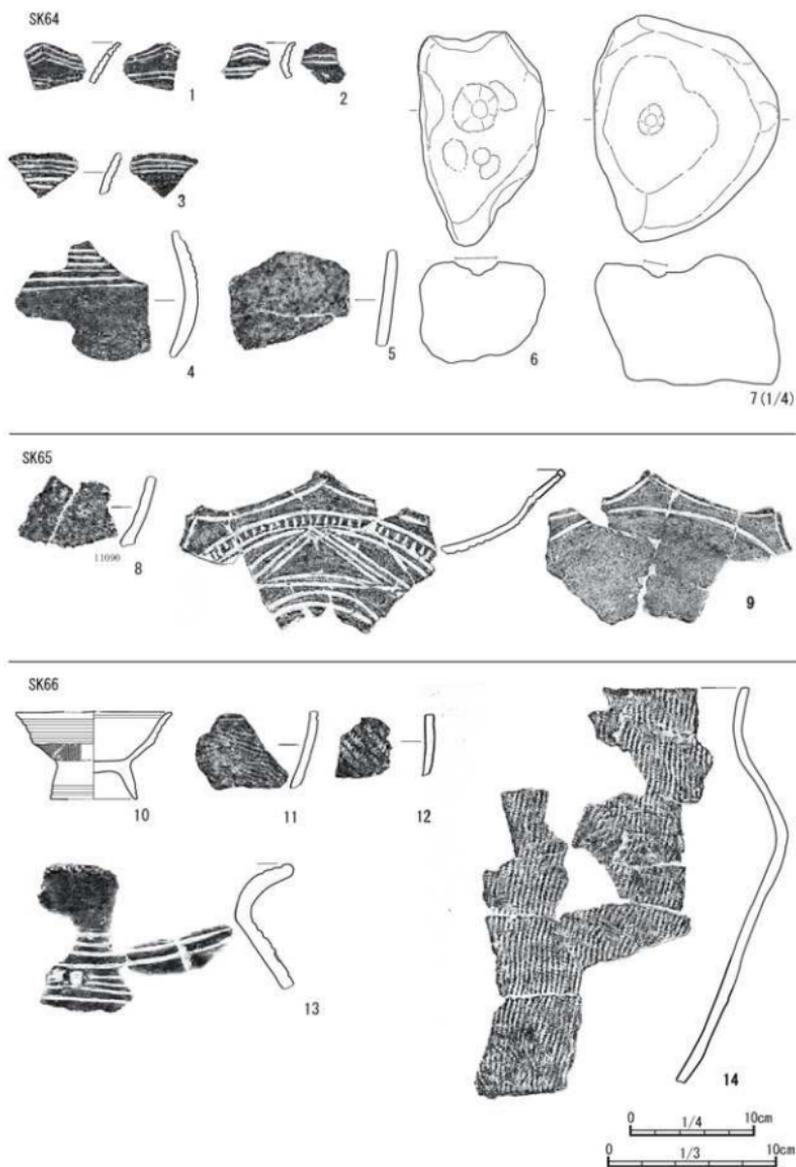
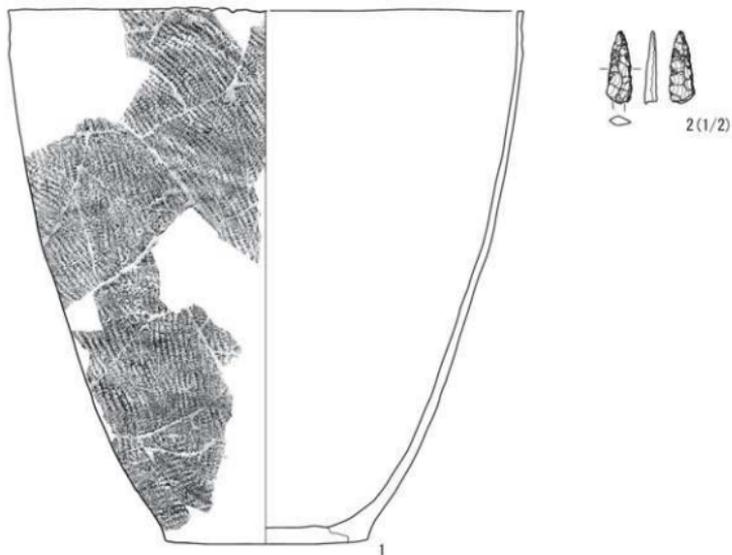


図 71 土坑内出土遺物 (11)

SK67



SK68

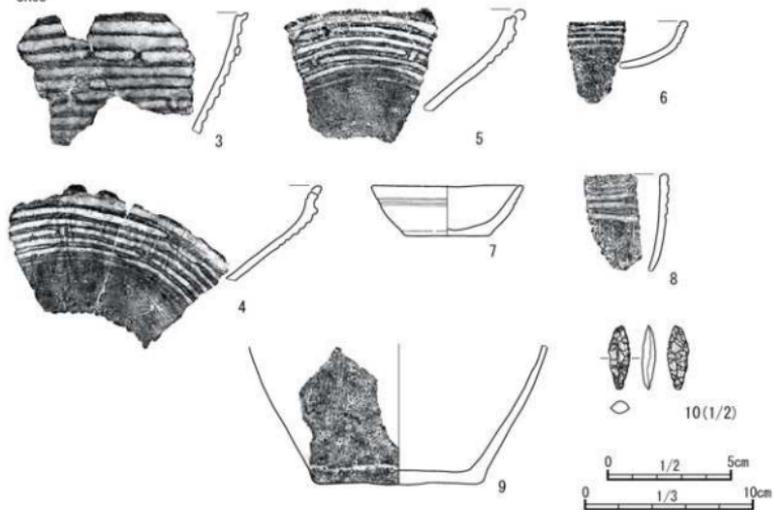


图 72 土坑内出土遺物 (12)

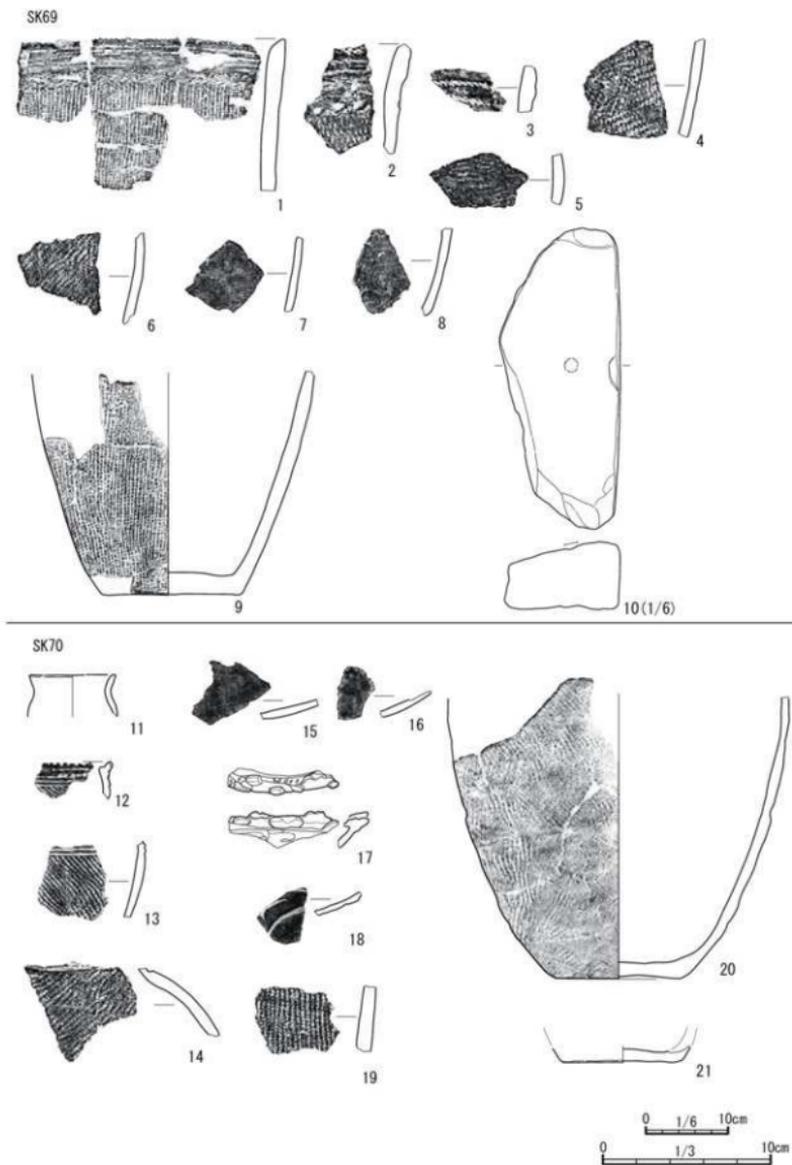


図 73 土坑内出土遺物 (13)

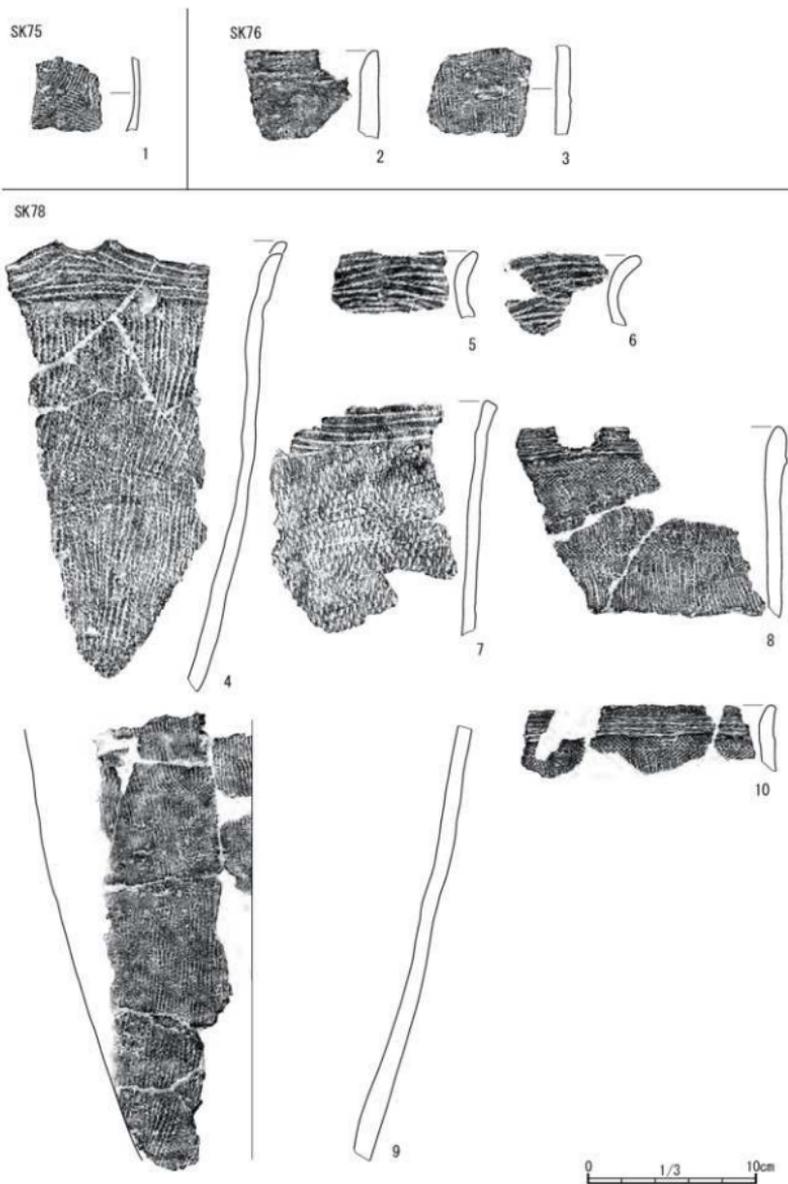


图 74 土坑内出土遺物 (14)

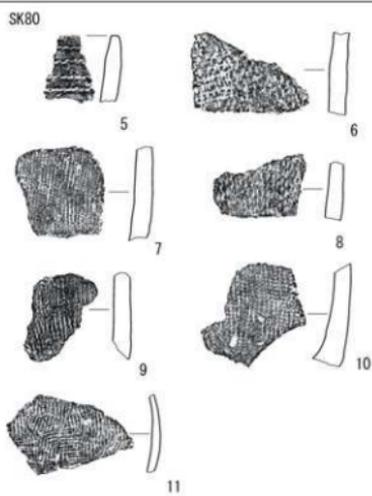
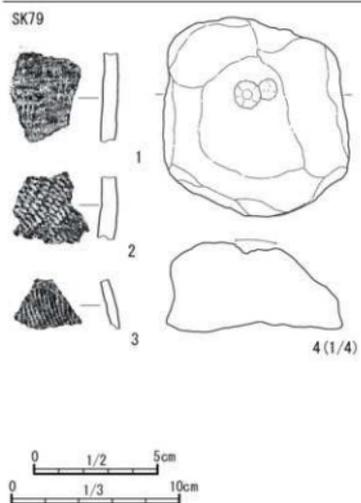
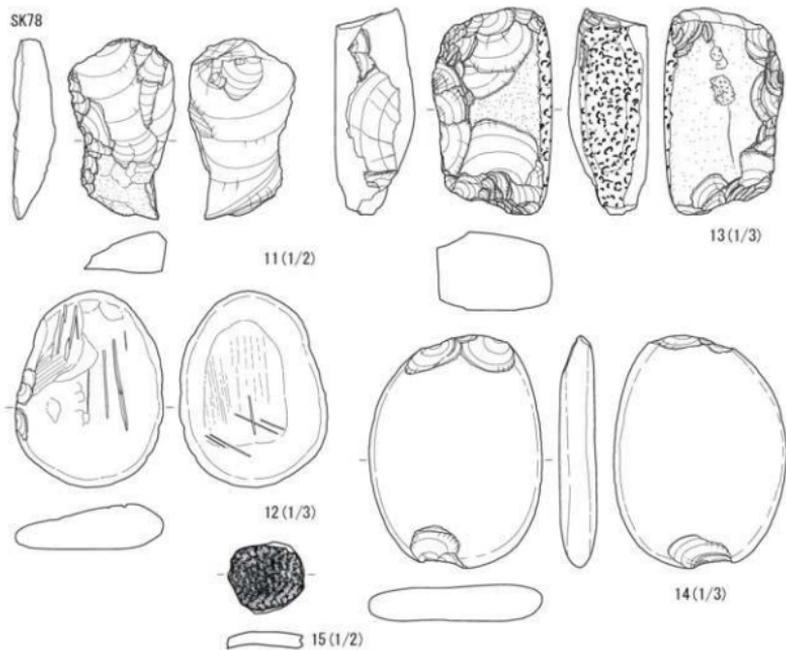


図 75 土坑内出土遺物 (15)

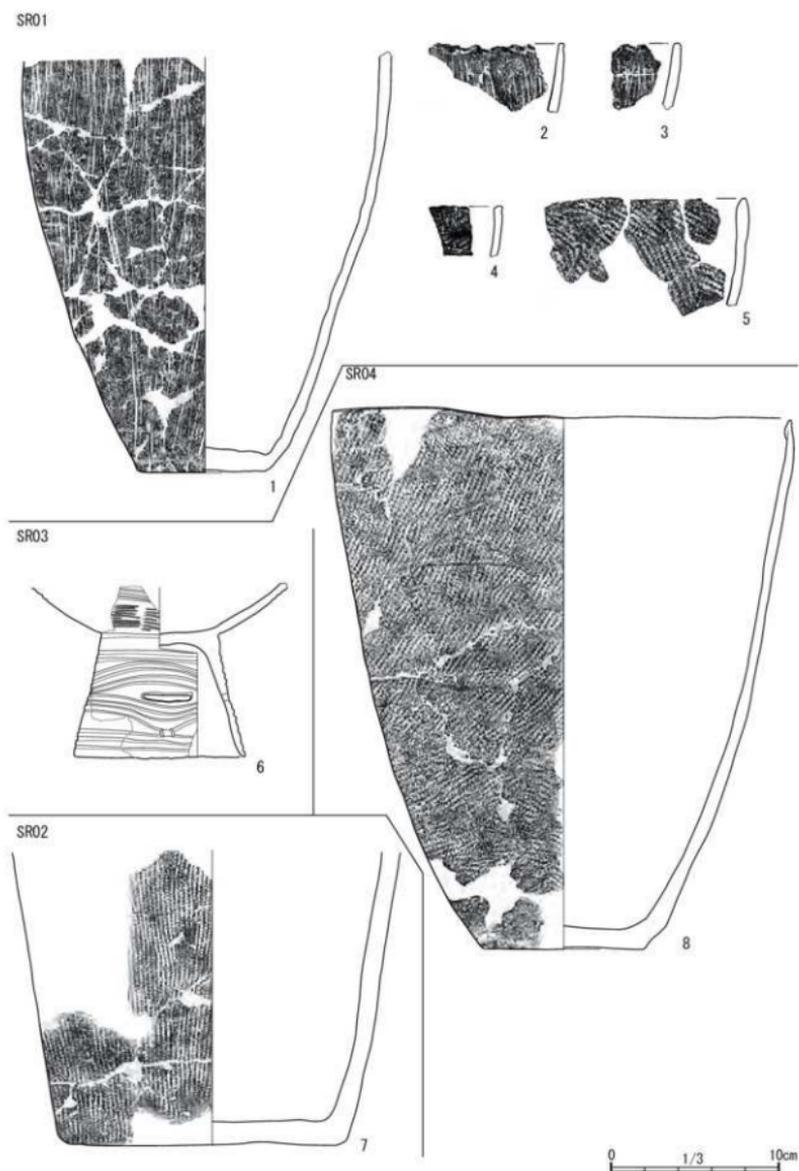


図 76 埋設土器 (1)

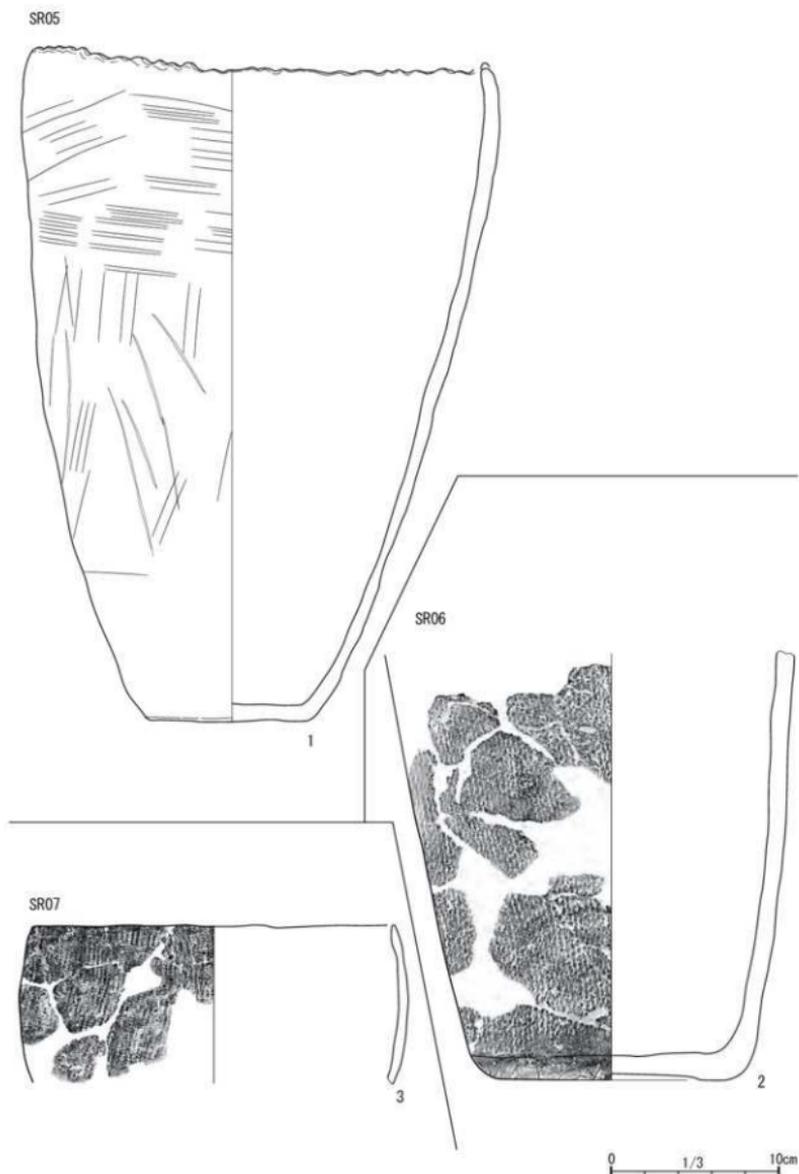


図 77 埋設土器 (2)

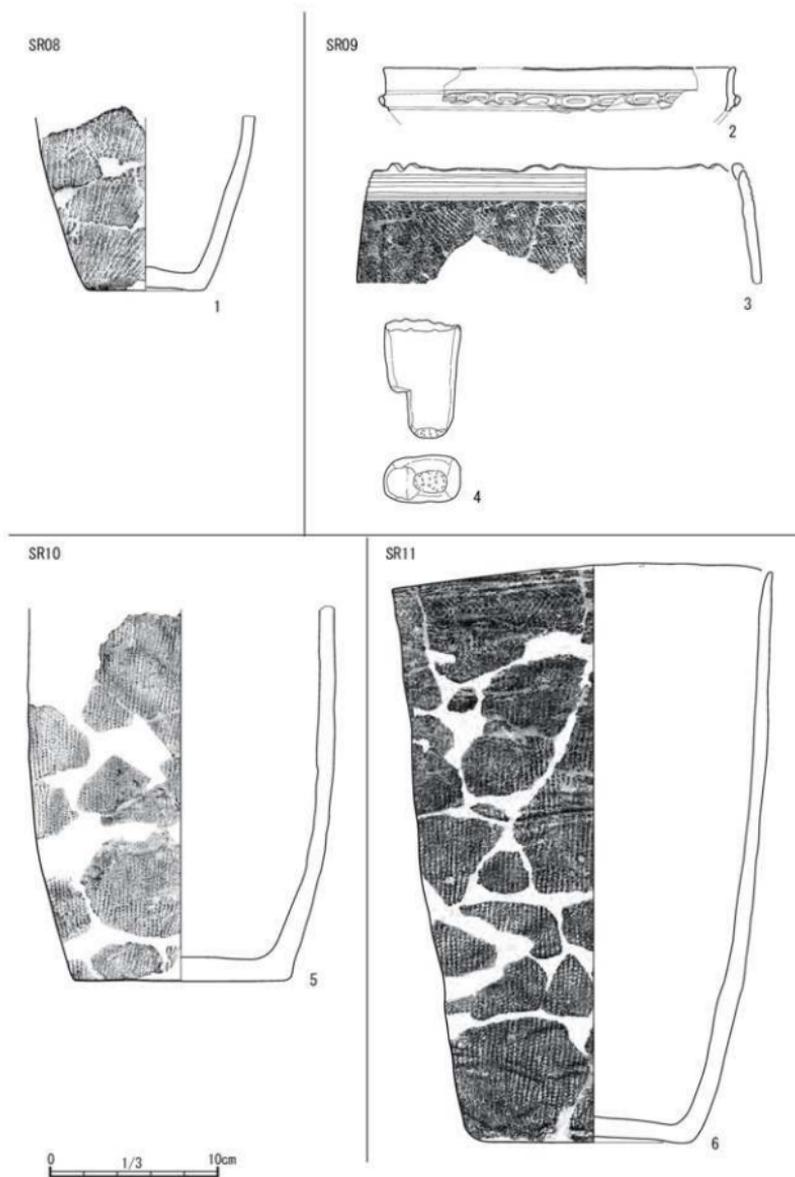


図 78 埋設土器 (3)

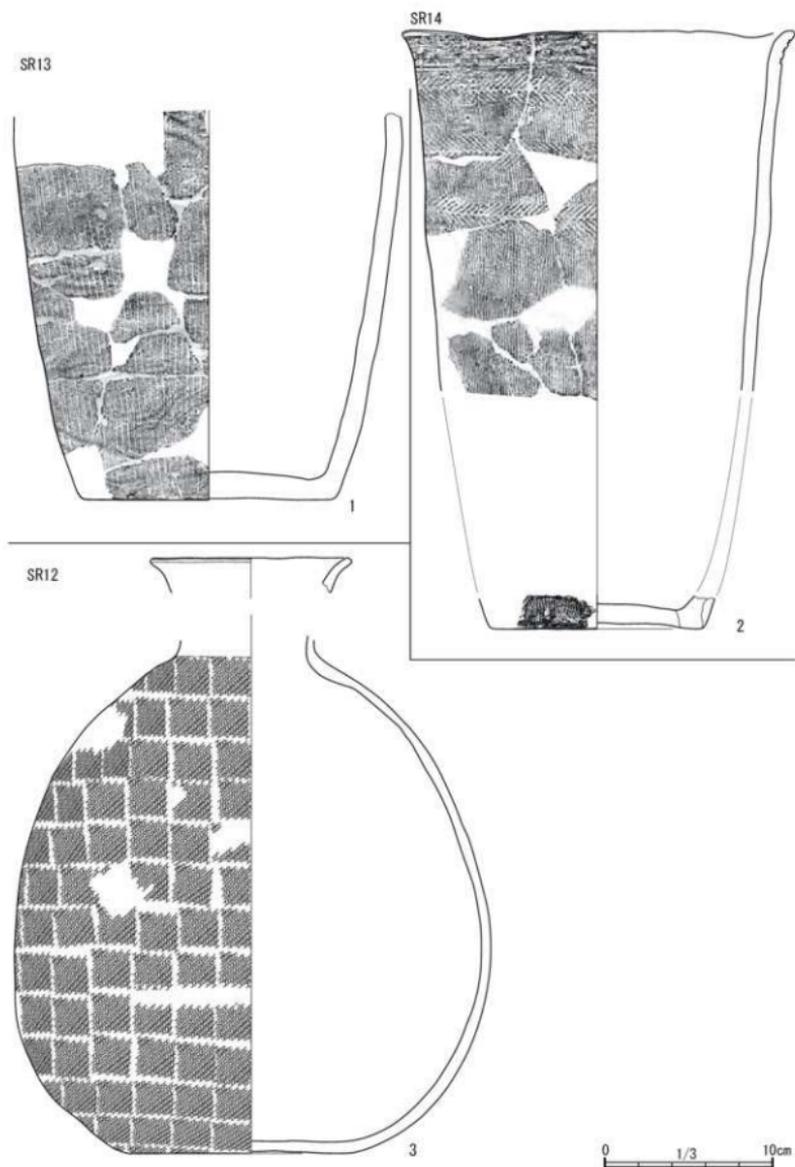


図 79 埋設土器 (4)

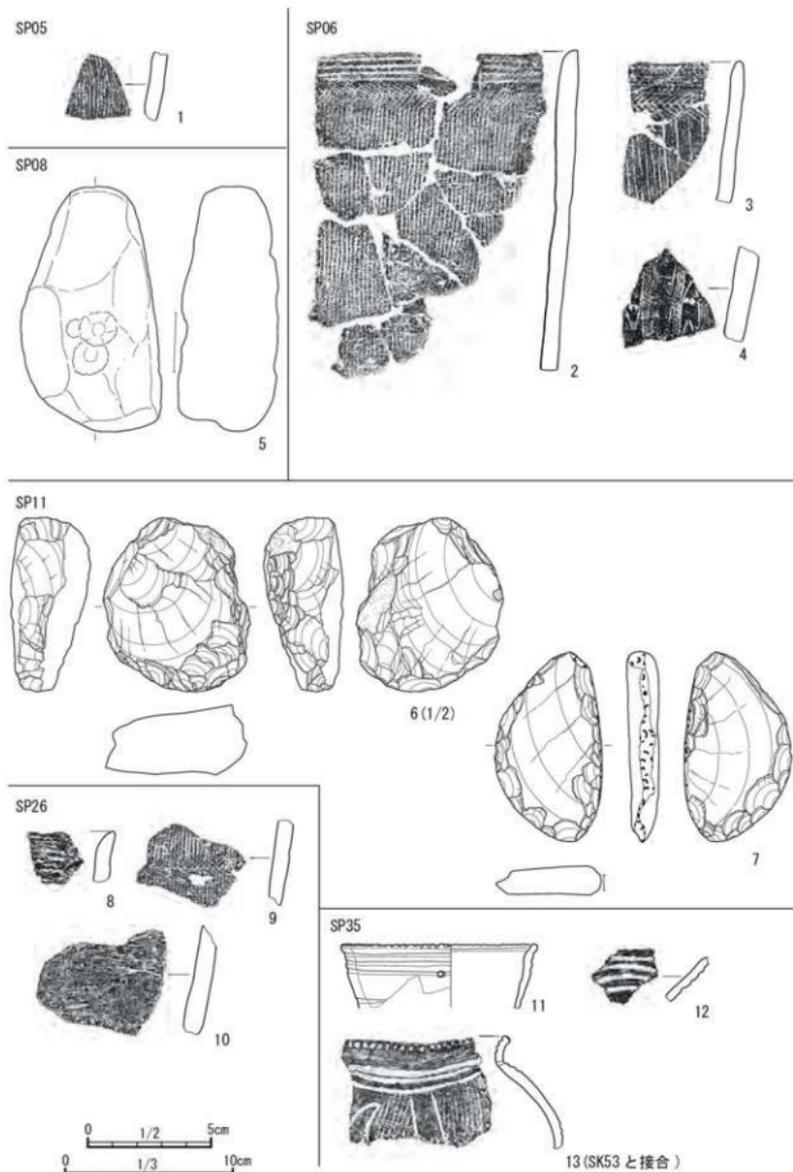


図80 ビット内出土遺物(1)

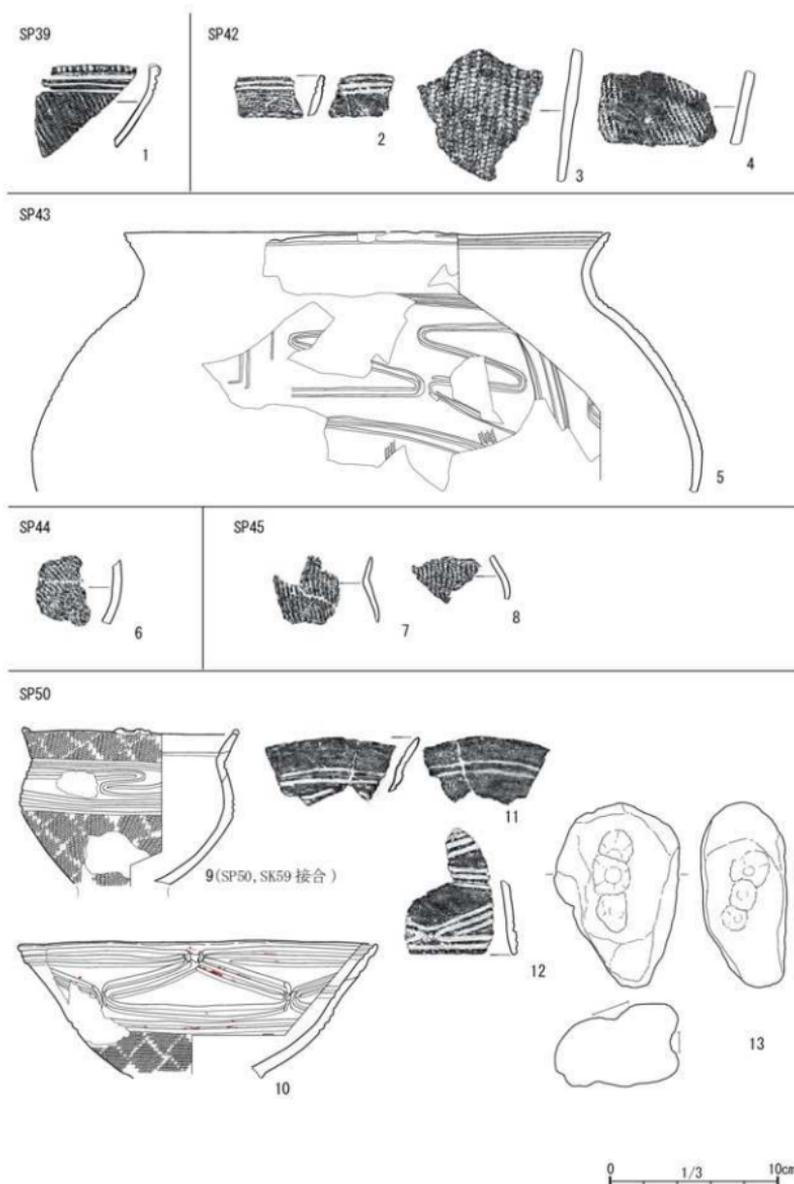


図81 ビット内出土遺物(2)

SP50

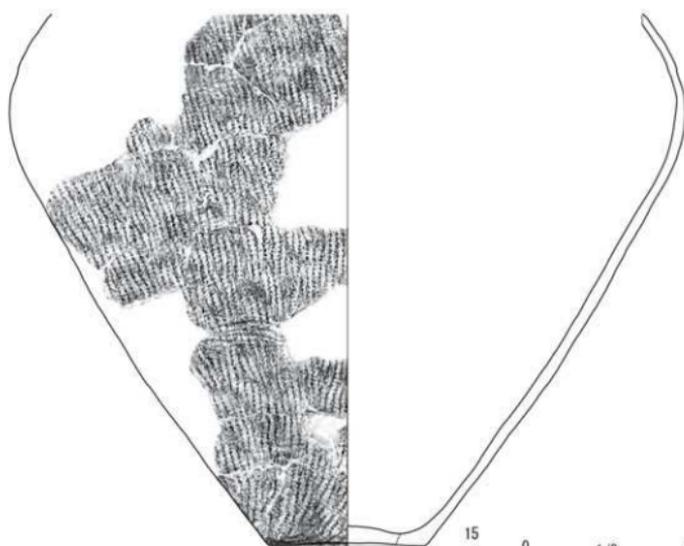
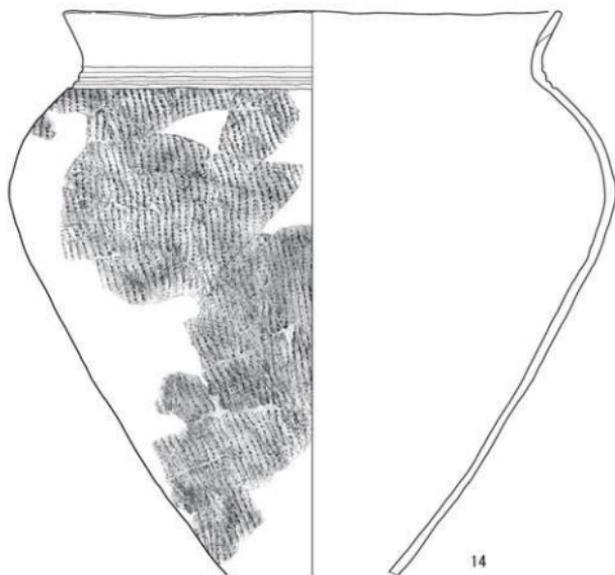


図 82 ビット内出土遺物(3)

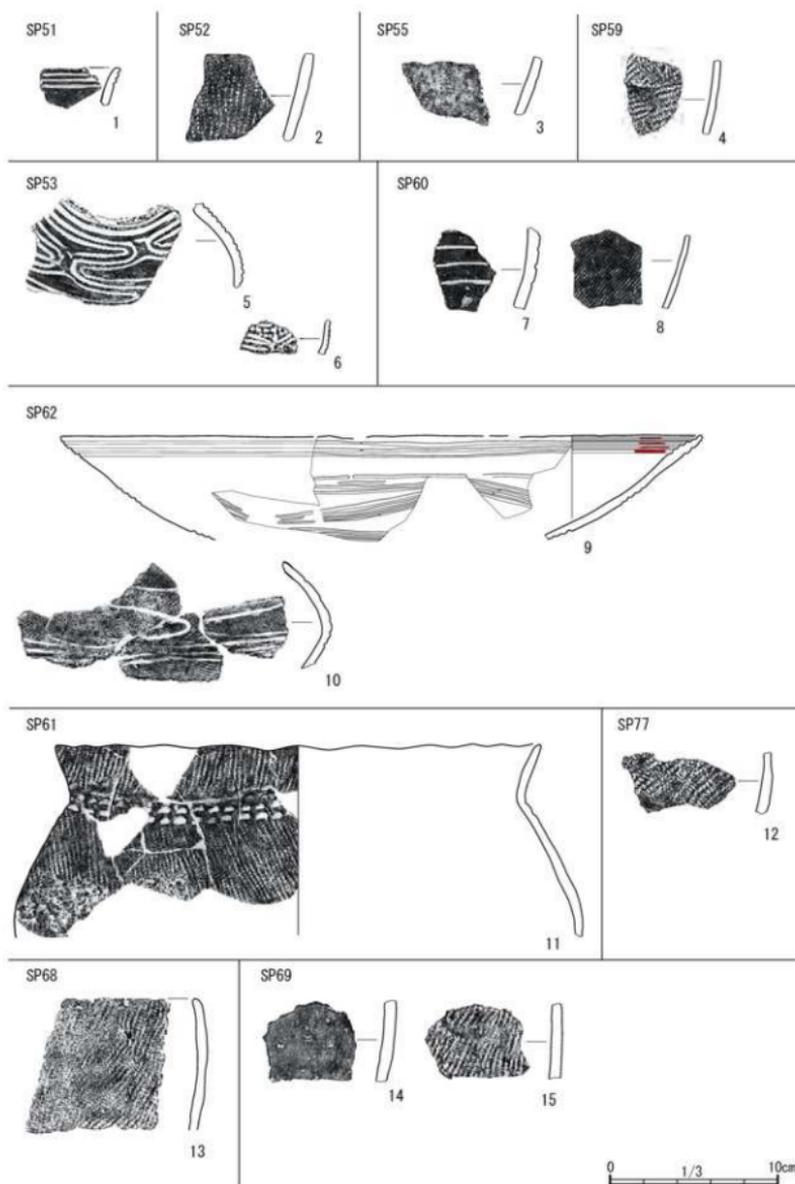


図 83 ビット内出土遺物(4)

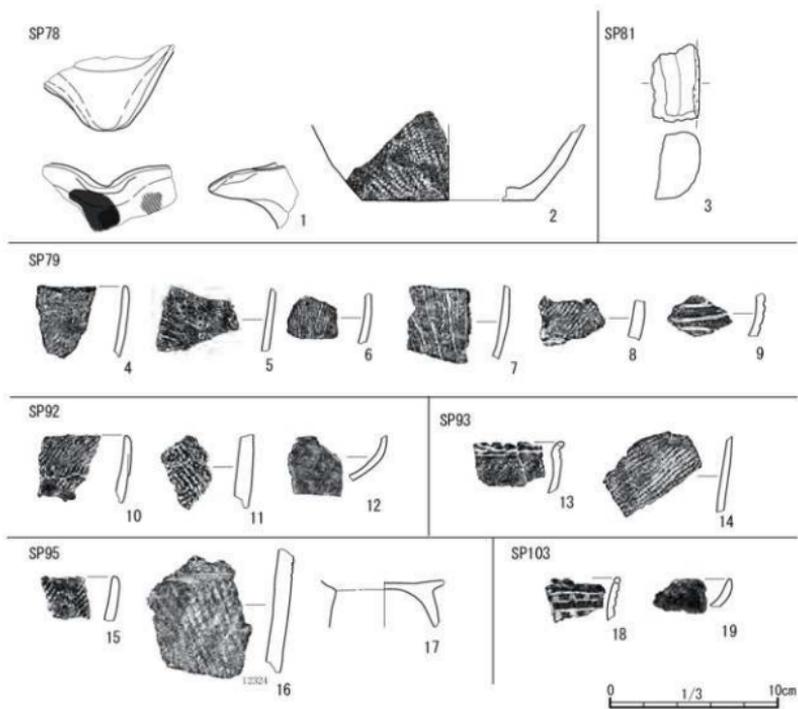
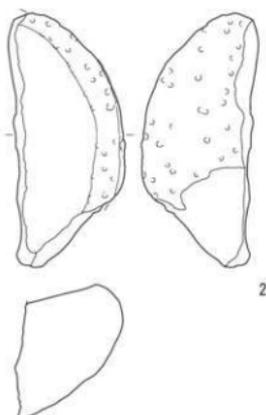
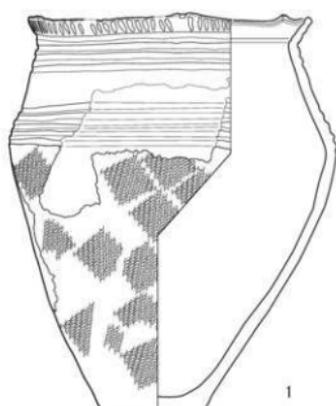
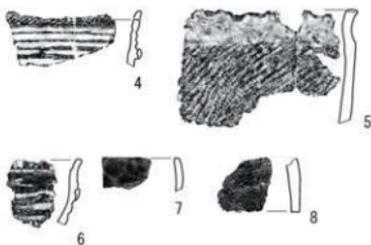
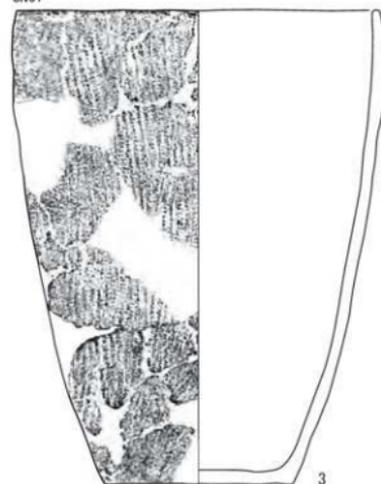


図 84 ピット内出土遺物 (5)

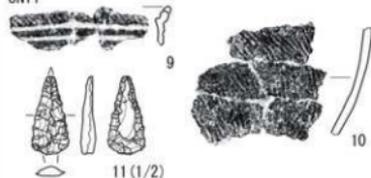
SN03



SN07



SN11



SN15



SN16

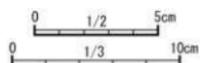
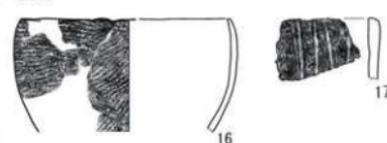


図85 焼土内出土遺物(1)

SN17

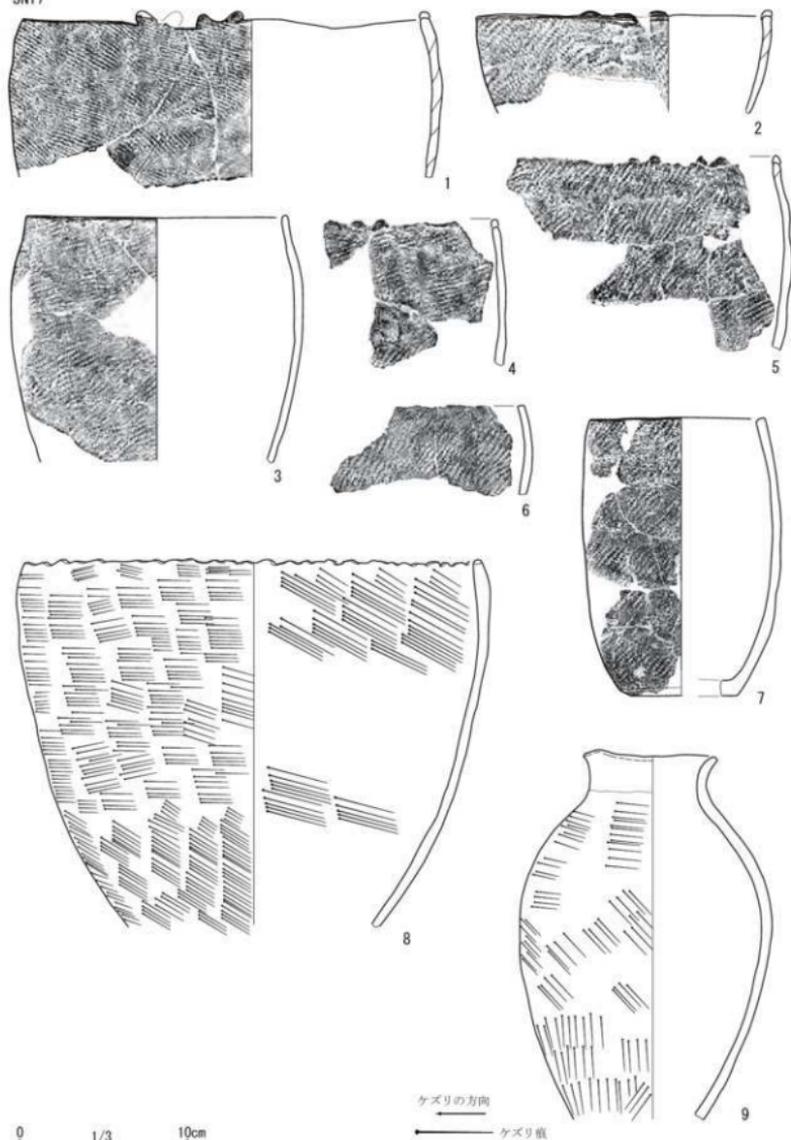


図 86 焼土内出土遺物(2)

SN17



図 87 焼土内出土遺物 (3)

SN17



0 1/5 10cm

図88 焼土内出土遺物(4)

SN17

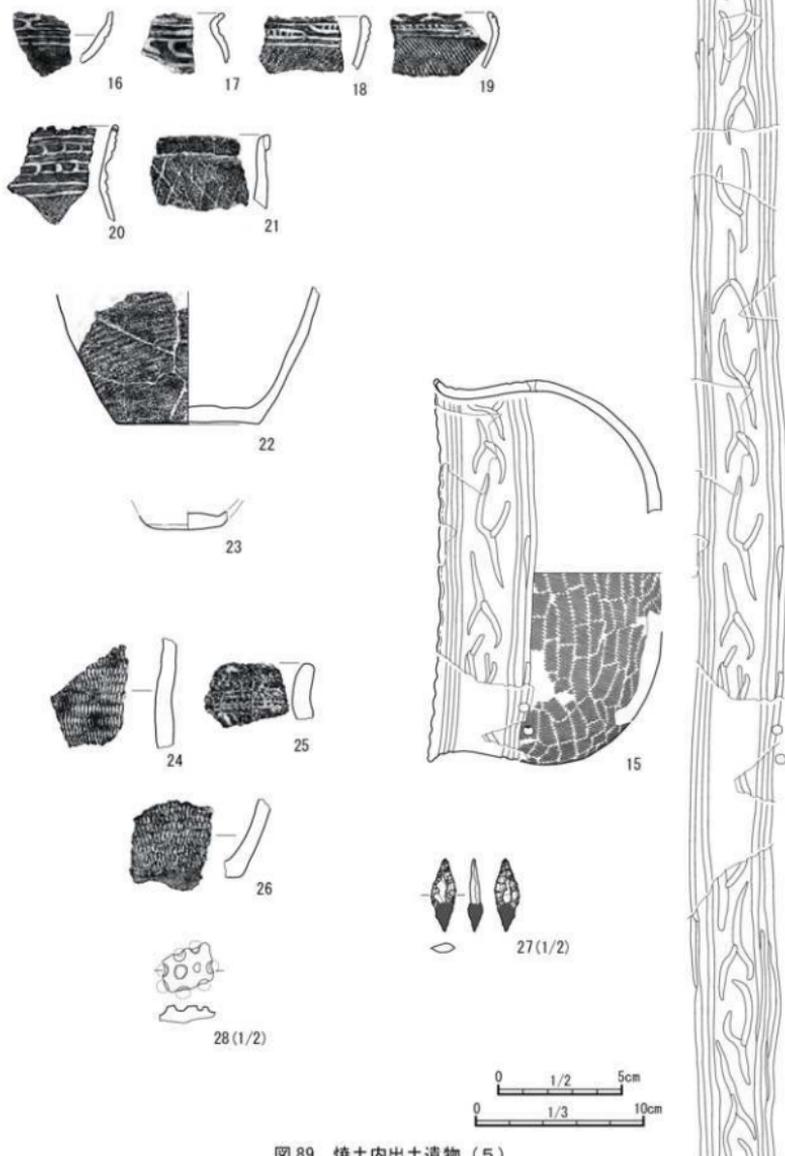


図89 焼土内出土遺物 (5)

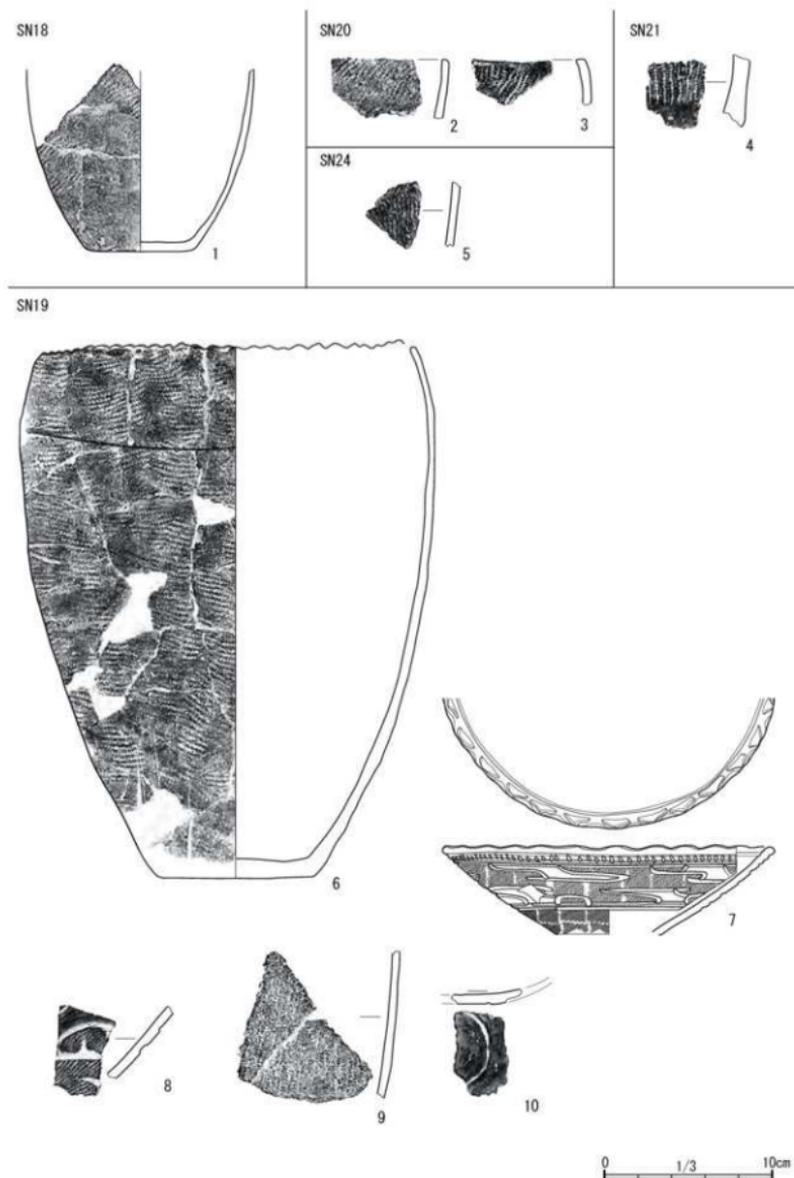


图90 烧土内出土遺物(6)

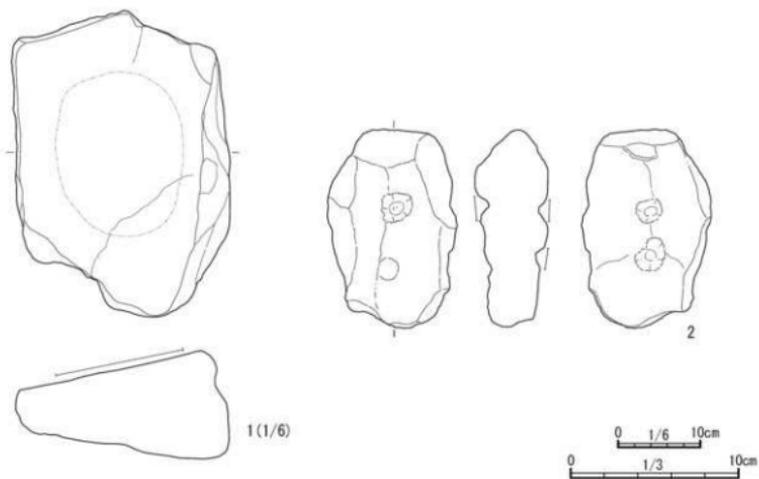


圖 91 集石遺構 出土遺物

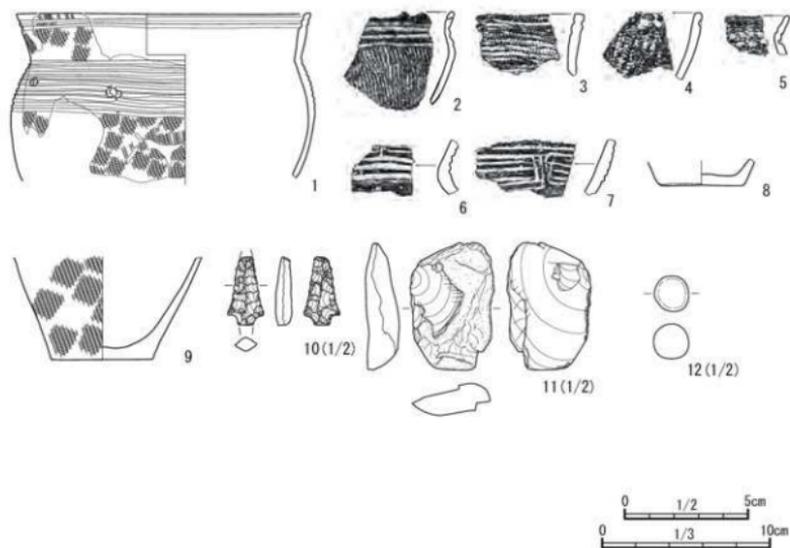


圖 92 黑曜石散布範圍 出土遺物

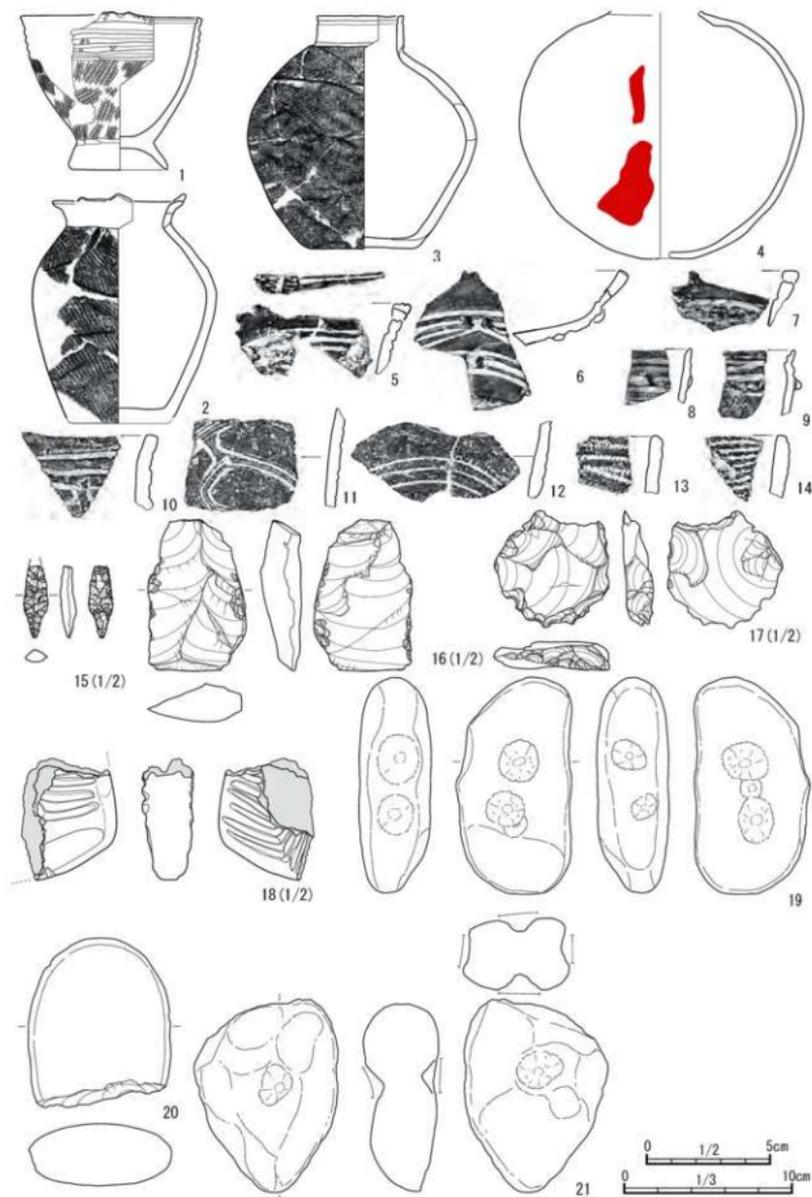


图 93 竖穴遺構 出土遺物

第9節 溝跡

溝跡は7条検出された。調査時、「SD04」として精査に着手した溝跡は単なる溝ではなく、貯水機能を有した遺構と考えられたことから欠番扱いとし、「SX02」（貯水池状遺構）に改称して精査・報告することとした。

第1号溝跡（SD01、図94-100～103）

〔位置・確認〕ⅡV-40・41、ⅡW-40～43、ⅡX-42～44、ⅡY-43・44グリッドに位置する。第V層で確認した。SD02と重複し、本遺構はSD02より新しい。

〔平面形・規模・底面〕両端とも調査区域外に延びているが、確認できた長さは19.5mで、直線的な溝である。確認面での幅は1.8～2.4mを測るが、概ね2.0m前後といえる。深さは65～93cmである。底面は平坦で、断面形は上部が開くコ字状をなすようである。底面は北東端と南西端で比高差がほとんどなく、ほぼ水平である。

〔堆積土〕堆積土は黒褐色土が主として堆積するが、壁際及び覆土下位はロームブロックが多く含まれており、初期堆積時には壁の崩落が随所であったものと思われる。

〔出土遺物〕北東半と南西側の覆土下位から礫が多く出土した。拳大のものから数十cm以上の大きさのものまで様々な大きさがあって規格性がないことから、無造作に廃棄されたものと思われる。これらの礫に石器類が混在していた。土器は覆土上位からも出土しており、縄文時代晩期のものと前期のものがある。1～4、6～10が晩期の土器で、1～4が大洞A式の深鉢・鉢で、6・9が壺である。7・8は条痕文土器で、5はミガキが丁寧で深い沈線が施されていることから、弥生時代前半期の鉢の可能性が高い。11～17・19は前期の土器であり、17は単軸絡条体第6類が縦回転で施文されている。18・20～28は晩期土器の底部である。

石器類は、石錐1点、削器1点、石器断片1点、微細剥片2点、石核1点、剥片4点、敲磨器12点、(北海道式)石冠2点、石皿4点、自然礫2点、石棒断片1点の31点出土し、その中から29点図示した。29は石錐である。黒曜石の剥片36や、微細剥片、削器が出土している。珪質頁岩製の石核37がある。(北海道式)石冠38・39が出土している。素材の礫に加工がある。40～50は凹石で、本溝跡から比較的多い点数が出土している。51は磨石+敲石である。55大型石皿の断片、53・54も石皿の断片である。56は石棒断片であり、表面は敲打で整形されている。本溝跡の確認面から出土した57は砥石で、鋸痕が認められることから中近世のものと思われる。

〔遺構の時期等〕堆積土中に白頭山古小牧火山灰が検出されていないことと、確認面から鋸痕を有する砥石が出土していることから、10世紀後半～中世に作られた溝跡と考えられるが、古代以降の遺物が出土していないため時期の詳細は不明である。本遺構はその形状や走行方向から水路として作られた可能性が高い。規模的には「新岡村領絵図 文政七年」にある「夷館」の濠跡である可能性も考えられるが、検出されたSD01の地点に堀切を施して地形的に分断させる必要性が考えられないため、その可能性は低いものと推定される。

第2号溝跡（SD02、図94-104）

〔位置・確認〕ⅡW-42・43、ⅡX-41・42グリッドに位置する。第V層で確認した。SD01と重複し、本遺構がSD01より古い。

〔平面形・規模・底面〕北西側は調査区域外に延びていて遺構の全容は不明だが、確認できた長さは9.2m、幅80～145cmで南東端は浅く先細りし、自然になくなる。この区域では上部が削平されていることから、本来は南東方向にもっと延びる溝であったものと思われる。確認面からの深さは11～36cmで、

断面形は上部が開く皿形をなしている。地山をそのまま底面としており、第V層を掘り込みやや起伏がみられる。南東端と北西端の底面の比高差は約10cmで、北西方向に底面は傾斜している。

[堆積土] 堆積土は、覆土上位は黒色土で、底面付近では黒褐色土が堆積している。

[出土遺物・遺構の時期等] 土器は、弥生(1・3)、縄文時代晩期(2・4・8)・前期(5・7)が出土している。弥生土器と思われるものは底面から出土した。石器類は、剥片1点、敲磨器4点、石皿2点が出土している。9は剥片、10～12は凹石、敲石である。13は石皿、14は台石である。出土遺物から弥生時代以降に作られた遺構と考えられるが、時期詳細は不明である。本遺構はその形状や走行方向から排水目的の溝として作られた可能性がある。

第3号溝跡(SD03、図95・97)

[位置・確認] II V・II W-34・35グリッドに位置し、第V層で確認した。SD05及びSX02と重複し、いずれよりも本遺構が新しい。

[平面形・規模・底面] 北側は調査区域外に延び、南側はSX02と重複していて捜査までは確認したがそれ以南はSD03を確認する前に掘り上げていたため、検出することができなかった。確認できた長さは3.0mで、幅87～97cmの直線的な溝である。確認面からの深さは30～37cmである。断面形は上部がやや開くコ字状をなし、しっかりした壁が立ち上がる。底面は第VI層を掘り込んで平坦に造られ、北端と南端の比高差は約10cmで北方向に底面は傾斜している。

[堆積土] 堆積土は、粘土ブロックと黒褐色土の混合土で埋め戻されている。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。遺構の重複関係から弥生時代以降の遺構と考えられ、短時間で埋め戻されたものとみられる。その機能は不明である。

第4号溝跡(SD04、図97)

[位置・確認] 調査時は溝跡と想定していたが、掘り込み範囲が広いため溝ではなく貯水池状遺構と考えられたことから「SX02」に名称を変更して報告することとした。

第5号溝跡(SD05、図95・97・105～106)

[位置・確認] II U-32～34、II V-32～34グリッドに位置し、第IV層で確認した。東側で接続しているSX02と同時期存在と考えられ、SD03より古い。

[平面形・規模・底面] 西側は調査区域外に延び、東側はSX02に接続している。確認できた長さは11mで、幅224～275cmの弧状を呈する。確認面からの深さは27～60cm、概ね30～45cmで、断面形は上部が緩やかに立ち上がる皿状をなしている。第V層を掘り込んで地山を底面とし、部分的に起伏があるものの、巨視的にみて東端と西端との比高差は約5～10cmあって、東にある貯水池状遺構(SX02)方向へ底面がわずかに傾斜している。西側では溝中央部が10～20cmほど、轍状に抉られている。

[堆積土] 堆積土上位は黒褐色土が堆積し、下位には砂質の黒色土や灰黄褐色土が堆積する。

[出土遺物・遺構の時期等] 覆土下位からは多量の自然礫が出土し、その中に土器片や石器といった遺物が少量含まれていた。1・2は同一個体の条痕文土器である。3～7は口縁部、8・9は胴部、10は台部である。7は磨かれていてしっかりと沈線が施文される鉢口縁部片で、底面から出土した。凹石(12～17)6点、台石(11)1点、自然礫(18)1点が出土している。堆積土の様相、出土遺物、貯水池状遺構等との関係などを考えると、縄文時代晩期終末期～弥生時代前期頃の遺構と考えられる。本遺構はその形状や走行方向から貯水池状遺構へ湧水等を導く導水路のために造られたものと考えられる。

第6号溝跡(SD06、図98・106)

[位置・確認] II T-31・32、II U-31・32グリッドに位置し、第IV層で確認した。SK07と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模・底面] 南北に延びる溝で、両端及び西側壁が調査区域外に延びていて全容は不明である。長さ7.5mは確認できたが、東壁の状況のみには幅は一定していないと推測され、南側は広く、2～4m以上あるものと推測される。確認面からの深さは34～61cmで、概ね50cm前後である。底面は第V層を掘り込んで地山を底面としており、断面形は丸底状の底面から上部が緩やかに広がる皿状をなしている。北西端と南東端との比高差は20～30cmほどで、南東方向に底面は傾斜している。

[堆積土] 堆積土は黒色土及び黒褐色土が自然堆積する。

[出土遺物・遺構の時期等] 北西部の覆土下半から自然礫が多量に出土し、それに遺物が少量混入していた。縄文晩期土器片(1)と敲磨器3点(2～4)を図示した。出土遺物や堆積土の様相などから縄文時代晩期大洞A式以降の遺構で、SK07が平安時代であればそれよりも新しくなる。その機能は不明である。

第7号溝跡(SD07、図98)

[位置・確認] II W・X-43～46グリッドに位置する。他遺構との重複は認められなかった。

[平面形・規模・底面] 本遺構周辺はりんご畑造成などによって削平されており、本遺構の両端とも自然に消滅している。確認できた長さは12mで、幅は110～170cmである。確認面からの深さは10～25cmで、東端と西端との比高差は約40cmで、西方向に底面は傾斜している。本遺構と重なるように攪乱があるため底面の状況は明確に把握できないが、丸底状の底面から緩やかに壁が立ち上がるようである。底面は第V層を掘り込み、地山をそのまま底面としている。

[堆積土] 堆積土上位は黒褐色土が、下位には暗褐色土が自然堆積する。

[出土遺物・遺構の時期等] 遺物は出土しなかった。堆積土の様相等から弥生時代～古代の遺構であると考えられる。本遺構はその形状や走行方向から排水等のために作られた可能性がある。

第8号溝跡(SD08、図60・106)

[位置・確認] II V-83、II W-82・83、II X-82グリッドに位置する。SK25・26・27・29・36より新しく、SX05より古い。

[平面形・規模・底面] SX05など他遺構と重複している部分が多く、調査区域外にも延びているため遺構の全容は不明である。堆積土の観察等によると、南から北へ延びていた溝がII W-83グリッド付近で北西方向へ屈曲して蛇行する溝と思われる。調査区内で確認できた長さは約10mで、確認面からの深さは約50cmである。断面形は土層セクション(C-Cセクション等)によると、西側は緩やかに屈曲なく立ち上がるが、東側は垂直に近い立ち上がりを示すようである。底面は凹凸がなく地山をそのまま底面としており、北西端と南端との比高差は約40cmで、北西方向に底面は傾斜している。

[堆積土] 北側大半は黒褐色土が堆積していて自然堆積と思われるが、南側C-Cセクションでは底面付近は明黄褐色土で埋め戻されている状況が窺える。

[出土遺物・遺構の時期等] 5～9は十腰内I式土器で、8・9は壺形土器の把手部である。10は弥生時代砂沢式土器の底部、11・12は縄文時代前期土器片である。石器は縦形石匙1点、叩折り搔器1点、凹石(13)、加工礫1点が出土している。白頭山苦小牧火山灰が堆積しているSX05より古く、土坑群より新しいことから、縄文時代晩期から弥生時代前半頃の遺構と考えられる。砂沢式土器は破片資料であることから、若干埋没が進んだ状態で覆土に流入したものと考えられる。本溝跡の目的は、本溝

跡の底面が傾斜していることから排水の可能性もあるが、砂礫等の堆積がみられず蛇行していることもあって、その機能は明確にできない。

第10節 貯水池状遺構

貯水池状遺構(SX02(旧SD04)・SX03、図97・107～108)

[位置・確認] 調査時は溝跡と想定していたため「SD04」として調査していたが、掘り込み範囲が広く、貯水池状と考えられたことから「SX02」に名称を変更して報告することとした。ⅡU～ⅡW-34～36グリッドに位置する。第Ⅳ層で確認し、東側で接続しているSX02と同時期存在と考えられ、SD03より古い。SX03として調査したピット列は、本遺構の付属施設と考えられる。

[平面形・規模・底面] 南北両端が調査区域外に延びていて南北方向の規模は不明であるが、確認できた東西の幅は10.5mで不整形をなすようである。確認面からの深さは西側では31～48cmと深いが、東側は13～27cmと浅くなっている。東壁以外の壁は屈曲なく緩やかに開きながら立ち上がるが、東壁のみしっかりと垂直に近い立ち上がりであることから、東側は溝として造り直された可能性がある。底面は第Ⅴ層を掘り込みやや起伏がみられる。北端と南端の底面の比高差は17～22cmあり、南方向に底面は傾斜している。

[堆積土] 堆積土上位は黒褐色土及び黒色土が主として堆積しており、底面付近にはぶい黄橙色土と細礫が互層に水平堆積している。

[付属施設] 西側にSX03として調査したピット列がある。大きく5基のピットからなるが、Pit1・3・5は2基の、Pit2は3基のピットがつながった状態と考えられる。ピット列の組み合わせとして、ピット2基の連結とピット1基の連結が考えられる。ピット2基が連結する組み合わせとしてPit2a・2b、Pit3a・3b、Pit5a・5bのセットが想定でき、各ピット間は60cmを測る。ピット1基が連結する組み合わせとしてPit1b、Pit2c、Pit4が想定でき、各ピット間は65cmを測る。ピット間の寸法が異なることから、検出された2基連結と1基連結のピット列は異なった時期のものと考えられる。2基連結のものは、さらに2時期に分かれるのか、大規模なものなのかは把握することができなかった。ピット底面は貯水池状遺構の方へいくに従って深く掘り込まれていることから、貯水池状遺構と一体的に造られたものと考えられる。ピットに柱材等を設置後、上部に板材を渡して連結することによって、これらピット列は貯水池状遺構へ降りていく通路、もしくは棧橋のようなものとして機能していたのではないかと想像される。

[出土遺物] SX02の覆土下位から多量の礫が出土し、それに混在するように縄文土器や石器などが出土した。図示し得る土器片は少なく、縄文時代晩期土器片(1・2)を図示できた。石器類は敲磨器4点、(北海道式)石冠1点、石皿6点が出土している。3は(北海道式)石冠である。凹石が複数出土している(4～7)。礫の平らな面に正面もしくは表裏に凹みがある。8・9は凹みを持つ台石、10は扁平礫であり幅広い平坦面を持つ台石である。緑有り石皿(11)や緑なし石皿(12・13)などが出土している。共に平滑な磨面がみられる。また、SX03の各ピットからは遺物は出土しなかった。

[遺構の時期等] 本遺構の東壁は西壁に比して約20cm低くなっている。このことは調査時にはまったく気づかなかつたのだが、整理作業を進めていくうちに本遺構の東側、ⅡW-39とⅡX-40を結ぶラインに地形の段差があることに気がついた。この段差の西側には並行するように白頭山苦小牧火山灰がまとまって検出されていて、西壁上部まで貯水された場合、水面の標高は159.1～159.3mになり、白頭山苦小牧火山灰の検出されたⅡW-39とⅡX-40を結ぶライン周辺の標高と同じレベルとなるこ

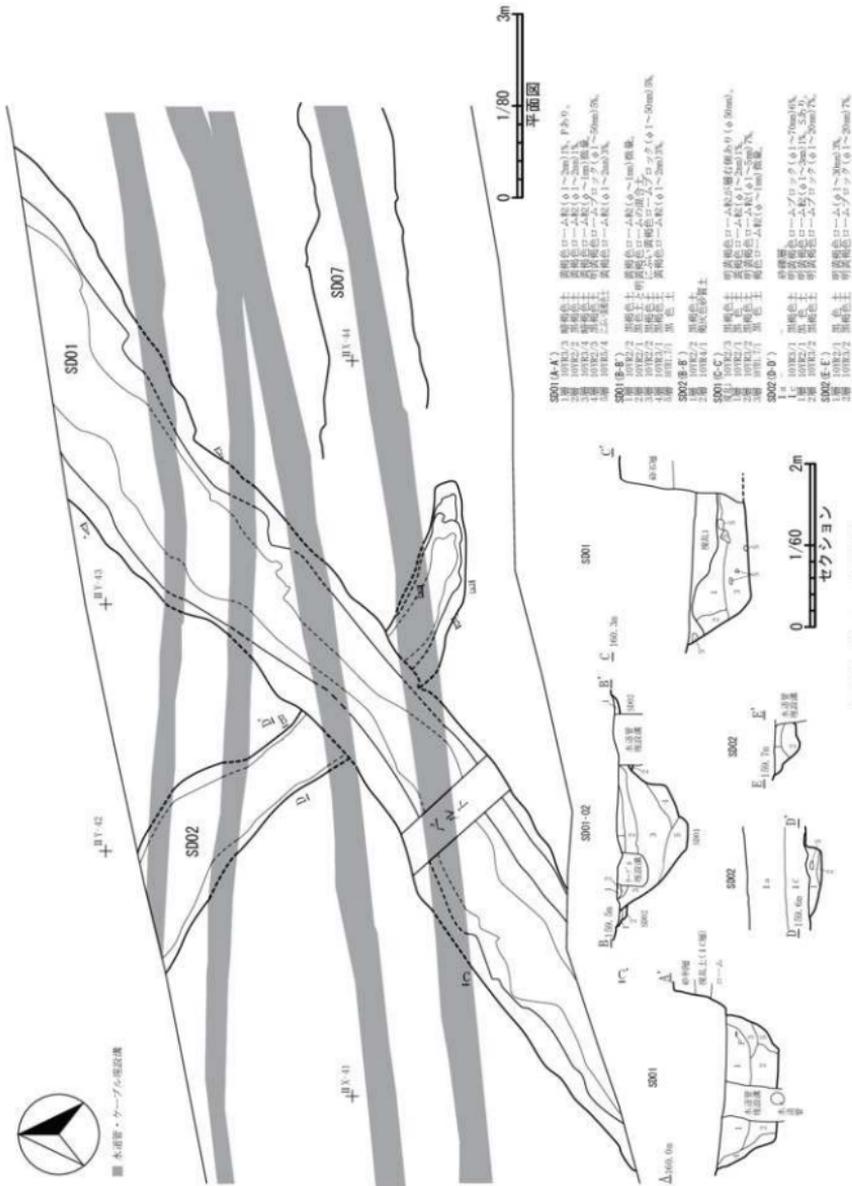


図94 第1・2号溝跡

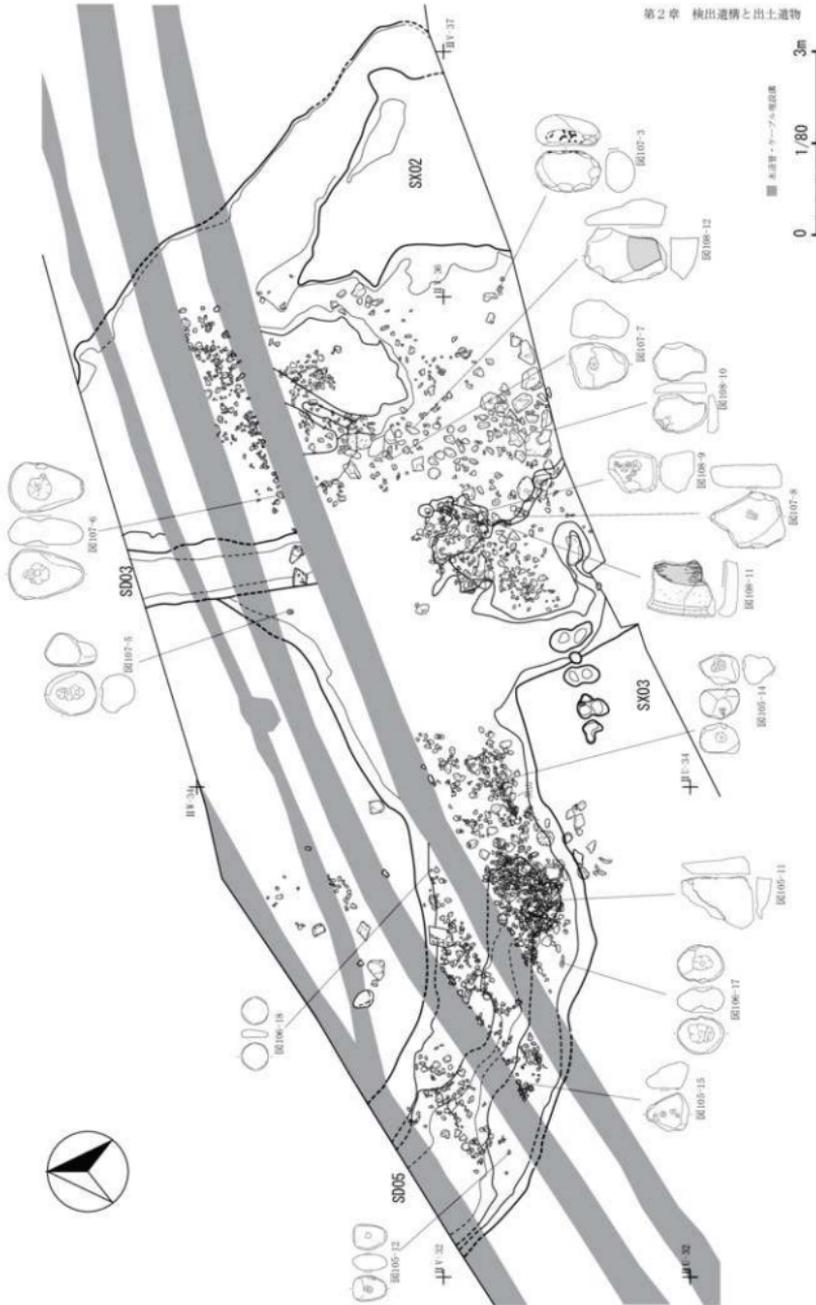


図96 第3号・5号溝跡、貯水池状遺構(2)

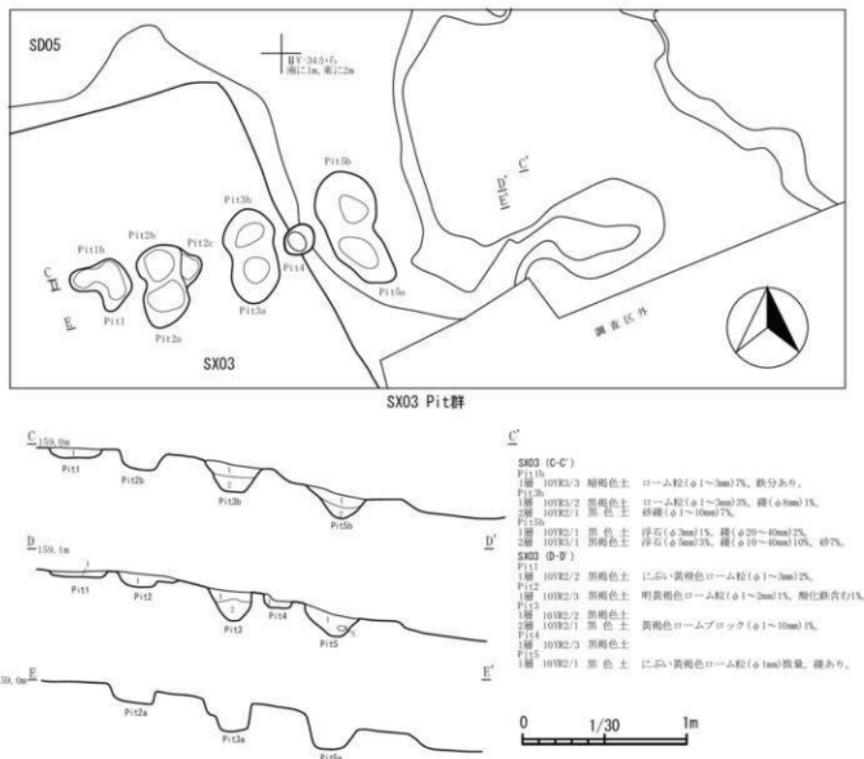
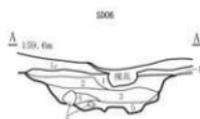


図97 貯水池状遺構（3）

とに気づいたのである。本遺構の東壁が西壁に比して低いのは、東壁付近で一度立ち上がるものの浅い掘り込みが続いていて、II W-39とII X-40を結ぶラインまで実は遺構が広がっていたのではないかと推察される。仮にそうであれば白頭山苦小牧火山灰の降下前に本遺構は構築されたもので、出土遺物の状況も勘案すると縄文時代晩期後葉から平安時代（白頭山苦小牧火山灰降下以前）に造られた遺構と考えられる。また、本遺構と本遺構に接続するSD05の出土遺物は、縄文時代晩期の大洞A式土器片がみられるが弥生土器や古代の土器片がみられないことから、縄文時代晩期終末期～弥生時代前期に作られ、平安時代まで開口していた可能性が高い。本遺構はその形状や堆積土の様相、ビット列(SX03)の存在などから、何らかの作業を行うために貯水した水利施設であった可能性が考えられる。



▲ 北 南 東・ケーブル埋設線



SD06 (A-A')

- 1層 101R2/2 黒褐色土
 2層 101R2/1 黒色土
 3層 101R3/2 黒褐色土
 4層 101R2/2 黒褐色土
 5層 101R2/1 黒色土

SD06 (B-B')

- 1層 101R4/2 黒褐色粘り土
 2層 101R2/2 黒褐色土
 3層 101R2/1 黒色土
 4層 101R1/1 黒色土

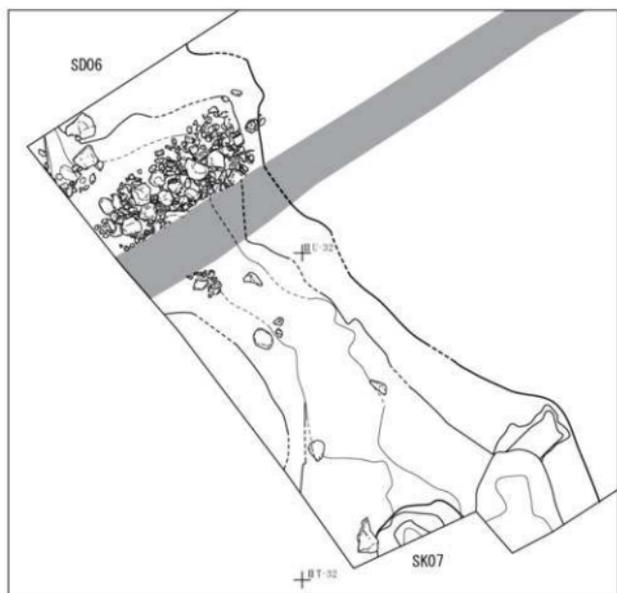
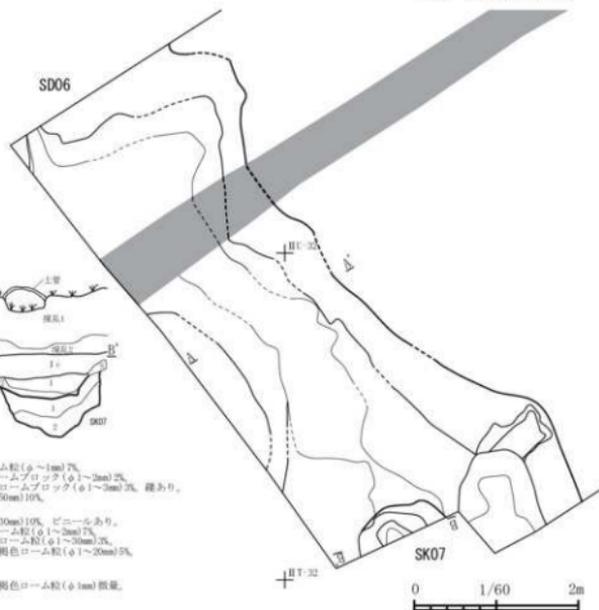
SK07 (B-B')

- 1層 101R2/2 黒褐色粘り土
 2層 101R1/1 黒色土

褐色ローム粒(φ1~1mm) 7%
 黄褐色ロームブロック(φ1~2mm) 2%
 明黄褐色ロームブロック(φ1~3mm) 2%、線あり。
 線(φ1~30mm) 10%。

線(φ1~30mm) 10%、ビニールあり。
 褐色ローム粒(φ1~2mm) 7%
 明黄褐色ローム粒(φ1~30mm) 2%
 にがい黄褐色ローム粒(φ1~20mm) 5%。

にがい黄褐色ローム粒(φ1mm) 散在。



標出土状況

図98 第6号溝跡・第7号土坑

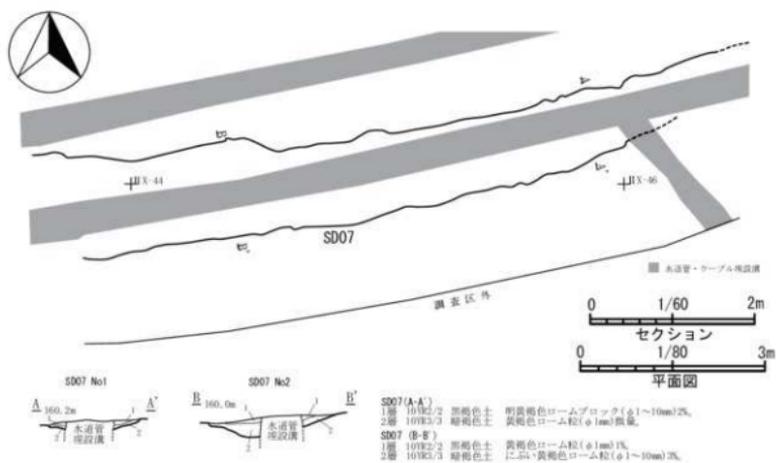


図99 第7号溝跡

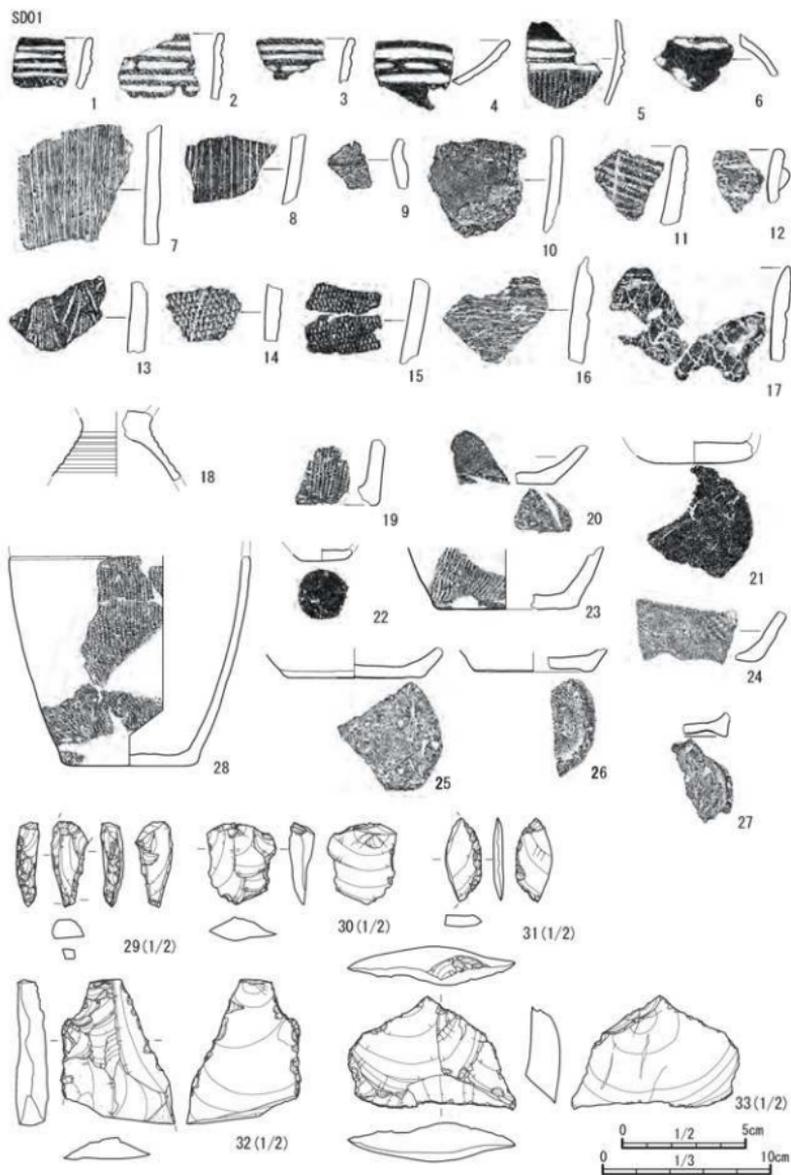


図100 溝跡内出土遺物(1)

SD01

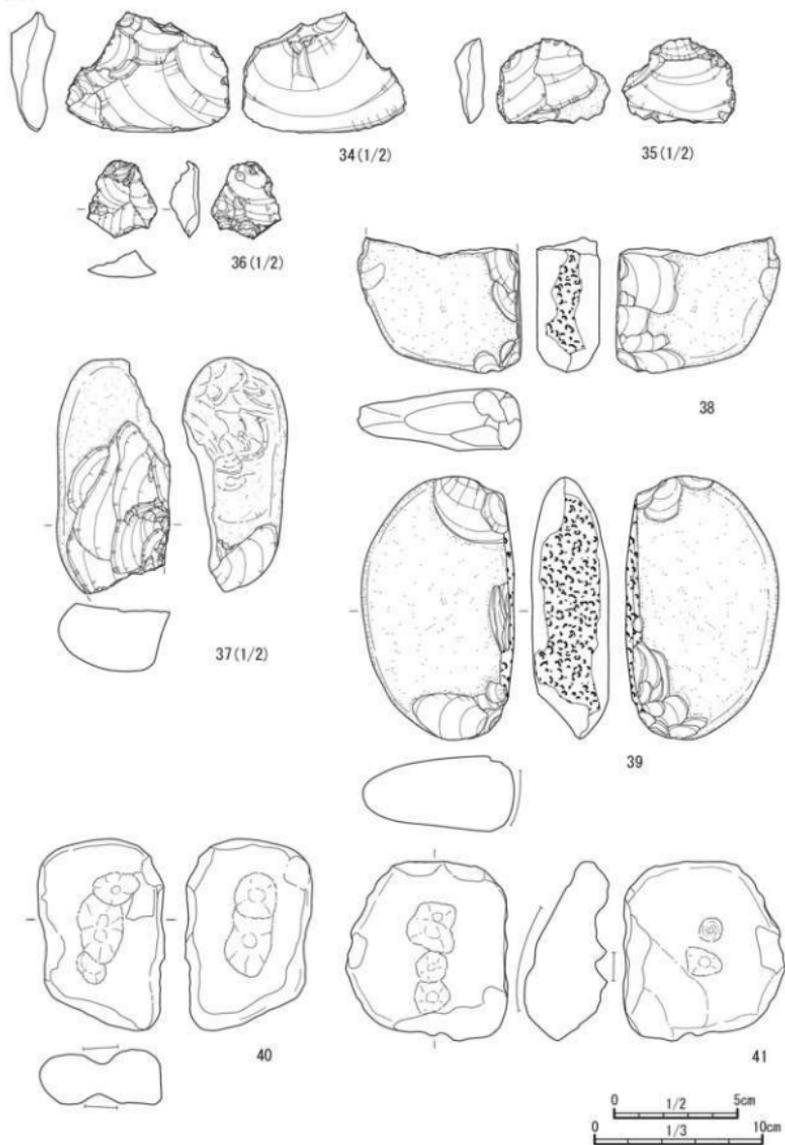


図 101 清跡内出土遺物 (2)

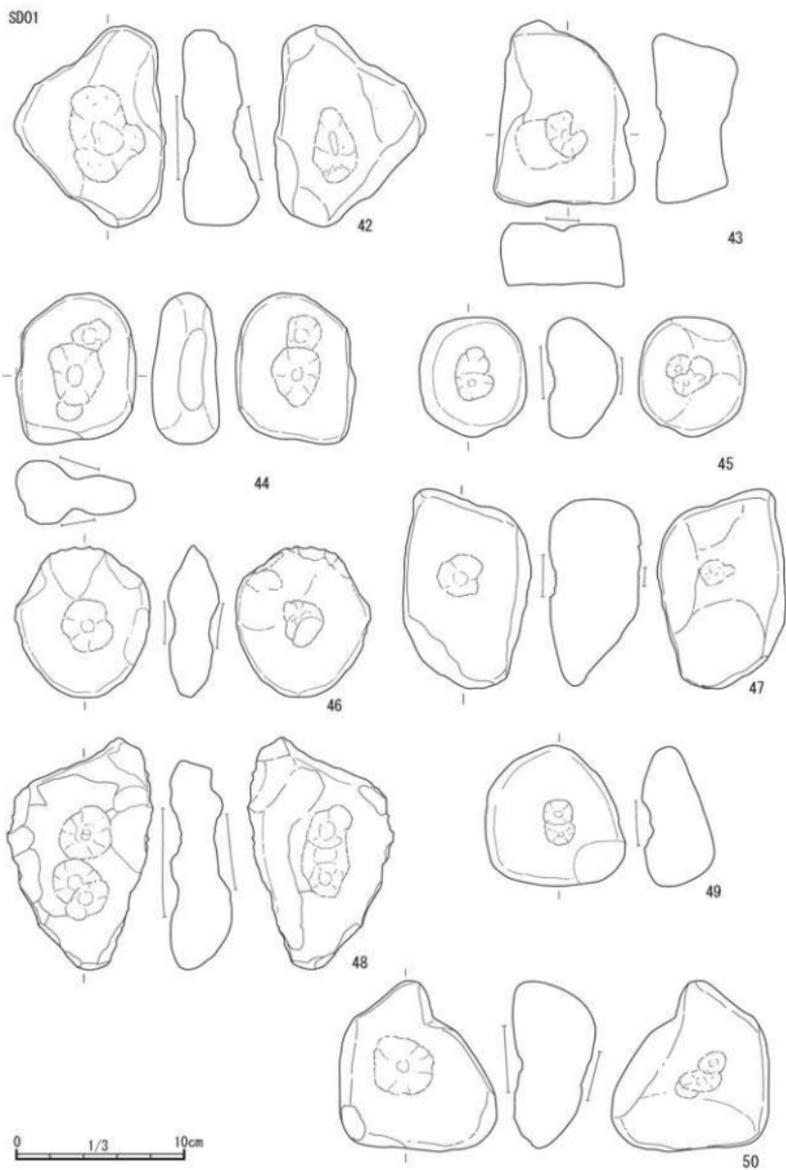


図 102 溝跡内出土遺物 (3)

SD01

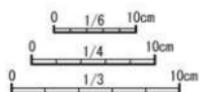
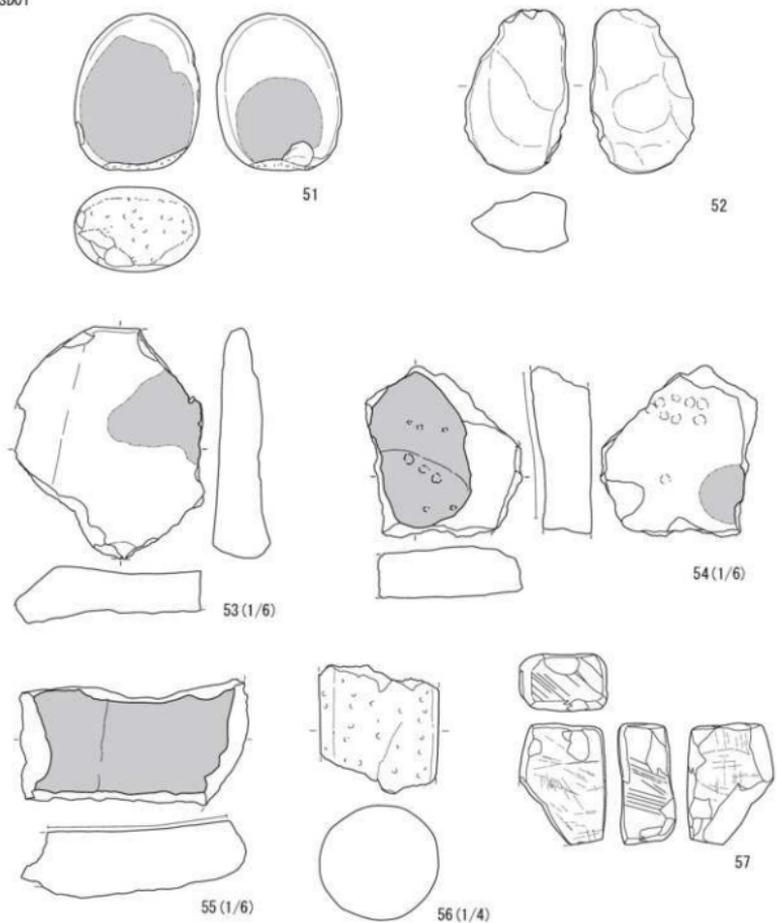


図 103 溝跡内出土遺物 (4)

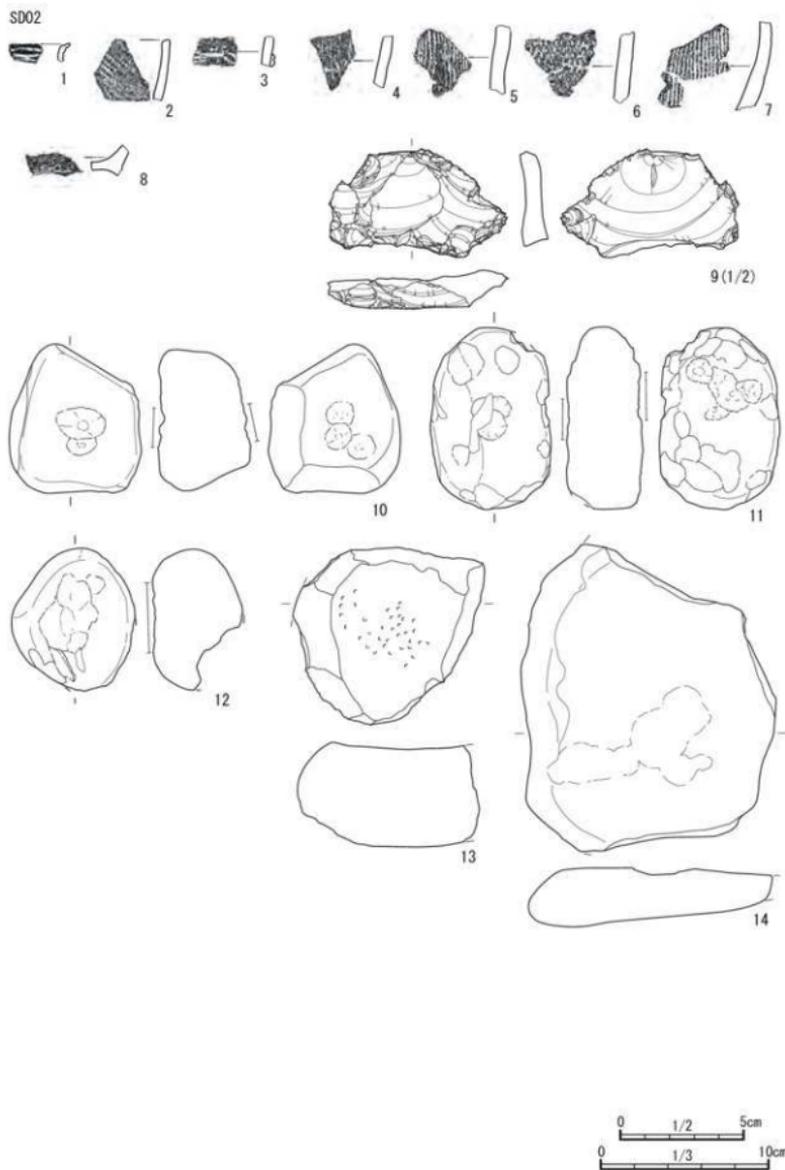


図 104 溝跡内出土遺物 (5)

SD05

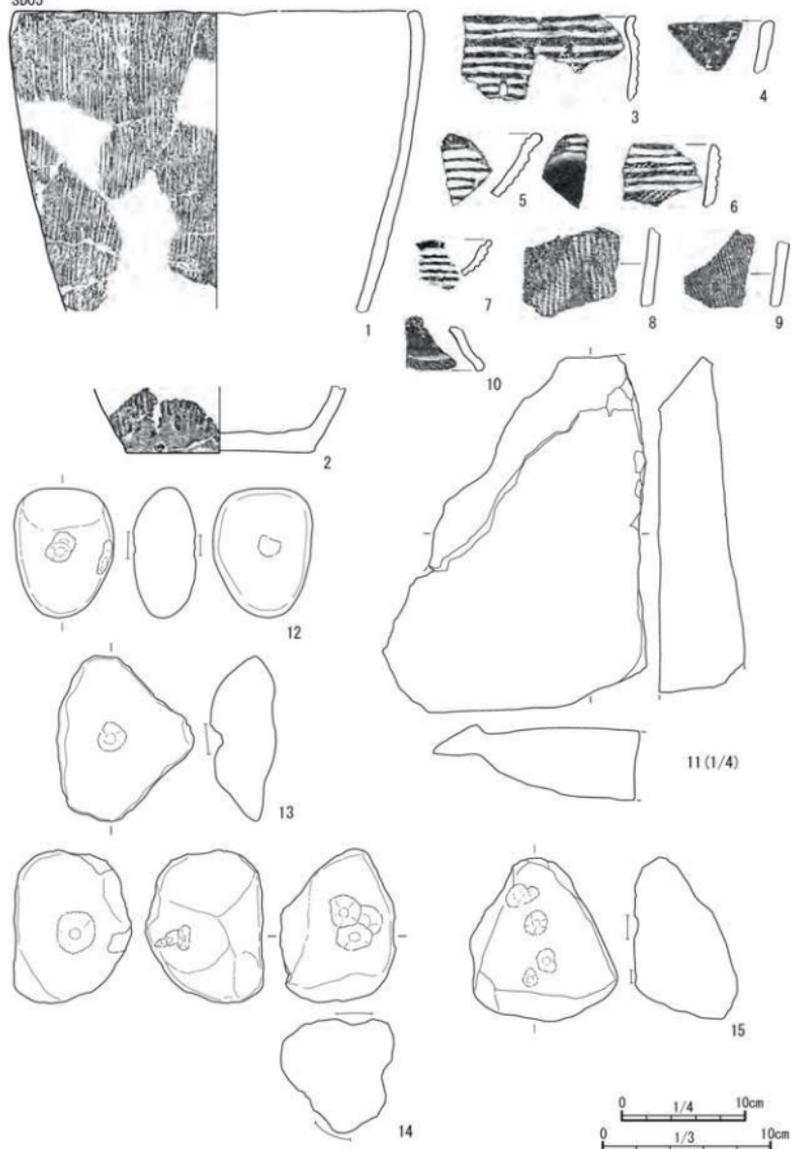


図105 溝跡内出土遺物(6)

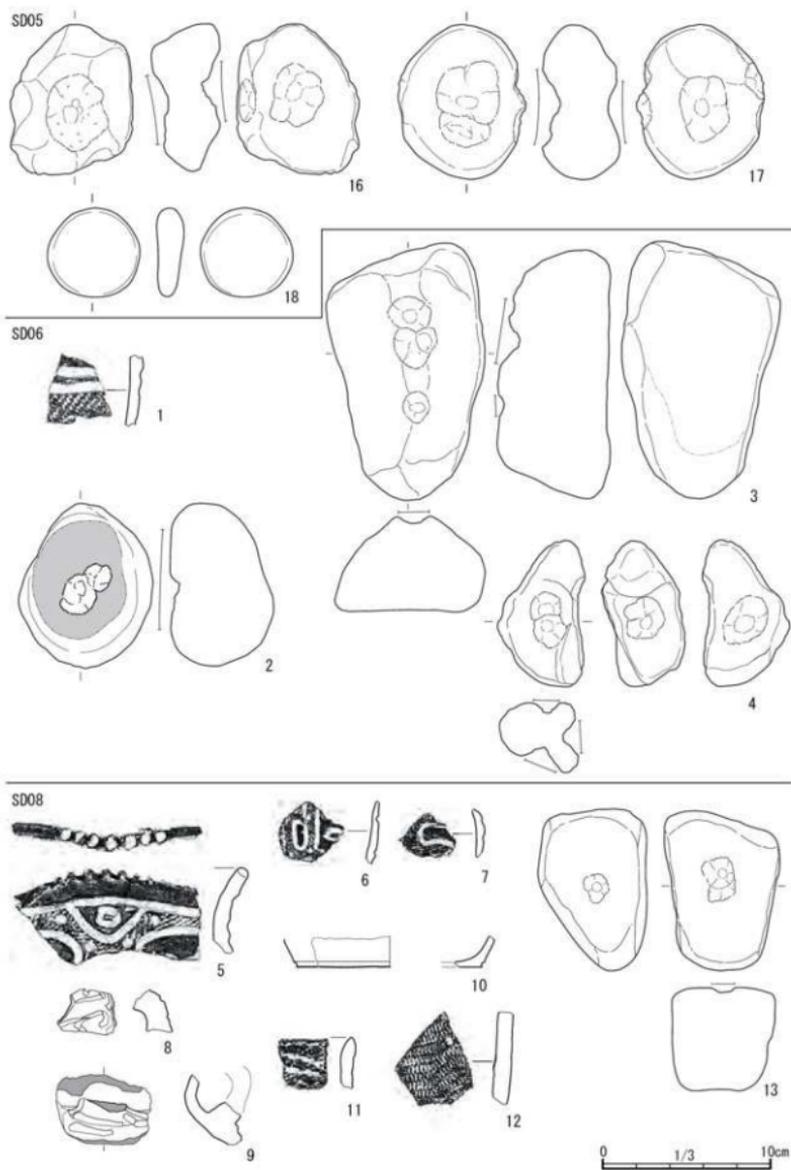


図 106 溝跡内出土遺物 (7)

貯水池状遺構

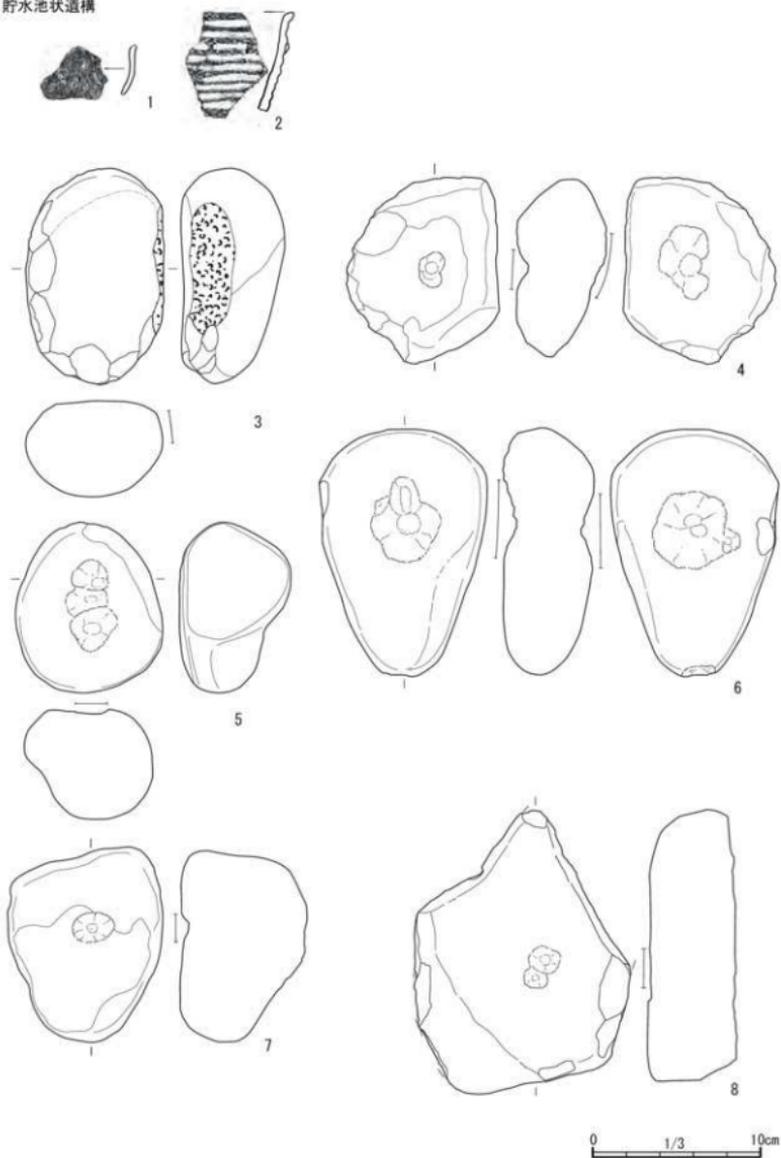


図107 貯水池状遺構 出土遺物(1)

貯水池状遺構

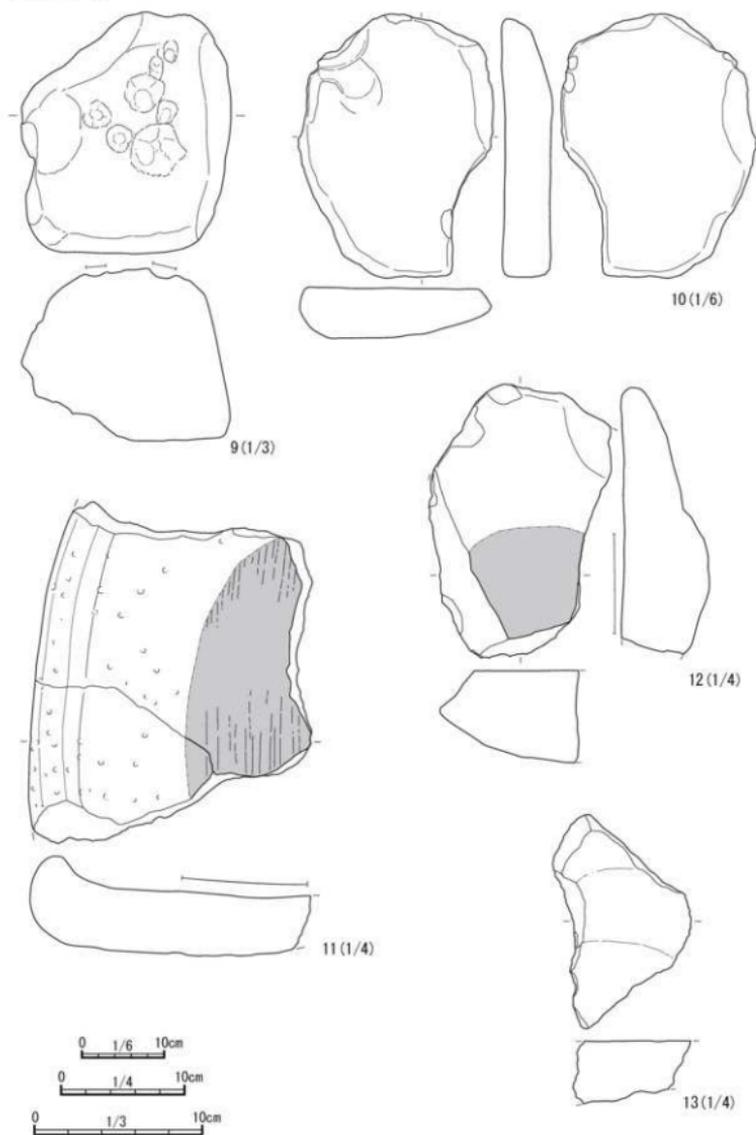


図 108 貯水池状遺構 出土遺物 (2)

第11節 盛土遺構(包含層2層(包2)、図109~196)

[位置・確認] ⅢCラインと63ライン間に位置する。遺物を包含する褐色土層(包2層)が広く分布し、その下位に黒色土層(包3・Ⅲ層)が存在していることから、当時の生活面(包3・Ⅲ層)上面に遺物を包含する土層(包2層)を盛りあげて、盛土を形成したものと判断された。縄文時代前期のSI08、SR10~14、晩期のSN10~25などより本遺構が新しく、SR07・09より古い。その他の遺構との新旧関係は、各遺構で確認いただきたい。

[規模] 調査区幅が約6~8mしかないため全体の規模は不明であるが、盛土遺構に関わる東端と南西端の直線距離は約50mである。その中で明瞭な盛土を形成している包2-C~H層が広がるのは約40mである。層厚は1mに達する部分もあるが、上位層は削平されていて遺存していないため本来の層厚は不明である。

[盛土遺構の把握と土層名称] 盛土遺構は調査当初、ⅢCラインから63ライン間に同一の盛土が形成されていると想定していた。それを確認するため、2つの方法で盛土遺構の状況把握に努めた。一つは昭和時代に設置された水道管及び水道ケーブルの埋設溝が調査区と重なって縦走していることから、これをトレンチとして先行して掘り下げ、縦断的な状況を把握しようとした。もう一つは概ね各グリッドに1m四方を基本とするトレンチ(1mトレンチ)を設定し、調査区(農道)に対して横断的な状況を把握しようとしたものである。1mトレンチの配置状況は図109のとおりである。その結果、盛土遺構は同質・一律に形成されているのではなく、地点や盛土時期によって土層(土質・混入物など)や廃棄方向、堆積の傾斜角度などが異なっていることと、地点によっては一時的に盛土が行われず地表面にさらされて黒色土が形成されていた時期が存在する(ロングセクション№3の「包2-D2(炭化物層)」や「包2-H0」など)ことが看取できた。そこで盛土層である包2層を、大きく「包2-A層」

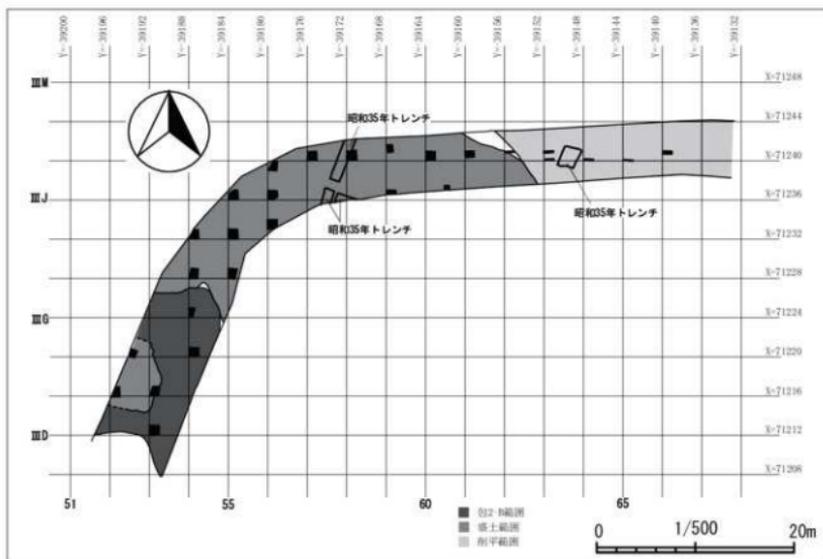
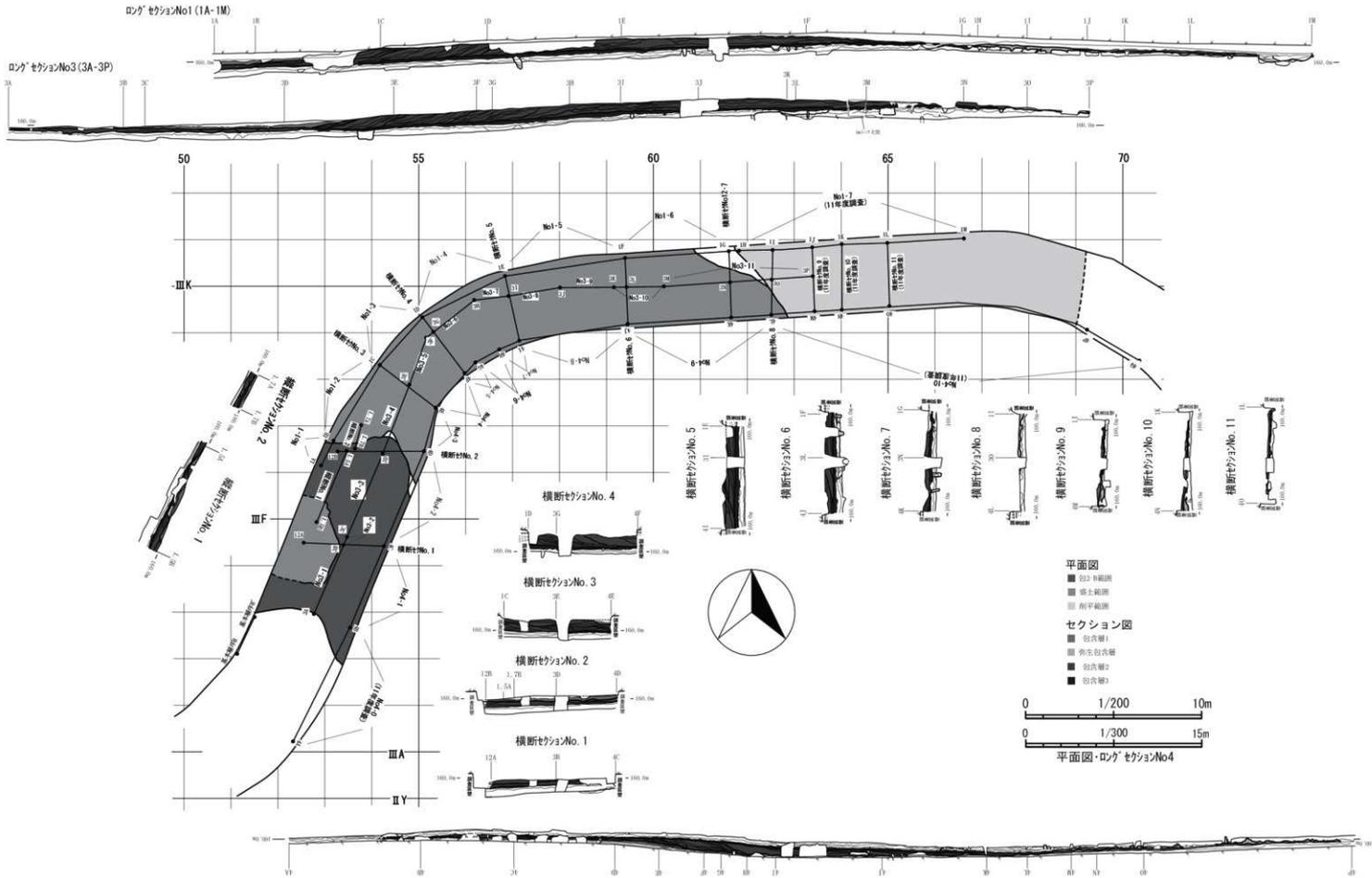


図109 平成23年度調査 1mトレンチ配置図



(dF-Vb) 44444444

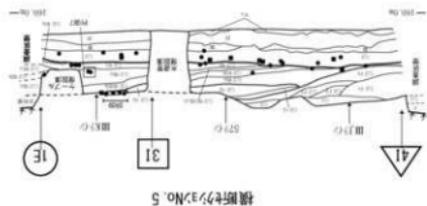
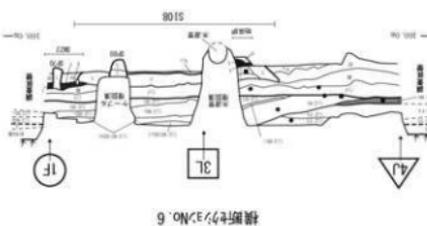
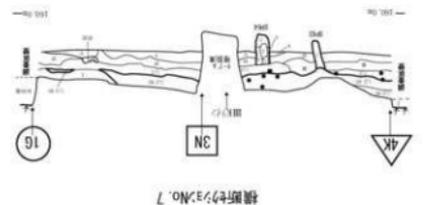
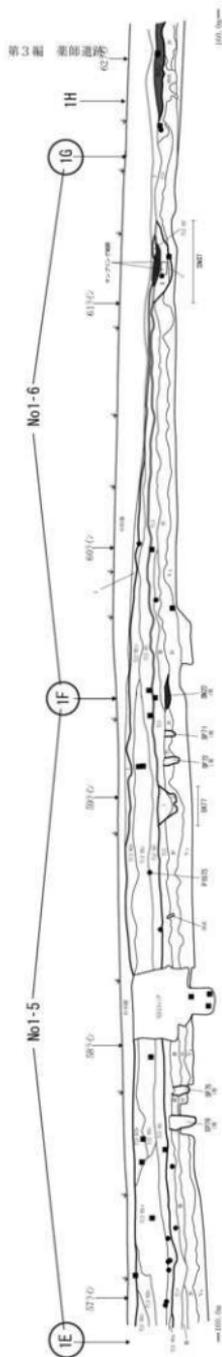
図110 盛土遺構・削平範囲のセクション等概要図

～「包2-H層」の8つに大別し、アルファベット末に算用数字を付して呼称することとした。また、必要に応じてさらに小文字アルファベットや特徴的な文言(「炭化物層」など)等を付加していき、立体的に広がる盛土層を把握するよう努めた。盛土層断面の記録にあたっては、調査区に平行する盛土遺構を貫く断面(ロングセクション)3本、調査区に平行する部分的な断面(縦断セクション)2本、調査区を横断しロングセクションと直交する断面(横断セクション)11本、計16本を図面と写真で記録した。各セクションの位置関係と概要は、図110に示した。3年にわたる調査と整理作業における記録地点の増設や中止、名称の変更などがあったことから、その経過を表12にまとめた。また土層写真撮影では土層名を写し込んでいるが、調査の進展に伴って土層名を変更したものがあり、写真よりも図版に記録されている土層名の方が優先されることを申し添える。

表12 盛土遺構・削平範囲のセクション名一覧

	22年度調査時名称	23年度調査時名称	報告書掲載名称	備 考
ロングセクション	調査区北壁セクション	ロングセクションNo.1	ロングセクションNo.1	
	—	ロングセクションNo.1.5	縦断セクションNo.1	
	—	ロングセクションNo.1.7	縦断セクションNo.2	
	—	ロングセクションNo.2	—	記録中止
	—	ロングセクションNo.3	ロングセクションNo.3	
	調査区南壁セクション	ロングセクションNo.4	ロングセクションNo.4	
横断セクション	—	横断セクションNo.12-1	横断セクションNo.1	
	—	横断セクションNo.12-2	横断セクションNo.2	
	—	横断セクションNo.12-3	横断セクションNo.3	
	—	横断セクションNo.12-4	横断セクションNo.4	
	—	横断セクションNo.12-5	横断セクションNo.5	
	—	横断セクションNo.12-6	横断セクションNo.6	
	—	横断セクションNo.12-7	横断セクションNo.7	
	62.2グリッドセクション	横断セクションNo.12-8	横断セクションNo.8	
	63.2グリッドセクション	—	横断セクションNo.9	
	64グリッドセクション	—	横断セクションNo.10	
	65グリッドセクション	—	横断セクションNo.11	

[各土層の特徴と細分] 8つに大別した盛土層は、土層観察の結果、南西側が新しく、北側もしくは東側の方が古いことが分かった。そこで南西側の最上層を包2-A層、そこから東側へ包2-B層、包2-C層…とし、東側の盛土最下層を包2-H層とした。包2-A層はロームを主体とする盛土層で、包2-B層は黒色土あるいは黒褐色土主体だが、互層状に黄褐色ロームが部分的に含まれる土層である。包2-C～G層は明瞭に傾斜堆積する盛土層で、いずれも黄褐色ローム層を主体として部分的に黒褐色土や暗褐色土が含まれる。これらは土質的に近似した土層であるが、傾斜角度に変化がみられることから盛土単位が異なるものと判断し、時期の新しい南西側から5層に大別したものである。包2-H層はにぶい黄褐色ローム土も含まれるものの黒褐色土～暗褐色土が主体となっている土層で、水平に近い堆積状況がみられる。調査時にこれら8層を十分に把握して掘り分けることができず、縦横に設定した土層観察用ベルトを残して掘り下げ、その後土層観察によって土層を把握した部分が多い。土層断面図をもとに各土層の平面的な広がりを推定したのが図118に示した盛土遺構の各層推定分布図である。以下、各土層の特徴を記載していく。



- 大塚面
- 地土被覆
- 新築及び改良
- 旧化被覆
- 上部
- 下部

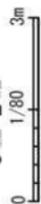


図112 盛土遺構 ロングセクションNo.1他(2)

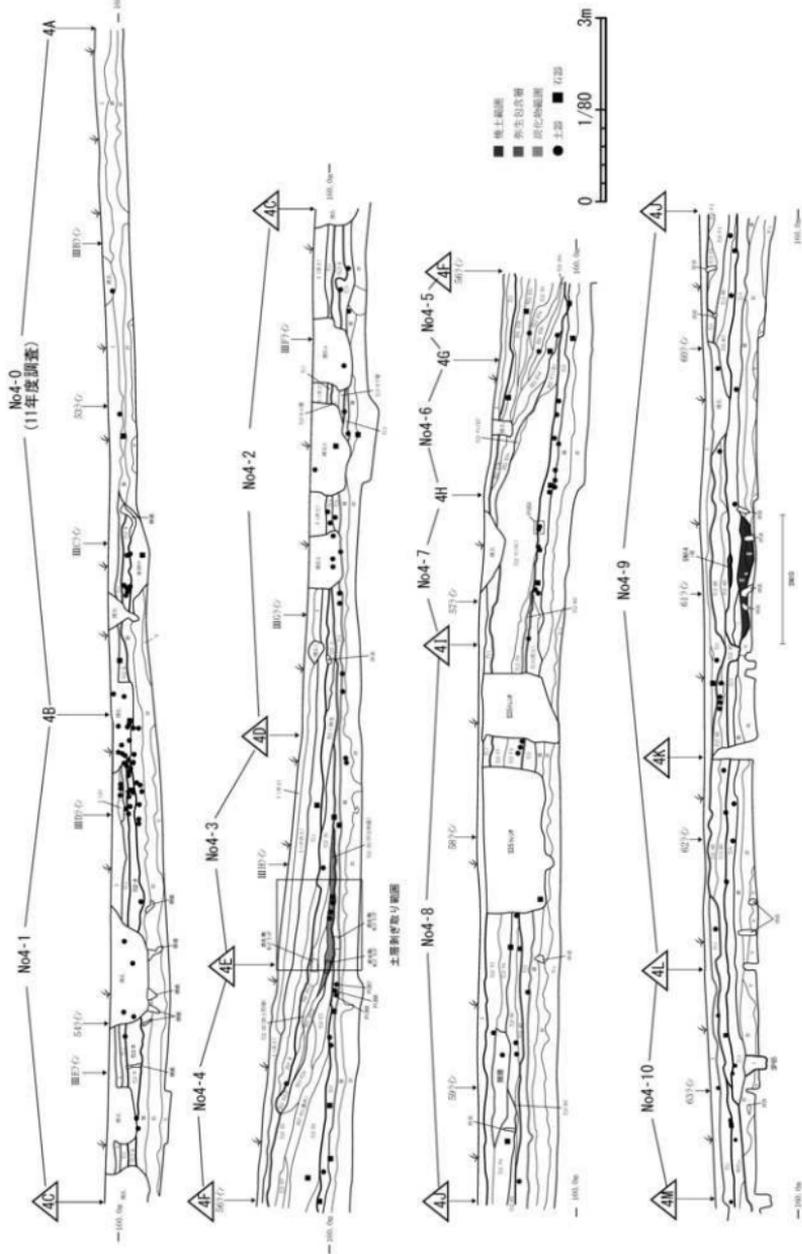


図116 盛土遺構 ロングセクションNo.4 (1)

包2-A層 本層は盛土遺構南西部、ⅢD～ⅢF-52・53周辺と、ⅢG・ⅢH-54周辺に点在する。ⅢG・ⅢH-54周辺のもの、北西から南東方向へ傾斜堆積している。ⅢD～ⅢF-52・53周辺のもの、マウンド状に堆積している。土層の東側末端は、傾斜して先細りしていることから、西から東方向へ盛土してマウンドを形成したものと考えられる。土質はいずれも褐色ロームを主体とし、層厚は最大22cmである。ⅢE-52グリッドでは弥生時代の遺物が出土していることから、その時期に形成された可能性がある。

包2-B層 本層は盛土遺構南西部、ⅢC～ⅢDラインとⅢG～ⅢHライン付近にかけて位置し、本層は地形的に沢部分に占地している。土質は黒色土・黒褐色土が主体だが、部分的にローム主体となる土層もある。ロームは斑状に堆積する部分があるが、巨視的には比較的水平に堆積して互層状をなす部分も存在することから、人為的堆積だけでなく、盛土遺構上部から水成あるいは風成作用によって土砂が流入して沢地形部分に再堆積したものも含まれるようである。ただし遺物は大きく動いておらず原位置を保っているようにみられることから、その作用は急激なものではなくゆっくりとしたものであろう。また遺物は重層的に重なるように出土していることから、人為・自然の両方で形成されたものと考えられる。層厚は通常20～30cm程度で、ロングセクションNa3-1や縦断セクションNa1では最大38cmに達する部分もあることから、包2-B上層と包2-B下層とに分けて遺物を取り上げたものも多い。包2層の中では最も遺物量が多く、壺類や玉類、土偶等も多く出土した。

包2-C層 傾斜堆積している盛土層(包2-C～G層)の中で最も新しい盛土層で、ⅢG-54・55周辺に小規模に存在する。北西から南東方向に傾斜堆積している。堆積土層は、黄褐色ロームを主体とする「包2-C層」と、褐色ロームと黒褐色土を含む「包2-C相当層」に細分された。層厚は最大14cm、通常10cmほどである。

包2-D層 傾斜堆積している盛土層(包2-C～G層)の中で2番目に新しい盛土層である。ⅢG・ⅢH-54・55、ⅢI-54周辺にやや広く存在し、北西から南東方向に傾斜堆積している。堆積土層は、D1、D2、D2(黄粘土層)、D2(炭化物層)、D2(粘土間層)、D2①、D2②、D2③、D3、D3・D4間層、D4の11層に細分された。黄褐色ロームもしくは褐色ロームを主体とし、層厚は最大40cm、通常30cmほどである。

包2-E層 傾斜堆積している盛土層(包2-C～G層)の中で3番目に新しい盛土層である。ⅢHライン付近から、ⅢJライン付近にやや広く存在し、西から東方向に傾斜堆積している。堆積土層は、E1、E1(a)、E1(b)、E1(炭化物層)、E2、E2(a)、E2(b)、E2(c)、E3、E3(黄色)、E3(褐色土層)、E3b、E3c、E3・E4間層、E4、E5、E5a、E5b、E5c、E5d、E5d(左)、E5d(右)、E5e、E6上層、E6(炭化物層)、E7、E8、E9、E9下層、E9相当、E10の31層に細分された。これらは全体的に褐色ロームを主体としており、部分的に炭化物や暗褐色土を含んだ盛土層である。確認できた層厚は最大70cmであるが、上部は削平されており本来の層厚は不明である。平成23年度に盛土遺構ⅢH-53グリッドに設定したトレンチで検出した「A式廃棄面」は、本層の最下部に相当する。

包2-F層 傾斜堆積している盛土層(包2-C～G層)の中で4番目に新しい盛土層である。ⅢJラインに重なるように東西に長い範囲で存在しており、北から南方向に傾斜堆積している。堆積土層は、F1、F1(右)、F1(左)、F2、F2a、F2b、F2c、F2d、F2e、F3、F4(黄粘土層)、F4・F5間層、F5、F5(黄粘土層)、Fxの15層に細分された。これらは全体的に褐色～黄褐色のロームを主体としており、部分的に暗褐色土が含まれる盛土層である。確認できた層厚

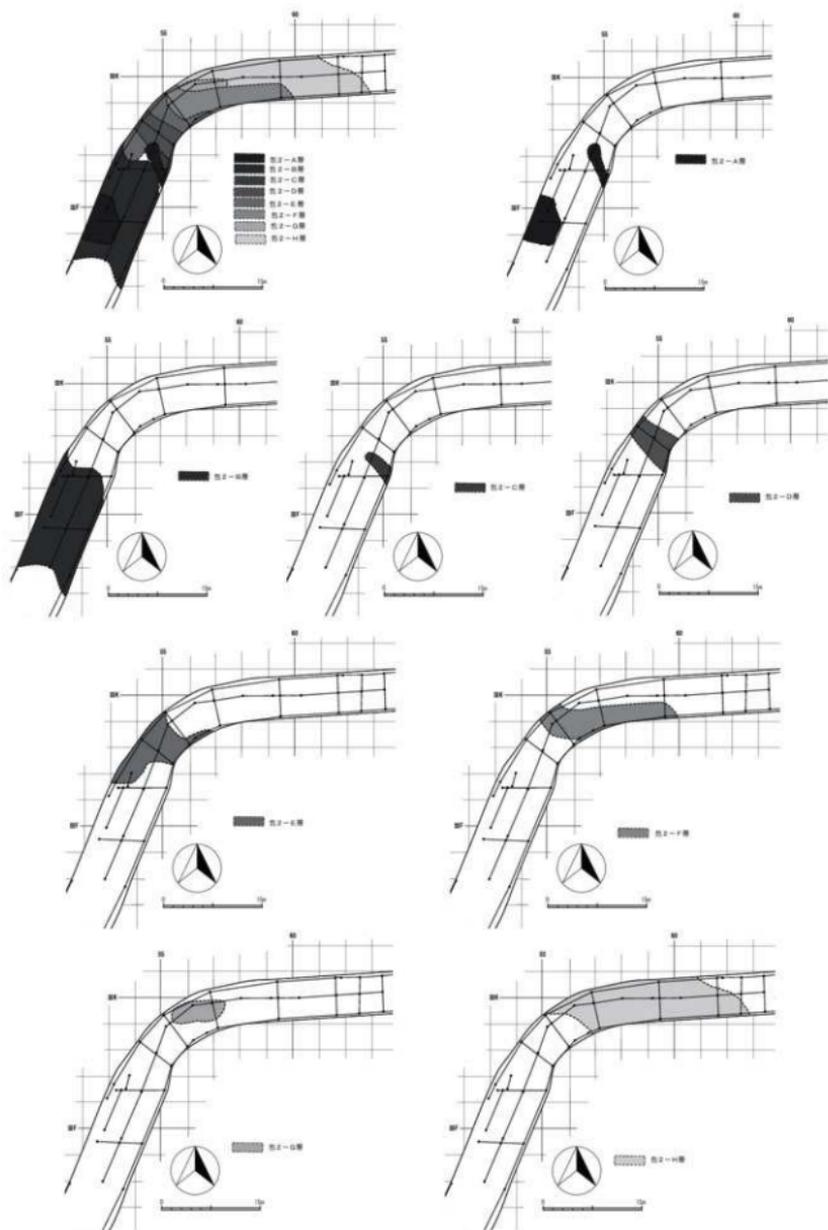


図 118 盛土遺構の各層推定分布図

は最大80cmであるが、上部は削平されており本来の層厚は不明である。また最大層厚が75cmの包2-F1層はロームの純度が高いことから単一土層としたが、堆積状況から細分できる可能性がある。

包2-G層 傾斜堆積している盛土層(包2-C-G層)の中で最も古い盛土層である。ⅢJ-55~57グリッド付近に存在し、北西部分は擾乱によって壊されていて断定できないが北西方向に延びる可能性がある。北から南方向に緩やかな傾斜で堆積し、堆積土はG1とG2の2層に細分されて、褐色土から黄褐色土が主体で部分的に暗褐色土が混在する。確認できた層厚は最大70cmであるが、上部は削平されており本来の層厚は不明である。横断セクション№5では、本層を掘り込んでSR09が作られている。

包2-H層 本層は盛土遺構の東半部を占める初期盛土で、盛土層の中では最も広い範囲に広がっている。グリッドで示すとⅢJライン付近より以東で、ⅢL-61とⅢJ-63を結ぶ範囲に位置している。堆積の様子は57ラインを境に東側では地形に平行した水平に近い堆積、西側では地形の傾斜に合わせて若干傾斜した堆積状況を示しており、いずれも北方向から堆積(盛土もしくは廃棄)されたものと思われる。堆積土層は、H0、H1、H2、H2a、H2b、H2c、H2d、H2e、H3、H3xの10層に細分された。包2-H0層はロングセクション№4と横断セクション№6の交点(4J)付近にのみ確認され、炭化クリ種実とプラントオパールが包含されていた。炭化クリ種実を年代測定したところ1,002calBC-892calBCという結果を得た。プラントオパールを分析したところ、ササ属、キビ族、ウシクサ族が含まれていた。詳細は第4章第2・9節にある。包2-H1層は60ライン付近にのみ薄層で検出された。包2-H2層は褐色ロームと暗褐色土の互層であり、包2-H3層は黒褐色土~暗褐色土が主体となっている。包2-H3層は包3層に面して接しており、包3層に覆い被せた状況が看取できる。その土色は黒褐色~暗褐色で包3層と近似していることから、別地点の包3層を剥ぎ取って包2-H3層としてこの地点に盛土したものと考えられる。包2-C-G層は褐色~黄褐色のローム質土が盛土されているため明瞭に盛土層と分かるが、包2-H3層も他地点から剥ぎ取った土を盛った盛土層と考えることができる。包2-H層の確認できた層厚は最大65cmであるが、上部は削平されており本来の層厚は不明である。包2-H1・H2でSR07を検出している。

[盛土層の区分と形成過程] 堆積土の様相を観察した結果、人為・自然の両堆積の可能性のある包2-B層の形成を挟んで、前の段階と後の段階に分けることができると考えられる。包2-B層の後に形成されたのは包2-A層のみで、包2-C-H層が包2-B層の前段階に形成されたものである。その中で包2-C-G層はいずれも褐色~黄褐色ロームが主体で、炭化物や焼土粒を含む近似した土層で、いずれも比較的急角度の傾斜堆積を示している。これらは傾斜角度や盛土(廃棄)方向が若干異なるものの、継続的、同一的な作業がもたらした結果でないかと思われる。ある一定の地点からある一定の方向へ盛土(廃棄)作業をしていたが、ある程度平らになった、もしくは供出元の地点を変えた、などの理由によって、盛土(廃棄)開始地点を変更(移動)させたものと想定でき、これが包2-C-G層に当てはまるのでないかと考えられる。つまり段階が異なる盛土(廃棄)作業であるものの、一連の継続する同一作業の所産と思われるのである。また、包2-H層に関しては、下位の包2-H3層は包3層と近似した土質であり、上位の包2-H2層では褐色ロームの混入率が增大することから、ある地点の包3層を削平して包2-H3層を形成し、その下位にあるⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層と削平した土壌で包2-H2層、包2-G層、包2-F層、…包2-C層と盛土遺構の形成が進んでいったものと推察される。以上のことから盛土層は、最終末期の盛土層である「包2-A層」、人為・自然両堆積の可能性のある「包2-B層」、明確な盛土層である「包2-C-G層」、盛土初期段階の「包2-H層」の4つに区分することができる。

〔出土遺物〕 出土遺物は上記の盛土層の区分に基づいて、包2-A層、包2-B層、包2-C～G層、包2-H層の4区分で掲載する。また平成23年度の1mトレンチ調査で出土した遺物は、土層把握する前に遺物を取り上げなくてはならないものもあった。帰属土層を推定できたものは包2-A～H層に振り分けて掲載したが、帰属層を推定できなかった遺物は包2-H層のあとにまとめて掲載した。

包2-A層

(1) 土器(図119)

土器は7点図示し、浅鉢・鉢である。4・7は大洞A式土器で、4はやや大型のもの、7は平行沈線上に貼り瘤がみられる浅鉢である。1・2・5・6は縄文時代終末期の土器で、1は変形工字文を施す波状口縁の鉢で口縁内面に沈線が1条巡る。2は平口縁で変形工字文が施され、低い瘤が貼り付けられる。入念にミガキが施されている。5・6は平行沈線と縦位短沈線を組み合わせているものである。3は、2単位の突起を有して、底部から口縁へ直線的に開く器形の鉢である。変形工字文と刺突によって、口縁から底部まで外面に文様が施文される。口縁内面及び口唇にも沈線が施され、弥生時代の五所式土器と思われる。

(2) 石器

石鏃5点、石錐5点、石匙4点、削器類5点、両極石器1点、二次加工剥片・石器断片9点、微細剥片11点、石核6点、半円状扁平打製石器1点、敲磨器2点、加工礫1点の計50点出土している。これ以外に剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は4,019.2g、礫石器の出土重量は856.2gである。

【石鏃】(図120-1～5) Ata4点(1～4)、Ab(5)1点の計5点を図示した。

【石錐】(図120-6～10) Ca(6)1点、Cb(8～9)3点、Cc(10)1点の計5点図示した。6は素材の縦折れ面に加工をいれ、錐部を作出している。8から9は先端が摩滅している。10は縦長剥片の末端部に急角度の尖頭状を作出している。いくぶん摩滅している。

【石匙】(図120-11～14) Fa4点図示した。

【搔器・削器】(図120-15～18) Ga1(15)が1点、Ga2が1点、Gb1(16、17)が2点、Gb3(18)が1点あり、その中から4点図示した。

【微細剥片】(図120-19) 素材横長剥片の末端を刃部としている。刃部は強く摩滅している。

【半円状扁平打製石器】(図121-20) 安山岩の扁平礫を素材とし、ザラザラした磨面2がみられる。

【敲磨器】(図121-21・22) Qa2点図示した。

【加工礫】(図121-23) 扁平円礫の一面に擦痕がみられる。

【自然礫】(図121-24) 凝灰岩の扁平円礫である。

(3) 土器製品

土器製品は4点図示、石製品は5点中、2点図示した。

【土製品】(図121-25～28) 25・26は鉢形のミニチュア土器である。27は土偶の上半身部の断片で、背中に1条の沈線がみられる。頭部の破断面に黒色付着物がある。28は無孔の土製円盤である。

【平玉】(図121-29・30) 緑色凝灰岩製の平玉1である。両面穿孔である。

包2-B層

(1) 土器

【縄文時代後期の土器】(図124-1) 1は縄文時代後期後葉、十腰内IV式頃の壺もしくは注口土器の胴

部片で、包1層(図208-2)、I層(図283-1)と同一個体と思われる。

【浅鉢・台付き浅鉢】(図124-2~10、図126-1~9) 図124-2・3は器高が低く、皿ともみることができ器形である。4は口縁に山形突起があつて、頸部に4条の沈線が廻り、突起下部に2個一對の瘤がみられる。5~7は台付き浅鉢で、5の台部には矢羽根状沈線がみられる。7は壺(図132-2)に被せたような状態で出土した。8は四脚を有する浅鉢だが、一脚が欠損しており現状では三脚が遺存している。口縁に山形突起が4単位あり、その両側にB状突起が付く。頸部には工字文が廻り、地文にはLR縄文が、胴部と脚部の区画には沈線1条が施される。内面は、口縁に1条、底面見込み部分にも1条の沈線が廻っている。9・10は大型のもので、9は台付き浅鉢だが、10は台の有無は不明である。図126-1~9は、規格性の高い台付き浅鉢で、胴部には工字文が施文されるが、台部には平行沈線のもの(4~6)と工字文のもの(7~9)がある。基本的に平口縁であるが、4・5・7には突起がつけられている。

【鉢・台付き鉢】(図124-11~図125-18、図126-10~17) 11・13・14は無文の鉢形土器で、13・14には台部が作られている。12は口縁部に1条の沈線のみが廻り、内面には付着物がある。15は台部を有する片口土器で、頸部に不明瞭な沈線を巡らして、胴部との境界に段差を生じさせている。片口の先端は欠損しているが、片口両側の口唇部にB状突起を有している。図125-1は外面上部に工字文、下部に矢羽根状沈線が施文されている。2・3は器高がやや低いもので、2は直線的に開く器形で平行沈線と工字文が施文され、3は丸みを帯びながら垂直に立ち上がり口縁に3条の平行沈線、地文にLR縄文が施文される。4~18は小型深鉢の器形をなすもので、口縁に平行沈線を施すもの(4~12)、地文縄文のみのもの(13~17)、無文のもの(18)がある。口縁に平行沈線を施すものには、沈線間に瘤を有するもの(5~7・10・11)と平行沈線のみもの(4・8・12)がある。8の口唇には刻みが、9の口縁には2個一對の突起が見られる。15口唇には押圧により小波状口縁となっている。18は最大径が胴部やや上部にあつて、そこから大きく内湾する器形である。

図126-10~17は台付き鉢形土器である。10・11は胴部に入り組み沈線文がみられ、口縁には2個一對の山形突起がみられる。12~15は入り組み沈線文が見られず、平行沈線(12)や工字文(13~15)が施されるものである。16・17は頸部に無文帯を有するもので2個一對の突起が4単位ある。16の頸部下端には眼鏡状文がみられる。

【深鉢】(図127-1~図130-5) 1・2は器高が低く、大型の鉢ともみることができ。平行沈線に2個一對の突起が見られるもの(図127-1・2・5・6)、口縁に平行沈線が廻るもの(図127-3・4、図128-1~3、図129-1・2)、頸部が無文となるもの(図127-7、図129-3)、縄文が全面に施文されるもの(図129-4、図130-1~4)、条痕文が全面に施文されるもの(図130-5)がある。

【壺】(図131-1~図132-8) 1~4はミニチュア壺で、1は無文の無頸壺、2・3は口縁部を欠く無文壺、4は最大径が底部下半にあつて地文縄文を施文する壺である。5~12は規格性が高い無文壺で、口縁に山形突起が付くようであるが、欠損しているものもある。6は頸部が破損したもので、補修孔が胴部と頸部に3個ずつ穿たれている。これらと器形が異なる無文壺が図132-1~3である。4は胴部上半に工字文が施され、口縁部に鋸歯状の隆帯がある。5は胴部中央に最大径があつて、頸部が直立するやや大型の壺で、縄文が施文される。縄文の有無と法量に違いはあるが、器形的には2と5は類似する。6~8は広口壺で、8は頸部に工字文、口縁には突起を有する。6・7は、ともにⅢF-53グリッド内の包2-B層下層から出土したものである。器形・胎土・調整技法等が酷似し、文様は法量が小さい6は簡略・省略されているが、大小セットのものともみられる。包2-B層では、

壺2点がセットで出土しているものが見ついた。図131-5・10、図131-8・9、図131-11と図132-2、図132-1・8などで、何らかの意図があって2個並べて置いたものと推察される。図132-2の壺には浅鉢(図124-7)で蓋をした状況であった。

(2) 石器

石鏃250点、石槍2点、石錐41点、石筥8点、両面調整石器16点、石匙43点、削器類103点、二次加工剥片1点、両極石器43点、二次加工剥片・石器断片145点、異形石器2点、微細剥片105点、石核107点、磨製石斧3点、半円状扁平打製石器1点、敲磨器19点、石錘1点、石冠3点、石皿類5点、擦切具1点、加工礫5点の計904点が出土している。これ以外に多量の剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は68,785.2g、礫石器の出土重量は41,925gである。

【石鏃】(図133-1～図136-217) Ata171点(1～164)、Atb17点(165～181)、Atc1点(182)、Aa19点(183～197)、Ab1点(198)、Ac1点(199)、Ad3点(200～202)、Az17点(203～210)、Ay20点(211～217)に分類できる。Ataが大半を占める。石材は大半が珪質頁岩であり、若干赤色の珪質頁岩(144)、玉髓(25・189など)や鉄石英(85・116など)がある。図示していないが、黒曜石製の石鏃(整理番号3098)の先端部が出土している。

【石槍】(図136-218、219) 218は貝殻状剥離による両面加工で、一端が尖頭状である。219は断面が三角形の形状である。

【石錐】(図137-220～247) Ca(220～230)は21点、Cb(231～241)は11点、Cc(242～247)は8点、Cz1点であり、28点図示した。232は玉髓製で小形である。242、243は折れ面利用の石錐である。247は縦長剥片の素材末端部が摩滅している。

【石筥】(図138-248から253) 刃部が平がる撥状や、胴部中央が膨らむ形状がある。250は長さと同幅の段差がない寸詰まりの形状であり、他は縦長の形態である。249は加工が他の石筥と比較して粗い。

【両面調整石器】(図138-254、255) 254は、形状から石筥と思われる。255は一端が折れている。

【石匙】(図139-262～図141-296) Fa1が17点、Fa2が1点、Fbが22点、Fzが3点である。35点図示した。Fa(262～276)は、多くは刃部が両面加工である。272～276は摘まみ部のみ加工がある粗製品である。Fb(277～296)は、刃部両面加工がほとんどである。283はミニチュアのFbである。296は摘まみ部のみ加工がある粗製品である。

【搔器・削器】(図138-256～261、図142-297～図143-322) Ga1が7点、Ga2が13点、Gb1が66点、Gb2が11点、Gb3が7点であり、32点図示した。

256～258はGa1(搔器)である。259～261は側面を叩き折りで加工したGa2の搔器である。261は刃部が素刃であり搔器とはいえないが、便宜的にこの分類にいった。

削器として、297～305は削器Gb2である。片刃が山形に膨らみ、片刃は直線に近い外湾形状である。山形に膨らむ側に数点アスファルトが付着しており、こちらは基部であり、直線に近い外湾形状が刃部と思われる。刃部は両面・片面加工とあるが、基部側はすべて両面加工である。302は内湾側に肉眼でも光沢がみられ、305は横長剥片を素材とし打面側が両面加工で肉眼でも光沢がみられ、こちらが刃部と思われる。

これ以外に多数の削器(306～318)が出土している。両側面、片側面、片面・両面加工とある。306は縦長剥片を素材とし、素材打面側に反方向の貝殻状剥離、末端にかけて平行剥離の両面加工で尖頭状の刃部を作出している。310は反方向から平行剥離で刃部を作出している。311・315は調整打面を持つ。316は縦長剥片の末端部が鋸歯状に加工されている。318は縁刃が反方向から鋸歯状に加工され、

素材打面は調整打面である。319～322は素刃削器Gb3である。321は抉りを持つ。

【**微細剥片**】(図144-323～327) 5点図示した。323は左辺に肉眼でも光沢がみられる。324は強い磨減がみられる。326は裏面の広い範囲にアスファルトが付着している。

【**両極石器**】(図144-328-329) 2点図示した。

【**異形石器**】(図144-330-331) 330は水性摩耗がみられ、ノッチ状に加工されている。331は鋸形である。

【**石核・剥片**】(図145-332～図146-346) 石核は107点である。打面転移の頻繁に行われた石核が多い。332～338は珪質頁岩製、339～343は黒曜石製の石核である。剥片(344)、礫端片(345)、自然礫(346)がある。産地分析の結果、出来島産であった(第4章第7節参照)。

【**磨製石斧**】(図147-1～3) 1は完形品で、敲打と研磨で整形している。特に側面の敲打が顕著である。2は敲打と研磨で整形している。刃部が欠損したあと、再加工している。3は、基部側の半割れ資料であり、研磨で整形している。

【**二次加工剥片**】(図147-4) 流紋岩の剥片を素材としている。右辺の両面に小さな剥離がみられる。

【**半円状扁平打製石器**】(図147-7) 剥片素材である。素材の幅が狭い面に磨面2が形成されている。

【**(北海道式)石冠**】(図147-5・6・8) 扁平礫を素材とし、周囲を剥離で加工している。

【**擦切具**】(図147-9) 全面研磨整形されている。左辺は剥離痕が残り、右辺は剥離がない。右辺側面に面取りの研磨がみられる。

【**敲磨器**】(図148-10～図149-23) Qaは9点、Qbが3点、Qcが7点に分類できた。Qa(10～15)は、垂角礫を素材とし、主に素材の幅広い面を中心に凹みが形成されている。特に10はほぼ全面に凹みがみられる。Qc(16～20)は、5点図示した。16は珪質頁岩を素材とし、ほぼ全面に敲打痕がみられる。17は両端に敲打痕がみられる。18は正面に敲打痕がある。19は長い棒状礫の両端に敲打痕がみられる。20は礫の一端に敲打痕がみられる。Qb(21～23)は、3点図示した。21は花崗閃緑岩の楕円礫を素材とし、意図的に叩き折ったと推定される。22は垂角礫の平坦な面に磨面がみられる。23は円礫の両面に磨面がみられる。長軸に直交して線状痕がみられる。

【**石錘**】(図149-24-25) 扁平礫の一端に加工がみられる。

【**石皿類**】(図150-26～29) Ta1が2点、Ta2が1点、Tcが2点に分類できた。Ta1は2点図示した(26-27)。共にガラス質安山岩を素材とし、敲打整形である。26は赤色顔料が付着した緑有りの石皿である。機能面を逆さにした状態で出土した。裏面に凹みがある。側面に鋭い加工痕がある。亀ヶ岡遺跡雷電地区、五所川原市観音林遺跡で線刻石が出土しており、それらの資料の痕跡ほど鋭い痕跡ではない。28-29はTcであり、凝灰岩や粗粒玄武岩を素材としている。

【**加工礫**】(図150-30～33) 30は扁平礫の長軸両端に研磨痕がみられる。31は扁平礫の長軸一端と側面に研磨痕がみられる。素材は凝灰岩である。32はチャートの大形礫を素材としている。チャート製の石器がほとんどないため、石核というよりは礫器の類いと考えられる。33は安山岩製であり、剥離で急角度の加工がなされている。礫器の類いと考えられる。

(3) 土石製品

土石製品は75点図示した。石製品は145点出土し、76点図示した。

【**ミニチュア土器**】(図151-1～24、図156-75) 1～3は壺形である。1は沈線と隆帯で文様が表現され、他の2点は無文である。4は鉢形である。角状の突起が2つあり、穿孔がみられる。文様は基本的に平行沈線である。鉢形土製品は昭和33年調査の薬師I号遺跡Cトレンチ(大洞C1式期)でも出土している。5～8は高坏形である。文様としては平行沈線のみである。9～11は壺形である。文様は

基本的に平行沈線である。12～20は鉢形である。12は条痕を持つ鉢形である。14は平行沈線が施文され、4単位の突起を持つ。15も平行沈線が施文されている。

断片資料として、21は底部片であり、沈線による文様がある。22は波状口縁である。23は底部辺りと思われるが、詳細は不明である。24は三角形の形をした有孔土製品である。側面に貫通孔がある。青森市稲山遺跡や小牧野遺跡で類例が確認されている。図156の75は四脚土器の底部片である。

【土偶】(図152-25～図156-59) 結髪形土偶や刺突文土偶が出土している。25は、頭髮部と左腕が欠損している。隆帯・沈線・竹管の工具による刺突で文様などが表現されている。仮面土偶のような顔の作りである。26は文様がないが、指圧で股部をくぼませ、陰部を表現している。背中に細い沈線が縦方向に数条みられる。27は刺突文土偶である。ほぼ全面に竹管の工具による刺突が施されている。指圧で股部をくぼませ、陰部を表現している。頭部の破断面に心棒孔がみられる。28は。背中の肩部に竹管の工具による刺突が施されている。隆帯や沈線で全体が表現されている。指圧で股部をくぼませ、陰部を表現している。29は、背中の肩部、首周り、腰部に刺突が施されている。比較的精製の胎土を用いている。30は、隆帯や沈線で全体が表現されている。指圧で股部をくぼませ、陰部を表現している。頭部破断面は、ソケット状にくぼんでいる。頭部を差し込むためと思われる。31は顔や下半身が欠損している。頭部は笠で被ったような三角形を呈している。胴部中軸を貫通するように、穿孔が施されている。類例は亀ヶ岡遺跡B区のI層から出土している。

32は赤彩の結髪土偶の頭部である。塗膜分析を行った(第4章第5節)。34は頭部であり、赤彩がみられる。35・37は中空土偶である。35は目や口が遮光器土偶と比べ退化した形態と思われる。頭部、顔からあごにかけて刺突があり、赤彩が施されている。33・36は頭髮部である。38・39は顔部で接合面がみられる。40は中空土偶の頭髮部である。良好な胎土を用い、ガラス質の鉱物が含まれている。赤彩が施されている。

41は妊娠状態の腹部を表現した土偶である。腹の部分に刺突が施されている。股部は刺突で表現されている。42は板状の土偶で、無文である。細長い手や頭が残されている。43は中空土偶の肩部である。竹管の工具による刺突や沈線で文様などが表現されている。50は下半身部であり、沈線と状文がみられる。51は中空土偶の脚部である。胎土には細礫が含まれており、粗い胎土である。57は肩部で、パット部分に刺突が施され、赤彩が残る。これら以外に腕部、胴部、脚部の断片が出土している。

【土版】(図156-60-61) 60は無文である。61は、4隅が突出した形態である。正面中央部が粘土で盛り上げられている。正中線があり、それを挟んで沈線でコの字状の重複した文様が表現されている。ただ表面が摩滅しており、モチーフとしてはかなり不鮮明である。

【土製円盤】(図156-62) 無孔である。

【土器片鏟】(図156-63) 一对の抉りがある。

【耳飾り】(図156-64～74) 64は破損した円盤状の耳飾りである。中央に孔がある。65から73は赤彩のキノコ形の耳飾りである。74は赤彩の傘形の耳飾りである。

【石製円盤】(図157-1～5) 5点図示した。扁平な礫を素材としており、表裏に自然面を残している。側面は敲打で敲き潰されている。

【独鈷石】(図157-6) デイサイト製であり、全面を敲打と研磨で整形している。類例に秋田県智者館遺跡、岩手県大橋遺跡などで確認されている。

【石棒類】(図157-7～10) 7～9は石棒類、10は断面形状から石剣である。

【岩版】(図157-11) 正面に重弧文様と、裏面に流水工字文風の文様がみられる。

【石製品】(図157-12~14) 12は凝灰岩製である。13は凝灰岩製で、研磨整形である。14は凝灰岩のくびれ石である。加工というよりは自然の力による形状と思われる。

【玉類】(図158-1~62) 1は勾玉状の形状である。2~5は平玉2であり、SK26の土坑からまとまって出土したものと同一形状である。6~38は平玉1であり、小口面は平上であり、両面穿孔が多い。38のみが片面穿孔であり、小口面が丸みを帯びている。39~42は穿孔塗上の資料である。片面・両面穿孔がなされている。43~45は凝灰岩や斑岩を素材とした両面穿孔の玉である。46~58は緑色凝灰岩の未成品や原石である。46は加工塗上であり、研磨がみられる。47~58は玉素材である。これら以外にも多数の緑色凝灰岩の原石が出土している。59~62は玉髄や泥岩の自然礫である。これらの石材を用いた玉製品は出土していないが、形状などから玉になる可能性がある。

【1mトレンチ出土石器】(図159-1~図160-30) 平成23年度の調査において設定した1mトレンチのうち、推定で包2-B層から出土したと思われる石器を掲載した。石鏃(1~12)、石錐(13~15)、石匙(16~17)、叩き折り搔器(18)、削器(19~25)、二次加工剥片(26)、石核(27~29)、有孔石製品(30)を図示した。黒曜石製の11・26は出来島産である(第4章第7節)。

包2-C~G層

(1)土器

【浅鉢・台付き浅鉢】(図162-1~9、図163-1~7) 1~8が浅鉢、9~7が台付き浅鉢である。1~3は磨消縄文で入組文を施文する浅鉢である。4~7は眼鏡状文の浅鉢、8は無文で口縁に突起を有する丸底の浅鉢である。図162-9、図163-1は文様帯の幅がやや広く、工字文が施文されている。図162-9は内面に黒ウルシと赤ウルシが遺存しており、ウルシパレットとして使用された可能性が高い。器面に付着しているウルシについては、塗膜構造分析を行っている(第4章第5節)。図163-2は胴部下半まで工字文が施文されている。図163-3~6は、口縁に平行沈線もしくは工字文がみられるもので、台部は工字文のもの(3)、平行沈線と短沈線のもの(6)、無文のもの(5)がある。7は変形工字文が施文される台付き浅鉢で、口縁が外反する器形を有する。

【鉢・台付き鉢】(図163-8~14、図164-1~11) 図163-8~図164-2、図164-6~11が鉢、図164-3~5が台付き鉢である。図163-8~図164-2は、胴部にやや膨らみがある器形を有するものである。8~13は口縁に沈線が巡るもので、8の口縁下部には剥落が顕著だがB状突起が施されていたものと思われる。13・14に縄文は施されておらず、13口縁には2個一対の山形状突起があり、14は頸部がすぼまる器形を有している。図164-1・2は地文縄文が施文される粗製鉢である。図164-6~11は口縁に平行沈線や工字文が施文され、胴部が直線的に立ち上がる鉢である。図164-3~5が台付き鉢で、3は口縁に平行沈線が、4・5は平行沈線・突起や工字文が胴部中程まで施文される。

【深鉢】(図165-1~図167-2) 図165-1~3・6、図167-2は口縁に平行沈線・突起・工字文を有するもので、図165-4・5・7、図167-1は口縁に平行沈線が巡るもの、図165-8、図166-1~5は地文縄文のみの粗製土器である。図166-4は底外面に笹葉痕が認められる。

【壺】(図167-3~図168-5) 図167-3~5は小型、図167-6、図168-1・2は中型、図168-3~5は大型の壺である。図167-3は浮文状のX字文などが雑然と施文される。図167-4・5は無文、図167-6は胴部に縄文が施文される。図168-1は口縁に山形状の突起を有する無文壺である。図168-3は最大径が胴部上部にあって、最大径から頸部までに文様帯を有し、頸部が無文となる赤彩の大型壺である。胴部文様帯は上下2段に分かれていて、上部は入組文、下部は工字文が施文される。

図168-4も最大径が胴部上部にあって、怒り肩状の器形を有する大型壺である。器表面の剥落が著しく不明瞭であるが、最大径から頸部までに突起、矢羽根状沈線、平行沈線などが施文されるようである。図168-5は精製壺で、流水工字文が施文されている。

(2) 石器

石鏃74点、石槍3点、石錐14点、両面調整石器8点、石匙13点、削器類32点、両極石器19点、二次加工剥片・石器断片34点、異形石器2点、微細剥片14点、石核116点、磨製石斧1点、敲磨器33点、石皿類12点、加工礫1点の計376点が出土した。これ以外に多量の剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は9,536.2g、礫石器の出土重量は34,760.4gである。

【石鏃】(図169-1～図170-63) Ata(1～31)31点、Atb(32～44)13点、Atc(45)1点、Aa(46～56)12点、Ac(57-58)2点、Ad(59)1点、Az(60～62)9点、Ay(63)5点がそれぞれ確認され、63点図示した。

【石槍】(図170-64-65) 石鏃よりも厚手のある石器である。石鏃の未製品の可能性もある。

【石錐】(図170-66～78) Ca(66～72)が7点、Cb(73～77)が5点、Cc(78)が2点であり、13点図示した。75は先端が摩滅している。

【両面調整石器】(図170-79～図171-82) 4点図示した。79は全面押圧剥離である。他は貝殻状剥離で整形されている。

【石匙】(図171-83～94) Faが4点、Fbが9点で、12点図示した。Fa(83～86)は、刃部両面加工と素刃の粗製(85-86)がある。Fb(87～94)も同様である。94は不明瞭な摘まみの素刃の粗製石匙である。

【搔器・削器】(図172-95～100) Ga1が1点、Ga2が2点、Gb1が25点、Gb2が1点、Gb3が3点あり、6点図示した。

【二次加工剥片】(図172-101) 片面加工の欠損資料である。

【微細剥片】(図172-102) 大形縦長剥片を素材とした微細剥片である。

【両極石器】(図172-112) 玉髓製である。

【異形石器】(図172-103-104) 共に石鏃形状である。

【石核・剥片】(図172-105～図173-111・113～図174-128) 石核は116点であり、その中で黒曜石製が40点である。打面転移の頻繁に行われた石核が多い。105から118は珪質頁岩などの石核、119から123は黒曜石製の石核である。黒曜石製の剥片(124～126)、原石(127・128)は、すべて出来島産であった(第4章第7節)。

【磨製石斧】(図175-1・2) 1は小形磨製石斧、2は敲打と研磨整形であり、刃部が欠損している。

【石錘】(図175-3) 扁平円礫の両端に剥離による加工がある。

【(北海道式)石冠】(図175-4) 礫の周辺を加工し、磨面2を持つ。

【敲磨器】(図175-5～9) Qaは23点、Qbが4点、Qcが4点、Qab1点、Qbc1点に分類できた。6は意図的な叩き折りと思われる。5・8は円礫のある部分が平滑な磨面を形成し、その中央部に凹みが見られる。9は磨面が不明瞭な資料である。10は扁平楕円礫の端部に敲打痕が見られる。磨面は不明瞭である。

【加工礫】(図176-11) 亜角礫の一端に剥離で尖頭状に加工している。

【石皿】(図176-12～16) Ta1が5点、Ta2が6点、Tbが1点である。Ta1はガラス質安山岩を素材としている。12-13は裏面に敲打痕が集中している。Ta2は、明瞭な磨面と線状痕を有する15-16がある。特に16は線状痕も顕著にみられる。

(3) 土石製品

土製品は25点図示した。石製品は145点出土し、24点図示した。

【ミニチュア土器】(図177-1～8) 1は匙形土製品である。匙形土製品は砂沢遺跡、津山遺跡や宇田野(2)遺跡で出土している。2は鉢形で、口縁が肥厚し、口唇部に刻みがある。3は口縁部が折れ曲がり、沈線が1条巡る。また上面に沈線が1条みられる。4は内面底面にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。5は鉢で、6は香炉形土器の一部であろうか。7・8は形状から高坏の台部と思われる。

【土偶】(図177-9～14) 9は頭髪部と思われる。割れ面に貫通孔がみられる。10は頭髪部である。刺突が施され、赤彩である。11は刺突土偶の肩部である。隆帯でバットが表現され、その部分に刺突がみられる。12は中空土偶の腕部分である。細線が含まれた粗い胎土を用いている。割れ口に黒色の付着物らしきものがみられる。13は下半身である。沈線で文様が表現され、赤彩である。14は脚部である。

【耳飾り】(図177-15、16) 15は傘形の耳栓であり、赤彩である。16は破損資料であるが、「の」の字状石製品に類似している。

【その他土製品】(図178-17、18) 17は筒状の形状を呈すると推定される土製品である。2つの突起がある。18は斧状土製品に類似しているが、単軸絡条体第1類の燃りの緩い縄を回転させており、円筒下層式期の土製品と思われる。

【土製円盤】(図178-19～25) 土製円盤の素材は円筒式(19・21)、縄文晩期土器片を用いている。胴部や底部分を用いている。20は穿孔途中である。

【玉・その他】(図179-1～9) 1～5は両面穿孔の平玉1である。6は緑色凝灰岩の大形の玉である。破損が著しいが、両面穿孔である。7は緑色凝灰岩の原石である。8は沈線が施文されているが、表面の摩滅が著しい。9は滑石製袂状耳飾である。

【石製円盤】(図180-1～11) 11点図示した。側面が敲き潰されている資料が大半である。

【石冠】(図180-12) 全面敲打で整形されている。

【石棒類】(図180-13～15) 13は頭部が三角形状である。15は断面形状から石剣と思われる。

包2-H層

(1) 土器

【浅鉢・台付き浅鉢】(図182-1～3) 1は丸底で湾曲する浅鉢で、口縁部には押し引状沈線が1条みられ、胴部には弧状文が施文される。2・3は台付き浅鉢で、2は2単位の入組文が施文され、口唇と内面には連続する突起や隆帯上の刻みがある。3は小型の台付き浅鉢で、口縁に平行沈線と突起がみられる。

【鉢・台付き鉢】(図182-4～15、図221-8) 図182-4～14が鉢、15が台付き鉢である。4は丁寧に作られた鉢で、口唇にB状突起と刻み目がみられる。無文の頭部下側には沈線4条が施文され、胴部との境界は明瞭な屈曲をもって直線的に底部へ向かう。底部付近には平行沈線2条がある。胴部にはR LとL Rを横位回転施文して羽状を表出している。下段側のL Rは原体の縄端が器面に段差がみられるように押しつけられる部分があり、そこでは羽状の境界部分が明瞭となっている。5・6は無文で、7は縄文が施文されて山形状突起を有する鉢である。9～14は口縁に平行沈線が巡り、口唇に刻み目が施される。12・13には突起が、14にはやや大型の突起が付く。台付き鉢である15も口縁に平行沈線が

巡ってやや大型の突起がつき、大型突起の基部外側に2組一対のB突起がつけられる。図221-8は外面に炭化物が大量に付着している鉢で、SP78出土遺物と同一個体の可能性があり、片口土器の底部と思われる。

【深鉢】(図183-1～図185-2) 図183-1～5は口縁に沈線を有し突起を有する深鉢で、沈線間に刻み目をもつもの(1)もある。3は現状では突起のない破片であるが、器形的・文様の突起を有する可能性が高いとみられる。この土器は縄文ではなく条痕を地文としている。2・5は、欠損しているが大型突起も存在していたと思われる。図184-1は小波状口縁をなし、直立する短い無文頸部を有する深鉢である。図184-2は2個一対の山形状突起を有して口縁に3条の沈線が巡り、内湾する口縁の小型深鉢である。図184-3～図185-2は粗製深鉢で、2個一対の突起が口縁に1～3組みられるもの(図184-3～図184-5)、小波状口縁をなすもの(図185-1・2)がある。

【壺】(図185-3～9) 無文の広口壺で器形に凹凸が少ないもの(3)、矢羽根状沈線を有するもの(4)、胴部は地文縄文で口頸部が無文のもの(5～9)がある。胴部に縄文が施文されるものには、頸部に突起があるもの(6・7)、頸部下端に沈線が巡るもの(6・8)、口縁に突起がつくもの(8・9)がある。(2)石器

石鏃31点、石錐15点、両面調整石器5点、石匙7点、削器類12点、両極石器16点、二次加工剥片・石器断片23点、異形石器1点、微細剥片4点、石核39点、打製石斧1点、磨製石斧4点、敲磨器41点、石皿類21点の計220点が出土した。これ以外に多量の剥片や自然礫が出土している。剥片石器の出土重量は5,652.5g、礫石器の出土重量は58,465.8gである。

【石鏃】(図186-1～25) Ata(1～16)18点、Atc(17)1点、Aa(18～21)4点、Ac(22)1点、石鏃(23、25)4点、未製品(24)3点がそれぞれ確認されている。25点図示した。

【石錐】(図186-26～39) Ca(26～29)が5点、Cb(30～38)が9点、Cc(39)が1点であり、14点図示した。使用痕として、30は一端が、37は両端が摩滅している。

【両面調整石器】(図187-40～42) 3点図示した。

【石匙】(図187-43～48) Fa(43～46)が4点、Fb(47～48)が2点、摘まみ断片が1点であり、6点図示した。45・46は摘まみ部以外の加工はない。

【搔器・削器】(図187-49、50) 削器が12点である。50は片面急角度の加工である。

【異形石器】(図187-51) 弓形であり、全面加工している。

【石核・剥片】(図187-52～図188-58) 石核は39点で、そのうち黒曜石裂が19点に分類できた。57は漆黒のガラス質の深浦産黒曜石剥片で、他は出来島産である(第4章第7節)。58は黒曜石原石である。

【打製石斧】(図188-1) 刃部断片資料である。土擦痕はない。

【磨製石斧】(図188-2～5) 2は小形の磨製石斧である。5は擦切痕がある。それ以外の磨製石斧は敲打と研磨で整形されている。

【微細剥片】(図188-6) 大形剥片を素材とした微細剥片である。

【敲磨器】(図189-7～12) Qaは36点、Qbが3点、Qcが2点に分類できた。7から10はQaである。11・12は珪質頁岩製のQcである。

【石皿】(図190-13～22) Ta1が6点、Ta2が8点、Tazが3点、Tbが3点、Tcが1点出土した。Ta1(13・14)はガラス質安山岩を素材としている。Ta2(15～20)は緻密な扁平礫を素材とし、19・20は機能面が円形でくぼんだ磨り面を持つ。Tb(21)は表裏に蜂の巣状に凹みを持つ。22は小形のTc(砥石)である。

(3) 土石製品

土製品は29点図示した。石製品は145点出土し、16点図示した。

【ミニチュア土器】(図191-1～3) 1は片口形ミニチュア土器である。2は香炉形土器の一部もしくは中空土偶の頭髪部と思われる。3は5つの突起をもつ土製品である。

【土偶】(図191-4～12) 4は腕・脚が欠損している。5は頭部である。6は角状突起をもつ顔部分である。7・8は上半身である。7は両脇に貫通孔と、体部中心に心棒痕がみられる。9は板状土偶の胴部と思われる。10は中空土偶の腕部分である。細礫が含まれた粗い胎土を用いている。11は刺突文土偶の肩部である。隆帯でバットが表現され、その部分に刺突がみられる。12は中空土偶の足首である。

【その他土製品】(図191-13～図192-15) 13は土面の額、眉の部分である。14は土版である。入り組み文風の様相が施されている。正中線らしく中央線の先端に刺突がある。円を沈線の弧状で下半分を囲んでいる。15は中空であり、筒状の形状を呈すると推定される土製品である。

【土製円盤】(図192-16～29) 土製円盤の素材は十腰内期、縄文晩期土器片を用いている。19は中心から縁のほうにずれて穿孔されている。薬師遺跡において文様のある土製円盤が十腰内I式なので29もそれに属すると思われる。

【石製円盤】(図193-1～13) 13点図示した。1は大型である。2・3は表裏に研磨痕がみられる。

【石棒類】(図193-14～16) 14は頭部に彫刻がある。他は断片資料である。

平成23年度1mトレンチ出土遺物

平成23年度の調査において設定した1mトレンチのうち、出土層が明確でない遺物をまとめた。

(1) **土器**(図194-1～7) 1～6が縄文時代晩期、7が弥生時代とみられる。台付き鉢は、入組文が施文されるもの(1)、口縁に突起があつて平行沈線(2)あるいは羊歯状文(3)が施文されるものがある。平行沈線と突起がみられる鉢(4)、口頸部を欠く壺(5)、小型の下ぶくれ器形の壺(6)、弥生時代の甕胴部片(7)がある。5は包2層最下面に倒立で出土したもので、内部から出土した炭化物を年代測定した(第4章第2節2)。

(2) **石器・石製品**(図195-1～図196-28) 1mトレンチのうち推定で包2-C～H層から出土したと思われる石器を掲載した。石鏃13点、石槍1点、石錐5点、両面調整石器2点、石匙10点、削器類10点、両極石器20点、二次加工剥片・石器断片27点、微細剥片4点、石核24点、磨製石斧3点、敲磨器30点、石錘1点、石冠1点、石皿類6点、軽石製品1点の計158点が出土した。

石鏃(1～3)はAtaが6点、Az6点、Ayl1点である。4～7は石錐である。6は先端が強く摩滅し、線状痕がみられる。8～14は石匙である。11は摘まみを2つ持つ形態である。摘まみ以外の加工はない。12は玉髄製である。他に粗製の石匙や黒曜石製(8)の石匙がある。15～17は削器類、18・19は二次加工剥片である。19はアスファルトが付着した資料である。20～23は石核である。23は黒曜石製である。24は黒曜石の大型原石で、出来島産である(第4章第7節)。25は定角式磨製石斧である。石棒類としては、26は大型の石刀で全面に擦痕がみられ、27は石棒の頭部に4本の沈線が巡る。28は断片である。

[降下火山灰の状況] 盛土遺構の区域内で、目視によって白頭山苦小牧火山灰を2カ所で検出した。1カ所は縦断セクションNa1で、もう1カ所はロングセクションNa3である。縦断セクションNa1では、セクションの中ほど、ⅢF-53グリッドで検出された。平面的にも断面的にも一定の形状をなさない風倒木と思われる攪乱層中で、包2-A層及び包2-B層を壊している。白頭山苦小牧火山灰は

断面ではレンズ状に堆積している。もう1カ所のロングセクション№3は、61グリッドライン付近で検出されており、これも風倒木層に斑状に混入していることが確認できた。この風倒木層は色調や土質、混入物などが包1層に類似していることから、包1層が倒木の影響で落ち込んだものと思われる。これら2カ所で白頭山苦小牧火山灰を確認したのは、いずれも盛土遺構形成後に倒木が形成した風倒木痕に含まれているものである。したがって白頭山苦小牧火山灰が降下する一定期間以上前に、盛土遺構形成が終了していたことを証左するものといえる。

また、盛土遺構構成土のうち包2-D2層、包2-D2炭化物層、包2-E6層、包2-E6炭化物層、包2-H0層について火山灰分析を行い、弥生時代や平安時代の降下火山灰は含まれていないことも確認された。(第4章第1節3)

[理化学分析の状況] 包2-E2層、E下層、F層、F4層、G2層、H0層、H2層、H3層から出土した炭化材・炭化物について、樹種同定や放射性炭素年代測定を行っている。詳細は第4章第2節3・第10節を参照していただきたい。

[遺構の時期等] 盛土遺構形成前後の包含層の様相と降下火山灰・出土遺物の状況、埋設土器遺構や焼土遺構等との新旧関係、盛土遺構構成土からの出土遺物等を総合的に検討すると、縄文時代晩期後半期から弥生時代前期の間に形成された遺構であると考えられる。本遺構は削平されていて盛土上面の形状等を知ることができないため、マウンド状であったものなのか平坦面を造成したものなのか不明である。つまり、土を盛り上げて山状にしたものなのか、平場を造成するためのものなのか、あるいは削平することに目的があつて盛土遺構はその造成土を廃棄するためだけに意味のないものなのか、いずれも現時点では確証を得る術がなく、構築目的は不明である。



図 119 包 2-A 層出土 土器

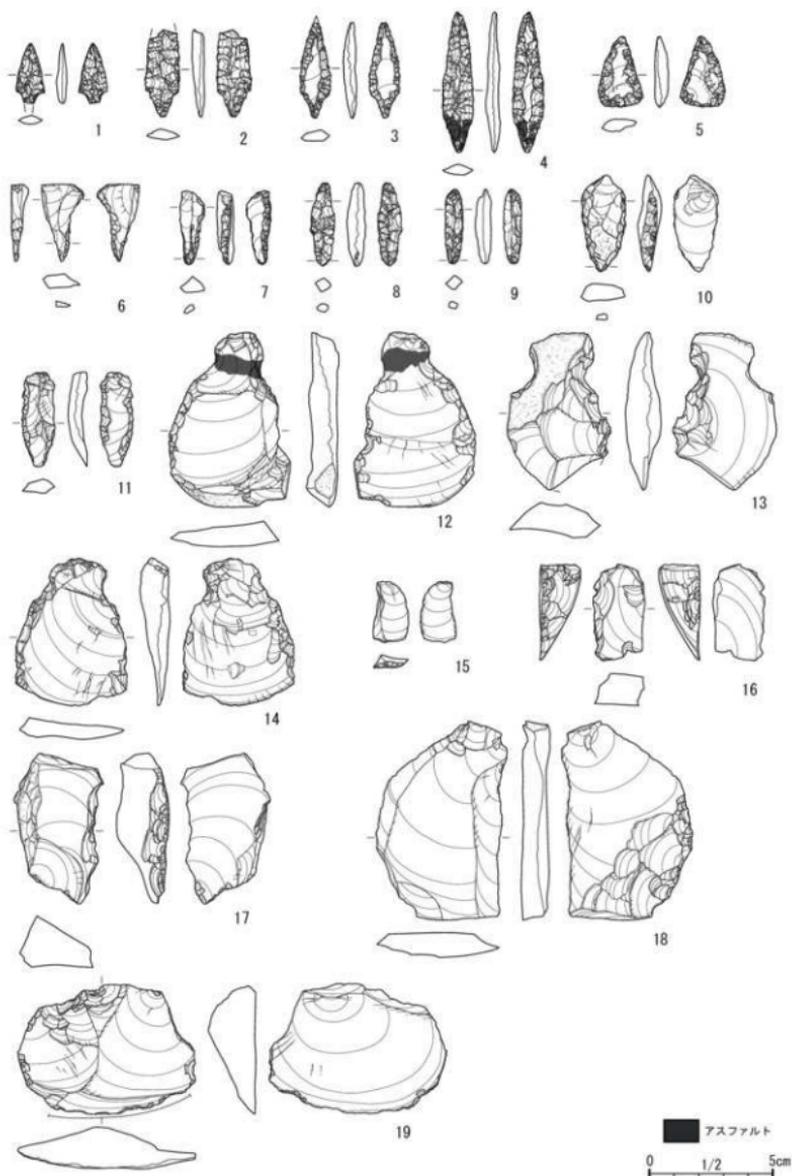


図 120 包 2-A層出土 石器 (1)

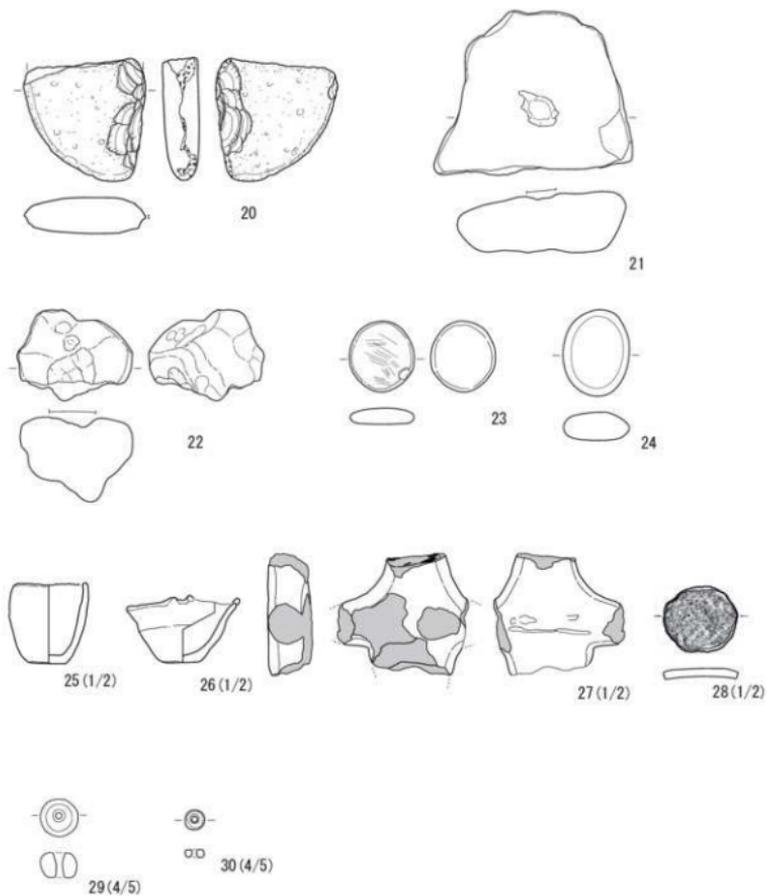


図 121 包 2-A層出土 石器 (2)、土・石製品

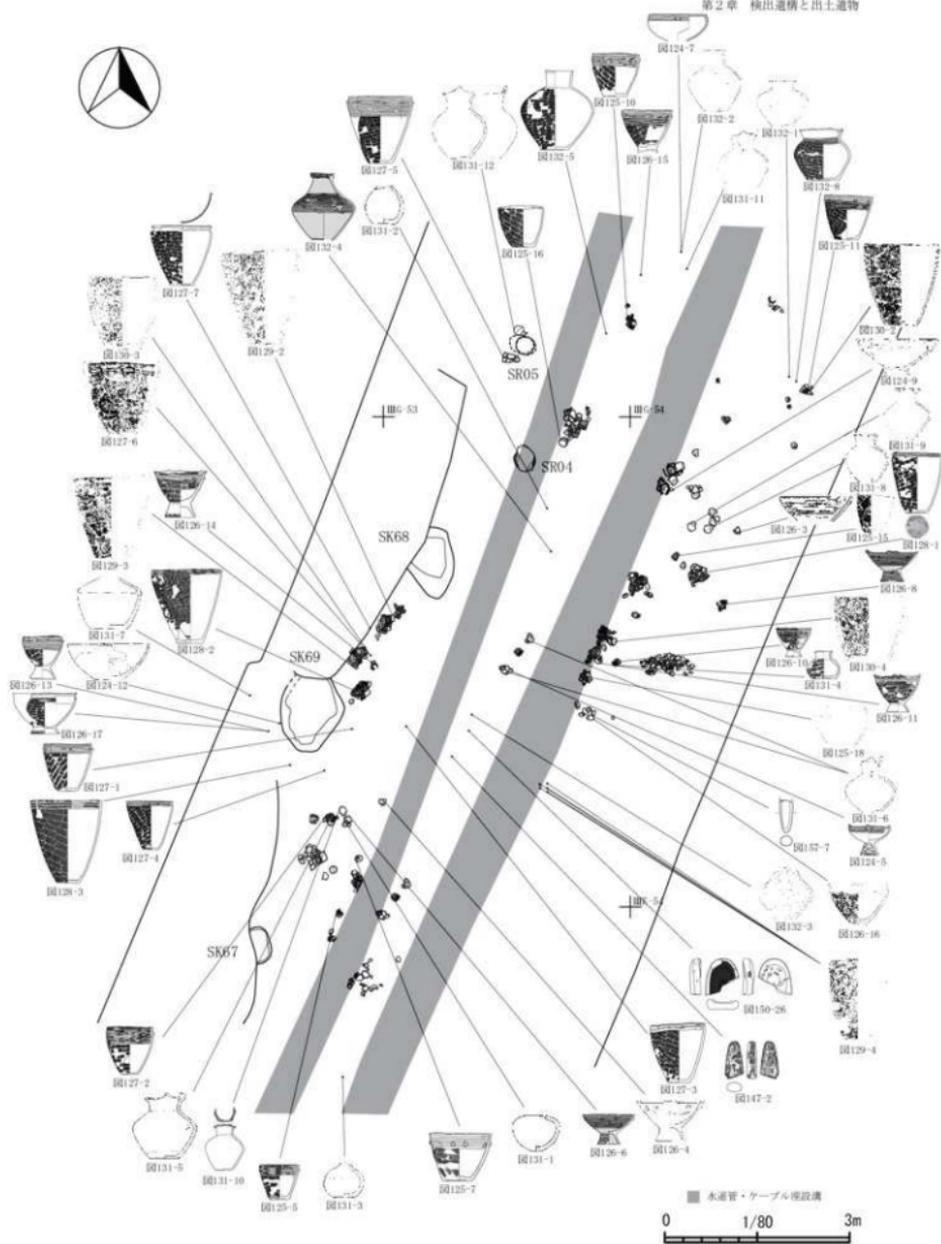


図122 包2-B層遺物出土状況図(1) 土器・石器

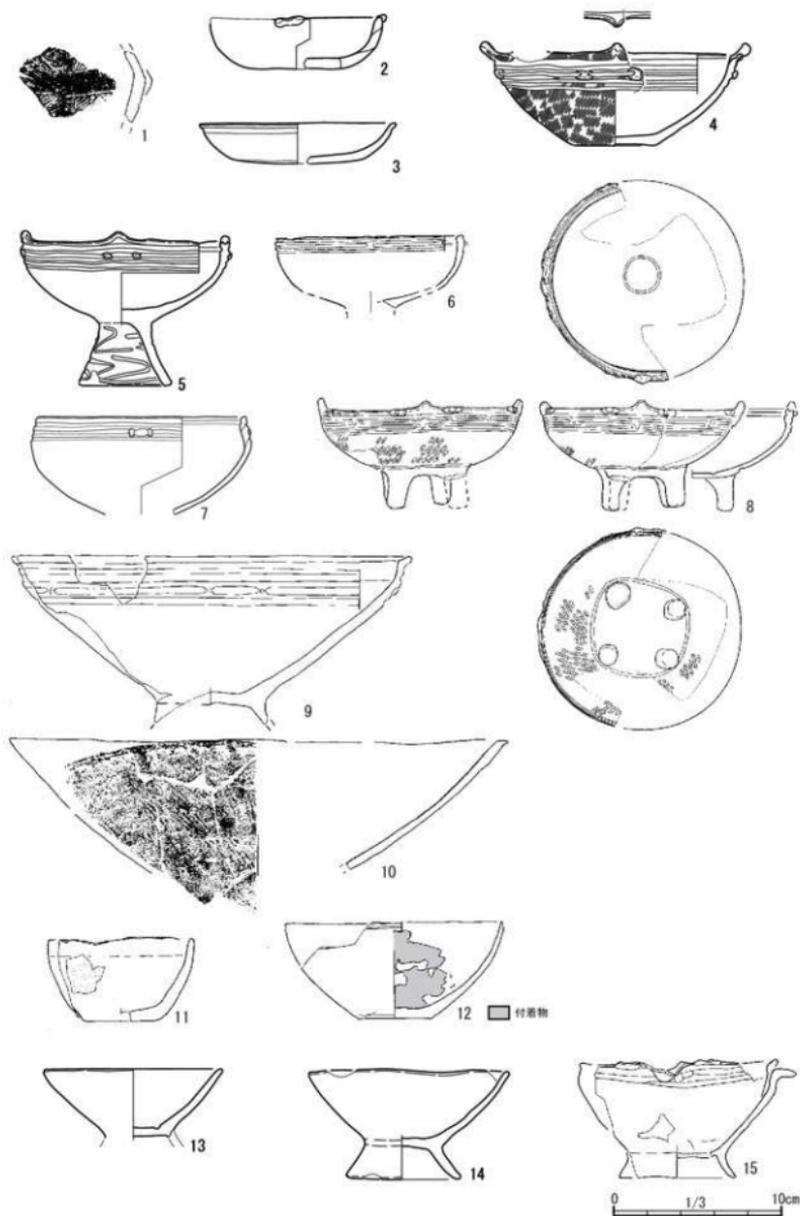


図124 包2-B層出土 土器(1)

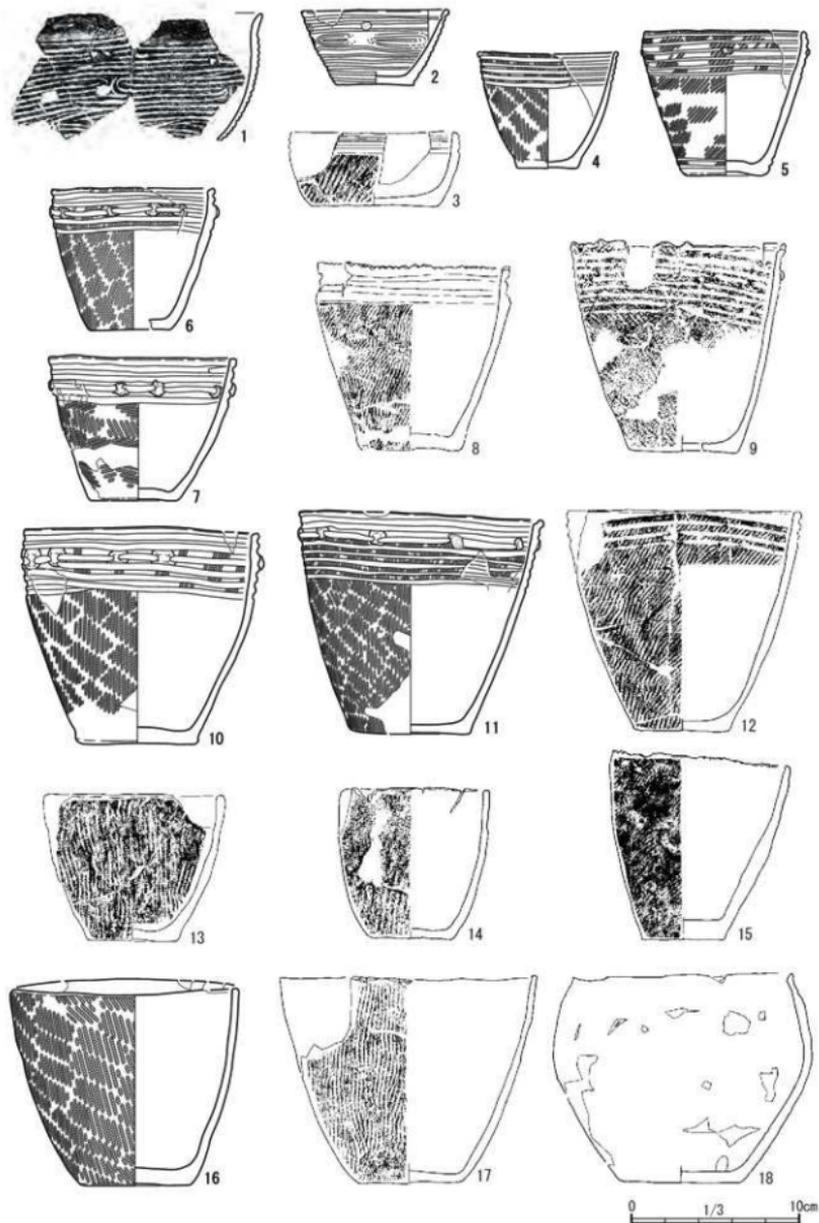


图 125 包2-B層出土 土器 (2)

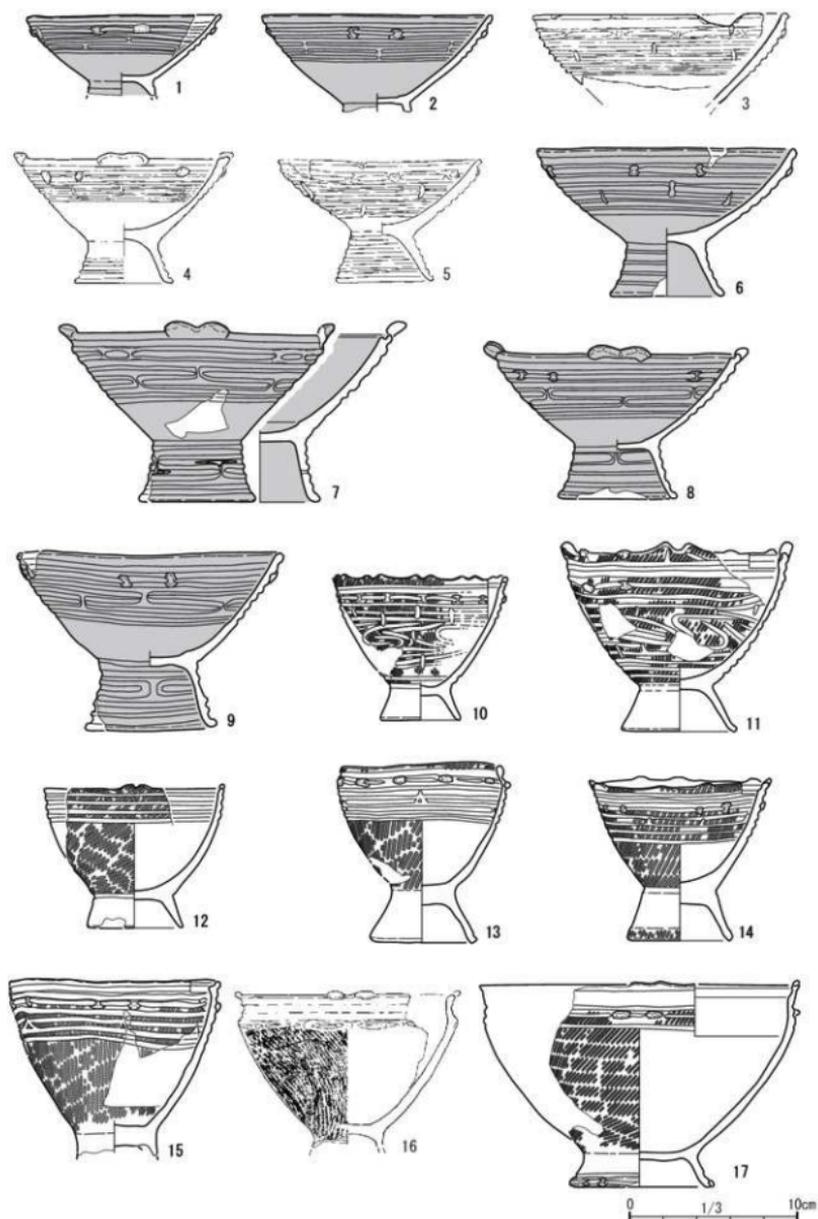


図 126 包 2-B層出土 土器 (3)

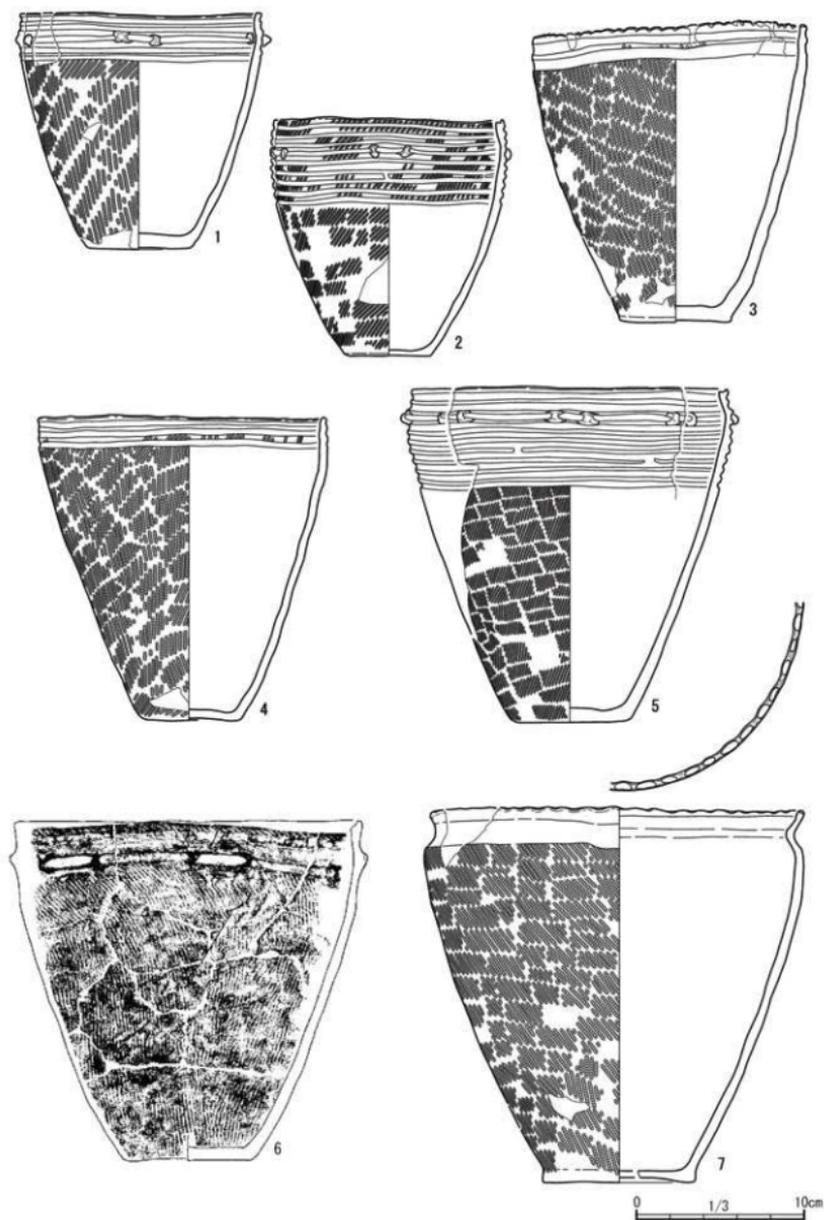


图 127 包2-B層出土 土器 (4)

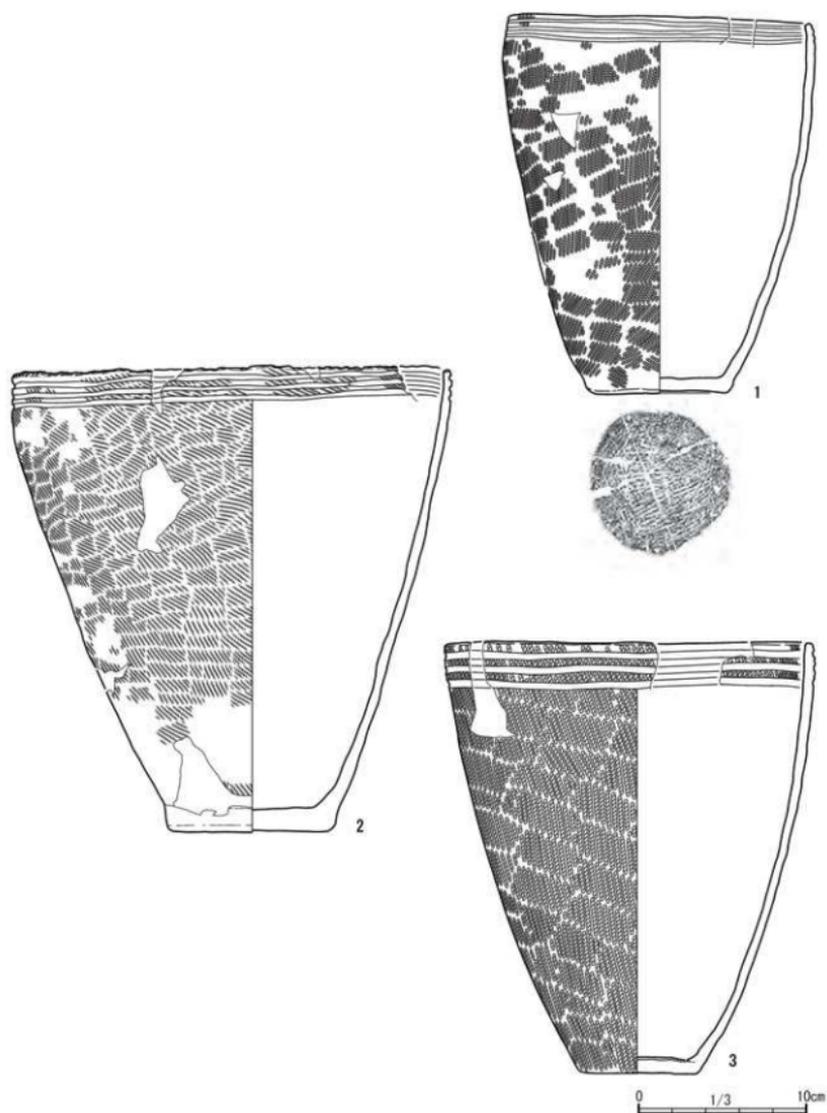


図 128 包 2-B層出土 土器 (5)

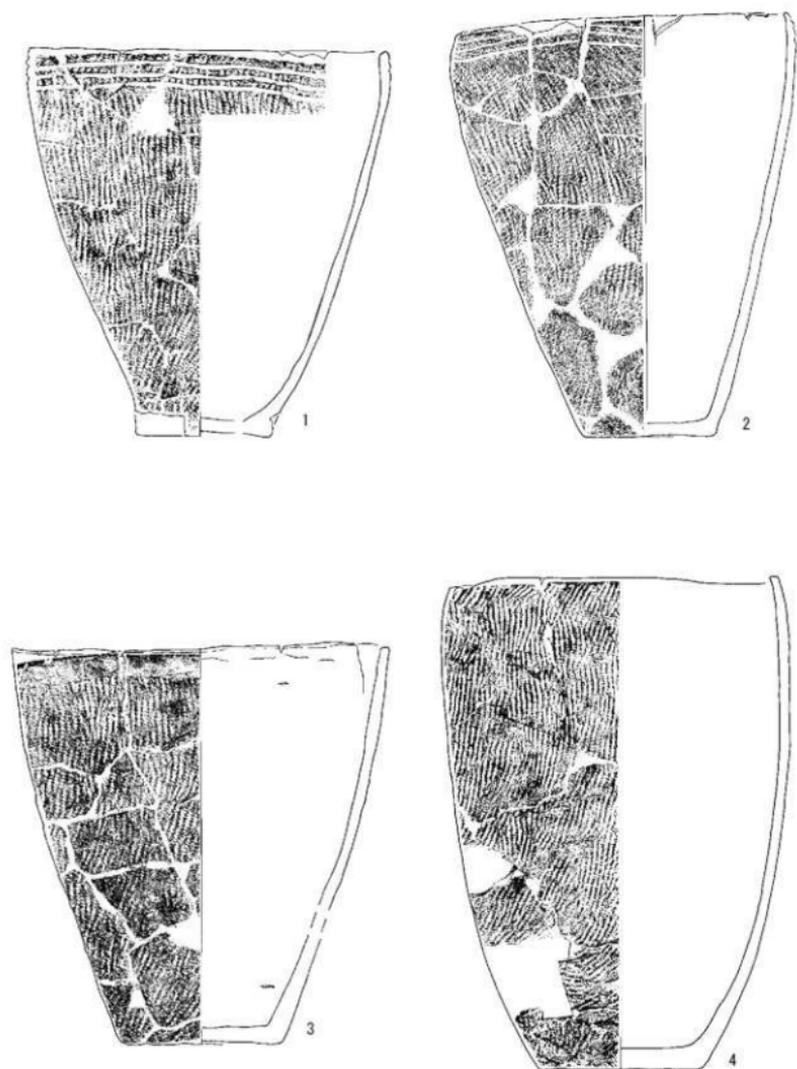


图 129 包2-B層出土 土器 (6)

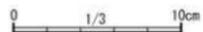




図 130 包 2-B層出土 土器 (7)

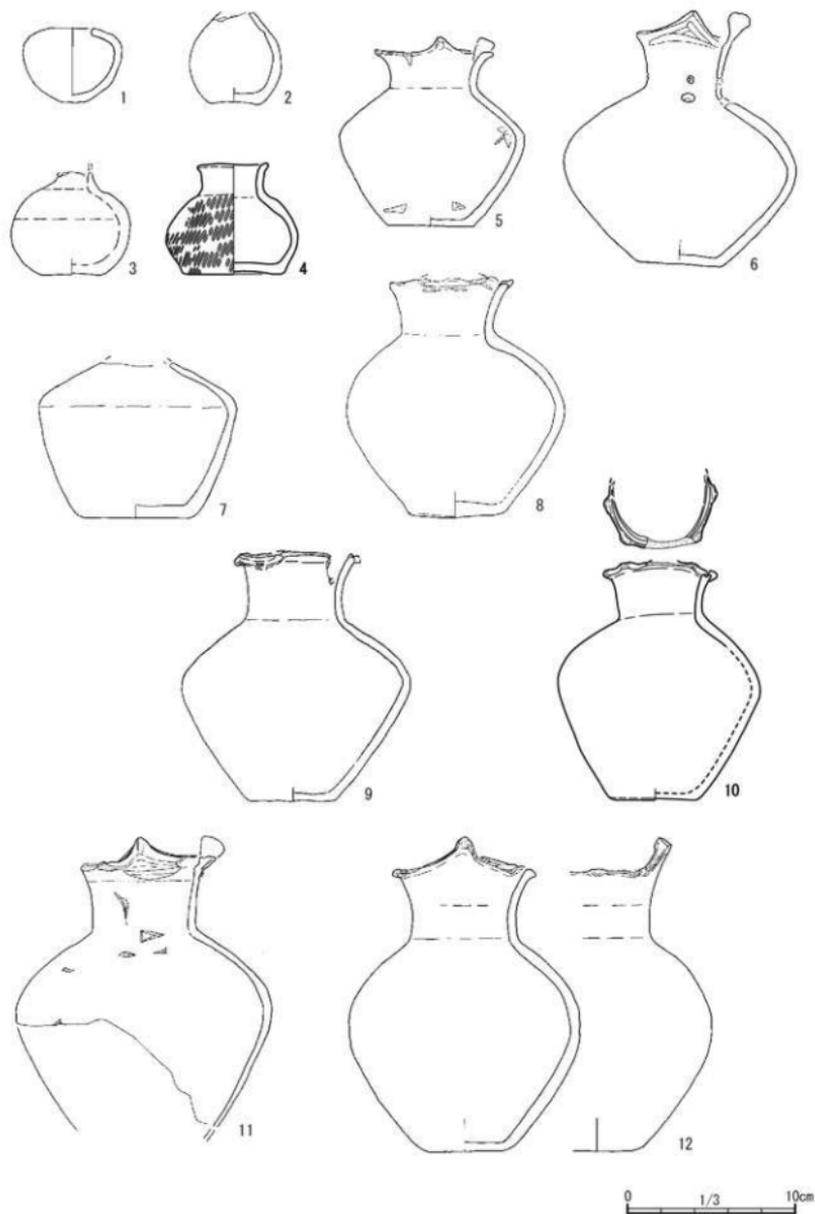


图 131 包2-B層出土 土器 (8)

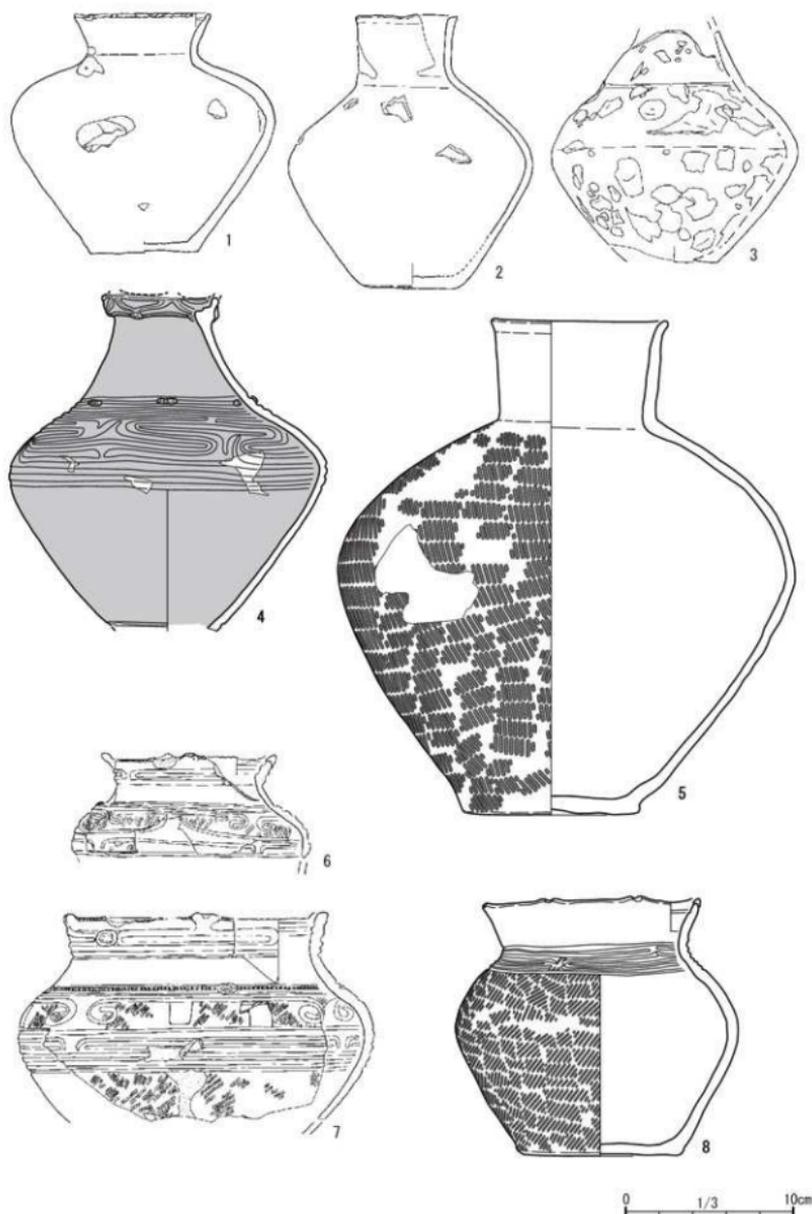


図 132 包 2-B層出土 土器 (9)

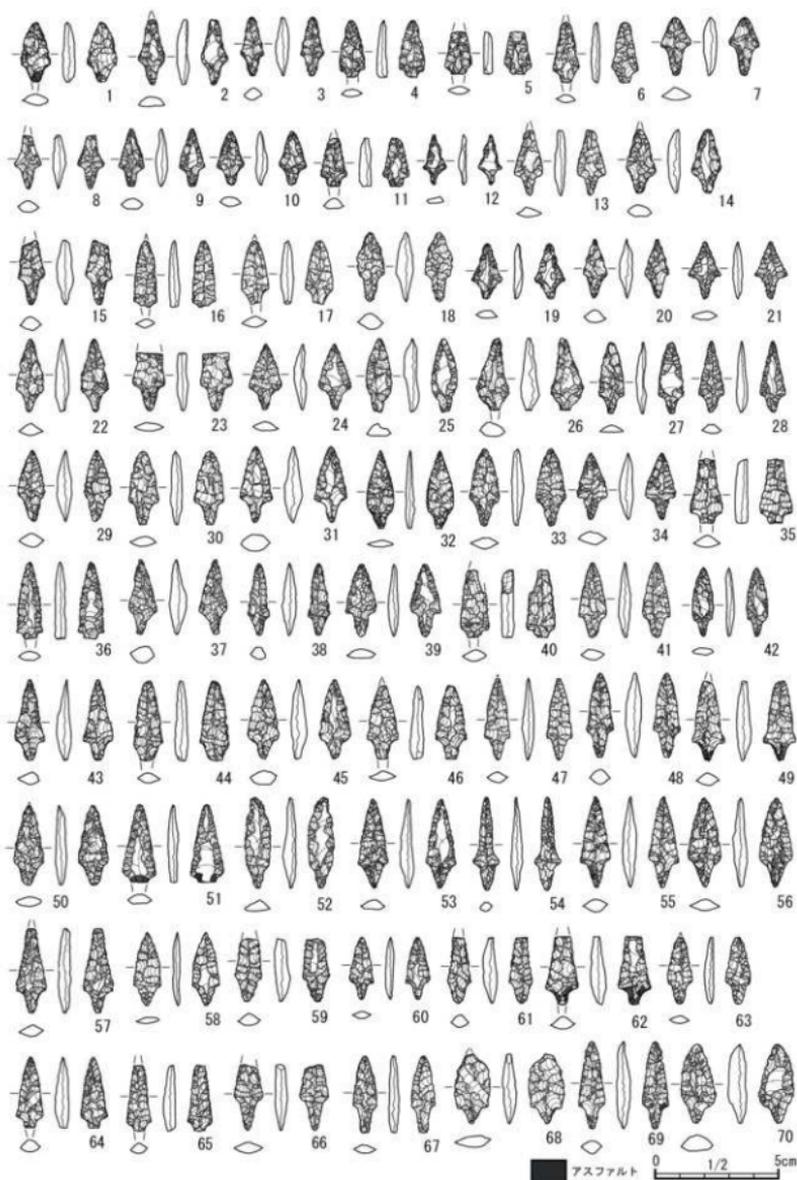


図 133 包2-B層出土 石器 (1)

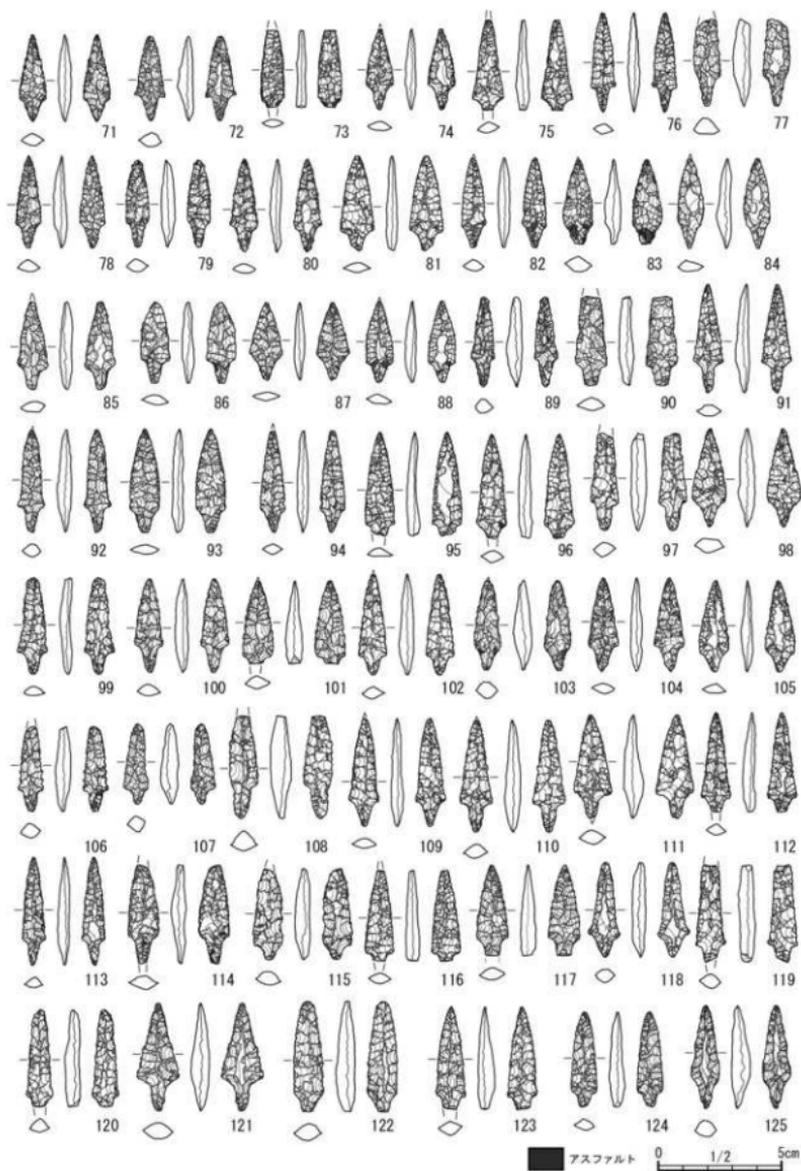


図 134 包 2-B層出土 石器 (2)

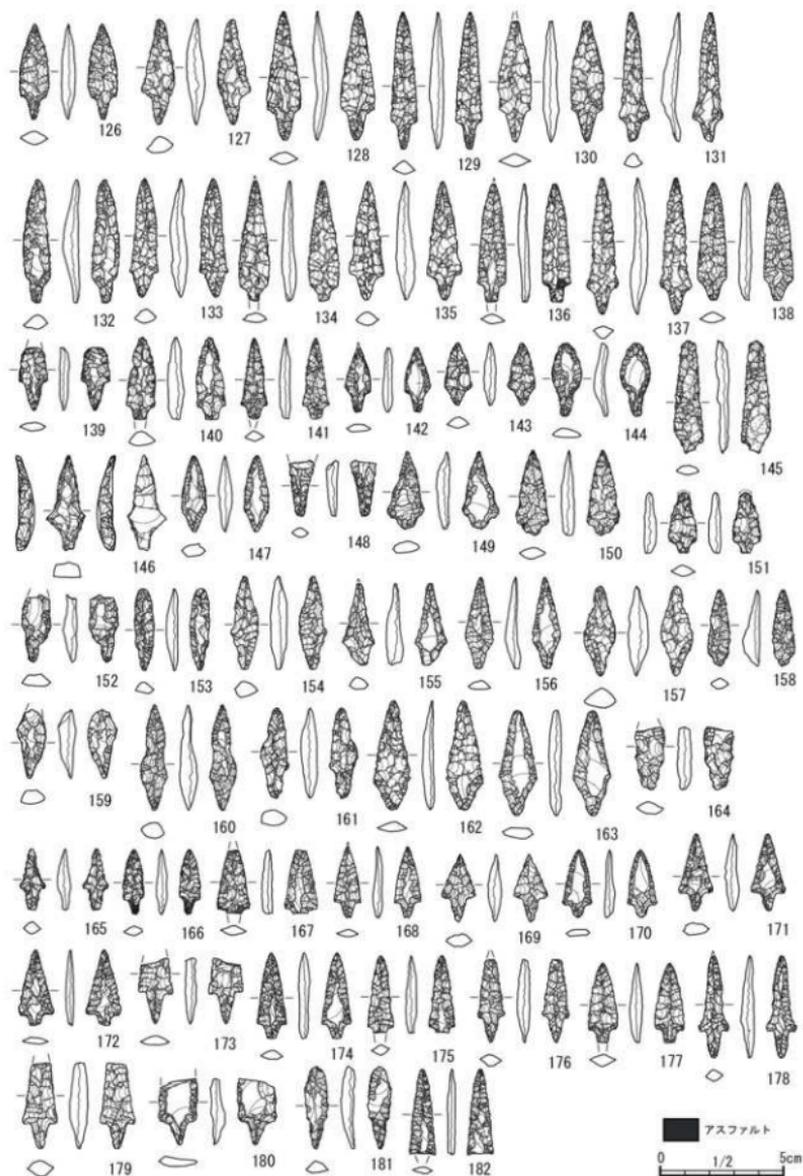


図 135 包2-B層出土石器(3)

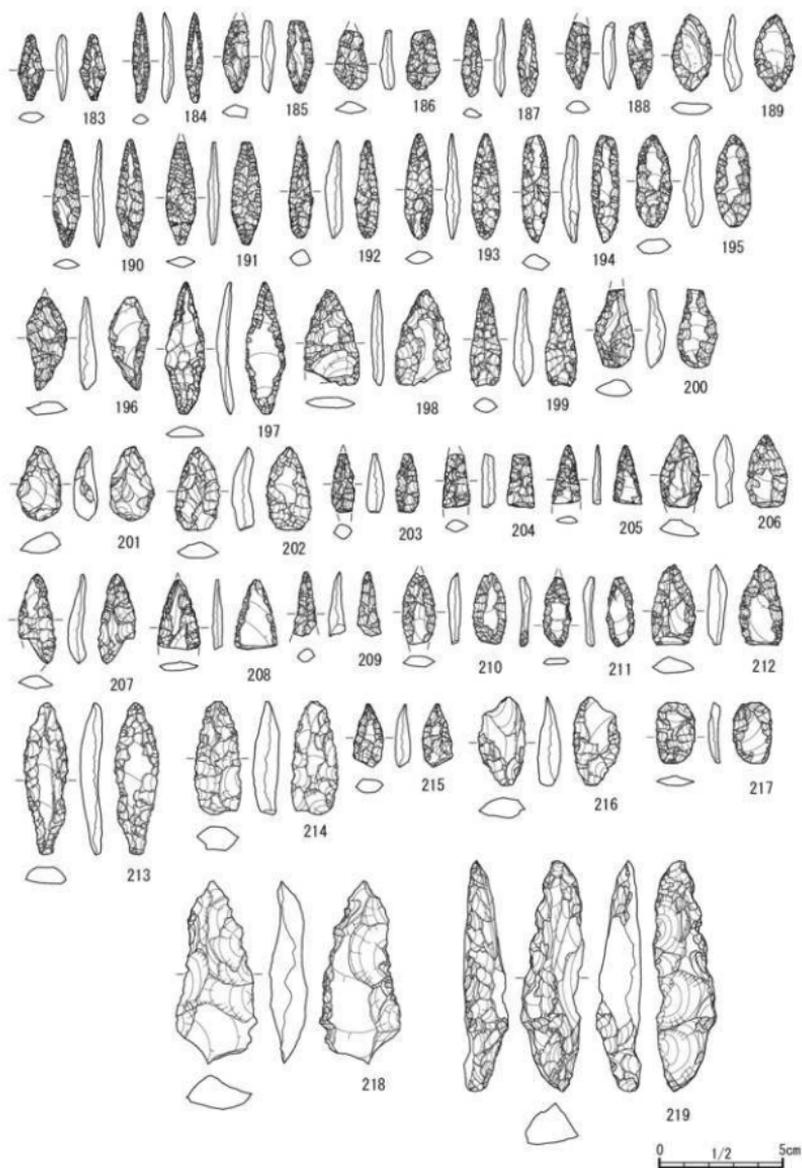


図 136 包2-B層出土 石器 (4)

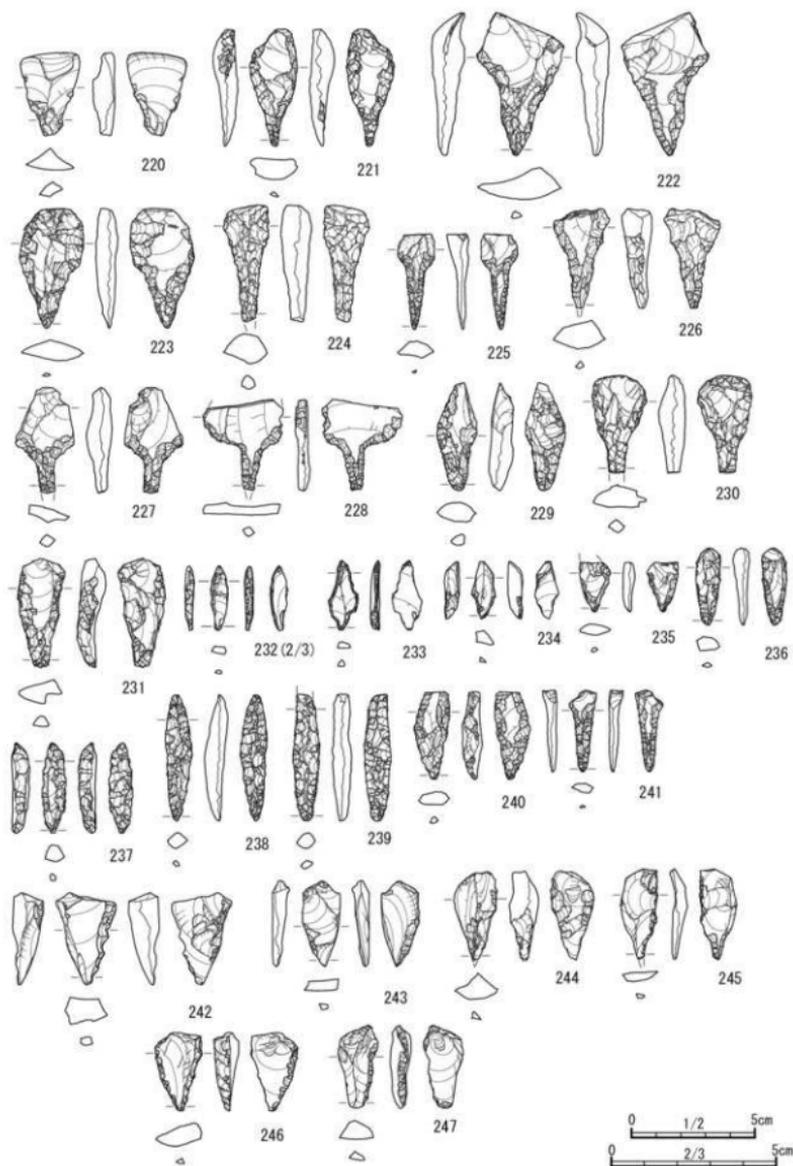


図 137 包 2-B層出土 石器 (5)

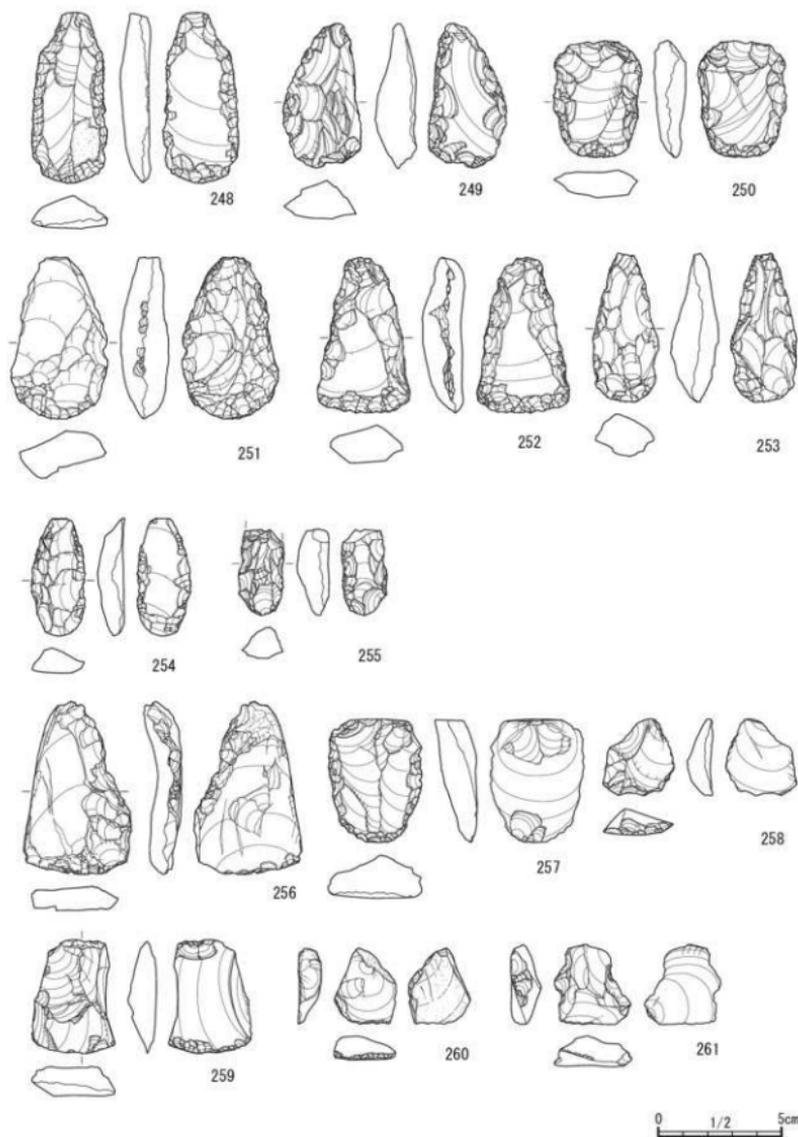


図 138 包 2-B層出土 石器 (6)

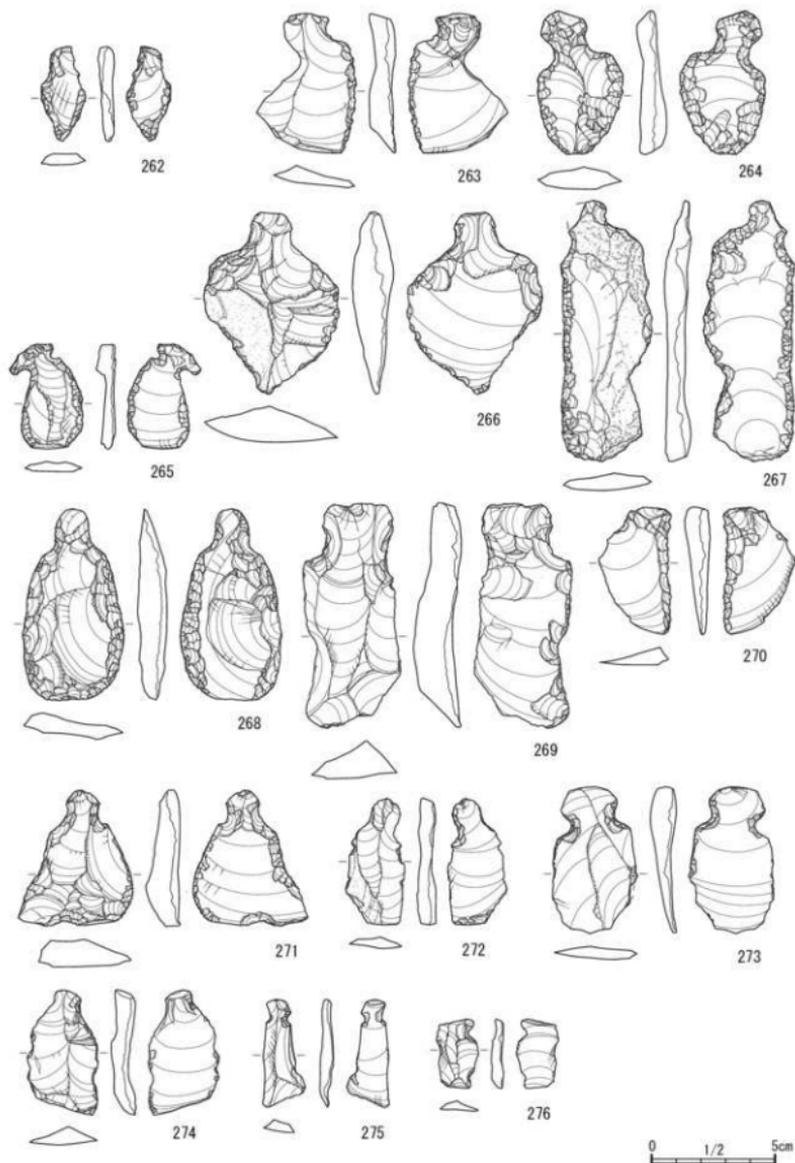


図 139 包2-B層出土石器(7)

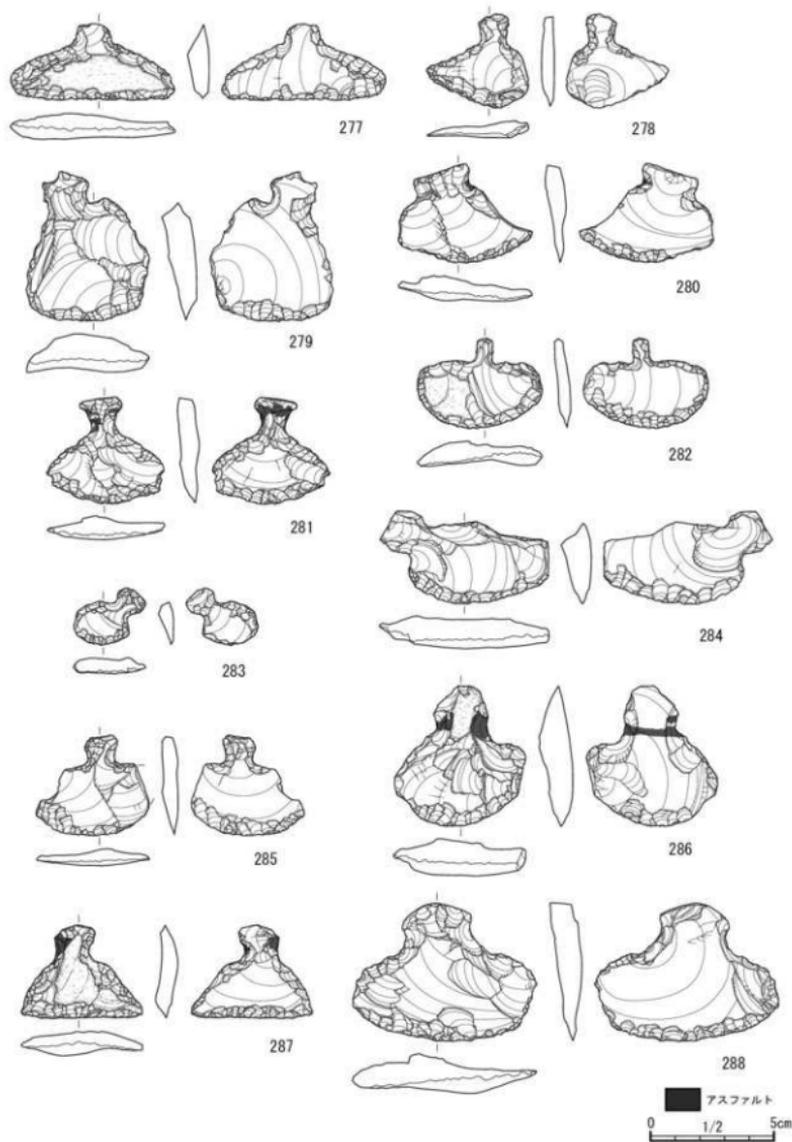


図 140 包 2-B 層出土 石器 (8)

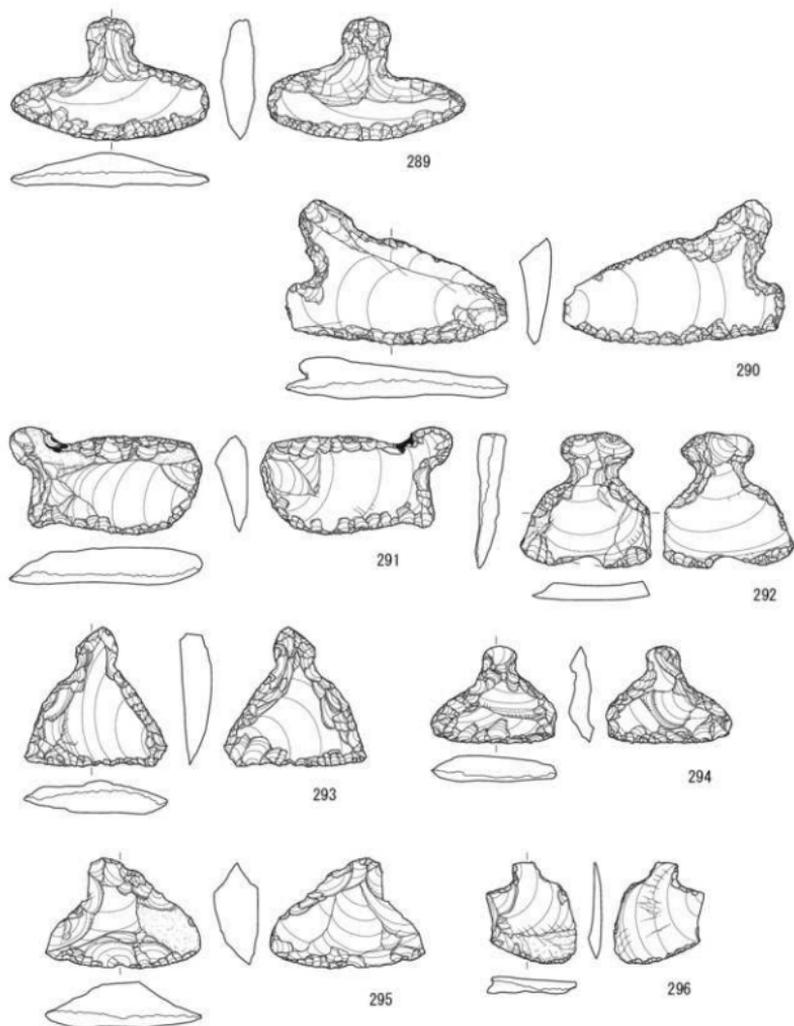


図141 包2-B層出土石器(9)

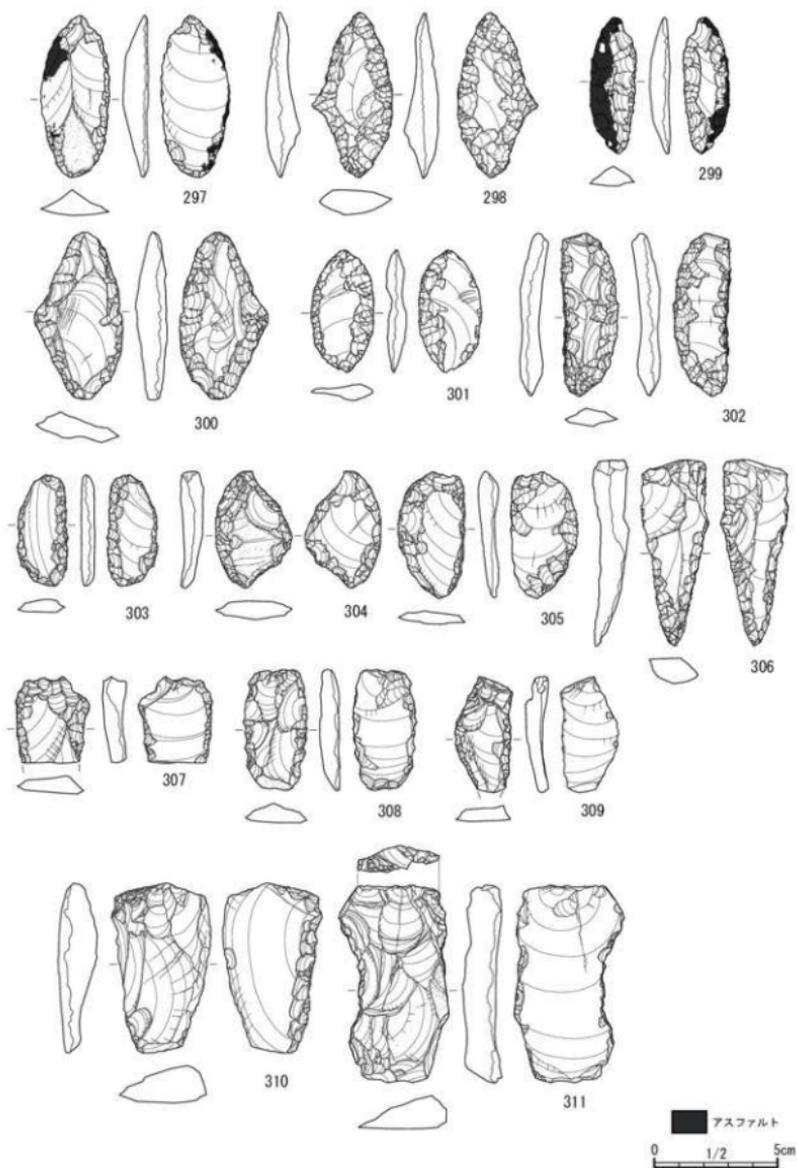


図 142 包 2-B層出土 石器 (10)



图 143 包2-B層出土石器(11)

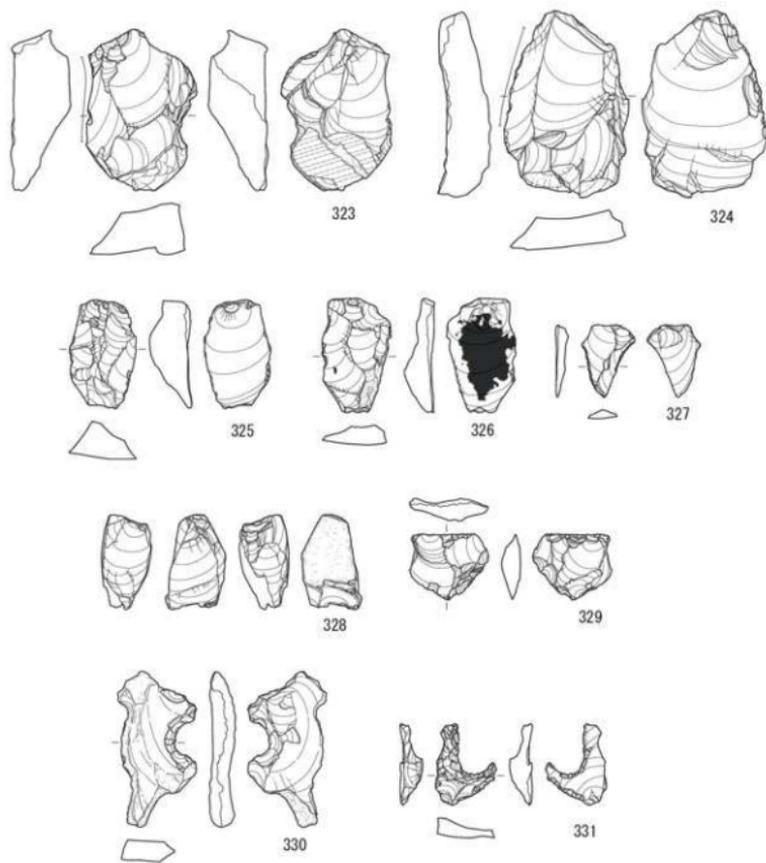


図 144 包2-B層出土 石器 (12)

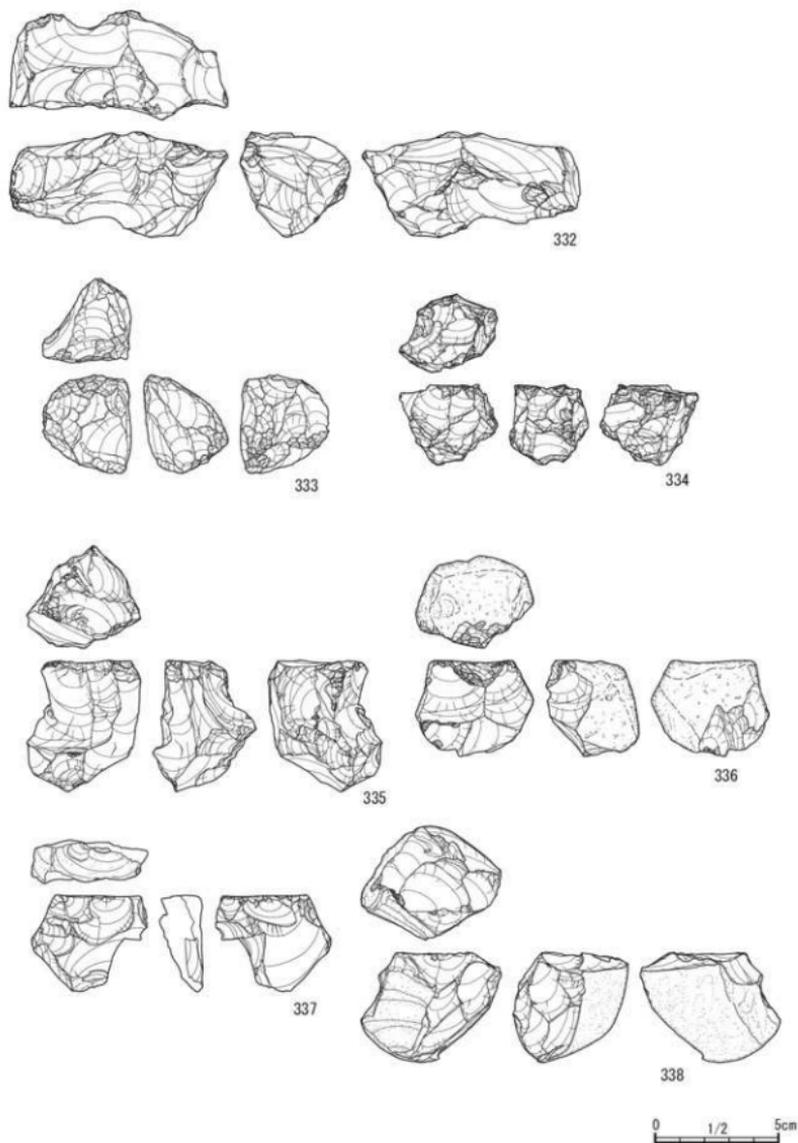


图 145 包 2—B 層出土 石器 (13)

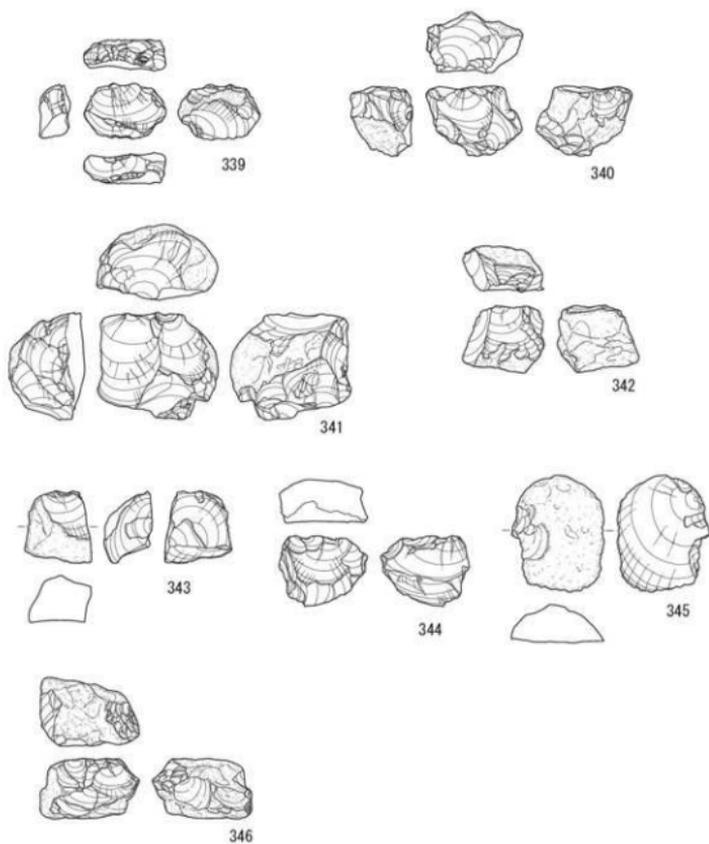


図 146 包 2-B層出土 石器 (14)

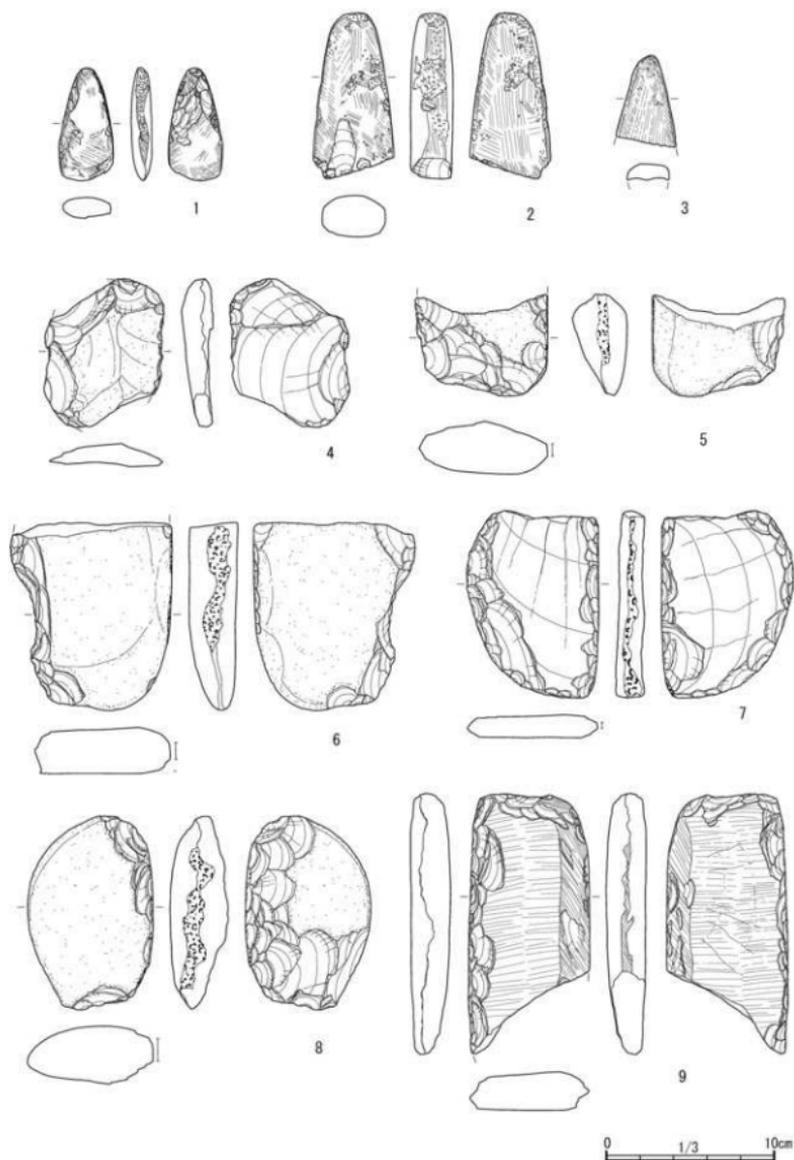


图 147 包2—B層出土石器 (15)

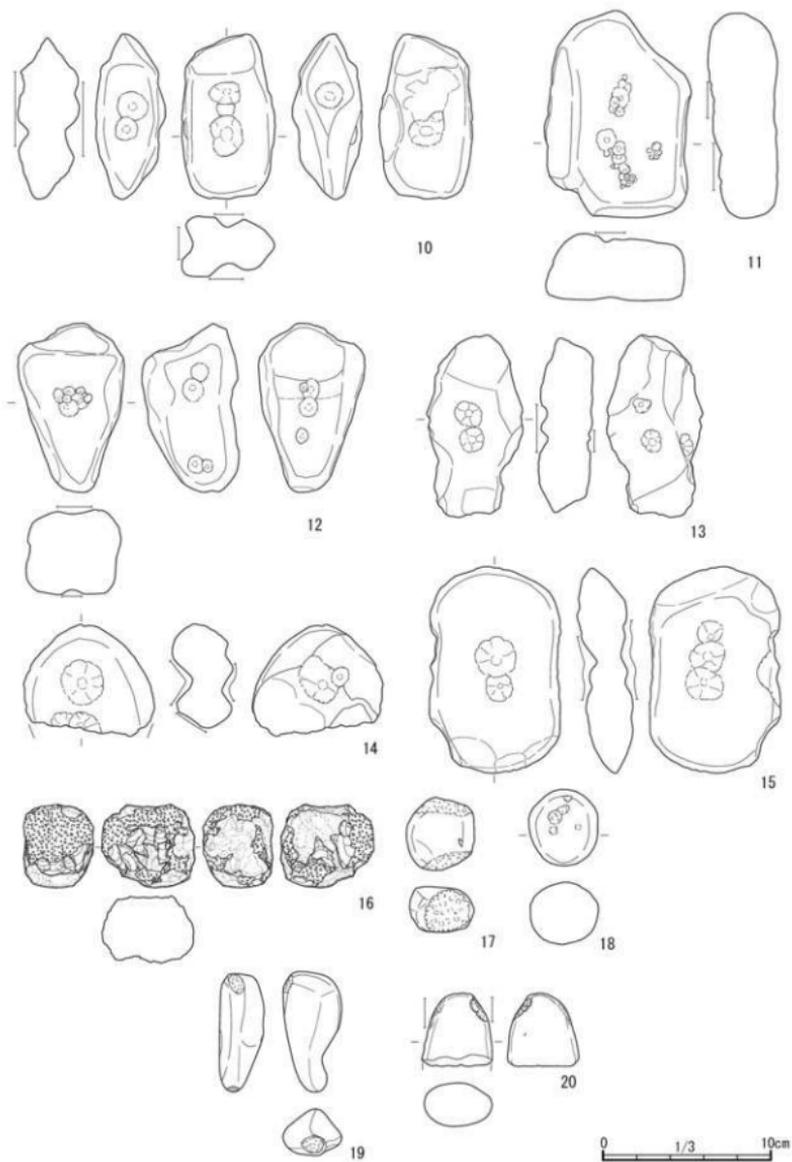


図148 包2-B層出土石器(16)

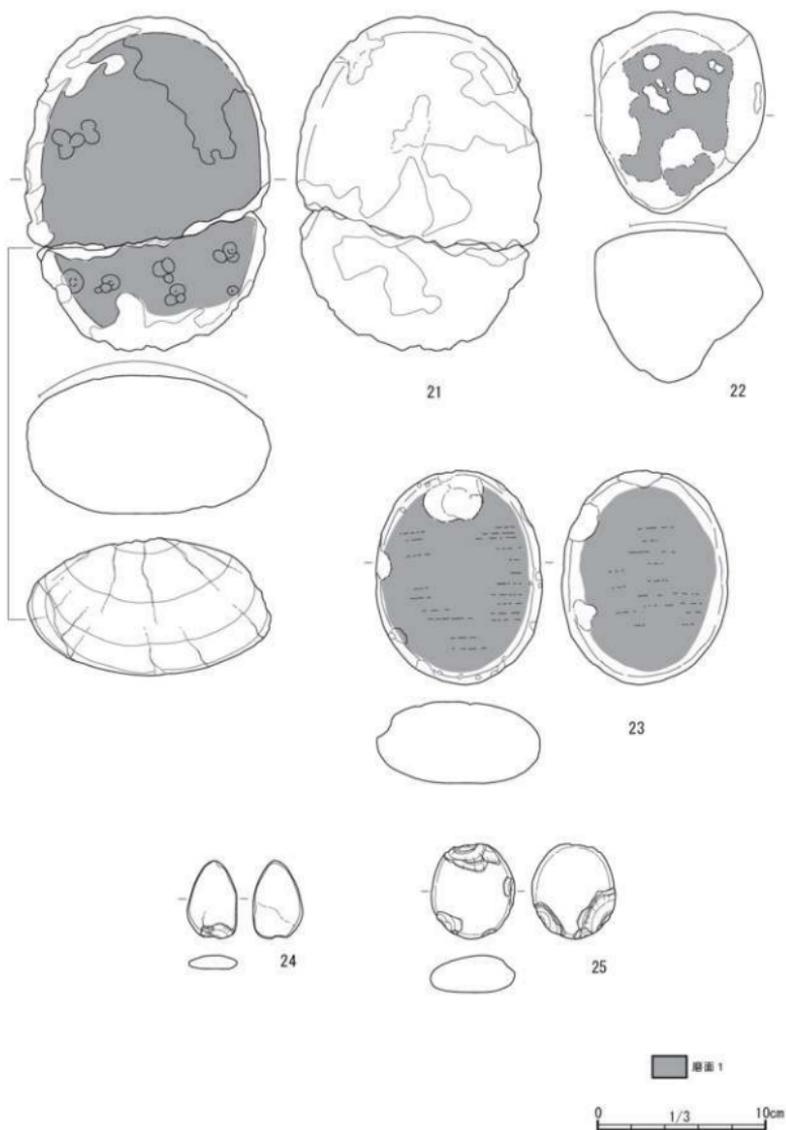


图 149 包2-B層出土石器(17)

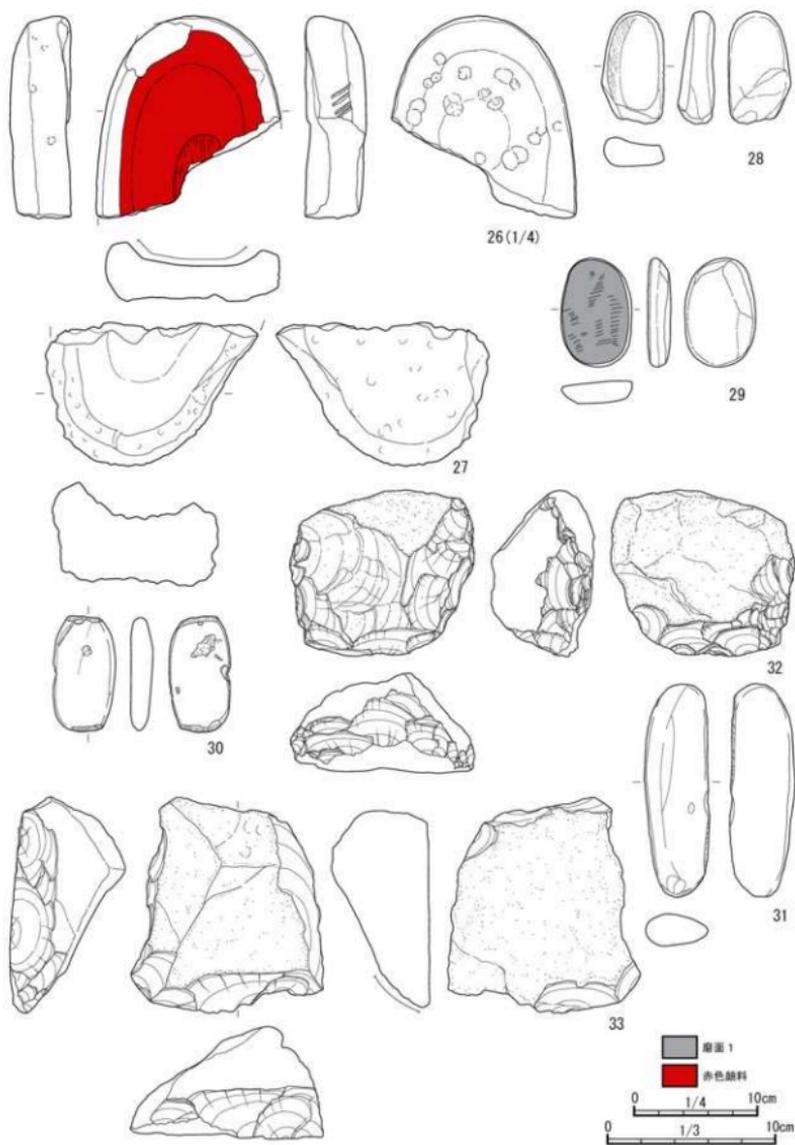


図 150 包 2-B層出土 石器 (18)

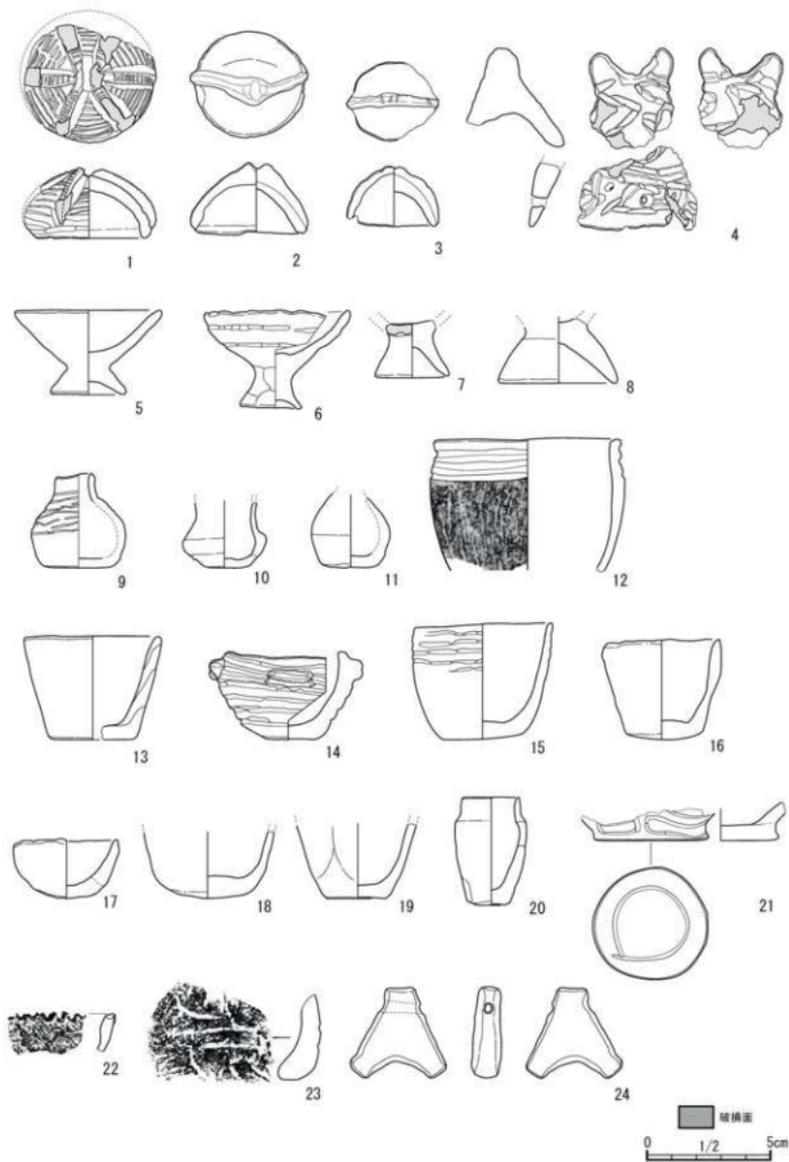
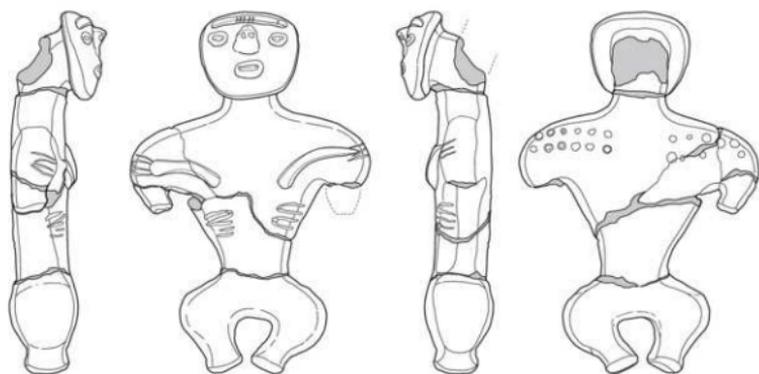
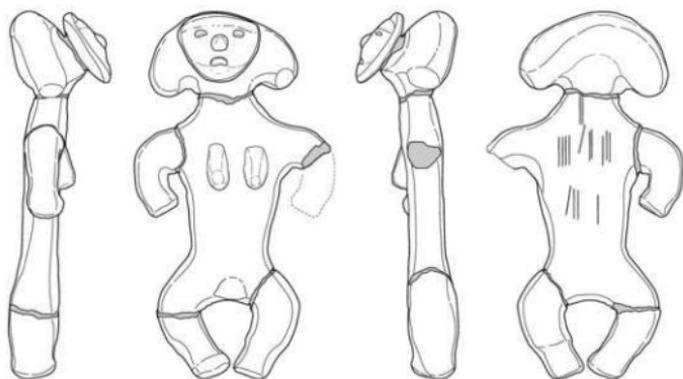


図 151 包 2-B 層出土 土製品 (1)



25



26

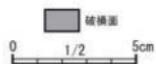


図 152 包 2-B 層出土 土製品 (2)

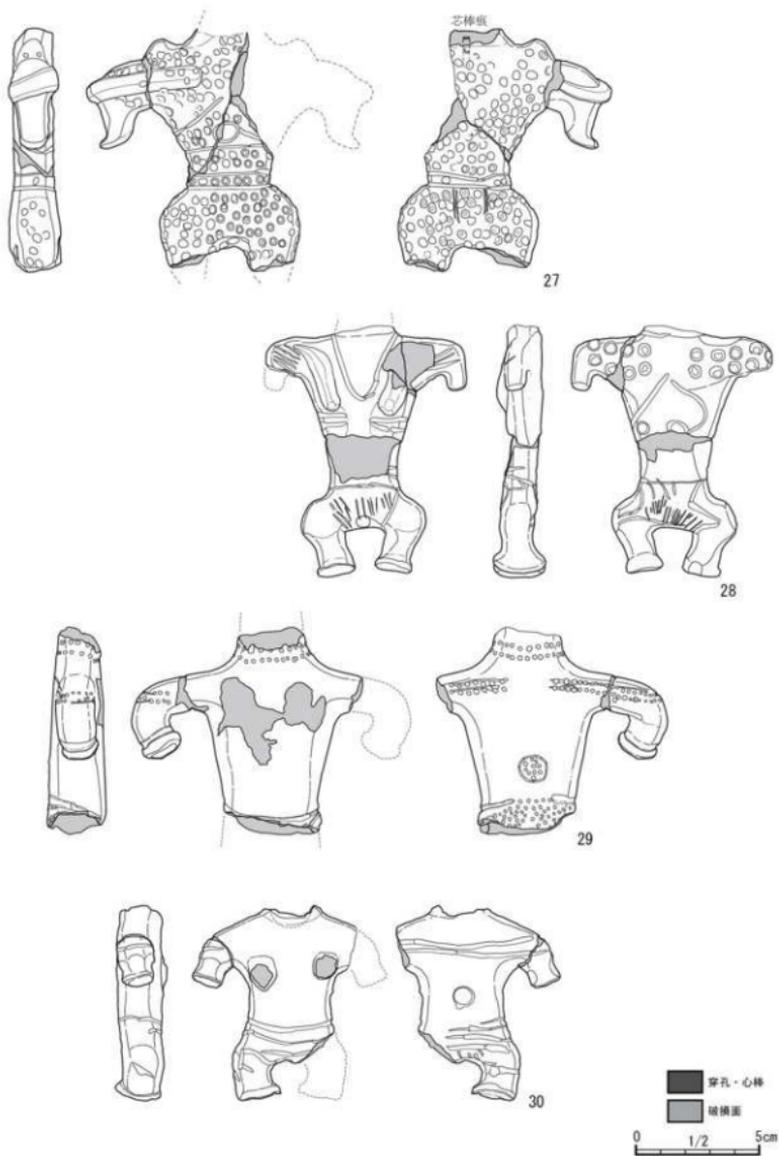


图 153 包 2-B 層出土 土製品 (3)



図154 包2-B層出土土製品(4)

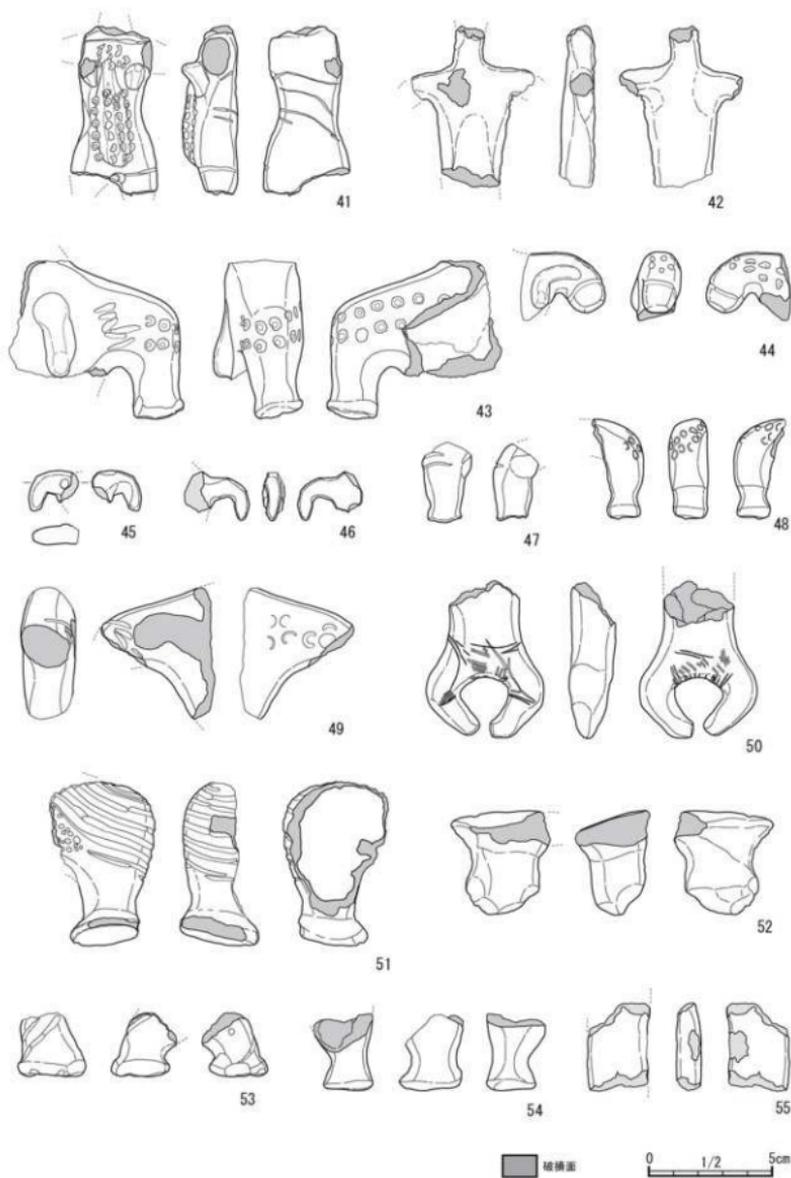


図155 包2-B層出土土製品(5)

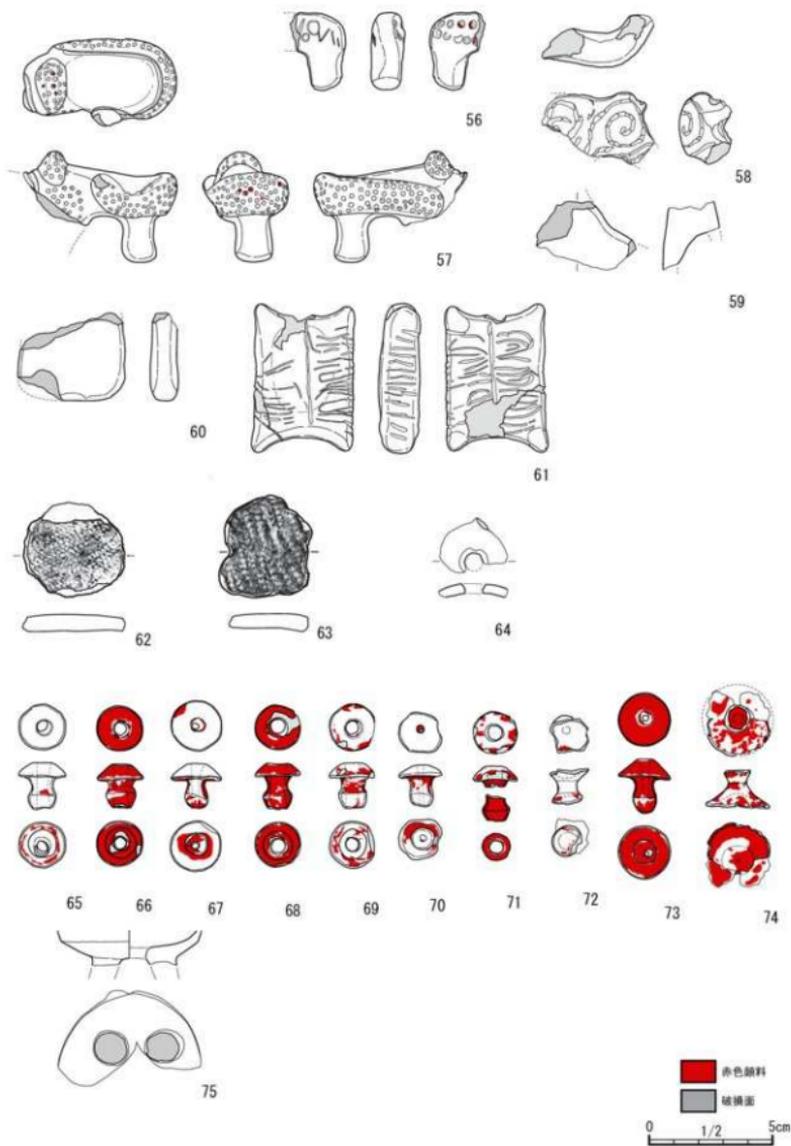


図156 包2-B層出土 土製品(6)

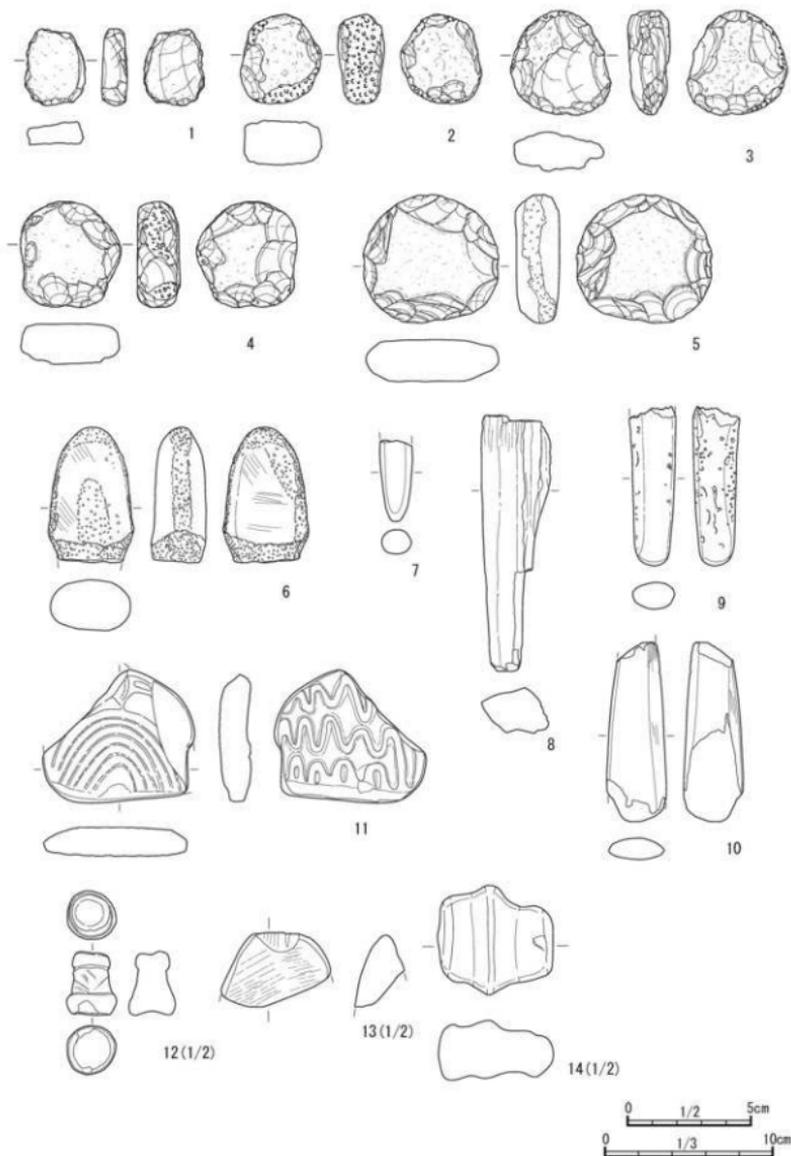


図157 包2-B層出土 石製品(1)

包2-B層

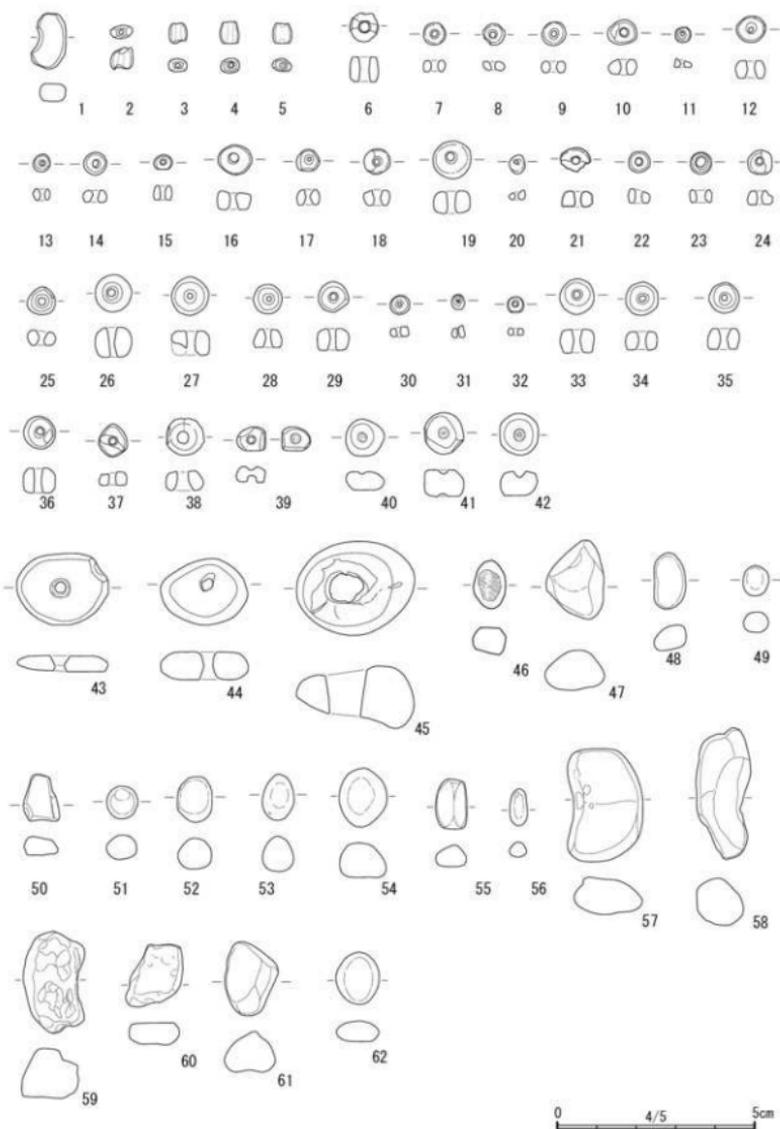


图 158 包2-B層出土石製品(2)

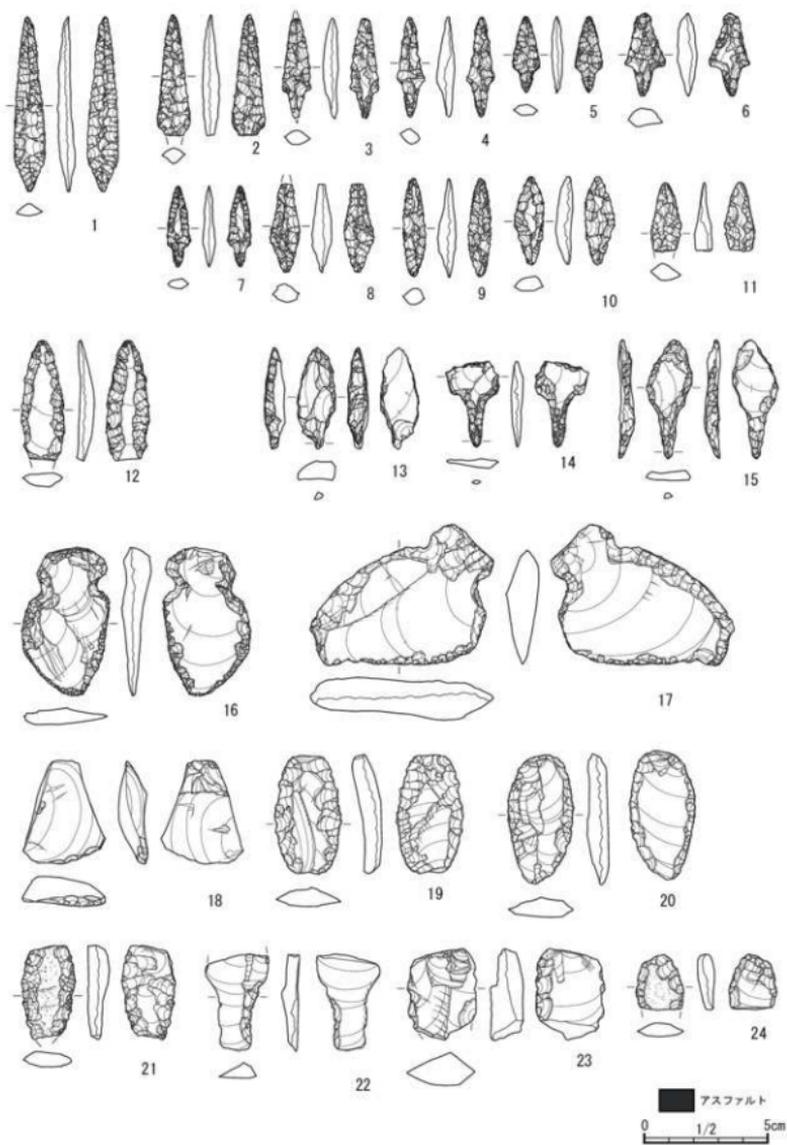


図159 包2-B層(1mトレンチ)出土石器(1)

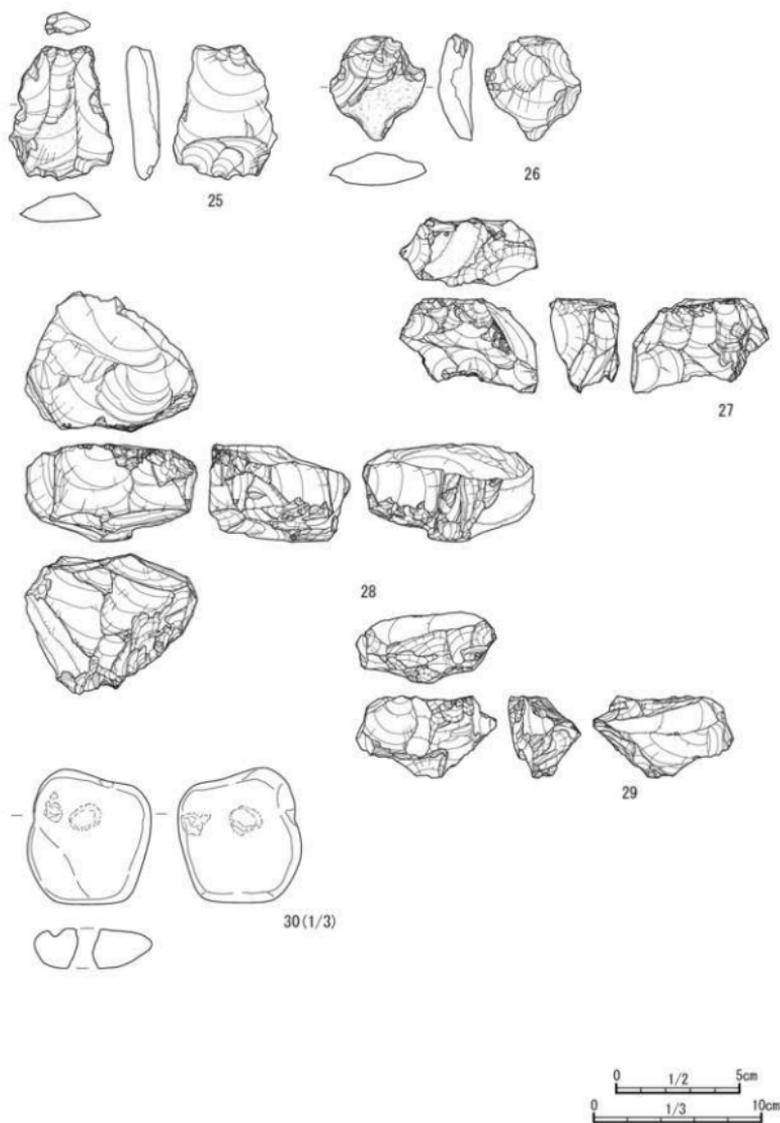


図160 包2-B層(1mトレンチ)出土石器(2)

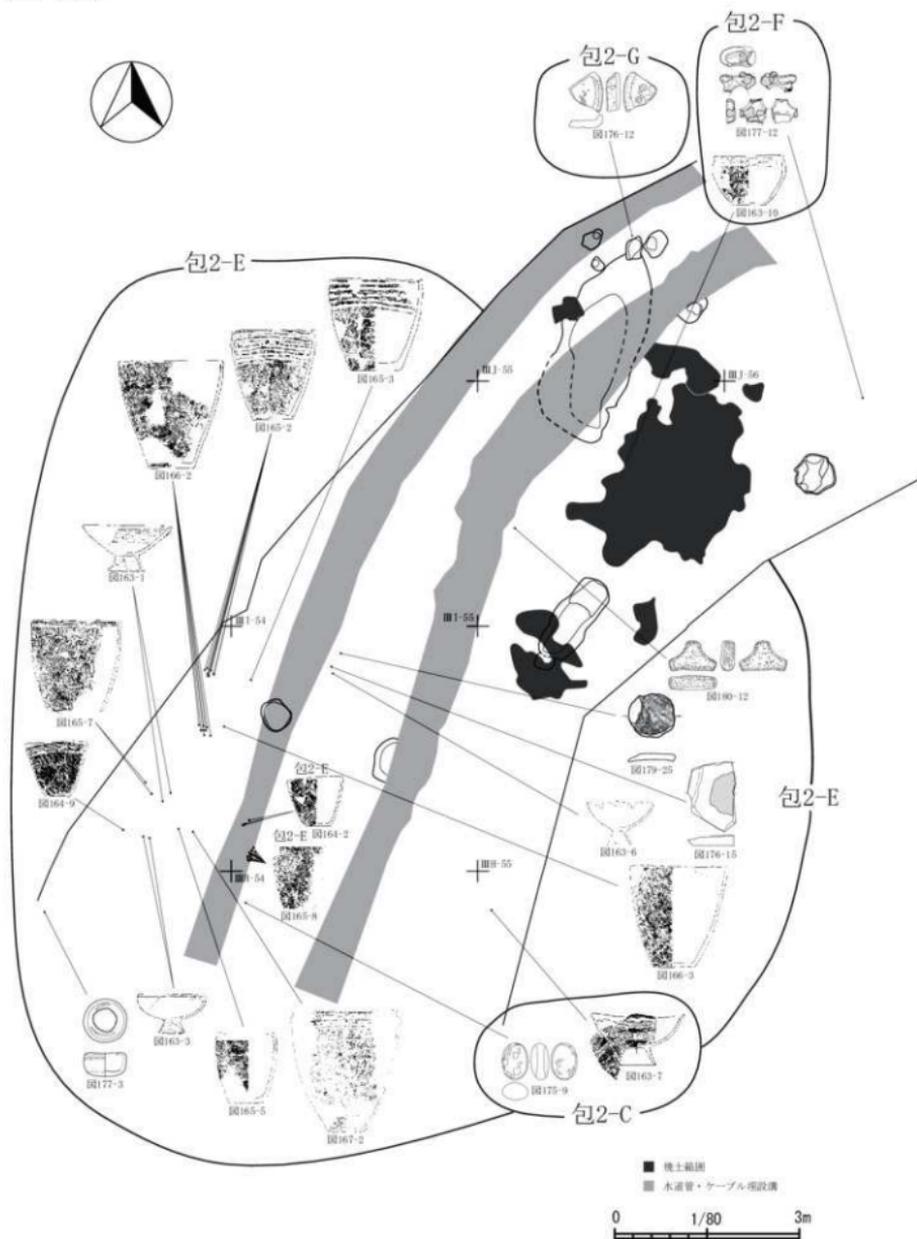


図161 包2-C～G層遺物出土状況図

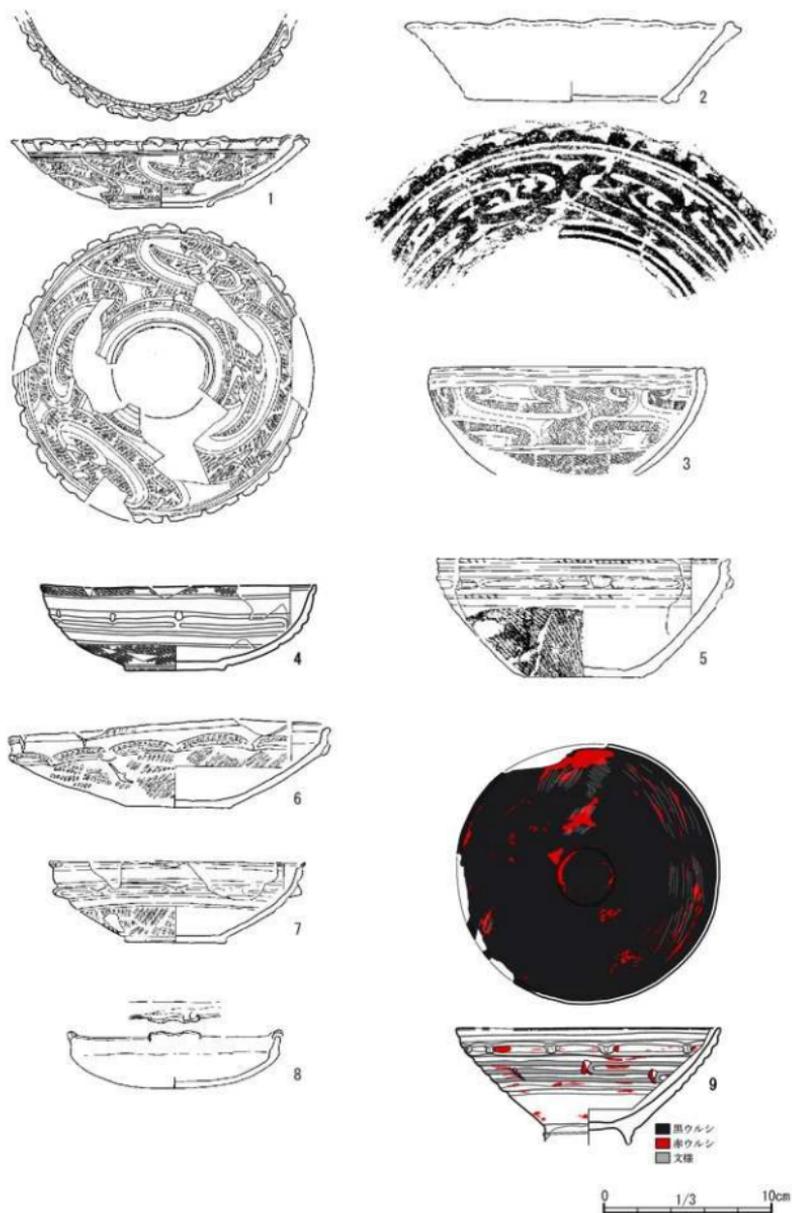


図162 包2-C~G層出土 土器(1)

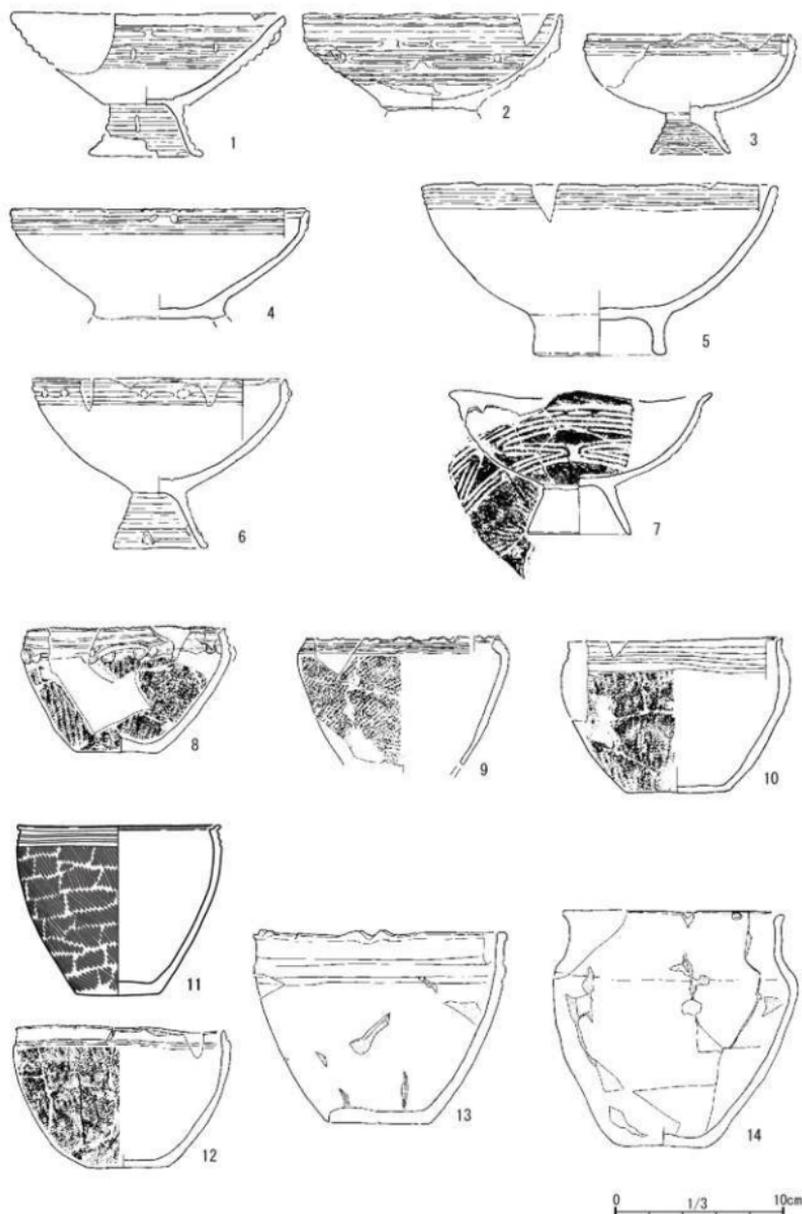


图 163 包2-C~G層出土 土器 (2)

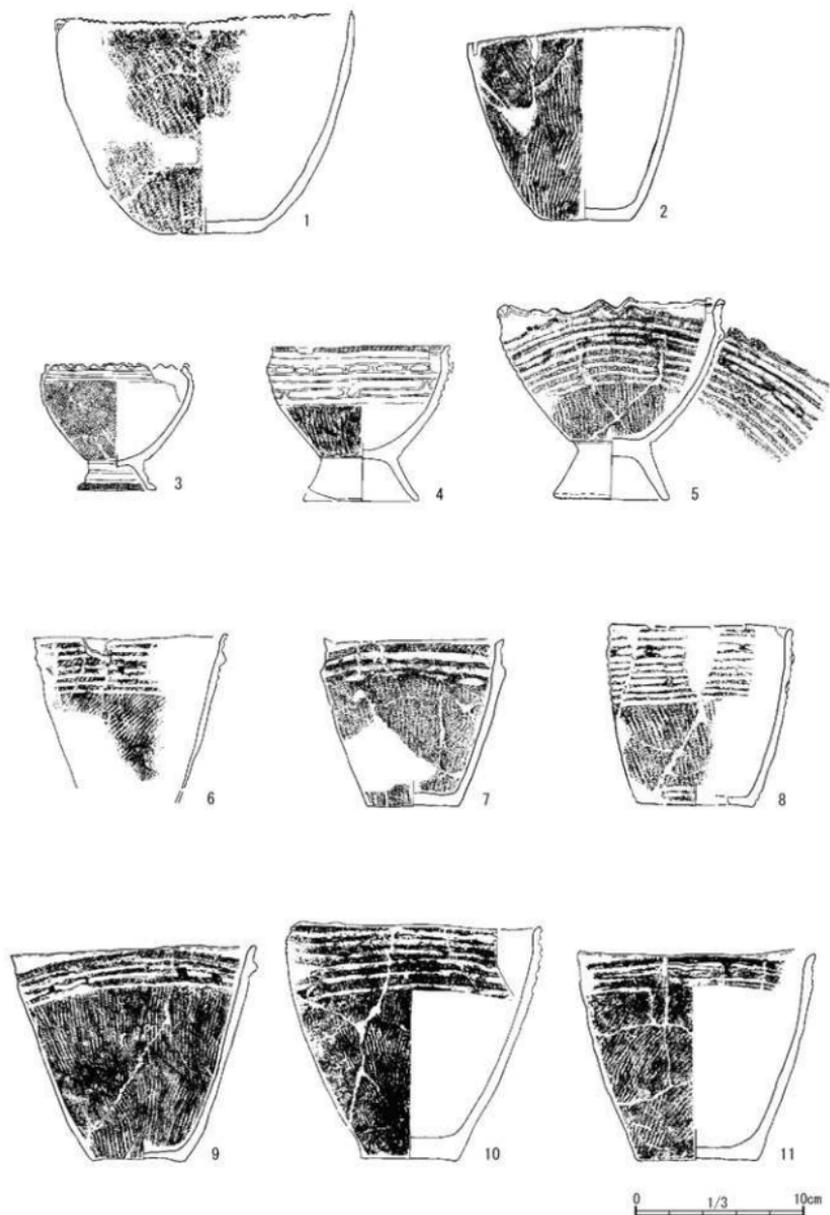


図164 包2-C~G層出土土器(3)

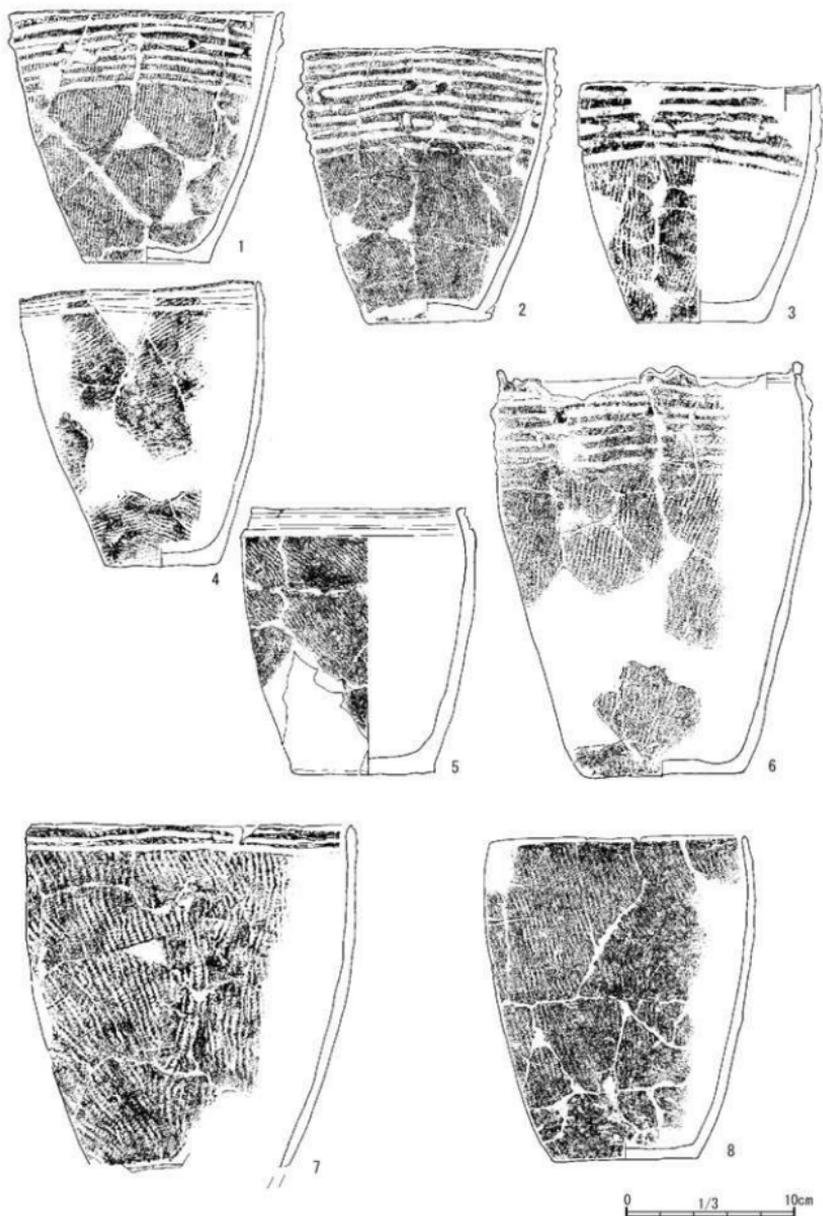


圖 165 包 2—C~G層出土 土器 (4)

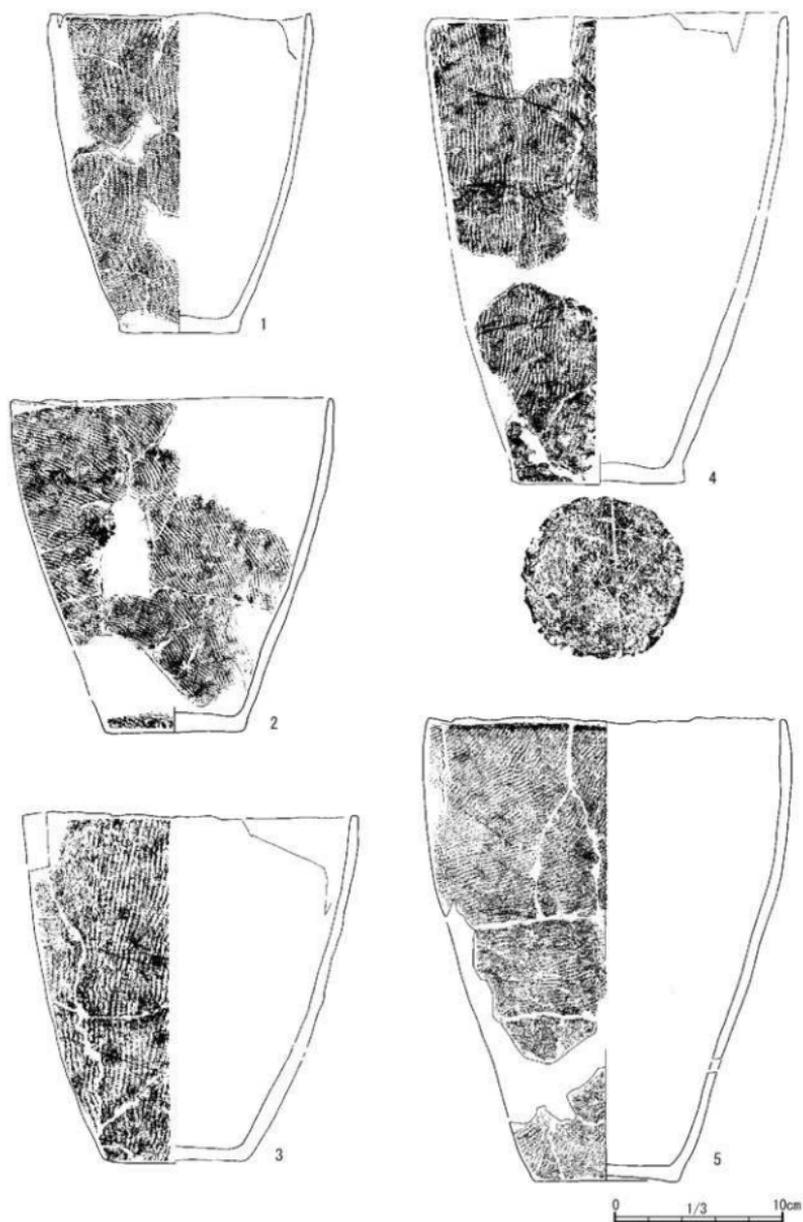


図166 包2-C~G層出土 土器(5)

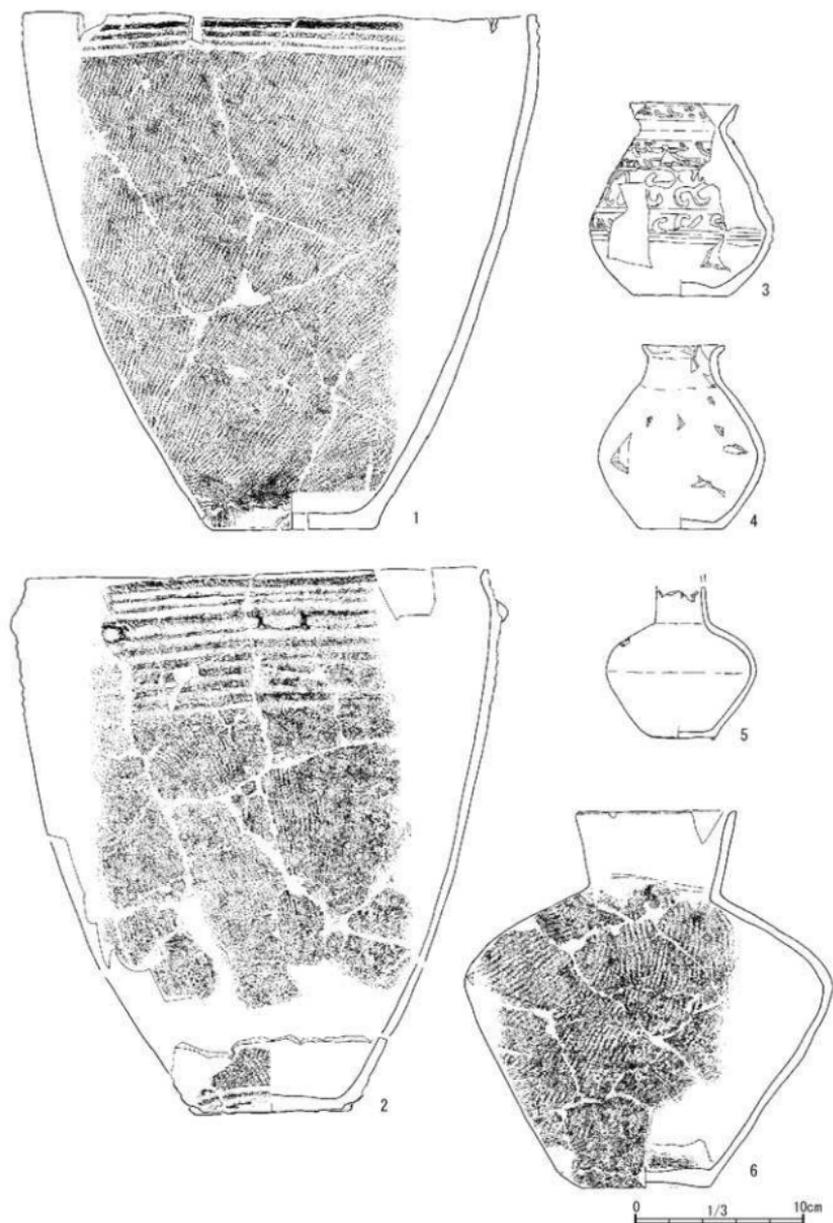


圖 167 包 2-C~G層出土 土器 (6)

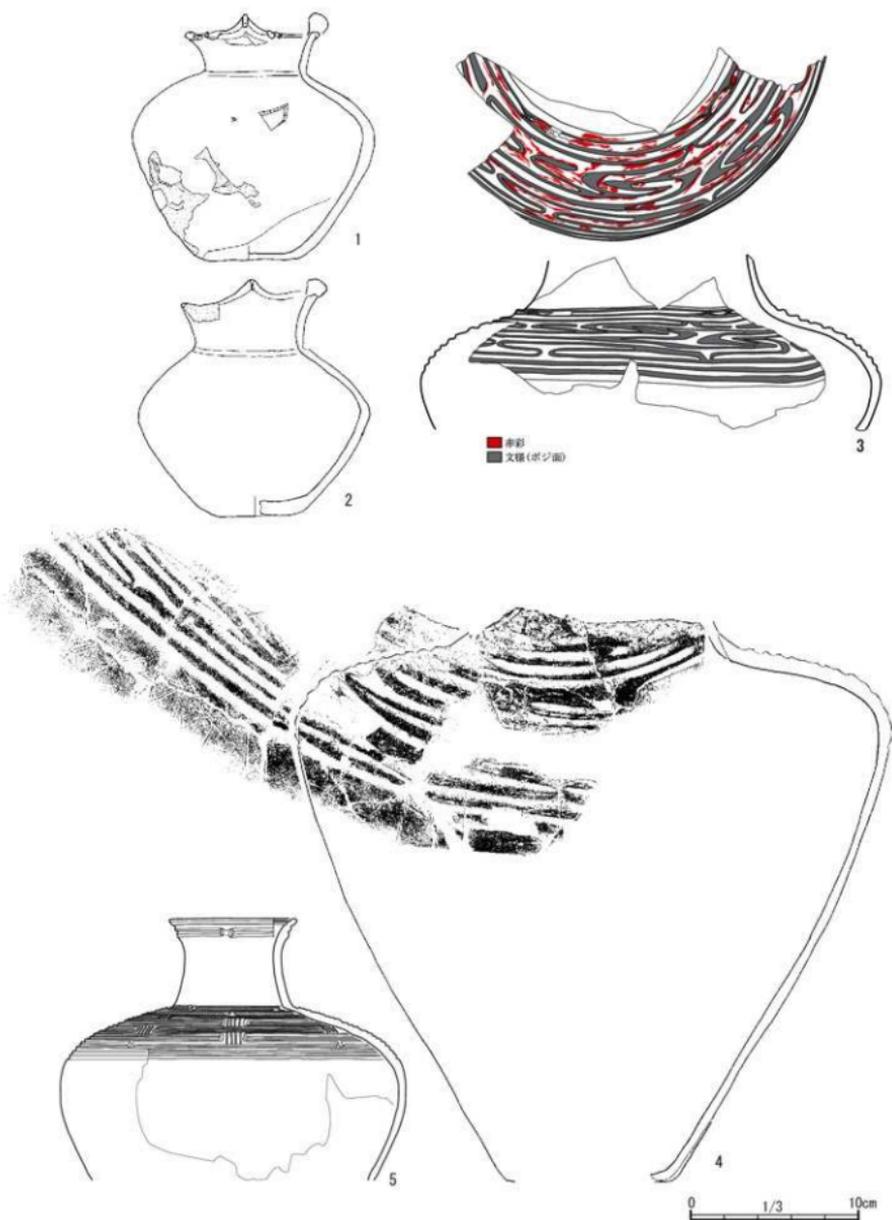


図168 包2-C~G層出土土器(7)

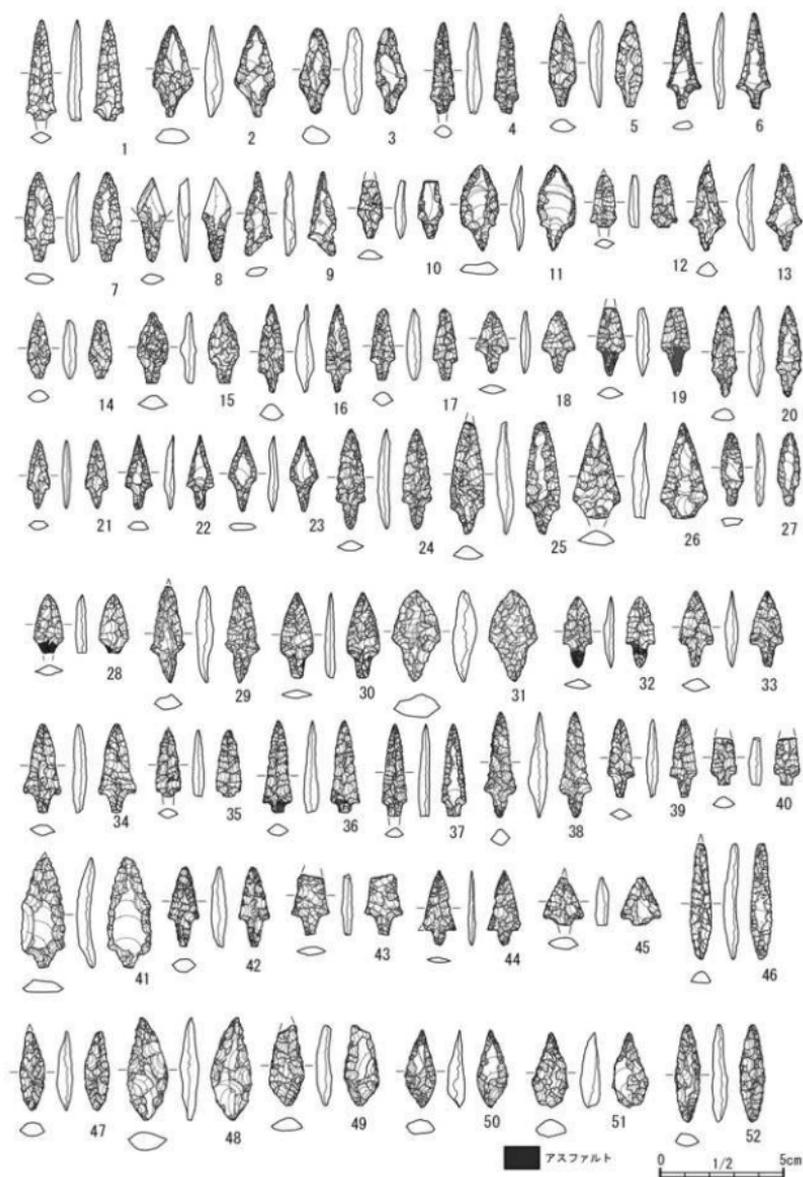


図 169 包 2-C~G層出土 石器 (1)